

---

man with the title of infinity and redo

サレンダー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The tale of a man with the title of infinity and redo

### 【Nコード】

N9469W

### 【作者名】

サレンダー

### 【あらすじ】

「ここは何処ですか？」って事で始めましたよ。時には愉快に、時にはCOOLに、時には遊びながらも主人公は頑張って家に帰る為に四苦八苦……するのかわからない物語。

一応主人公はチートですが、使用すればする程BAD END直行  
まっしぐら仕様です。

内容は、シリアス3% 寒いギャグ97%仕様で行ってみたいと思  
います。

## 簡単なご説明（前書き）

あくまで簡単な説明ですので、読んだ方が……いいのかな？

## 簡単なご説明

これは自分が、書いてるお粗末過ぎるお話、「人生は矛盾しっぱなし」のもしもの話です。

具体的な違い。

### 1・転生物

2・段々と主人公の思考回路が変態化する。

3・おもっくそ、原作介入する時もある、原作スルーをする時もある。

4・神だの相棒である霧生 零が一切出てこない。

5・話の都合上、元からチートの能力設定を更に、それこそクソみたいにチート化させる。

6・元々あつたかは不明だが、恋愛描写。  
一応迷ってますが、今の所は無いで通しますが、作者の気分で変わります。

7・戦闘描写及びオリ主無双乱舞の大減少。  
まあ、言う程無双してた描写を書いてた……のかはわかりませんが、  
戦闘描写は多分格段に減ります。(一応あるつもりです)

## ○共通する所

- 1・主人公の名前と容姿
- 2・家族構成(一部改変あり)
- 3・主人公の持つ能力。あれです、ザ・インフィニティ無腎蔵です。
- 4・ハーレムだのなんだの一切無し。  
(捌ける気がしない)
- 5・駄文  
(永遠にです)

主な違いは以上ですが、もしかしたら途中で心変わりする可能性が  
無きにもあらずなので悪しからず。

尚、クオリティーの向上は絶望的ですが気が向いた時、目に入った時、究極に暇な時などに読み下さい。

以上

## 簡単なご説明（後書き）

次回から本編に入りますが、暫くは原作キャラとは関わる所か顔すら合わさない可能性があります。



0：私の名前はもぐ 霧生 零です（前書き）

まあ、オープニングですな。

くだらねえ始まり方は許して下さい。

## 0：私の名前はもぐ 霧生 零です

世の中には、『ああ、あの時告白しとけば……』という、俗称“やらずに後悔する”と『ああ、告白して玉砕……最悪だ』の“やっつて後悔する”の二種類がある。

ちなみに俺は前述にも後述にも当て嵌まらない微妙な位置にあるのだが、それはまた追々説明しよう。

「ズルズル……！」

ウム、このカップ麺は中々どーしてだな、思い切ったの『ご当地〇ラーメン』の唄い文句につられて、何時もより百円多く出した甲斐があるつてもんだが、いかんせん量が少ないのがネツクだな。

「ご馳走様でした……！」

と、誰も居なくたびれたアパートの一室に俺こと、霧生 零は住んでいる。

家族なんて者は居ない……いや、この世界にはいない、と言った方が正解か……。

何故、“この世界”等と表現するかというと、それは約一週間程前に遡る必要があるのだが、その事はまた後で説明するとして、今は食後のブレイクタイムに移行しよう。

「ヤニとライターは……あつたあつた」

テーブルの上に無造作に置いてあつたタバコ、LUCKY STRIKEとANGLEと刻み込まれたZIPPOライターを手前に引き寄せた後、タバコを口にくわえ、火を点けて吸う。

紙巻きタバコ故なのか知らないが、巻いてある紙がチリチリと静かで淋しい部屋の中にまるで『お前が一人でも、俺が居るから安心せえや!』と励ますように静かに音を立てる。て、現在進行形で自分に酔って格好付けているが、実際問題んな事は有り得ないし、本気で聞こえるとか言ってしまった奴は診療内科に行く事をオススメする。

「フウ」

口の中に含んだ煙りを吸い込み、肺の中に浸透させて吐き出す……  
こういった行為にリフレッシュ後悔を期待出来るのだから凄い。  
と、喫煙がいかに素晴らしいかを勝手にアピールしている訳なのだが、嫌煙家さんからしたらこの行為すら迷惑千万だろう。

なんせ、自身がフィルターから吸う紫煙より、火を点けた先から出る副流煙の方が人体に影響が出る割合がデカイと、何処かのお偉い学者様が言ってくれたお陰で、俺達喫煙家の肩身が狭苦しくなってしまうっているのだから。

が、勝手に喫煙家を代表して物申させて頂くと、正直タバコから出てくる副流煙が人体に悪影響を及ぼすという理屈はまあ、事実だからしょうがないとして、だ。

なら、戦時中や戦後とかにあつた放射線とかはどう説明するんだ？

こつ俺は聞きたいね。

詳しく言わせて貰うと、放射能とタバコの副流煙、果たしてどちらが危険なのか？ そう聞けば、余程のお馬鹿ちゃんじゃ無い限り、『放射能』と答えるだろう。

そして、戦時中に放射能を直でバンバン浴びて尚且つ、放射能たっぷり漬けの野菜やら魚やら食ってきた戦時・戦後時代の方々が『今も現役バリバリじゃない！』と言わんばかりの元気っぷりで俺と将棋やら囲碁やら麻雀を嗜んだりするのだが、まさしく『これいかに？』だ。

また、当時の方達いわく、戦時中の空気の悪さからしたら、紫煙等屁でもねえし、モクモク吸いまくってた喫煙暦何十年の方が、非・喫煙家の方達より長生きしたってのもまた事実だ。

結局の所、何が言いたいのかと言えば、確かにタバコを吸っても良い事はねえさ、だからと言ってそこまで毛嫌いされてもねえ？ こう言いたい訳だ。

まあ、向こうからしたら健康に悪いだけじゃなくて、マナーが悪いだのと反論してくるだろうが、だったらアンタ等はゴミをポイ捨てした事ねえか？ 車やバイクの排気ガスも健康に良いとは思え無くない？ つーか俺達人間が居る時点で母なる大地である地球様が危険なんすけど？ とまあ、何十年もの間に喫煙家と嫌煙家の不毛な争いが続いているのだ。

「フウ……」

フィルターまで火種が行き渡った所で灰皿で揉み消す。

喫煙家と嫌煙家の不毛な争いの歴史話して、本来の話題から右斜め45°くらい話が逸れたので修正する。

何故俺が『この世界』と心の中で誰に対して分からない説明をしていた訳……それは、今から調度一週間前に遡ってしまうのだが……。

続  
く

0：私の名前はもぐ 霧生 零です（後書き）

次回は何故零が、異なる世界に飛ばされたのか、が話しの内容ですが、まあ、良くあるパターンですね。

1…てんぷら(テンプレート)？ ストリップ(トリップ)？ ……ええっやっやっ

この主人公は物事をすぐに信じ、尚且つすぐに諦める癖があります。





呑気な声色で話す婆ちゃんに、『行くな……！  
まだ機ではない！』と理性と言う名の獣が叫びまくってる。

この人は、俺の祖母……といても血は繋がって無く、自身の本当の両親は今何処で何をしているのかは知らない、というか興味が全くない。

婆ちゃんの姿は、何かしらの力が働いてるお陰とかで、見事なまでの若々しさを誇り、俺も何かしらの力を持つてるが、その話しはまた後でにしよう。

「ご馳走様でした……。婆ちゃん、行ってくる」

「ん、いつてらっしやい、今日は遅くなるとかあるの？」

「愚問だね、俺が遅くなるまで家に帰らないなんて話あったかい？」

「……そうだったね。全く、健全な男子高校生がそんな事じゃ駄目じゃないか？」

と、表情の変化はさほど無いが、若干声の質が違う所、ダチと全く遊ばない俺を心配しているらしい。

別にダチがいない訳では無いし、遊びにもしょっちゅう誘われていたのだが、俺としてはんな事よりさっさと家に帰って、“婆ちゃん成分”を摂取しなければ、干からびてミイラと化してしまう。まあ、

そんなだからダチと遊ぶ暇等皆無なのさ。

「俺の中では、健全な男子高校生より、婆ちゃんが優先順位に入ってるからね……最近の遊びは、やたら金も掛かるし」

一回遊びに行く事に、諭吉の兄さんとか野口の兄さんが俺の財布から名残惜しそうに出て行ってしまっから、俺としては遊びになんて行く必要性を感じないのさ。

「ふ〜ん？ まあ、良いつて言うんならこれ以上何も言わないけどさ」

「まあ、そういう事だから。じゃあね……ってさっき言ったような？」

「言っただけど、二回言っただけじゃいけない決まりなんて無いし、良いんじゃない？ てな訳でいってらっしやい」

家を出る時は、軽くハグをしてから出るというのが、我が家の昔からの決まりで、この行為も早十三年近くにもなるので、決してやましい事等考えてない。

二度言っが、やましい事等考えてないからな。

《キーンコーンカーンコーン》

あつという間に、授業が終了し放課後。

周囲の人間は、『これから部活だ』だの『遊び行くぜえ！』だの騒いでいる中、俺は先程説明した通り、さっさと帰る。遊びに誘われても断ってる俺も一応は誘われたが、当たり前障りの無い様にお断りさせて頂いた。

なんせ今日は、ある意味で俺にとっちゃあ“特別な日”なんだからな。

「  
」

辺りが暗くなってくる中、携帯を弄りながらの下校。

それが何時もの日課なのだが、今日は何時もと何か違う、ていうか俺以外に人様がない。

「……？」

良くは分からないが、一つだけ認識出来た事……“恐怖”だ。  
辺りが暗く、更に人がいねえというのは恐怖を助長するのに十分過ぎるのに加え、何故か霧まで出て来てた。

「えっ？ えっ！？ 何これマジ？」

元々オカルトな類は苦手だと自覚があるだけに、今の状況は極めて危険だと判断、だから走る、この嫌がらせに似た状況から脱出する為に。

「ゼエツ……！ ゼエツ！」

軽く30分位は全力疾走したのが良かったのか、気が付けば霧だけ見みたいな空間から脱出できた、のは良いが。

「此処は……何処やねん？」

別に関西人では無いのに、関西弁での独り言も仕方ないと、自分で言い訳がましいと思うが、だっていつの間にか知らない山中みたいな場所に行き着いてしまったんだよ？

「い、いやいやいやいや。待ってって俺、確か真っ直ぐ走ったよな？」

来た道を見える範囲内で観察するが、全くと言っていい程に知らない山道だった。

「んな馬鹿な……」と口には出しつつ、内心不安だらけの中、元来た道を歩いて山を下りて街中に進む……すると。

「な、な、なな……」

目の前に広がる街並みに俺は只驚愕する。

何一つ俺の記憶と合致しないのだ。

そして思わず頭を抑えながら……。

「なんじゃこりゃあああ！……！」

と、周囲の人目を気にせずには有名俳優さんの有名な名言を叫んでしまっただった。

「……………」

あれから約三時間後、自分で出来る限りの情報収集を終えた俺は、取り合えず今居る状況の整理の為、聞いた事も無い名前のファミレ

又に居た。

「……………」

まず、第一に知ったのは、此処はどうやら俺の居た世界とやらとは似てる様で全く違う世界だという事………という説明が明記されてる手帳を、もう何回目になるか分からなくなる位に読み返していた。もっと簡略化すると。

1 . 平行世界に飛ばされた。

2 . 何故か俺の服装が普段着。

3 . 帰りがかったら手帳に書いてある条件のみ。

4 . それまでの生活等は一番始めのみ力を貸すのみで、それ以降はこちら関与は一切せず。

1 については、もう認める他無かった。

近くにあった交番に行き、カップ麺を食いつつ、いかがわしい本を読んだ青の国会権力さんに元に住んでいた世界の街を聞いたら「何言ってるんだこいつ?」みたいな顔された揚句に「無い」と一言で終了した。

俺としては、カップ麺食いながらエロ本読んでる目の前の国家権力

振りかざし野郎の顔面を、原形が解らなくなる程にボッコボコにしてやりたい衝動に駆られたが、そんな事した瞬間に「はいお縄」と逮捕されてしまうので我慢した。

2については、言った通りの意味で、何故か俺の服装が元の世界にいた時に着ていた学校指定の制服じゃ無くて、私服だった。

それも、一番安い服という、俺に恨みでもあんなのかと言いたくなる位だ。

3については、少し救われた気がした。

なんせ帰れる可能性があったのだからな。

詳しい説明は最後にする。

4は、書いてる通りで、最初の自分で住む家と資金、身分証明その他、最低生活に必要な物が俺の持ってた鞆の中に詰め込まれてあり、それ以降、この手帳の作者は関与してこないらしいのだ。

「フウッ」

タバコを吸いつつ、今の状況を一通り整理した所で、最後の項目『何故俺がこの世界に飛ばされた』のか、だ。

「暇つぶしして……」

手帳に書いてある項目を読むたんびに怒りのあまり、声がボソリと出てしまう。

最後の項目についてだ。

君の能力について、と説明書きに載ってた時はマジでビビったが、この手帳の作者が………言いづらいのだが、神様らしいのだ。無論、最初は「ふざける、バツキヤロイ！」と手帳を地面に叩き付けたのは記憶に新しい。

だが手帳を読むにつれて、段々信じる他無いような気がして来たのだ。

てのも、婆ちゃんと爺ちゃんならまだしも、何故この作者が俺の能力を知ってるのか？ 手帳の筆跡からしても、爺ちゃんと婆ちゃんの筆跡と一致しないから除外となると……居ないのだ、他に俺の能力を知ってる人間が。

「グビグビ」

メロンソーダを飲みながら、もう一度頭の中で整理をする。

この手帳の作者が、神様（仮）だとするにして次は、元の世界に戻る条件の整理だ。

……ここは何でも漫画か何かの世界らしく、俺が帰る為の条件は『その世界の原作ストーリーが終了する前に君が死ぬ事が出来たら、君の勝ちとし、元の世界に帰る事が出来るが、死ぬ事が出来なかつたら永遠に君はその世界で生きる事になる』らしい。

正直「んだよ、簡単じゃねーか」思い早速中々のスピードを出してあった大型のダンプの前に飛び出し、自殺願望全開で自分から跳ねられてみたのだが……あら不思議、クソみたいな痛みと跳ねられた時の浮遊感来るだけで、死ぬ気配が全くしなかった。

それ処か、跳ねられた際に来た傷や骨折が、瞬くまに修復してい



つたのだ。

こればかりは、齡18歳にして一番驚かされた、確かに俺は普通人には無い力が備わっちゃいるが、それはあくまで“他人様の力を吸収”するだけで、こんな化け物じみた回復力なんか持って無かったんだから。

ダンプに跳ねられて死ね無いと判った瞬間、即刻その場から立ち去り、ファミレスへと避難した。そう、これが第5の項目“能力強化と帰還方法”だ。

どうやら俺の能力は、この神様（仮）によってとてつもなく強大な力にしてくれたらしいな。

主に言うとは……俺はそう簡単には死ねない身体になったらしく、いわく『例え肉体を消し炭にされようが、バラバラにされようが、宇宙空間に放り込まれようが、遺伝子レベルから消し去られようが e t c …… とにかく一瞬で元に戻る』らしく、あるう事がそれプラス不老不死なんだと、手帳に書いてある。

この項目を見た時俺は思った……「あれ？ 将棋で言う所の詰みじゃないですか？」と、一瞬思ったが、俺はこう考えてみた“致命傷レベルの攻撃を絶えず受けまくる”そうすれば、何時かは死ぬんじゃない？ と。

まあ、この世界がどんな世界か知らないし、惑星破壊レベルの力を持った人間が居るとは到底思え無いが、何時か現れる事を願って手帳に明記されていたアジト兼、家に向かうのだった。

その際、家の様子を見た時に、抑えてた怒りが爆発したのは言うまでもないだろう。

続く

1: てんぷら (テンプレート) ? ストリック (ストリッパ) ? …… ええっ じゃあ

次回は時系列が発覚します。

## 主人公の設定もどき（前書き）

まあ、よくあるパターンッスね。

## 主人公の設定もどき

名前：霧生 零

年齢：18（現 14相当）

身長：183？（現 175？）

血液型：Rh - AB型

利き腕：左

神とか唄ってる存在によって、いつの間にか別世界に飛ばされてしまった青年。

本人は始めの方は、軽く信じちゃいなかったのだが、元居た世界との違いが次々と発覚したために、早い段階で認める。

原作ストーリーが終わる前に死ねば元の世界に帰れる、そうでなければ永遠に死ぬこと無く飛ばされた世界に閉じ込められてしまう、といった、罰ゲームみたい嫌がらせを無理矢理執行させらる。その為、日夜死ぬ方法を模索しているが、神とやらに勝手に実装されたチートボディのお陰で、そう簡単に死ねない体質になってしまう。

性格は、周囲に流されやすく、それに加えて死ぬ事ばかり考えてる為、時たま不気味がられる。  
要は変態に近い思考回路。

好みの女性のタイプは“年上のお姉さんタイプ”で年下とかロリ系に全くと言って良い程反応を示さない。

容姿は普通にイケメンで、モテそうに見えるのだが、前述の好みのタイプ、性格が災いしてなのか余りモテてない。

## 能力1

ミュータント ゼロ・インフィニティ  
突然変異・無腎蔵

主人公が元々持つ能力。能力名を一部変更しましたが、効果は変わりありませんので、詳しくは「人生は矛盾しっぱなし」の主人公設定をご覧ください。

## その2

再臨

全てをあるべき状態に戻す力。

主人公のチートボディの原理にて、別の能力からの干渉が一切不可  
能で、常時発動に加えコントロール不可。

この能力が常時発動しているお陰で、主人公がいくら致命傷を負  
うが、遺伝子レベルで消され様が、人間が知りえる理屈を通りこし  
て再臨リセットされる。

この力の発動条件は、主人公が怪我を負ったり、死にかけると、主  
人公の意思とは関係無く発動するので、主人公が怪我を負わない時  
は発動はしないが、この能力のお陰で不老不死の不死身人間にされ  
てしまう。

2：つーかこの世界の女（タレ）ってレベル高いな（前書き）

短いです。

2：つーかこの世界の女(タレ)ってレベル高いな

神とやらから状況を教えて貰い早8日……。

「ほら、ついたぞ！ 降りろ」

「……ハア」

俺は拉致られたのだ、中学校の進路相談員に。

「何時までもため息なんかついてねえで、さっさと教室に向かいやがれや!!」

「イダツ！ わ、解りましたよ……っ！」

進路相談員からして見たら、学校に行きたくねえオーラをバシバシ出しまくってる俺のケツを蹴りまくり、無理矢理学校へと強制送還させたのだ。全く、今の時代にそんな事をすれば、モンスターンチャラと呼ばれる親からバンバンクレームが来ると言うのに、それを知ってか知らずか、この目の前に居る進路相談員は「でもそんなの関係ねえ!!」と言わんばかりであれよあれよと俺を名も知らねえ中学校に引っ張っていったのだ。



「じゃあ！何かあったら俺んどこに来て良いからな。頑張<sup>テッ</sup>って頂<sup>ベシ</sup>点<sup>ベシ</sup>とってこいや！」

そんな進路相談員に後押しされ、何のだよ……とツッコミを心の中に入れて言われた通りに教室へと向かうのだった。

「……ハア」

処で、何故俺が中学生をやってるのかと言うと、何故かこの世界での俺の立ち位置は14歳の中学生で、この世界の物語が始まる三年前からのスタートらしいのだ。

ちなみにに物語のタイトルは“めだかボックス”という名で、正直内容は知らない。ジャンプに載ってたとか手帳に書いてあったのを見て、ジャンプを読んでる筈の俺が知らないのが引つ掛かるが、今となつてはどうでもいい、とにかく一刻も早い内に死んで家に帰つて婆ちゃん成分を補給しなければ、生き地獄をリアルに体験コース直行だ。

まあ、今の所は向こう三ヶ月は大丈夫なんだが。

「オット……此処が俺が名簿だけに入ってるクラスの教室か」

これから先、また中坊をやり直さなけりやならんと思つと、不思議とテンションが下がってしまう……。

《ガラッ!》

「あ?」

「……………」

下がったテンションの状態で、教室に入ろうと扉に手を掛けるか掛けないかの時に事件は起きた。なんつーか一言でいうと、デンジャラスな人が居た。

うん、背は……今の俺よりちよいと高い程度で、金髪ロングの憎い程のイケメン。

そして肩に担いでるのは……折れにくいように短く切った鉄パイプ……………。

「フツ…………古い番長気取りってか?」

「……………」

鼻で笑いながらの一言が原因かはたまた、目の前に居たのがうざかったのかは定かでは無いが、肩に担ぐ感じで持ってた鉄パイプで顔面9発、頭頂部11発、計20発殴れた。うん、それはそれは清々しい位にぶっ叩かれたよ、だけどこの程度じゃあ死なない…………てか死ねない。

出来れば後5億発位同じパワー、同じスピードで殴ってくれたら死

ねた可能性があったのに、地面に突っ伏した俺に満足したのか、さつさと帰っていった。

てかよ……何だこの学校は、人が殴られて倒れてるってのに周りにはシカトですかい？ 薄情にも程があるってもんだよ。

「イテテ……」

頭から血がダラダラ流れてる。

俺は一応、死にはしないが、痛いという感覚はあるので頭を摩りながら、教室に居る連中に文句の一言でもいってやろうと中に入ると教室の真ん中に人の円が出来た。最初は、宇宙人かなんかを信じてしまってる別の意味で怖い集団が、宇宙人とやらを呼び出す儀式でもしてるのかと思ってたら、どうやら違うらしい、皆の顔が青ざめているのだ。

不思議に思った俺は、円の中心を一般的な中学生より若干背が高いのを利用して覗くと、一人の女の子が俺と同じ様に頭からダラダラと血を流して倒れてるのだ。

「成る程な……」

誰も聞いてないと思う一言が俺の口から飛び出す、どうやら彼女は俺よりチョイト前にさっきの金髪ロング君の生贄か何かにされた様だ。

だから、俺が殴られた時はスルーされたって訳なのね。

「つてオイ！ 君も頭から血が……！」

一人の男子君が俺のリアル血達磨人間状態に気付き、叫ぶと倒れてる女の子から俺に一齐に視線が向く。気が付くのが遅いぜ、よつちやんよ……と最初に気付いてくれた男子、仮名“よつちゃん”に心の中でツツコミを入れてると、このリアル殺人未遂現場に耐えられなかった者達が、次々と気絶して行く。

当然、授業処では無く中止。

俺は保健室に強制連行されかけたが、既に傷口が塞がってる為断り（その際に、大半の名も知らぬクラスメイトに変な目で見られた）その前に女の子の方が大変そうだったので、意識を女の子の方に持ってくる事に上手く成功させたのと同時に、このクラスの女の子って結構レベル高いなあ……と血だらけの顔をしながら、不謹慎な事を思う。まあ、全員俺の好みの対象外ですがね。

続く

2：つーかこの世界の女(タレ)ってレベル高いな(後書き)

中学生時代の話しは飛び飛びで進みます。

3：「世の中を上手く渡る方法は、思った事をストレートに言わずに、オブラー

このお話の主人公は、結構人を突き放す言動が多いです

3：「世の中を上手く渡る方法は、思った事をストレートに言わずに、オブラー

あの、会った瞬間に血達磨にされてしまった事件から早、何ヶ月か過ぎた。

「フゝ」

その何ヶ月かの中に、校内で人気の無い場所を調査した場所に俺はタバコを吸いながら、ボケーツと黄昏れていた。

一応この数ヶ月の間は、色々な死に方を試してみたが、イマイチ効果的なのは無かった。

具体的に言うと、自分で刃物を身体中（男の勲章以外にだが）に刺しまくって失血死を狙ってみたのだが、死ねず。

ある時は、狭い部屋に一酸化炭素を充満させて安楽死も試してみたが、逆に良い睡眠薬がわりになってしまい効果無し。

またある時は、首吊り自殺を試すが、気を失うだけに留まり、これもまた効果無し。そしてこけ最近は、阿久根君（一応設定的には先輩）を挑発して撲殺死を望んでみたのだが、「殺してくれえ」と言ったのがまずかったのか、気味悪がられて逆に近付きもしなくなってしまった。

しかも何時の間にか、俺が最初に見た時に血達磨にされていて、しかもそれ以降、ほぼ毎日の様にタコ殴りにされて居た黒神 めだかさんとやらが、何をしてくれたのか知らないが、阿久根君を改心させてしまったお陰で、この学校に居る間は恐らく、俺は死ぬ無くなっただ。

そう……唯一“肉体的な暴力”という名の爆弾を解体してくれたのだ、黒神さんとやらは。

全く、余計な事をしてくれるよ。

「フウ」

まあしかし、たかが中坊如きが本気で人を殺<sup>ヤ</sup>れる訳も無いのも事実だし、これはこれで良かったのかもな。

改心させられた本人も満更でもなさそうだったし？ それに、次の目星が無い訳でも無い。

あの現・生徒会長である球磨川君とやらは、ごく近い将来何か強大な能力を手に入れてくれそうだしな？  
なにせ、あの生徒会の副会長さんはアレだもんな。

「おやおや？ こんな所に校則違反者がいるぞ？」

「と……噂をすれば何とやらだな、と思いながら声がした方向へと首を傾げる。」

「まだ授業は始まってないんですがね……」

「そんな事は分かってるよ。僕が言いたいのは、君が口にくわえてる物のことだ。」

ああ、タバコね。



ハイハイ解りましたよ、消せば良いんでしょ、消せば、と悪態をつきながら携帯灰皿で揉み消す。

「ほら、これで良いですか？ 安心院先輩？」

キーホルダータイプの携帯灰皿を目の前にいる人物……安心院さんに見せ付けながら言うと、本人は「それで良い」と言わんばかりの顔をしながら頷く。

タバコ位、自由に吸わせてくれたっていいのにさ……と思っている  
と、昼休み終了のチャイムが鳴り響く。

フト見ると、校庭で遊んでいた何人かの生徒が、校舎の中に入るの  
が見える。

だが俺は、午後の授業もサボる気満々な為動かない。

「僕の事は親しみを込めて、安心院あんしんいんさんと呼んでくれたまえ……と  
再三に渡って言って来たのに、まだ言うつもりが無いみたいだね……  
……」

「別に貴女と親しくなったりつもりは無いですし、これかもあるとは思え無いんでね、悪いがお断りさせて頂きますよ……ファッア」

欠伸混じりに、ハッキリと拒絶の意を伝えた後、その場にねっころがる。荷物は教室だし、このまま良い感じに日が当たるこの場所でお昼寝と洒落込む腹積もりだ。

放課後辺りに、真面目さんな黒神さんに絡まれるがね。

「……あ？ 何だあ、まぐだいたんですか？ 安心院先輩、授業始まりませ〜」

「君もだろ？」

「良いんですよ俺は、中学生なんて義務教育なんだから、単位なんてねえし……てな訳お休み〜」

シツシツと、追い払うような仕種をしつつ本当は知ってる癖に、業と煽る様にして言う。

てか寝たいから早く消えて欲しい、ハッキリ言って……邪魔だ。

「君は……」

「あん？」

「君はどうして何時も僕を邪険にするのかな、僕に恨みでもあるの？」

軽く瞼を閉じつつ安心院さんの話を聞く。  
邪険、ねえ。

「何時も、と言うほど貴女に会ってた気がし無いんですがね」

「そうだったかな？ 確か今日を入れて25回は顔を合わせてるんだけど」

「なに？ そんなに会ってたんすか？ なら今度からはお互い、0回を目指しよう」

くだらねえ事言ってるやないでとっとと消えて欲しい、別にアンタに恨みなんか無いが、アンタの顔を見てると、逢いたくて仕方が無い女性性が頭の中に浮かんでしまう……。だからこれ以上、俺に関わらないで欲しい、と流石に声には出さないが、思ってしまう。

「……………」

「……………」

何時もなら、此処から妙な言い回しで俺を更にイラ付かせるのだが、今日は妙に大人しなと思うのと同時に、逆に何も言っていないで俺を見下ろしている人物に腹が立って来る。

「……………チッ」

思わず舌打ちをしながら、これ以上この空間に居ると苛々した感情が爆発するので、直ぐに別の場所へと移動して、そこで昼寝の再開をしようと思ひ、仰向けに横たわってた状態から重い身体を起こして、第二の安住の地へと足を運ぶ。

「……………」

「……………」

歩く……………。

「……………」

「……………」

止まる、後ろを見る。  
何か居る。

「……………」

「……」

歩く……。

「……」

「……」

止まる、そして後ろを見る。  
何か居る。

「……何ですか？」

いい加減鬱陶しいので、一定の距離を保ちながらついてくる安心院  
さんに怒りを抑えながら聞く。

「別に……君と同じ方向に用があるだけさ」

「……」

ほほう？ なら。

「そうでつか、なら俺は気が変わったんで、元の場所に戻って寝ますから……安心院先輩はこの先にある用事とやらを頑張ってくださいね」

と、恐らく自分で見ても、小憎たらしい笑みを浮かべながら、心にも無い事をすれ違い様に言い、元居た昼寝場所に向かいお昼寝モードに移行する。

流石の安心院さんも、それ以降はついてこなかった。  
ちなみに何時もの俺なら、あそこまで人を邪険にしないつもりだし、ましてや人嫌いじゃない、それ相応の理由がある。

あの安心院さんの顔は似過ぎ……いや全く同じなのだ、婆ちゃんにいや、婆ちゃんの方が安らぎオーラが出てるから、一概には同じとは言え無いし、そもそもあの人と婆ちゃんを一緒にするつもりは無い。

そりゃあ、最初に見た時は本気でびっくりはしたが。

だけど、安心院さんを見るたんび、俺の胸は苦しくなる……万が一いや億が一にでも、二度と婆ちゃんに逢え無くなるかもしれない不安感……。

だからあの人とだけは、必要以上に親しくするつもりは無い。  
でないと、取り込まれてしまう、あの人に……安心院さんに。

「畜生……」

気晴らしのタバコも味がまずく感じる、午後だった。

そして更に数ヶ月後。球磨川君が何かしらをした影響か、安心院さんが……一部の人間以外の者の記憶から消えた。

続く

3・・・」世の中を上手く渡る方法は、思った事をストレートに言わずに、オブラー

次回……又はその次辺りから、原作に入ります。



4：「学校と学園って……つぶあんとしあんの違いと同じ……じゃねえか

どなたが知りませぬが、このお粗末小説を評価して頂き、ありがとうございます。

これかも地味に頑張りたいと思います。

さて、今回で中学生時代は終了します。

4：「学校と学園って……つぶあんとしあんの違いと同じ……じゃねえか」

あれよあれよと二年の時間が過ぎ、季節は出会いと別れの春。無事に中学を卒業してしまっただ俺は、もう何に対しても嫌になってきた。

「……ハア」

この二年もの間、何があつた訳も無く、結局死ぬ事が出来ずにズルズルとそしてグダグダとこの世界で生きて来た。

死ぬ為に様々な策を張り巡らし、ある時はヤの付く人が経営する違法賭博会場に出向いてわざと馬鹿勝ちをし、ヤのつく人のイチヤモンにわざと反抗、そしてドラム缶コンク詰めになされて、東京湾沈められたりしても死ぬ、スカイダイビングをやった時は、パラシュートを開かずに上空一万メートル転落死を試みてもやっぱり死ぬない。まあ、そんなこんなで、二年が過ぎたって訳だ……。

「ハア……」

そして今では、日に三回はため息をつくのが日課になってしまった。ちなみに、当の昔に婆ちゃん成分が切れたのだが、どうも俺の思考回路が“どうしたら死ぬる”とか“どう挑発したら殺してくれる”で頭が一杯で婆ちゃん成分が無くても生きられる状態なのだが。

「逢いたいな……」

二年という決して長くは歲月……それでも逢いたい気持ちは変わらない……いや、以前よりも逢いたい気持ちが強くなってる。

そう……自身の能力チカラの様に。

「……」

自分の掌を見ながら、二年前の時の能力チカラを思い出す。

今日で分かった事だが、俺の能力は一年周期で増大していつてる。

始めの一年は、気が付か無かったのだが、今日この瞬間、俺の中に存在する二つの能力……婆ちゃんから名を貰った能力、無賢蔵ゼロ・インフイニティと奴が勝手に俺の中に容れてきやがった再臨リセットの力が増大して行くのが解る。

「早く死なないと……もう時間が無い」

あの手帳に明記されてるのが本当なら、タイムリミットは後三年、俺がこの世界に飛ばされる前の年齢になった瞬間に……俺は奴の暇つぶしの勝負とやらに負ける。

何故なら俺が18歳になった時、一年周期の力の増大とは比べ物になら無い位に能力チカラが肥大化する。原作ストーリーが終了するとか関係無い、認めたくもねえが、その時点で俺は完全に不死の生物になつちまうらしいのだ、そうなれば誰にも彼にも俺を殺す事が出来ず、自ら死ぬ事も出来ない。

それだけは……。

「絶対に……死んでやる!!!」

端から見れば、危ない人みたいな発言をしてるのだが、生憎自分の部屋なのでその様な心配は皆無だ……それはそれで寂しいもんなのだが。

その夜……。

「明日からまた、高校生、か」

高校の“箱庭学園入学案内”と有りがちな文字がタイトルになる資料を読みながら、また面倒な学生生活を送るのかねえ、と肉体系年齢と精神年齢のギャップを感じながら缶ビールを片手に柿ピーをポリポリと食う。

何故中坊の頃にサボりまくってた俺が高校に行く嵌めになったのかというと、あの進路相談員が余計な気を利かせてくれたお陰だ。

勿論最初は断ったが、進路相談員いわく、中々の身体能力を持つ者達がいったり、喧嘩が強そうな所謂“猛者”と呼ばれる奴らがゴロゴロ口といると言うので興味本位で願書を出したのだが、次の日になって、合格通知書が我が家のポストに何故か投函されていた。

（数ヶ月前）

（何故に？）

意味が解らない状態で、進路相談員にその事を説明すると「よくやっただな！！」と怪しむそぶりすら見せずに、暑苦しい抱擁をして来た。

これが女……しかも年上のお姉ちゃんとかだったらどれだけ良かった事か……と思いつつ、目の前にいる進路相談員は、もしかしたら真性の馬鹿なのかもしれない……と一人考えたのは記憶に新しい。しかも……。

「よしっ！ お祝いだ、学園の制服やらその他必要な物を買ってやらあ！！！」

「はあ！？ いや、良いから！！！」

この三年で、一番絡む割合が多かったのが、この進路相談員だったのだが、流石にそこまでして貰う義理は無いので断った。だが、この強引な進路相談員は、全く聞く耳持たずに、学校に必要な物全てを買い揃えてくれたのだ。

「よし、これでお前は、気兼ね無く箱庭学園で頂点<sup>テッペン</sup>としてこいちゃっ

！」

「いやだから、何のだよ……」

人の話を聞かない人だと、三年もの間に分かった事で、半ば諦めながら聞くしか無く、結局、箱庭学園に行かなければいけなくなっ  
てしまったのだ。

く回想終了く

「グビツグビツ……ぷっはぁ！ まあ、暫くは学校に行つて、俺を  
殺せる相手が居るかどうか捜す事にするかなあ」

4本目のビールが飲み終わり、明日の入学式に出る事を、取り合え  
ず決めてさっさと寝る事にした。

（しかし……未だに不思議だな。何で俺が合格？ あれだけ中坊や  
つてた時はわざと悪い事してた気がしたんだかな）

布団を被り、天井を眺めながらあの学園の事を考える。  
授業には殆ど出ず、学校は直ぐ抜け出しサボり、そのままパチンコ  
店直行等々……逆に素行が悪いのが目だったのだろうか？ と今更  
考えた所で遅すぎるのだからな。

「まあ明日は、ほんのちょっぴり楽しみだな」

あの進路相談員が言うんだから、良い奴の一人や二人居るだろう、  
いなかったら……うん、その時考えよ。

続く

4：「学校と学園って……つぶあんとしあんの違いと同じ……じゃねえか」

主人公は原作を知らないので、自身の利益になる為ならいきなり突撃をかます事が多々あるかもしれません。



## 設定2（前書き）

タイトル通りその2です。

## 設定 2

名前：霧生 零

年齢：16歳（本来の年齢は18）

身長：180？（後に3？程伸びる）

血液型：Rh - AB型

容姿：ジュエルペットに登場するキャラ、アンディ王子と全く一緒  
（知らない方は画像検索でもして下さい）

結局何だかんだで、この世界で三年程生きて少し成長した青年。  
本人はさつさと死にたいのだが、チートボディのお陰で死ね無い、  
そして殺されないのもので全体の三割程、諦めモードに入ってるが“婆  
ちゃんに逢いたい”を行動原理に頑張ってる。

性格は死ぬ為には他者を平気で利用し、その者に利用価値が消えた  
瞬間表には出さないがその者に対して一切の興味を示さなくなる。  
それ以外は、「健全な死にたがりの学生」と自称している。

ちなみに中学校時代によく絡んだ“先生”のお陰でチャラ男子備軍となっていて、本人も一応の自覚がある。そして相変わらずモテない　とまでは行かなくなったのだが、性格や素行に一癖、二癖もある人間からは妙にモテる。

## 能力1

### ミュータント 突然変異者

### ゼロ・インフィニティ 無賢蔵

他者の能力をコピー又は取り込み、自身の尺度で永続的に昇華させる能力。（能力を取り込まれた者は能力を永久に使え無くなる）

1年周期で能力が強くなっていった。

一年目は、相手の使う異常・過負荷を見れば即自分の物と出来る様になった。

二年目は、永続進化のコントロール。

三年目は、5?以内ならワイヤレスで相手の能力を奪い取る事が可能となった。

能力2

リセット  
再臨

主人公のチートボディの原理にてコントロール不可能。  
こちらも1年周期で能力が強くなっていった。

一年目はリセットさせるまでの時間の微妙なコントロール。

二年目は他者にある程度干渉させる事が可能に。

三年目は他者に干渉する際に30?以内ならワイヤレスで能力を干渉させる事が可能になった。

## 設定2（後書き）

次回から原作入ります。

5：「入学式？ ああ、つまんねーからサボるよ？」（前書き）

主人公は別に不良じゃありません。

単に面倒臭さがりなだけです。



い。

(我慢しろ……此処でブチ切れてこのガキ共をぶちのめしたら、それこそ俺の計画がペアだ)

此処は、古今東西昔からある机に突っ伏して睡眠学習モードが一番だと思い、お眠りに入るが。

「ねーねー!」

「……ZZZ」

誰だか知らないが、俺の背中をチヨンチヨンと突きながら呼ぶ。対して俺は、古今東西である“シカト”を発動中。

「ねーねーってば!」

「……ZZZ」

我慢しろ、キレるな俺。

「オ〜イ寝てるの? 寝てたら返事してよ〜」



「だあああ！！　るっせえぞゴラァ！！！！」

俺の制服を引っ張りながら起こしに来やがって……決まりだ、ブツ殺す、と並々ならぬ決意の下、目の前いたチビなクソガキを睨む。

「オウ！　ワレエ、よくもワシを起こしてくれたのお！！」

人に聞けば100%ヤー公の口調ですと言わんばかりの形相と口調で、目の前のアホ毛チビ餓鬼（見た目判断）の頭を片手で掴み、自分目線まで持ち上げる。

周りが「こ、殺される」とか「うほっ、いい男」等と言ってるが知らん。

「いやーゴメンゴメン。機嫌が悪かったみたいだねっ」

何だこのチビ、全くヒビツて無いばかりか、腹の立つ笑顔を見せてきやがったぜ。

「今の俺は最っ高に気分が良いんでね、この窓から放り投げて擬似スカイダイビングの刑に処してやるよ」

これで普通の人間は死ぬるのだから、羨ましい事この上ない。

「アハハッ！ その前に君の足元にあるメモ帳を拾ってくれれば嬉しいんだけどなあ」

「あ？」

最後の遺言か？ と思いつながら自分の足元を見ると、確かに今時の餓鬼が使用しそうなメモ帳が。

「なんだこれ？」

「それ、アタシのなんだけど、返してくれると嬉しいなあ……な  
んて」

「あ？ ああ、ほら」

「アリガト……ついでに降ろしてくれると嬉しいなあ、ってね」

「え？ お、おお」

アホ毛チビ餓鬼の言われた通りに降ろす。  
何か言いくるめられてる気がしないでも無いが。

「うん、それじゃあ拾ってくれてありがとうね〜!!」

そして風のように、俺の前から姿を消した。

「なんだっただ？」

もはや、怒りも湧いて来なくなったので、その場に座る。

周囲の餓鬼共が俺をスゲー目で見てくるので、たまたま筆記用具容れの中にあつたカッターを取り出し、刃を出したし引っ込めたりしたら、一斉に視線を逸らしてくれた。しかしあのチビ……友達には慣れそうにないな、気にはなるがね。

第一、メモ帳を取る位で俺を起こそうとする意味が解らない。だとすれば、単に俺が珍しかったのか？ まあいい、いずれにせよだ。

(確かに、アンタの言った通り……この学校は面白いかもな)

心の何処かで、余り期待しちゃあ居なかったが……フッフ、少し評価を改める必要ありだな。

それから暫くして、入学式が始まったが当然の如く出席してない。

所詮入学式なんて何処の学校も同じだろうし、何より今は喫煙場所の搜索が先だ。

(体育館裏、旧校舎裏、そして時計台の頂上。フフン、この学校は穴場がいっぱいだぜ)

既に頭の中は、ヤニ、ニコチン、タバコ、煙り、と続け様に流れていく。学校の為にニコチン摂取が出来ねえとかフザケテやるからなあ。

(んで、最後が……)

どっかの屋敷みてえなデカサを誇る建物を見上げていた。此処は剣道場……噂によると、剣道部が廃部になった後に不良のたまり場になったとかならないとか。

「さて、小僧共は仲良くしてくれるかな？」

まあ、いざとなれば全員追い出しゃあ良いんですけどね。

「1年坊！　ここ座れや！！」

「ウゝツス」

「1年坊、火いかせや火！！」

「オイゝツス」

結論、直ぐに仲良くなりました。

いやあ、こつも簡単に仲良くなれるとはねえ。

先輩方いわく『オメエから同じ匂いを感じる』ってんで、凄く歓迎されちまったよ。

「そついや、知ってるか、新しい生徒会長？」

俺が先輩方のタバコに火を点けると、誰かが不意に話題を振って来た。その内容が非常に興味深いので聞いてみる。

「生徒会長お？　なんだそりゃあ？」

「なんでも、スゲエ奴が生徒会長になったとか……」

「ああ、しかも1年らしいぜ？」

「明日の朝会辺りに出て来るとか」

「どんな奴なんだ？」

「聞いた話じゃ、化物みたいな奴だとか……」

「それ俺も聞いた、なんでも3Mはある巨人とか」

いる訳ねえだろ、んな奴と思いつつも、明日の朝会に出てみますかと思うのだった。

続く

5：「入学式？ ああ、つまんねーからサボるよ？」（後書き）

次回から本格的に原作突入です。

6：「『24時間365日誰からの相談を受け付ける』……………いやいや、男が

あえて原作沿いに主人公を突っ込む……………と見せ掛けて、です。

クオリティーは何時を通りです。



6：「『24時間365日誰からの相談を受け付ける』……………いやいや、男が

く何だかんだで数日後」

『世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実 is 適当か？』

「ふあゝあ……………ねみい」

『安心しろ、それでも生きてることは劇的だ！』

(今日の夕飯何にすっかなあ……………)

『そんな訳で本日より、この私が貴様達の生徒会長だ。 学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい』

(あつ、塩と醤油切らしてたんだつた。 帰りに買わないと……………)

『24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける!!』

「やべえ、タバコも補充しとかねえとな」

体育館の外まで響く女の子の声をバツクに、俺こと霧生零は黄昏れ

ていた。

いや、最初はきちんと中に入って噂の生徒会長さんのツラを拝もつとしたのだが、なんか怠くなったので音声が聞こえる場所まで行って、そこでサボる事にしたのだ。

「ふわぁ……ねみい」

今日になって何回言ったか解らない。

なんせ昨日は、珍しい高レートの雀荘に行つて遅くまでジャラジャラやってたからなあ。

まあ、結果だけ言えば勝つたけど、四暗刻・大三元の西の単騎待ちが炸裂した時の爽快感は半端無い、一気に点差が開いたし。

「今日もタルいし、帰ろうかなあ……」

学校に登校して約一時間チョイ、早くも俺の中の悪魔が『帰って寝た方が良くぜえ、ケケケ!』と囁いてる様な気がしてる。

「うん、決めた……帰ろう!」

心の中の天使が『真面目に授業を受けなさい!』とか言ってる気がしないでも無いが、悪魔の方と契約を交わした俺にはもはや聞こえなかった。

教室に戻ると、俺の席の隣の席にて突っ伏しながら何かブツブツ言  
つてる野郎一人と、誰かの噂をしている昨日のアホ毛チビ餓鬼がい  
る。

「……………」

その横をさりげなく座り、鞆を取りながら帰りの準備をする。

横の二人以外の餓鬼共が俺を『何でいんの？』みてえなツラで俺を  
見てくるが、もはや慣れたもんだ。

(よし、準備完了……………かゝえろつと)

今日の夕飯は何にすっかなあ、とか考えながら帰る為に席を立つが、  
隣にチヨロチヨロと動いてたアホ毛チビ餓鬼が喋ってるのが聞こえ  
る。

しかし今更だが、この学校の制服って、なんかダサいな。

「しっかし、あのお嬢様。全校生徒の前でよくあんな啖呵が切れる  
もんだよ、人前に立つのに慣れてるっつかさー」

「カツ！」

横目で何気なく聞いてみると、机に突っ伏してた男子が、苛々した感じで身体を起こす。

「ありやあ人の前に立つのに慣れてるをじゃねーよ、人の上に）・・  
・・）立つのに慣れてんだ！」

「んーそうだね。そうでなきゃ、1年生で生徒会長になれないもんねー」

ああ、何だ生徒会長の噂ねえ、周りの餓鬼共と一緒にか。

まあ、俺はその生徒会長さんのツラを見ちゃいねえからな、話題についていけない。

そもそも集団の輪に入る事はもはや不可能だが。……ってくだらねえ事考えてないで早く帰ろうと思ひ席を立った瞬間、椅子が後ろの机に良い感じで当たったお陰で、中々の音がした。

「あ……」

思わず出てしまった俺の声。

「うん？」

「あん？」

直ぐ隣に居たアホ毛チビ餓鬼と金髪坊やがこちらに気付く声。

「……………何？」

何でか知らないが、俺の顔をジーツと見てきやがる目の前の餓鬼二人。

肉体年齢的には同い年かもしれないが、精神年齢は二十歳ぐらいあるからな、頭の中では餓鬼と認定してるのだ。声には出さないがね。

「あれ？ 君って昨日の……………？」

「ああこの前、睡眠妨害してくれたチビね……………」

取り合えず、あたかも今気付きましたみたいないな感じで話を合わせる。

「チビって、そりゃあいくらなんでも 「霧生!？」……………え？」

「は？」

アホ毛チビ餓鬼との会話とは余り言えない行為に勤しんでると、後ろに居た金髪ボーヤが指差しながら俺の苗字を叫ぶ。

てか、あんまり目立ちたくねえからデケエ声で俺の名前を呼んで欲しく無いし、何故デメエが俺の名前を知ってるんだよ。

「えーっと、何で君が俺の名前を知ってるの？ ……どっかで会ったっけか？」

『ワレエー！ 何処の組の者じゃコラア！』とは言え無いので、比較的優しめに聞く。

真面目な話、こんな金髪ボーヤの事等知らないし。

「人吉善吉だよ。ホラ、中学の時に同じクラスだったろ！？」

中学？ いや、俺殆ど授業サボってて当時のクラスの顔と名前なんて覚えちゃいないんだけど。

「ん？ ゴメン覚えてないや」

「そうか……あつ、なら黒神めだかは知ってたんだろ！？」

「ん？ あゝ よく覚えてるぜ、授業サボるたんびに絡んで来た女の子だろ？」

ヒデエ時は、無理矢理連行されそうになった事もあったっけな、逃げたがね。

「そうそう、そんな時に横に黒い髪をオールバックにした奴がいたろ？」

オールバック？ …………… あっ、ちょっと思い出して来た。

「いたけど………… え？ あの時の子って君なの？」

「思い出したか！？ それが俺だよ」

お、オイオイ。マジかよ、人って髪型が変わるだけで分からなくなるもんだなあ。

「そうなんだ………… ほえゝ  
わかんねえもんだなあ」

「まあ、あの後直ぐに周りから『ダサイ』って言われて直ぐに戻し

たからな」

「へえ……所であの子は元気なの？」

「あの子って……ああ、あいつの事か？ その言い方だと、あいつがここの生徒会長になったの知らないのか？」

「そうだったの？ ゴメン、俺朝会サボってたからさあ」

「ハハツ、相変わらずだなあ」

苦笑いしている金髪ボーヤ改め、人吉君から聞いた情報に少しばかり驚かされたぜ。

確かに今からしたら聞いた様な声だった気がしたけど、まさかこの学校にいるとは。

参ったな……あの子が生徒会長となると、少しばかりめんどうになりそうだな。

「あ〜」

「ん？」



二人で軽い会話を交わしていたら、いつの間にか空気がって奴になりかけてたアホ毛チビ餓鬼が、会話に乱入して来た。

「いやー二人共、アタシの事忘れてるっばいかなあ〜なんて……」

「……スマン、正直忘れてた」

普通に申し訳なさそうに謝る人吉君に対して俺は。

「申し訳ございません。正直に言えば意識して忘れようとしてました」

友達にはしたくないような言葉で攻める。  
俗に言う軽めの毒舌だ。

「あはは……」

「相変わらずだなお前。なんつーか、わざと人を突き放す言動が目立つつーか……ああ不知火、コイツが言う言葉は一々間に受ける必要なんて無いからな？ 単なる挨拶代わりみてーなもんだし」

「アタシは全然気にしちやいないから大丈夫だよー！ 昨日も色々

あつたしねー霧生く〜ん？」

俺は人吉君の事を知らないのに、俺の事をある程度知ってるってのは妙な気分だな。

それとアホ毛チビ餓鬼改め不知火さんとやら、ニヤニヤしたツラで俺を見るなよ、この前のアレは結構マジだったんだからさ。

「人吉君がそこまで俺を知ってる理由を聞くのは置いといて、だ。新しい生徒会長さんの事が少しばかり気になるんだが……」

これ以上グダグダと話す気も無いので、さっさと内容の起動修正する。

適当に話をすれば、向こうも勝手に満足するだろうし、俺も気持ち良く帰れるって訳だ。

「あ？ ああ、あいつね……本当めんどろな事をしてくれたよなあ」

「それは本心で言ってるのか？」

「どづいつ事？ 霧生君」

「ん？ ああ、この子……っーか人吉君ね、俺が中坊の時の記憶か

ら察するに、いっつも黒神さんと二人一緒だったからなあ」

「へ〜？」

「ばっ！ 誤解を招く言い方をすんな！！ あれはあいつが勝手に  
だなあ！」

照れ隠しか何かで、まくし立てる人吉君。  
ほほう、なら。

「不知火さん不知火さん、見て下さいよアレが俗に言う“ツンデレ”  
”ってやつですぜ？」

「見ました見ましたよ〜霧生さん。全く何で素直になれないのです  
かねえ」

流石だぜ不知火さん、やつぱりこの子は、人を引つ掻き回すタイプ  
の様だな、アドリブもなんのそのでこなしてくれたぜ。

「お、お前等……さっきまで余り仲良くなかったよな？」

「えー？ これは別に仲が良いとかじゃ無いんだけど……」

「そうだよ人吉君、単なる“ボケ”と“ツツコミ”みたいなもんだよ……」

「「ねー？」」

「ぜってえ仲が良いだろお前等！？」

人吉君のツツコミに久しぶりにゲラゲラと笑ってしまった。

不知火さんからのパスも良い感じで受け止められた俺は気分が良くなったのか、そのまま三人で談笑する事にした。

心の中の悪魔が『サボンじゃ無かったのかよ！？』とか言ってる気がしたが、面白けりやそれで良いやになってしまった俺は普通にスルーを決め込む、別に俺は人嫌いじゃ無いし、普通に面白いのなら人に話掛ける事だっつてするさ。

〈数分後〉

「でもよ、確かにあの子は凄いケドさ……捏造ばっかだな、聞いた限りじゃ全長が250メートルあるとか聞いたんだけど」

「いやいや、ないない」

「あたしも聞いたよ、高度6万フィートをマツハ2で走行とか」

「何だよそれ、身体が超合金か何かで出来てるってんなら解るけど」

「フーかもはや人間じゃねーよ」

自然と生徒会長さんの話をしていた、なんせ話題が無いもんだから。

「んでさあ、人吉」

「あ?」

「アンタもやつぱり生徒会に入るの?」

「あ、そりゃあ俺もきになるね」

まあ、多分入るんだろうが。

「カツ、確かに何度も誘われちゃいるがな、これ以上あいつに振り回されるのはゴメンだな! だから……」

予想はできるが、何かを宣言する為に一息入れ、そして。

「俺はぜってー！ 生徒会には入らない！！！」

元々容姿は普通にカッコイイので、妙に決まっている人吉君なのだが……ああ、後ろに何かいなければもつとカッコイイのにな……。多分隣に笑顔で固まってる不知火さんも似た様な感想を思ってる事だろう、うん。

「まあ、そうつれない事を言うな善吉よ」

そして後ろに居た女の子は、人吉君の頭をガシツとわしづかみにする。

本人はこの世の終わりみたいな顔をしてる、成る程ねえ性格は余り変わっちゃいねえか。

「ん？」

「あ？」

何故か知らないけど、俺のツラを見て一瞬固まる生徒会長さん。思わず喧嘩越しの口調の返事を返してしまったのは仕方がないでし

よう。

「貴様は……」

「はい？」

「フツ、調度良い貴様も来い!!」

「えっ　　グエツ!!」

そうやって俺の首根っこを掴みながら、連行して行く。  
それを不知火さんはハンカチん振りながら見送るのが見える。  
フツ、白状な子だぜ。

続く

6：「『24時間365日誰からの相談を受け付ける』……………いやいや、男が

先に言っときますが、主人公はチャラ男予備軍です。



7:「この俺に後退は無い！ 在るのは前進全勝のみ！！」……ううむ一度でいつの間にか総合評価が1000を越えてました……。いやマジで恐縮です。これをバネに頑張りたいです。ありがとうございます。

さて、今回で主人公のルートが決まってしまいましたが、先に言えば王道ルートって奴です。元々はこのルートにするつもりは無かったのですが自分、二次創作で主人公ルートで話を作った事が無かったので、チャレンジの意味でやってみました。

ちなみにお互いの呼び名ついて突っ込みたい所があるとは思いますが、一々主人公を〇〇何年と長くなるのであえて下の名前で呼ばす様に無理矢理矯正しました。

そのところは広い心で受け止めてくれたら幸いです。

それではどうぞ。

7:「この俺に後退は無い！ 在るのは前進全勝のみ！！」……うむ一度でい  
理不尽という言葉がある。  
意味は『道理に合わない事』なのだが、今この瞬間にも俺はそれ（・  
・）を味わってる。

「霧生、大丈夫か？」

「人吉君さあ……理不尽って言葉、誰が考えたんだろうね？」

「言いたい事は分かった……オイ！ 普通に連れてこれねえのかよ  
！？ 生徒会長さんよお！！」

人吉君が目の前に仁王立ちして居る生徒会長さんに吠える。  
出来たら俺も援護射撃をしてやりたい気分だ。

「フン、私の誘いを断り続ける貴様が悪い。それに昔のように“め  
だかちゃん”と呼ぶが良い」

「そんな事は今は良いんだよ！ 俺はともかく、何で霧生を連れて  
来たんだよ？ 見るよ霧生の奴、余りに唐突な事が起こってポーッ  
としてやがるぞ？」

「……アハハハ、ちょうちよになりてえ」

窓の向こう側に居る紋白蝶が羨ましいぜ。

「ム……。そうだな、善吉にも言って置くか……。オイ、コツチを向けー！」

「ブヘッ！！」

頭に鈍い衝撃と共に意識が紋白蝶から元に戻る。決まった、文句を言ってみよう。

「ってなあ……。ゴラア！ 人の頭は叩けば600万個の脳細胞が死滅するとか訳の分からない説が流れてるんだよお！！」

論点が軽くズレてる気がしないでも無いが、文句の一つ位言っても罰は当たらんだろう。

大体昔から苦手なんだよ、こういったタイプのガキ女タレは。

「フン、人が折角引っ張って来たのに話を聞かないから悪いのだ」

「うわぁ……人吉君聞きました？ バツサリ切り捨てましたよ？  
彼女は鬼ですか？」

「諦める霧生、奴は昔からそうだ」

「うん、何となく分かってたさ」

人吉君に慰めると言った情けない構図になつてるにも関わらず、当  
の生徒会長さんはやり切った感丸だしの表情で制服を脱ぎだす。

「うぉーい！！ 当たり前のように人の後ろで着替えてるんじゃない  
！！」

「？ 私と貴様の間に恥じらいなんてないだろうに、少なく共小六  
の時まで、一緒に風呂に入った仲だろう？」

「昔の話だろうが！ それに霧生だっていんだらうが！！」

「つかよ、俺はこんな茶番劇を見せられる為に連れて来られた訳じ  
やねえよな。」

何か今になって眠気が来たんだけど。

「フン、奴なら別に問題は無い。その証拠に見ろ」

「ああ!？」

「ふあゝあ……」

「よ、余裕な表情をしながらの欠伸……」

「あゝ ねみい」

「奴は中学の時の修学旅行の時に女湯に間違っって入った時も、あんな態度だったしな」

「おい……」

俺の黒過ぎる歴史をほじくり返すなよ。

「あゝ オレも思い出した。確かすつげえ涼しい顔して何か言ったら、女子にタコ殴りにされてたって噂が……」

「君も思い出すなよ」

人吉君の言った通り、中学の修学旅行の時に何を間違ったのか、女湯に入ってしまった事がある。まあ、中学生という餓鬼の肉体を見て欲情する変態なつもりは無いし、俺の好みの女性のタイプから大きく掛け離れた人種なので思わず鼻で笑いながら素っ裸の女の子達に向かって『乳臭い身体だな』と言ってしまい、女子全員からの報復を喰らったのだ。

結局死ぬ程のダメージは無かったが、多分生きて来た中では一番死に近いダメージだったかもしれない。

「俺のくだらない話は置いといて、だ。俺を連れてきた理由は何ですか？ まさか思い出話に花を咲かそうなんて事は無いでしょ？」

「フツ、相変わらずだな……何、善吉と貴様を呼んだ理由は他でも無い」

「……」

どーせ人吉君を呼んだ理由は分かるからアレだけど、俺を連行した理由がわからない為、何時に無く真面目に聞いてやろうと、生徒会長さんの顔を見る。

「改めて言おう二人共生徒会に入ってくれ、私は貴様等が必要だ」

誠意の籠った言葉と共に頭を下げる生徒会長さん。

人吉君は、何かを想ってるのかダンマリだが、俺は訳がわからない。

「ちょっと待って下さいや。俺が必要？ 冗談は顔だけにして下さいよ、何で俺なんですか？」

マジで意味がわからない。

俺が必要って……俺は人吉君みたいな幼なじみとやらでも無いし、お世辞にも模範生徒じゃ無い。それに中学の時は決して仲が良かった訳では無いのだ。

「貴様は中学の時に私の言う事に全く従わない者の一人であり、尚且つ私以上に……だからな」

「!？ 何だと？」

ボソリと言った言葉に、思わず口調が戻る。

まさかこの餓鬼……気付いてやがるのか？

俺が普通を通り越した存在だって。

なら……。

「どうだ？ 頼む……私を手助けてくれ、霧生一年よ」

「……フッ」

「？」

「クツクツクツ……」

やべえ、我慢が出来ねえよ。

「クハハハハハハハハハハ！　ハツ／＼ハハハハハアツ！！！」

多分この世界に来て、一番の笑い声を出したと思う。  
まさかなあ、こんな餓鬼に気付かれるたあな。

「フウ／＼　良いだろう！　アンタに着いてけば、俺の目的は更に完全なものになるからな！！！」

「そっか、なら」

「ああ、生徒会とやらに入っちゃんよ」



この餓鬼がこの世界の主人公だつてのは、名前で分かつてた。  
なら逆に奴等の輪とやらに入つて、いずれ来る死亡フラグとやらに  
真つ向からぶつかつて……………死んでやるよ。

「ではよろしく、生徒会長さん?」

「ウム、こちらこそ頼むぞ霧生一年」

「ノンノン、俺の事は零で構わんよ……………まあ、呼びたく無ければ良  
いんだケドね」

「良いだろう貴様は特別だからな、喜んで呼ばせて貰おうか。それ  
なら私の事はめだかちゃんと呼ぶが良い“零”」

「フフツ、今だけ君が好きになれそうだよ“めだかちゃん”」

お互いに握手を交わしながら俺は思う。

今日を持って俺は生徒会に入ることになった、俺自身の目的の為に…  
…頼むぜ? 黒神めだかよ、お前なら俺を殺してくれるかもしれないのだからな。

「さて、善吉はどうだ? 零は喜んで生徒会に入ってくれるらしい  
が、お前はどうか?」

「ちくしょう、こんな状況で断れる訳ねえだろうが。良いぜ、テメーに振り回されるのははや慣れっこだからな、俺も入ってやんぜ生徒会によー!!」

「決まりだな」

「だな」

黒神めだかが微笑むと同時に俺も薄く笑う。

人吉善吉君、君も俺の為に頑張って貰おうかな？　ククク……。  
その後、何故か三人で円陣を組む事になった。  
ハズイぜ……。

続く

おまけ

零

「そっいや、俺と人吉君の役職って何さ？」

善吉

「俺の事は善吉で構わねーぜ」

零

「あ、マジ？　なら俺も零って呼んでくれや」

善吉

「おう！」

めだか

「役職については、後で言う、今は早速来た依頼を片付けてからだ」

零

「依頼？」

めだか

「『三年の不良達が剣道場をたまり場にしてます、どうか彼を追い出してください』だそうだ」

零

「え、っ！？」

善吉

「ん？　どうかしたのか？」

零

「い、いや（俺もその仲間だった……って言えねえ）」

めだか

「よし、行くぞー!」

零

「（先輩達……ご愁傷様でござりまする）」

終わり

7:「この俺に後退は無い！ 在るのは前進全勝のみ！！」……うゝむ一度でい

先に言っときます、主人公はニコ中です。

8：「勝つぞ……！絶対に勝つぜえ！」とか言った瞬間負け確定さ（前書き）  
急ぎで書いた為に、話が飛び飛びのクオリティー最低です。

申し訳ございません。

8：「勝つぞ……！絶対に勝つぜえ！！」とか言った瞬間負け確定さ

やはり世の中は解らないもんだ。

なんせ俺が生徒会とやに入る事になったのだから。

まあ、それが普通の生徒会なら入りはしない、だがあの生徒会長さんは話は別だ、あの子は何かを持っている。

その何かのおこぼれを貰う為に俺は疲れない程度に頑張る事にしたのだ。

剣道場の件から一週間後……いやあ、あの時は大変だったなあ。

生徒会と先輩の板挟みをもろに受けたし、同じクラスの日向君とかいう奴（その時初めて知った）が良い感じでイッチやってやがったのを善吉君とめだか君が上手く纏めてくれたし、俺も色々と裏で動いて上手く片付いたのは奇跡に近いぜ。

主に先輩達に土下座しまくったり、場合によっては殴りまくって記憶を消したりとか……。

「フウ……生徒会室は、空調完備だからサボるのにはもって来いだな……ニコチンは摂取出来ねえがね」

中々に日当たりも良いし、エアコン常備、これに灰皿が用意されてりゃあ言う事無しなんだがね。

「いやいや、お前未成年だよな？」

「アアン？ 良いんだよ、俺の精神年齢は二十歳越えてっからさあ……っーか俺がヤ二吸ってる事知らなかったっけか？」

「知ってたけどよ……学校に居る時ぐらいは我慢したらどうよ？  
それに、その理屈は理屈にもなってるねーぞ」

「アハハ……確かに」

実際問題、俺の精神年齢は二十歳過ぎなんだかな……と言った所で信じちゃくれないか。

「っーか善吉君よ……さっきから鏡の前で何してんのさ？ 自分の姿に酔いしれてるの？」

さっきからソファでねっころがる俺の斜め前で、全身が写る鏡を前にして、生徒会専用の制服を着ながら、何やらため息をついている善吉君が地味に気になるんだがね。

「ちげーよ。俺って黒の服が似合わねえと思ってる訳でさ」

「はあ、そうか？ 俺は結構様になってるよっに見えるんだが」



実際に善吉君は普通に着こなしてる様に見えるんだが、一体何が気に入らないんだか。

「あゝあ、だから制服白のこのガッコにしたのによ」

「学校選ぶ理由が軽すぎ無いか？」

何その『このラーメンは気に入らねえから、ちょっと県外まで行く』みたいなノリは。流石にビツクリよ？

「いやそんなことはない、善吉には黒が良く似合う」

おう？ いつの間に善吉君の後ろで同じポーズしているめだか君が居るぜ、ボケーンツとしてたから気付かんかった。

「どうわっ！ だからなんでお前はいつもいきなり後ろにいるんだよー！」

そして何時もの様に驚く善吉君。

「チヨリッス！ めだかちゃん」

軽目の挨拶をする俺に対して、ウムと一言返したためだか君。

「善吉よ、見てくれが気になるなら内側にジャージでも着てみたらどうだ？ きつと格好よいであろう」

めだか君の提案にほほうとなる俺。

確かにカツチヨよさげな気がするからね。

んで案の定半信半疑で中にジャージを着てから制服を羽織るとあら不思議、トラックの運ちゃんみたいな格好の出来上がりだ。

「デッ、デビルかけえ！！ 反骨精神のカタマリみてーだ！」

「良いなあ善吉君…… オリジナリティある格好に加えて普通に似合ってるし……」

「そ、そうか？」

テレテレしてる善吉君に対して普通に羨ましいと思う俺。

いや、普通に格好良いっしょアレ？ なんか世間じゃダサイみてーな事言われてる気がするが、少なくとも俺は良いなあと思うぞ。

「ねえねえ、時々真似して良いかな？」

「おう！ どんどん真似てくれ！！」

お、おおふ……ニカッと笑う善吉君が眩しいぜ。

「制服の話はそこまでにして、そろそろ目安箱のチェックの結果を  
言っぞ」

会長専用の机の上に目安箱を置き中に入ってある紙を取り出す。

あ、ちなみに俺は普通に制服着てるだけです。

「明日から目安箱の管理は庶務である善吉の仕事だ。本生徒会の最  
優先事項だから、決して手を抜かぬ様に」

「へい」

けだる気に返事をする善吉君。

彼の役職は庶務で、ちなみに俺は……。

「ねえ、俺に対しての仕事は何か無いの？」

「“役員補佐”である貴様は今の所は善吉の補佐をしてくれ、今の所私が手を貸して欲しい所は無いからな」

「ういゝ」

これが俺の役職“役員補佐”で内容は他の生徒会役員の手伝い及び意見出しで、なんでも緊急時には生徒会長と同じ権限を持つ事が出来るとか……。

まあ緊急時以外は庶務と殆ど（・・）変わらないのだがね。

「でもさあ、俺の役職って十代前の生徒会で無くなったとか聞いたんだけど、何で今更復活させたのさ？」

「先日も言った通り、私は貴様……零に手を貸して欲しいとは言ったが、お前が私の下というのは私自身納得がいかないからな。だから緊急時に会長と同じ権限を持つ事が許される役員補佐を復活させたのだ」

「ふゝん、別に俺は下でも構わないんだけどなあ」

「それじゃあ私が納得出来ないのだ。とにかく貴様は役員補佐で決定だ」

「へいへい」

「では早速来た依頼を片付けるぞ」

「ウッス！」

「おっつ！」

まっ、この子の近くにいたりゃあ、いずれでかいヤマが来るはずだしその時までは無難に従わせて頂きますよ。

つー訳で目安箱に投書された依頼をやる事に。

「ふむ、今回はちゃんと記名されてるみたいだな」

「あの……ごめんなさい。本当はこんなこと下級生のあなた達に相談することじゃないかもしれないんだけど……」

「下級生？ ……って事は貴女は先輩？」

「え、ええ……（なにこの子……）」

「なんだ貴様、ちゃんと投書の内容を読んで無かったのか？」

「まあ、一人が内容を把握してりゃあアレになって……で、ちなみに学年は？」

「二年九組……だけど」

「ほほう、なぐるほど、へえ？」

「おい零、急にニヤニヤしてどうしたんだよ？」

フツ、後ろの二人が俺の好みの女性のタイプを知ってる筈無い、か。それにしてもフムフム、年上かあ。良いね良いねえ、テンション上がって来ましたたよ？

「よし、遠慮はいりません。俺達は誰からの相談を受け付けるがモットーですから、ササッ！ お茶をどうぞ」

先輩……いや有明さんにお茶を出す。  
一応精神年齢から考えたら年下なのだが、肉体年齢的にはこの方のほうが上なので最上級の敬意を表するぜ。  
結局俺は言ってる事が曖昧なのだよ。

「あ、ありがと……（さっきまで死んだ魚の様な目だったのに急に態度が変わった……）」

しまった、露骨過ぎたか？ くっ、テンションの上げ下げがむずいぜよ。

「貴様……私の台詞を取るなよ。さっさと下がれ」

「お前ホントにさっきからおかしいぞ？」

善吉君とめだか君が俺を無理矢理後ろに下げる。畜生終わったよ、この野郎が。

（1時間後）

それから俺は、意気消沈な状態で依頼を聞く。  
なんでも陸上部に所属している有明先輩のスパイクが悪戯でスタスタにされたとかで、犯人を突き止めて欲しいとかで、何だかんだで一時間が過ぎたのだが……。

「善吉君よ。あの子ってコロンも真つ青の推理力だよな？」

「ありすぎて逆に引くぜ」

校舎の陰から陸上部の練習風景を覗きながらの俺と善吉君の会話。

「んで？ 不知火さん、どれが諫早先輩？」

横目で直ぐ横に居る不知火さんに犯人であろう諫早先輩の姿を教え  
て貰う、正直また先輩だつてんでテンションが上がり始めてるぜ。

「あの水道の所にいるのがそうだよ。三年九組諫早先輩、有明先輩  
と同じ短距離専門のアスリートで利き腕は左、同じスパイク履いて  
いるのはみてのとーり」

「ほう、俺と同じ左利きか、話が合う……とは思えないな」

気難しそうな目つきだな。

「お住まいは23地区で三年前から文車新聞を購読中 だつ  
てさー」



「……いつも思うのだが、不知火の情報ってどこから引っ張ってくんの？」

「あひやひや！ 人吉が正義側のキャラにいたいのなら知らない方がいいね」

様は人には言え無いような事ってか？

「ちなみにあの諫早先輩、有明先輩が代表に選ばれたせいでレギュラー落ちしてまーす」

「ふくんで事は、だ」

「ああ、決まりだな」

上級生が下級生に出し抜かれたのが面白く無い故の犯行って所かね。やはりあの子の推理は正しかったって訳だな。

「意外とあっけなかったな」

「といつても、ほとんどめだか生徒会長の推理のお陰だがね……お  
おっ！ 水を飲んでる姿がなんかセクシーだ！……ってオイ、二人  
とも何故俺から距離を取るんだよ」

「いや、なんかお前の言い方がヤラシー感じだったから」

「アタシも」

「フン、いずれ善吉君にも分かる時が来るさ。そして不知火さん、  
心配しなくとも俺は君に人間としては興味あるが、女性としては興  
味が1ナノも感じ無い！！」

言っただけで馬鹿野郎が。

「……それはそれで傷付くかなーなんて」

「零。お前はもうちょっとオブラートに包んで言えないのか？」

「フツ、曖昧な供述をした所で意味なんて無いからな、ハッキリと  
言っただけの方がお互い良いのさ……」

「いや、そんな無駄に格好付けながら言う事じゃないぞ」

とまあ、こんな感じでグダグダとやっている、めだか君が後ろからやって来て、物的証拠も無い癖に諫早先輩に『貴様が犯人か？』とメジャーリーガーも真つ青な直球180キロストレートで聞き出す。

諫早先輩もいきなり核心を突かれたのか、返ってテンパリボ口を出しまくった揚句に逃げ出すが、身体能力のスペックからして違うめだか君に直ぐに追い抜かれ結局捕まるのだが、めだか君も先輩を捕まえ様とはせずに何かを語った後その場を立ち去る。

その後、その場にヘナヘナと座り込む諫早先輩の所へ行って善吉君がめだか君について語り、いい感じで事件は解決の方向へと向かって行くのだった。

余談だが、善吉君の格好を諫早先輩がダサイと評した時は二人してマジでガツカリしたのは言うまでも無い。

〜次の日〜

「クッソー どうしてこのカッコ良さが伝わらないのか……」

「全くだ……諫早先輩にはガツカリだよ畜生!!」

善吉君と二人して制服の中にジャージを着た格好をしながら鏡の前で唸る。

やっぱりどっから見てもカッチョ良いと思うんだがなあ。

「あの……人吉君と霧生君、ちょっと良いかな？」

「え？」

「あ、有明先輩!？」

いつの間にか有明先輩が後ろに居たのだが、なんか最近背後を取られる事が多いな。

「人吉君のその格好、個性的でカッコイイと思うよ？」

「な、なぬっ!！」

「あ、アリガトございます」

「ちょっと、ちょっと有明先輩俺は？　ねえ俺は!？」

「あ、ああ、うん。格好良いんじゃないかな？」

「な、何で疑問形なんすか!?　せめて俺の目を見て言っして下さいよ!」

「うんカツコイイカツコイイよ」

あからさまに目を逸らしながらの発言に、俺の心はズツタズタさ…  
…グスン。

「お、落ちつけて、な?」

「善吉君は良いよなあ、先輩にカツコイイって言って貰えてさあ…  
…グスッ」

鬱だよ…死にたいぜ畜生。

「あ、ああ。そう言えばどうしました?　また何か変な事でも?」

俺の事など無かった事にしやがった。

「今度はロッカーから代用していたスパイクが無くなって…」

「は？」

「代わりに新品のスパイクとこんな手紙が入ってたんだけど、どう  
いう事だと思っ？」

「これは 「何々『ごめん』か……」 おい零、話に割り込んで来  
るなよ」

「うっせ、色男はだまってる！」

(かなり引きずってるな……コイツ)

先輩にカツコイイって言われたんだ、会話に割り込む位でガタガタ  
抜かすなや。

「……有明先輩、見た限りですがこれからはあんな悪戯も無いと思  
いますので、もう大丈夫ですよ？ 心配無いです」

「そ、そうかな」

「ええ……陸上、頑張ってくださいや。応援しますよ」

うんうん、良い感じで解決出来たから自然と頬が緩むのが分かるぜ。

「あ……」

「へえ？」

「なにさ？ 善吉君に有明先輩」

俺の顔見て新発見でもした様な顔してコツチを見る善吉君と有明先輩。

何だよ、照れるじゃねえか。

「あゝ 俺が言うより有明先輩お願いします」

「うん、霧生君って笑うと結構カッコイイかも」

「えっ？ マジっすか！？ イヤッホーイ！！ 褒められたぜー！！」

「この喜びをどう表現しようか……そうだ！」

「俺は鳥になるぜえ！」

何か今なら飛べる気がするので、窓を豪快に空けて窓枠に足を乗せようとするが。

「ばっ、馬鹿！　ここ4階だぞ！？　飛び降りようとするな！」

「うっせやい！　離せ、喜びの表現じゃああああ！！！」

「アハハ……」

後ろで苦笑いしている有明先輩の事などつゆ知らず、俺は喜びの余り窓から飛び降りようとするが、善吉君に後ろから羽交い締めにされて出来なかったのだった。

続く



8：「勝つぞ……！絶対に勝つぜえ！」とか言った瞬間負け確定さ（後書き

主人公ってもしかしくなくても真黒と相容れないかもしれない。

9：「ん？間違ったかな？」（前書き）

主人公の淋しい放課後の過ごし方です。



(つ、着いた……)

呼吸を整えながら、我が家であるボロアパートの階段を上がる。

なんだかんだでこのアパートに住み始めて二年が経過している、そして後三年……いや二年半位で俺がこのボロアパートに永住するか死ぬかが決定するのだが、この世界に永住となった場合……あくまでも場合であつて永住する気なんて更々ないのだが、もし永住決定となつたらまた一から進路を考えなアカンのかと思つと異常に気が重い。

「ハッ……くだらねえ」

馬鹿馬鹿しい何を考えてるんだ俺は違つだろ零。お前は帰るんだろ？ 死んで家に帰るんだ。婆ちゃんがない世界なんて……鬣の無い雄ライオンじゃねーか………チヨイスが何かおかしい様な気がしたが気にしたら駄目だ。

「……よしっ！」

両頬をバシんと叩き気合いを注入しながら、部屋へと入る。

「帰つたぜえ………って誰もいないがね」

もう何回目になるか分からない淋しい光景。

まあ、普通に考えれば孤独な独り暮らしの部屋に『ただいま』って言って『おかえり〜』なんて返ってきたら、間違いなく空き巣か酔っ払いだけど。

「……………まずはニコチン摂取からっ」と

学校を出た時から、ずっと頭の中でリピートしていたタバコを吸う、口に含んだ煙を肺に浸透させてから吐き出す……………うゝむ、マイルド。我慢して我慢させられた後の一服の爽快感と開放感は最高だ、心が落ち着くぜ。

「さて、と所持金は……………野口の兄さんが5人に福沢の兄さんが8人……………まずは夕飯の買い出しだな」

財布の中を確認してからバイクのキーを取り、上着を着る。

ちなみに口座の方には、おおよそ人様には胸を張って言えない様なやり方で得た金がうん百万単位であり、しかも元の世界に居た時から持ってた大型二輪と車……………普通免許がこの世界に来た時も所持してたのだが、よくよく免許証を眺めてたら何故か今いるこのポロアパーツの住所になっていたのは嬉しい誤算だった。要は、この世界で免許を取得出来る年齢になれば、わざわざ教習所に通わなくても車やらバイクに乗れるようになる、という訳だからだ。

んで16歳になった今。現在は原チャリと250CCまでの二輪車が青の国家権力さんを気にせず、堂々と乗れるようになった。ちなみに大型二輪と車は18……………即ちこの世界へ永住する事になった瞬間

間、解禁されるのだ。

「ガソリンは……あんまり無いな、帰りに入れとくかな」

ガソリンが高騰してる世の中の情勢に軽くイラツとしつつバイクのエンジンをいれる。

ちなみに俺が乗ってるバイクは、ローソンレプリカ仕様の“Z1000J”カウル無し、通称“ジェイソン”だ。

今の年齢では乗ってはイケナイのだが、たまたまバイクを買う時に目に入ったのがこれだったので『まあ、いいか』の精神で乗ってる。サツにも捕まった事無いしね。

「さて、とエンジン音に違和感無し……行きますか」

軽い曇り空の中、ハンドルを握りアクセルを入れ、近所の大型スーパーに向かう俺だった。

《リーチ！》

「おっ？ 赤オーラ……激熱リーチってか？」

スーパーでの買い溜めも終了しいざ家に帰りましょう……という筈だったのだが、たまたま走ってた時にたまたまイベント開催中の旗があるパチ屋が目に入ってしまいフラフラと店に入って、何となく打ってみたのだが……。

《世紀末覇者拳〇!!!》

「おおい！ いきなり文字赤ラ〇ウリーチかよ……これはもしかしたらもしかするぞ？」

座ってから打ち始めて、まだ二千円しか使っていないのだが、いきなりの激熱リーチに心躍る。

《ハアア〜》

「ああん！ ケンシ〇ウ対ラ〇ウリーチかい……どうせならト〇対ラ〇ウが良かったが……後は時の運だな」

《フォアター！!!!》

《又オリアア!!!》

ケンシ〇ウとラ〇ウが正面からぶつかった瞬間上のロゴが揺れる……

…ヤバイ、来たんじゃないか？ 後は……。

「頼むぜえ……しゃっ！……！」

画面の中の二人が空中戦を繰り広げた後地上に降り、振り返りながらお互い睨み合う画面……そしてボタンプッシュのマークが出たので『頼むぜ……お小遣！』と思いつつボタンを押すと……。

《お前は……この時代に必要な男！》

(お……おおっ！ 来た、来たぜ！！ プレミア縦カットイン！！)  
本来なら、ケンシロウが何か一言言うカットインが、プレミアであるレ○のカットインになってる……という事は。

《フンッ！》

ラ○ウの兜が割れ、そして。

《ラ○ウ……！ そんな駄馬の上ではこの俺には勝てん！！》



当然ケンシ〇ウ勝ち、更に……。

「フフフリーチだったから何もせずともハイパーボーナスってね」

大当り……という訳だ。やっべ、周りのおっちゃんやおばちゃんやら兄ちゃんやら姉ちゃんやらがスゲー羨ましそうに俺を見てくるぜ、ククッ此処は余裕の表情でタバコだね。

「フウ……」

この後、夕方から入店して閉店ギリギリまで打ってた訳で、総額 5万の臨時収入が入ったのだった。

「すみませうん、LUCKY STRIKEのBOXを4カートン  
ください」

「かしこまりました（あら、超イケメン……）」

「」

いやあ、今日は色々あつて疲れたけどあのパチ屋での臨時収入のお陰でいくらか疲れが飛んだぜ。と、擬似的な疲労回復に酔いしれながら勝った金を必要な分を財布に入れて残りは口座に預けた後、タバコの買い溜めをする。

「ありがとうございました」

「フンフン　　と……夕飯買った材料が生物でなくて良かったわあ」

これが生物だったら、腐ってた事間違いなしだからねえ、ホントに良かった。  
後は家帰って飯食って寝る、大体これが俺の放課後の過ごし方だ。

続く

9：「ん？間違ったかな？」（後書き）

次回は再び本編？に戻ります。

10:「いいか？ 何度も言っては無いけど俺は年上好きなのだ！」（前書き）

主人公は結構我が儘なのかも知れない。

ってな訳でクオリティー最低ですが宜しければどうぞ！

「10:」いいか？ 何度も言っては無いけど俺は年上好きなのだ！」

どうでも良いのだが、何故あの学校はバイク通学が駄目なんだろう  
か。

恐らくは学校の品格とやらを著しく下げるとかっつてのが理由だと思  
うのだが、と何時に無くごちゃごちゃと言いつつ訳がましく言ってるの  
かと言つと……。

「9時、遅刻決定か。痛つつ……しかも二日酔い」

おもつくそ寝坊&二日酔いで遅刻決定なのだ。

いや、遅刻だけならこんなごちゃごちゃと御託めいた事を考える必  
要は無いのだが、つい先日辺りにめだか君に勝手な約束を交わされ  
たのだが、その内容が『遅刻及び授業のサボった場合は黒神めだか  
による特別補習』だというお互いにとって全く利益の無いものだ。

中坊の頃からそうなのだが、何故かあのガキ女……いや流石に可哀  
相だからあの子にしとくか、とにかくあの子は事あるごとに俺に突  
つ掛かってくるのだ、いわく『授業は楽しいぞ』だとか『そんな物  
を吸つてると早死にするぞ』等など、正直何回本気でブチのめして  
やろつと思つた事が……。

(また新しい目覚まし時計を買わないとな)

目の前で『ひでぶう！』となつてる目覚まし時計に黙禱を捧げなが  
らポリポリと頭をかく。

多分煩いとかいう理由で無意識に目覚まし時計の営業妨害という名の破壊をってしまったんだろう。ありがとう……君の事は忘れないよ目覚まし時計君6号、と柄にも無い事を思いながら遅めの朝食と軽いシャワーを浴びて鉛の如く重い足どりで学校へと向かうのだった。

「で？ 学校に行く途中にお前好みの女性が居たからといって、ついフラフラと着いて行った……それが遅刻の原因か？」

「そうです、一目見た瞬間雷が走ったもんで」

学校に着いて早々担任から遅刻の原因を聞かれるというある意味お約束の展開を迎えてる訳だが、まさか二日酔いで寝坊しましたとは言え無いので適当にごまかす。

目の前でコメカミをひくつかせながら自身の理性を抑えてる教師と、その流れを呆然と見ているうん十人単位の餓鬼共もといクラスメイ  
トがタルい二人のやり取りを眺める。

「もういい……早く座れ」

「ひい〜」

暫くジト目で俺を見てた教師だったのだが、やがて折れてお咎め無しで俺を席に着かせると授業を再開したのだった。  
座った時に善吉君と不知火さんが軽く苦笑いしてたのは何故だか印象的だったぜ。

席に着いて早々に睡眠学習モードへと移行した俺はいつの間にか放課後に突入、更にいつの間にか生徒会室へ召喚されてました。

「一組の担任から聞いたぞ。今日遅刻したそうだな？」

「……」

そして何故だが、正座をさせられています。

目の前には生徒会長さんであるめだか君が居てその後ろで目安箱のチエック中の善吉君、そんな物（投書）より俺をフォローしてくれよ……。

「スマン。これにはエベレスト山より高く、マリアナ海溝より深い訳が……」

「ほう、言ってみろ」

口元に扇子を当てながら何処かの時代劇風な取り調べを受ける俺なのだが、ハッキリ言ってそんなデカイ例えにする程の理由なんて無い。  
だって昨日は深酒をしてからの只の寝坊だもの。“響30年”とかいう少々値が張りそうだが、なんとも美味そうな名の酒が5本限定で売ってたのをついつい買い占めてしまった案の定美味かったから、ついつい夜遅くまで飲んでしまったただけだもの。

「どうした？ 言え無いか？」

「……」

どうしよう、よくありそうな言い訳『両親が危篤だったんです』  
は、両親がいないという事を知ってしまったているこの二人には通用しないし、かと言って正直に答えた所で動機が不純過ぎて普通に怒られてしまう。

最悪それが原因で『ガチ補習コース』直行だ。

それだけは何とか避けなければ……クソッ！ 何で俺がこんな馬鹿らしい言い訳を考えなければ……これが年上でしかもお姉さん氣質がバシバシの家庭教師だったら『色々と至らないと思いますけど、何卒ご鞭撻の程宜しくお願いします！』と嬉し涙を流しながら言うと思うのだが、その補習教師が目の前居る、1万歩譲って同年代の餓鬼……そんなの、何が悲しくて一緒に勉強をせなアカンのだ。



「ね、寝坊です」

結局言い訳らしい言い訳も浮かんで来なかったの、正直に言う事になった……ああ、もう嫌。

それから約2・30分程の時間を使い、めだか生徒会長様のありがたいお言葉という名のお説教を受け、説教だけで補習は無しになった。

このサプライズにはその場で小躍りする程喜んだ。

「そんなこんなで本日の投書は3件                   バスケット部部室の普請要  
請に学食の新メニュー開発そして、子犬探し、だ」

「子犬探し？」

（むっ！   来週の日曜日は設定Aイベントか……）

ありがたいお説教も終わり、生徒会のお仕事モードへと移行した二人の後ろでパチンコ屋のイベントを携帯でチェックする俺。  
仕事よりも趣味を優先するのが俺なのだ。

「ではバスケ部は私、学食の方は零、貴様が担当しろ……零？」

(フム、新台60台導入か……こっちも捨て難いな)

新装開店は大体オールラウンドに出してくれるからな。  
だが、少し遠めだな。

「おい、聞いてたのか!？」

「うおっ！ な、何!？」

耳元で呼ばれたので、一瞬心臓が止まるかと思いつつながら、何事かと声のした方向へと向くとめだか君が不機嫌そうな顔をしながらコチラを見ていた。

「ええつと、何か？」

話を聞いて無かった俺からして見れば、この状況は訳が分からない。

「……貴様は学食の件を担当だ、だ。聞いて無かったのか？」

「あ、ああ、ハイハイ分かりました。頑張ります、ハイ」

「聞いて無かった様だな……」

「みただいな」

何やら俺の背後で二人分のため息が聞こえたのだが、うん、次から気をつけますかな。

「ところで、善吉君は何をするんだ？」

「やっぱり聞いて無かったろ？ これだよ」

「ハハ、面目ねえ。どれどれ………善吉君一生のお願いだ、この学食の仕事と交換してくれ頼む、いやお願いします！  
！」

何気無く話を聞いて無かったのをカミングアウトしつつ、善吉君の

担当する投書の内容を見てもの凄く善吉君と仕事を代わって貰いたい衝動に駆られ、自分でも歴代1・2位にランクインする勢いのある土下座をかます。

「なっ!? オイオイ、いきなりどうしたんだよ!？」

「頼むっ……! 俺は昔から犬が大好きなのだ! 頼むうう!!」

超困り顔の善吉君を無視した土下座だが実際問題、犬好きだからって代わって欲しいのでない。

投書の差出人の名前と学年を見て代わって欲しくなったのだ。三年二組、秋月。かわいらしい犬のイラストに文字……間違いなく女子、更に年上、俺のやる気ボルテージは一気に上がったという訳だ。正直学食の新メニューなんて善吉君にも出来る仕事だからな、変わって貰えればお互いハッピーだ。

「うん」

「どつだろつか?」

何やら考え込んでいる善吉君。

それに対して俺は『考えるな! 感じるままに俺と仕事を交換しろ!』と念じまくる。

「いや、ほらめだかちゃんが俺に指定して来た仕事だし本人に許可も取らずに仕事を代えるってのは……」

横目でめだか君をチラ見しながら言う善吉君、対してめだか君は目をつむり紅茶を飲んでる。

「フツ、なら本人に聞けば良いのだ………めだかちゃん！ 別に代わっても良いよな？」

妙に絵になる姿で静かに紅茶を飲んでるめだか君に、確認を取る。暫くするとゆっくりとティーカップを受け皿に置き目を開ける。

「私は別に構わんのだが……」

よしっしゃあ！ 言動取ったあ！

「ほら見る聞いたか善吉君！！ 後は君が首を縦に振れば……」  
「だが！」  
「アアン!？」

会話に乱入して来た主であるめだか君を見ると、目をカツと見開いて俺を見ていた。

思わず喧嘩を売られた様な返事の仕方をしてしまったのは仕方が無いだろう。

「何だよ？ 何かあんのか？」

「零よ……貴様、そこまでして代わって欲しいのなら、それなりの理由があるのだろうな？」

「は？」

「そつだぞ。お前、時たまおかしな事を言い出すからな」

善吉君とめだか君に理由を言えと迫られた。

まあ、理由位は言っても良いかな？ 別に邪な理由じゃ無い……筈だし。と思い正直に理由を述べると、段々とジト目に近い目つきになっていく二人、そして。

「分かった。代わって貰いたい理由は良く分かったよ……」

「おおっ！ なら」

希望の光が見える未来を想像しながら『オラ、ワクワクすつぞ！』の気持ちで次の言葉を待つ。

「善吉……」

「ああ」

（ワクワク）

「早く行け、子犬捜しにな……」

「了解」

「えっ!?!」

「零、貴様は学食担当だ。私がやった人選振り分けに変更は無い。早く行け!」

「あ、あれ？ さっき『代わる事は別に構わない』……って」

「私もバスケット部の仕事を開始するかな……」

「おう、じゃあまた後でな」

「ねえ、聞いてる？」

何処からか出して来た虫取り網を引つ提げながら生徒会室を出る善吉君とめだか君。

出てった事で独りになる俺。

「な……何故じゃあああああ!!!」

思わず頭を抱えて叫んでしまったのはしょうがないだろう。

滞る事無く学食の件が終わったので、報告&帰宅の為に生徒会室へと向かいながらブツブツと独り言を言う。

「クソッ！ 犬探しの方が良かった……」

腐った女みたいに未練タラタラな状態で歩く。

確かに学食の件の時に上級生が居たのだが、いかんせん全員餓鬼臭かったのだ。

ああ、でも食育委員会とか変わった名前前の委員会と合同で学食新メ



ニユーを考えた時に会った、米良めい 狐吞このみさんとかいう人は少し違ったかな、軽くクール入ってたばいし。  
まあ、俺がサンプルとして作った飯が気に入ら無かったのか、終始ガンつけられたただけだったがね。

「フウ、早く帰って酒でも飲みたいぜ……」

今日の俺は良いこと無しだし、そんな時はさっさと帰って寝るに限るな。

「で？ 犬畜生にズタボロにされた揚句に捕まえられず、のこのこと戻って来たのか？」

「……ハイ」

上から下までズタボロの善吉君に、鬼の首を取ったの如く罵言を浴びせる。

代わってくれ無かった恨みはデカイよ？

「……というわけでございまして、不知火と一緒にターゲットを発見するも捕獲には失敗。その後の逃走を許してしまいました」

めだか君に報告する善吉君の後ろ姿が寂し気に見えなくも無いが、俺は全く同情はしない。

俺に代われれば犬ツコロの一匹や二匹、即座に捕獲してやったんだからな。

「そうか……まあなんとというかアレだな。取り敢えず貴様等の仲の良さは不愉快だな」

「ふわあゝあ」

既に興味が失せた俺はソファーにねっころがりながら、二人のやり取りを右から左で聞き流す。

「要するに、行方しれずとなっていた約半年もの間に、子犬は成犬になってしまったというわけか？」

「あー……まあ、そんなトコだ。いやそれどころか、ありゃあ完全に野性化しちゃってるよ」

(今日の夕飯何にしようか。たまには外で食うのも悪く無いな……)

「一応投書主にも会ってみただけど『なぬっ!』……なんだよ零?」

夕飯の事を考えてながら何となく聞いていると、善吉君の発言に超反応する。

「お前……会ったのか？ 秋月先輩に」

「ああ、そうだけど……」

「どんなだった？」

「は？」

「いやだから、どんな感じの女性トだった？」

会ったんなら是非とも感想が聞きたい。  
聞く位なら別に罪にはならんしね。

「あゝそれがいかにもって感じのお嬢さんでな？ とてもじゃねーが犬の事は言え無かったよ」

お嬢さん……か。

「あつそ、善吉君ご苦労」

何か急に冷めるものを感じながら、再びソファーに寝転ぶ。

「何だよお前、急に態度が変わったな」

「ああ、うん。まあいいじゃん、ほら続き続き」

「あ、ああ」

報告を再開する善吉君。その後ろで急に冷めた感情になりながらソファーにダイブする。

お嬢様タイプは俺の趣味じゃ無いので、一気に興味が失せた。

「ーか秋月って人は馬鹿なのか？ 犬を学校に連れてくるのかよ普通。」

このクソ広い学園で逸れたらそう簡単に見つからない事ぐらい考慮しろよ、第一何で犬の種類がウルフバウンドなんだよ。よく今まで人を襲わなかったな、犬の方がよっぽど利口じゃねーか。

「やはりこの件……私が動こう」

俺が秋月さんの事を考えていると、どうやらめだか君が動く事になったらしい。

なら俺はお役御免だよな、ってことで。

「んじゃあ、俺は帰っていいか？ 学食の件は片付いたし」

「む……まあ、良いだろう。学食長からも完了の報告を受けたからな」

「そついつ事だから俺は帰るぜ」

「ウム、では明日な……遅刻するなよ？」

「わかってるって」

「一々念を押すな。遅刻しずらいだろうが。」

「じゃあな零！」

「おう、善吉君も頑張れよ」

軽く挨拶を交わし、俺は生徒室を出た。

「たらら〜りらら〜 っと」

少し早めに学校を出れるのか、少しご機嫌に近い気持ちで昇降口を出る。

「塩〜 塩〜 名前で良くあるのはよしお〜」

適当に考えた歌を歌いながら歩いてると、周りの餓鬼共にクスクス笑われた……が今の俺は気にしない。

「〜 ん？ ありゃあ」

裏口の門から帰ろうと歩いてると、何か俺の目の前を歩いて行った。

「……………何だありゃあ？」

身体中傷だらけで『俺に構う奴は食いちぎる』と言わんばかりの雰囲気全開の、おおよそ犬には見えない単なる獣だ。

「あれが善吉君達が探してた犬か？ ハードルたっけーなオイ」

あんな出で立ちの犬ツコロなら善吉君のあの傷は納得だわ。

ん？ 目が合った、アレ？ 唸ってるぞ？ そして何故低姿勢なんだよ…… オイまさか。

『ギャオオオ！！』

「うわっ！」

いきなり俺に向かって飛び付いてきやがった。

咄嗟の事だったので、右腕を前に出したら見事に噛み付かれた。

『グルルルル！』

「イゝデデデ！ 何で俺に噛み付くんだよ、しかも犬なのに『ギャオオオ！』って……」

普通なら腕が食いちぎられる位の顎の強さなのだろうが、生憎俺の肉体は普通を乗り越してるから血がドバドバ出る程度だ。

「オイオイ、犬に噛まれて死ぬ実験はもう体験済みだから、テメエに噛まれても嬉しかねえぞ？」

『ビクッ！』

声色と顔つきと気配を変えて、右腕を食いちぎらんとする犬コロを睨むと、急に犬コロの様子が変わりだし、噛み付いて離さなかった右腕から離れる。

「フンッ！」

『キヤインッ！！』

すかさず、調教目的のゲンコツを食らわせると、雷に怯える犬みたいな鳴き声と共に気絶してしまった。

「ハア」 制服に穴が空きやがったな……あの秋月ってセンパイを脅して……いや、やめとこ傷は無くなったし」

既に傷が塞がった右腕を眺めながら、脅迫材料が消えた事を残念に思いつつ、気絶した犬を踏ん付けながら学園の門を出たのだった。ちなみに、その数分後に犬のコスプレをしたためだか君とその後ろに



着いていた善吉君と不知火さんが気絶した犬ツコロを見て大騒ぎしたの  
は次の日になって知った事だ。

続く

10:「いいか？ 何度も言っては無いけど俺は年上好きなのだ！」（後書き）

それではまた次回

11:「反則王って呼ばれてる位だからってつきり鉄仮面と水平二連式ショットが前半と後半に分けます。

てな訳で前半です。

ちなみにこの主人公は変に正直と言いますか……チャラ男予備軍と言いますが……とにかくどうぞ。

あと後書きに質問的な奴を載せてみました。

11:「反則王って呼ばれてる位だからってつきり鉄仮面と水平二連式ショットが

昨日は疲れた……。

なんせ、めだか君に恨みがあるとか無いとか吐かしてたエセ不良君達を善吉君と一緒にになって叩きのめしたのだ。

と言っても手を出したのは善吉君であって俺は一切手を出してない。だって、手を出したら向こうが死んじゃうし、それじゃあ『死ぬ』が行動理念の俺からしたら考えられませんからね。

なので、向こうがどつから引つ張ってきたのか知らない、釘バットやら鉄パイプやら模擬刀などの凶器トウケで俺に襲い掛かって来たのを真っ向から受けてやったら、顔を真っ青にした揚句気絶しやがったのだ、『自称グレてます』の癖してチキンな野郎だ。

まあ、殴って蹴つてを繰り返して作った傷がまるで“元に戻るかの様に”修復していくのだから普通の人間の神経だったら気味が悪くてしょうがないだろうけど。

ちなみに俺の外から貰ったこの力、再臨リセントの力についてだが、善吉君とめだか君と他数名はある程度知ってる。……といっても、彼等の認識は“傷の治りが異常に早い”程度だがね。

EP:11start

てな訳で昨日の事を思い出しながら、善吉君と並んで生徒会室へと向かってる。

お互い何気ない談笑って奴だ。

「しかし昨日の出来事クーデター（笑）は間違いだったって事にし

て、本人に言わん方が良いかもね」

「そうだな、これは俺達の胸の中にとこころ」

誰だったかのくだらないクーデター事件についての話だ。

「てか今更なんだけど君等ってさ、よく俺と一緒にいられるよな？」

「は？」

突然話の内容をすり替えたので、キョトンとした表情の善吉君。

「いや、さ。俺の身体ってさ、どんなに殴ろうが、蹴ろうが、刺そうが、斬ろうが、落とそうが、すり潰そうが、その場で出来た傷が瞬くまに修復するんだぜ？ 君等から見ても気持ちの良いもんじゃ無くね？」

むしろその逆だ、近付きたくも無いと思うのが普通の人間の考えだ、と何時に無く弱ネガティブ思考になると、善吉君は「んな事かよ」と言った後、続けた。

「まあ、なんだかんだでお前の場合は“アイツ”と違って他の人間の害になって無いしな。お前、中学の時は単なる素行の悪い不良中学生で通ってたし」

「ふ〜ん？」

確かにあの頃は、授業をサボる程度に留めて置いてただけで、暴力沙汰は無かったなそっぴや。

それに、善吉君の言う“アイツ”というのは、恐らく球磨川君の事だろうね。

善吉君ったら彼の事を死ぬ程毛嫌い&怖がってたし、でも今はどうなんだろうか、会えばトラウマ再発かな？

「まっ！　そういう訳だから零。気にせずめだかちゃんを手伝ってやってくれや」

柄にも無く頭を下げる善吉君。

うん、まあ……手伝うっちゃあ手伝っけど、俺の本当の目的を知った時はどんな反応をするんだろうね。

「ああ、可能な限り手伝わせて貰うよ」

「おう！」

まあ、時期が来るまでは君等に従わせて貰うよ時期が来るまで、ね。

「!?!」

およ？ 考え事をしてたら善吉君がひっくり返ってらあ。

「どうしたよ？ 善吉君……ってああ、なるへそ」

「善吉、零。今日は柔道部に行くぞ」

下着姿のめだか君が柔道着を掲げながら言ってる。

相も変わらずの露出狂っぷりに感心するぜ。

うーん、これが年上のお姉さんだったらと思うと悔やまれるぜ。

「鍵をかける！ カーテンを閉める！ 人目をはばかれ！！ 何遍  
いったらわかるんだ！！」

疾風の如き動きで扉、窓、カーテンを閉めてめだか君に怒鳴り散らす善吉君だが、その手のタイプの人間にゃあ無駄だろうぜ、と思いつながら二人の不毛な争いをポケットと眺めるのだった。

「柔道部？」

「うむ、柔道部部長の鍋島三年生は知ってるな？ 彼女から目安箱に投書があったのだ」

「鍋島つて、チームトクタイ特待生の鍋島猫美さんか？ あの有名な柔道界の反則王と呼ばれたあの人？」

反則王？ 誰だそりゃあ。

生憎、最近まで人付き合いもへったくれも無かったのでその鍋島とかいふ人の事は知らない。

唯一分かるのは女性……しかも三年生つて事か。

「フム……興味あるな」

「ほう、貴様がそんな事を言うなんて珍しいな」

「まあ、人間ですから興味位は持ちますぜ？」

「まあ、何にしても行ってみようではないか。柔道部といえは懐かしい顔にも会えるだろうしな」



「あ、ああ……」

「懐かしい顔？」

「零。貴様も知ってる顔だ」

俺も知ってる？ うーん……ますます分からない。  
まあ、行ってみれば分かる事か。

「失礼します」

「おお、やっと来たか」

「……チッ」

「あからさまな舌打ちは止める」

つー訳で俺は柔道場……では無く職員室に居た。本来なら俺も一緒

に行こうとしたのだが、悪意のあるタイミングでの担任の呼び出しを喰らった、呼び出された内容は大体分かる為に苛々する。

「……今度からは気をつけるよ？」

「……………ハイ」

「よし、この話は終わりだ。早く行け」

「失礼しました」

予想通り、似たり寄ったりな話題での説教を喰らった。

頭の中で何百回になるか分からない程、目の前でウダウダ吐かして  
る教師を様々なシチュエーションでSATSGAIしていたので  
8割は話を聞いて無かったがね。

その後、得に何も無く柔道場に到着。

例によって剣道場と同じ位にデカイ道場なのは言うまでもなく、こ  
んなもんに金を掛けるのが理解出来ない、俺なら売り飛ばして直ぐ  
金にするね。まあ、所詮人によって価値観は違うのだから、只の道  
場に無駄に金を掛けまくる人からしたらそれはそれは素晴らしいの  
だろう。

「すみませ〜ん、遅れますい〜た……って、うわ〜お、モウレツウ」

柔道場の中はまあ〜凄かったわ。

いやだって数名以外の人間がお昼寝タイムなんですもの。

「むっ……零か。遅かったな」

「ゴメンよ、思いの他長引いたんでね」

「フン、普段から真面目に授業に出てればそんな事にはならなかったんだ。自業自得だな」

「返す言葉もいけません」

「まあ、良い。後少しで鑑定も終わるからお前もあそこに居る善吉と一緒に待ってる」

「ほい」

めだか君が後ろ指を差した先に居る善吉君の元に行くと、他二人の柔道部員がいる。

「つかその内の一人って……そういう事かいな。」

「よお零、遅かったな」

「君は……」

「ほお？」

何時もの様に挨拶する善吉君にちよっぴり顔が青い様な様子の金髪ロングイケメンに、誰だか分からない人。

「ん、先公の話が嫌に長くてね……っと、久しぶりですね阿久根センプイ？」

「……」

善吉君に理由を説明しつつ、金髪ロングイケメンもとい阿久根君に挨拶をするが、あからさまに警戒してますな顔で俺を見てくる。

「へえ？ めだかちゃんが俺も知ってる顔ってただから誰かと思いきや……いやはや、まさかの阿久根センパイだったとはねえ……意外だわ」

普通に言っただつもりなんだが、阿久根君は気に入ら無かったのか睨みが強くなっていく。

「意外？ どういう意味だ……」

「んだよ……そんな睨まなくても良いんじゃないやありませんか。俺が言いたいのは、中坊の頃の貴方から考えてたら今の状況が信じられないって意味ですよ」

まあ、それもこれも俺が勝手に阿久根君に期待しただけなんだが。

「……」

警戒と軽い恐怖が交じった睨み方で俺を見る阿久根君。

その空気がキツイのか流石に善吉君と……誰かさん、得に善吉君がオロオロしだす。

「お、オイ二人共。落ち着けて、な？」

「俺は至って平常心だぜ？ 善吉君。 だけど向こうが敵意バンバンだからねえ？」

「……………っ！」

ニヤケ顔の俺が気に入ら無かったのかより一層睨みを効かすが、殺気を出すならもうちょい真面目にやって欲しいもんだね、これならヤー公の睨みの方がまだ怖いしな。

「まあまあ、阿久根君に…………霧生君っていうたかな？ 何があつたか知らんけど思い出話もそこまでにしときや」

「あ？」

横からいきなり話に割り込んで来たもんだから、例によってまた喧嘩腰の口調が出てしまった。

この癖早く治さないとマズイな。

「そんな睨まんといてーな……………」

「ごめんなさい。 これ半分癖になっちゃって……………」

「本当だぜ、早く直せよな？」

「わゝとるわい」

「グホツ！」

後頭部に両手を組ながら軽口を叩く善吉君に軽くイラツとしたので、空いていた脇腹に軽い肘打ちをすると良い感じで入ったのか、その場で悶絶する。

「ったく、一タリアクションが大袈裟なんだよ………っとな事より自己紹介を、生徒会“役員補佐”の霧生零です」

悶絶する善吉君をほつといて、名も知らぬ女性に自己紹介をする。相変わらず阿久根君は睨んでくるが、これから先もう君に用は無いから何もしないんだがなあ。

「ごらご丁寧にどうも。鍋島猫美です、どうぞよろしゅう」

握手をしつつ名前を告げられた、がその名前を聞いた瞬間思わず鍋島さんの顔を見る。

「? なにか?」

珍しい物を見る様な目をしたのが気になったのか、聞いて来る鍋島さん。つーか、え? この人が善吉君の言ってた反則王さん?

「いや、善吉君から反則王さんの話を聞いたから、どんな人なんかなあって思ってたら、まさか貴女が……」

「それはどういう意味や?」

「うーん、俺の勝手な想像ですが『俺の名前を言ってみる』とか『兄より優れた弟など存在しねえ!』や『馬鹿め勝てばいいんだ!』とかいう鉄仮面被りの人みたいな外見を想像してたもんで」

「そ、そうなんや」

反則の“王”ってんだから、そもそも男だと思ってたしね。

「それがこんな美人さんだとは……うん、来て良かったです」



「は!?!」

「お、お前何言ってるんだよ!?!」

「まさか君がそんな事を言うとは……意外だ」

俺の言葉にビツクリした様子の鍋島さんと善吉君。阿久根君は冷静に俺が言った事が意外だったらしい。

「つか鍋島さん普通に美人じゃん、事実を言ってる何が悪いんだよ。」

「意外って阿久根センパイ……貴方は俺がホモか何かに見えたんですか?」

「い、いや。そういうつもりじゃ……」

「それと善吉君。美人さんに美人と言って何が悪い?俺は美人には美人、ブスにはブスとハッキリ言うぞ?」

「あ、あのなあ……」

俺が言った事に、呆れ顔の様子で返す善吉君。

今に始まった事じゃないが、コイツ等って美人を見ても案外平気な

顔して会話するよね。

俺なら迷わずナンパに走るってのにさ。

といっても今回はナンパじゃ無くて純粹にそう思ったただけだがね。

「いやあ、こんなイケメンに言われるなんて、何か照れるわあ」

うつすらと顔を赤くしつつ照れる鍋島さん。

うゝむ、やはり美人だ。

「アハハ！ ありがとうございます。ってそうだ、後でメルアド交換……ギャン！！」

連絡先の交換を持ち掛け様としたら横から結構な衝撃を喰らった。

衝撃の正体は名も知らない柔道部員で、どうやらめだか君がこちらに投げ付けて来たらしい。

鍋島さんと善吉君と阿久根君がそろってビックリ顔だもん。

「イッテテ……オイめだかちゃん！ 何すん………だ？」

途中で言葉が詰まったのは仕方が無い、何故だから知らないがめだか君がすごい氷点下の目で俺を見据えてやがるのだ。

「あ、あのお？ 黒神生徒会長、一体いかがされました？」

場合にもよるが、こういった眼力の持ち主から睨まれるのは、肉体の暴力より怖い時があるのだ。だからついつい下手に出てしまうのは仕方が無い事なのだ。

「貴様……私は善吉達と談笑しながら一緒に待つてるとは言った。しかし、誰がナンパしろと言った？」

「あゝ いやだって美人さんがいたら声を掛ける事位は常識……いや申し訳ございません、だからその柔道部員さんをコチラに投げ付けるのは勘弁して頂けないでしょうか？」

いつの間にか発射体制に入ってた柔道部員さんを見て、瞬時に謝罪をする。

こんなアホみたいな事で死ぬのはどーせ無理だし、だったらせめて投げ付けるのは男子部員じゃ無くて女子部員……あつ、また男子部員が飛んで……。

「あべしっ……」

上手い具合にお互いの頭がヒットして、余りの痛さにその場で悶絶する。

「ひ、人は余程の事が無い限り、真っ直ぐ飛ばない筈なのに」

「フン」

俺の疑問も『そんなもん知らん』という顔をされてバツサリと切り捨てられた。

「零、今のはお前が悪いと思うぞ？ あの手道部員には悪いが」

「オレもこの虫の言う事に同意する、君が悪い。……しかし、相変わらずめだかさんは勇ましい！」

「あ、アハハハ」

どうやら善吉君と阿久根君は俺の味方では無いようだ……覚えてやがれ。そして鍋島さんは苦笑いした顔も美人だった。

「さて、鍋島三年。阿久根二年以外鑑定は終わった、後は先程も言った通り善吉と阿久根二年の試合で最後だ」

「し、試合？」

「ああ、そういえば貴様には言って無かったな。阿久根二年は善吉と試合をする形で鑑定するのだ」

「あ、ああそうでっか……」

「この状況を誰も心配してくれないのですか……おじさん悲しいよ？」

「霧生君……大丈夫かいな？」

と思ったら鍋島さんが普通に心配してくれた。  
何だろう、目から汗が出て来た。

「グスツ……貴女だけです、俺に優しい言葉を掛けてくれるのは、  
やべえ惚れそうになりました」

「……ま、まあ、黒神ちゃんが怒るのも分かる気がするわ、ナンパはアカンでナンパは」

「いや、別にナンパなつもりは無いのですが……一応以後気をつけます」

そもそも美人な女の人に話掛けただけでナンパ扱いしやがるめだか君の認識が異常なだけであって、普通の人間からしたらあんなのは挨拶みたいなものだ。

それと何故か『惚れそう』の件をスルーする鍋島さんがチヨイと気になるが、取り敢えず頭の隅の方に置いといて、善吉君と阿久根君の試合を見学するのだった。

続く

11:」反則王って呼ばれてる位だからってつきり鉄仮面と水平二連式ショットが恋愛描写って入れる方が良いのか？ それとも入れないべき？

このお粗末話を読んで頂いている皆様はどう思いますかね？

12:「おいテメエ！ そのうるせえ笛吹くの止めないと鼻に一発痛いの食らわ  
後半ですが、タイトルに意味も何もありません。

つーかもはや原作沿いでは無くて単なる主人公の長考タイムになっ  
ていて、その上主人公のキャラ男予備軍全開モードの回だったり…  
…。

まあ、読んで後悔しないという鋼の精神力を持つ方はお読み下さい。

それと、いつの間にか評価が340位になってました。  
いやホントに恐縮です。これをバネにしたいと思います。

それと、感想をくれたアキスマンさん超ありがとうございます。



12：「おいテメエ！ そのうるせえ笛吹くの止めないと鼻に一発痛い食らち

ちゅう訳で、俺は善吉君と阿久根君の試合とやらを見学をしている訳ですがハツキリ言おう……………退屈だ。

めだか君と鍋島さんは善吉君と阿久根にお熱（試合の様子を見ている意味で）で他の柔道部員も同様だ。

その中で欠伸するのを我慢しながらボケーンと見ている俺は完全にアウエー感全開って訳だ。

あつ…………阿久根君の巴投げが綺麗に決まってるなあ。

「退屈そうだな零」

「んあ？」

阿久根君の一本背負いが決まり、投げられて早四回目の善吉君を身体にフワフワした感覚を覚えつつ見ていたら、不意にめだか君から話し掛けられる。

「まあ、柔道のルールを知らないの何がアレなのかがサッパリとわからなくてね……………」

「フム、なら私が実践を交えながら教えてやるつか？」

「結構だ。只単に自分を痛めつける趣味は無いんでね」

「そうか……」

めだか君の提案を断ると、そのまま視線を戻す。先に言って置くが、俺は死ぬのが目的であって、自身を痛めつけるマゾピストの気は無いと胸を張って断言する。

第一あの程度では死ねない、たかだかスポーツの柔道なんかに興味は無い。

いや、柔道をこよなく愛する人達に失礼だから『なんか』呼ばわり事は訂正しよう。

話が変わるが、さつきから何か隣に居るめだか君と鍋島さんが天才だかどうかとかがこちゃこちゃと言ってる気がする。

盗み聞きするつもりは無かったのだが、どうやら鍋島さんは天才がお嫌いらしく、対してめだか君は「天才等いない」と言い張ってる。俺は思う……めだか君よ自分の姿を鏡でみたまえねって。

正直、努力だけではどうにもならん事が世の中にはごまんとあるし、この目の前で何やら語ってるがきんちょは人間の持つ得意分野を集約した様な存在だからな。

これは俺の勝手な目測なんだが、めだか君近い将来、限り無く“俺に近い存在”になりえるかもしれない。

と言うのも“人から聞いたり見たりした事を自分なりに吸収し更に上げる”は俺の中にある力と似ている節があるのだ。

さしずめ、俺が無限吸収ブラックホールだとするなら彼女は完全コンプリーってところか。

まあ、俺の力の様に“特技を吸収された人間が永久にその特技を發揮出来なくなる”とまではいかないと思うがな。

「お……………ぜ……………ろ……………?」

まあ、めだか君がいい感じで成長してくれた時は俺の力を覚えさせて、その後俺の中から力を奪い取ってくればハッピーエンドなんですけどね? 上手く行けば良いのだが……………。

「おい零!?!」

「はっ?」

考え込んでいた俺を揺さぶる様にして現実に戻してくれためだか君が目の前にどアップで見えた。

「ええつと……………何か?」

「何か? じゃ無いだろう。阿久根二年生と善吉の試合は終わった帰るぞと、さつきから言ってたのに貴様……………聞いて無かったのか?」

「あ、ああ。悪い、考え事をしていて聞いて無かった」

深く考え事をするとうりが見え無くなるってのはどうやら本当の様だな。聞くところによると、善吉君が最後にナントカ刈りだったかで阿久根君から一本取り善吉君の勝利らしいってな話を半ば右から

左へと受け流しながら聞いた。  
まあ、これで視察が終了したって事なので……。

「てな訳で鍋島先輩……早速メルアドの交換を……っ！」

「あれ本気やったんや？」

「なぐにを言ってるんですか、俺は冗談で連絡先の交換を持ち出す程暇な人間じゃないツスよ」

そんなこんなで、人から聞いた連絡先の数はもう二百件近くになる。  
まあどれもこれも連絡先の交換止まりな訳ですが……。

「ナハハハ！ 全く、霧生君にはある意味じゃ敵わへんなあ。ええやろう、今から着替えて来るからちよつと待っててな」

「マジっすか！？ イヤッホーイ！ いつまでも待ってます!!」

俺は正に今“飛び上がる程喜んでる”を素でやってる、周りの奴らの生暖かい視線なんてこの喜びに比べればミジンコみたいなもんさ。

「あ、阿久根先輩……俺達って」

「言つな……俺だっと思ってたんだから」

「……」

後ろにいる善吉君と阿久根君からブルーな空気を、そしてめだか君からは何とも言えない視線を浴びせられてる気がするがもはや知らんの領域に入った俺には効かないわ！

続く

おまけ

零

「送信つと……来ました？」

鍋島

「うんうん、来たでえ」

零

「暇な時は何時でもメールなり電話下さい。超喜んで受けますので」

鍋島

「そこまで言って貰えると普通につれしいわあ〜」

零

「フフン、俺は年上の女性（と言っても肉体年齢的ですが……）には一定以上の敬意を払ってるつもりですから………。っとそれは置いといて、これからお帰りですか？」

鍋島

「そつちけど……何かあるん？」

零

「ん〜 もし良かったらこれから一緒に飯食いがてらの下校でもと………どつづです？ 門限とかあります？」

鍋島

「ん〜ん、ないよ。なんや？ いきなりデートのお誘いかいな」

零

「そつ取ってくれて構い………いやそつです」

鍋島

「おおぅ、君って結構ドキリとする事を平気で口走るタイプやねえ」

零

「『女性を誘う時はまごついて喋らずハッキリ言え』……そう教えられましたからねえ」

鍋島

「そつなんや。まあウチは構わないんやけど……」

零

「？ 何か？」

鍋島

「いや、後ろ後ろ」

零

「は？ 後ろ？」

「一体何が……と思いつつながら後ろを振り向くと。」

めだか

「……………」

妙に変な空気を醸し出しながら零を見据えるめだかがいたりした。がこの男、自身の好みから外れてる女子には一定以下の興味しか持

たないの……。。

零

「何だどうしたよ？ 早く帰れば？」

寧ろ邪魔だとあからさまに態度を表に出しながら言う零。  
そして更にその後ろで、三人のやり取りを半ば忘れられてる節がありながらもオロオロしながら見ている善吉と阿久根の二人。

零

「あ？ 何だよ、さっきからずっと黙ってて……鍋島先輩分かります？」

鍋島

「さ、さあ？」

零

「まあ、この子が分からなくなるなんて何時もの話だから……つとくだらねえ話は置いて行きます……」「オイ」 はあ、何だよ？

軽くうんざりした口調でめだかの方へと振り返る。



めだか

「悪いが貴様にはこれから私の書類整理の仕事の手伝いをして貰うからな……今日は遅くまで学校に残って貰うぞ？」

零

「はあっ！？ 嫌だよ、何で俺がやるんだよ。善吉君にでも手伝わせりゃいいじゃんよ」

めだか

「今日の善吉は阿久根二年生との試合のダメージがあつて無理だ。それに比べて貴様はダメージ処か今日に至っては仕事すらして無いからな、調度良いだろ？」

零

「ぐっ……。確かにそうだが、だが何も今からじゃ無くたって……」

めだか

「もう決定事項だ。ほら、行くぞ！！」

零

「グエツ！ 制服の襟を引っ張るな！ 嫌だ！ 俺はこれから楽しい楽しい下校TIMEなんだよ！！」

めだか

「決定事項だから仕方が無い。それに、そんなに鍋島三年生と下校したいのなら、代わりにこの私が一緒に下校してやらん事も無いぞ？」

零

「ふ、ふぎけんなっ！ 何が悲しくてテメエみたいなガキ女タレと一緒に帰らなアカンのじゃい！ それにお前は歩きじゃねえだろうが！」

めだか

「知らんな、そんな事は」

零

「ぜ、善吉君、阿久根先輩、鍋島先輩！！ 誰でも良いからこの暴タイ君ラントを止めてくれ……って何で一斉に目を逸らすんだああああ！？」

一同

「（ご愁傷様です）」

ちなみに、零の学校滞在時間が過去最大を記録したのはいうまでも無い。

終了

12:「おいテメエ！ そのうるせえ笛吹くの止めないと鼻に一発痛いの食らわ  
フラグでは無い……答だ！！

13：「『芸術は爆発だ！』って言うが、実際に国宝級の芸術品が爆発した

一時間で書き上げた為に結構おどろきは感否めないとは思いますが、悪しからず。

ちなみに最後のオマケについては“主人公がこの世界についてある程度心を許した”という描写みたいなもんなので、内容については「そんな事がありましたとさ」程度に捉えてください。

それでは鋼の心を持つ方はどうぞ。

なんやかんやで、その後阿久根君が生徒会“書記”として入る事になった。

めだか君が決めた事なので別に俺としてはさして問題は無いのだが、どうも阿久根君と俺の仲はぎこちないと言いますか、ギスギスしてると言いますか……って感じだったのを見兼ねためだか君が俺と阿久根だけに生徒会の仕事をやらせた。

内容は手紙の代筆とかで、依頼人は三年の先輩しかも女性だったのに俺は珍しくやる気に満ちていたのだが、書かされる内容を知れば知る程にやる気が削げていった。

というのも、八代先輩いわく書いて欲しい手紙の内容がラブレター的なアレだったのだ。

俺としては何が悲しくて余所様のカップル成立の為に働かなけりやならんと思うのと、その告られる野郎に殺意が芽生えていたのだ。

その際、ブツブツと『呪詛してやる』や『両手両足をブツた切つて

……その後』といったの間に口に出していたのがマズかったのか、

二人には“危ない奴”のレッテルを貼られた。

その視線に腹が立った俺は八代先輩に向かって『テメエが告るんだからテメエの手で書いて渡せば良いだろうが。アン？ それとも何か？ 俺達に書かせりゃあ告りが上手くいくとも思ってたんのかい？ だったらパソコンで打った文章でも印刷してそれを渡せば良いんじゃないの？』と仮にも先輩相手にタメ口&因縁口調で凄んだところ、それが良い方向へと向かってしまったらしく一緒に居た阿久根君は何か目覚めたらしく、八代先輩に半無理矢理な感じで直筆で書かせたのだ。

八代先輩も何かに気が付いたらしく、ものスゲエやる気と根性でラブレターを書き上げて告白したのだが、結果は知りません。

んでその結果……。

「ありがとう」

とまあ、にこやか〜な顔でめだか君に阿久根君とついでに俺がお礼を言われた。

何ででしょう、先日（残業の件）のせいか全くと言っていいほどに喜べ無いぜ、と目を回す程喜んでる阿久根君の横で思う俺だったりする。

これがここ数日に起きた面白い内容のダイジェスト。

EP14 start

「…………ふわあ〜あ」

誰もいない日当たりの良い生徒会室にて俺は昼寝をしていた、じゃなくてしようとしていた。

ソファーにねっころがりながら思う事が一つ…………俺って何気に学校生活をきちんとしてね？ と。

授業はまあ…………アレにしても、こっやって何かに入ってたただ働き同然の仕事らしき事をするなんて、以前の俺だったらまず有り得ないのだから。

「ん？ 霧生君か……君は相変わらず怠け者だね」

長考タイムに差し掛かったところで阿久根君が入ってくる。

ちなみに阿久根君とは、ラブレターの件があった後、少しだけ仲の悪さが軟化した……と言っても阿久根君が一方的に毛嫌いしてたのであって、俺は別に阿久根君の事はどうも思っちゃいない。

そう……どうも思っちゃいない（……………）のだ。

「チーッス！ 阿久根先輩。めだかちゃんも来て無いからこうしてねっころがつてるだけですからねえ」

俺の言葉にピクピクとコメカミが痙攣する阿久根君。

なんか知らないけど、俺が『めだかちゃん』と言つと音で反応する玩具みたいに反応するのだ。

多分だが、俺がめだか君の事を名前と呼んでるのが気に食わないんだらうが。

「……………」

「……………」

これ以上話す事は無いのでお互い沈黙する。



「おっす……って何だ先に阿久根先輩と零がいたのか」

おっ、良いタイミングで善吉君の登場か、ナイスだね善吉君。

「よう！ 善吉君。授業は楽しかったか？」

「楽しくは無かったが……お前出るよなあ」

「やはりサボってたのか。全く、めだかさんが君を生徒会に勧誘した意図が全く分からないよ」

「ハハハ、手厳しいぜ阿久根先輩」

こうして男三人になると自然と会話が成立するのだから凄く、流石は善吉君だね。

「絵のモデル？」

そう誰かが言った瞬間に仕事が始まった。

つーのも、依頼人の美術部員の誰かさん（名前を覚える気無し）が言うにはコンクールに出展する絵を書いているのだが、自分の満足いく絵が書けなくなりスランプに陥ったのだ。そこで絵のモデルとやらをめだか君に依頼した……って流れな訳で。

「さあ、夕原同級生……存分に書くがいい……！」

美術室にての絵かきが始まりましたとさ。

「エッ………クセレント!! 素晴らしいめだかさん！  
貴女は女神だ!!」

「おいおい阿久根書記、女神は言い過ぎであろう。せめて妖精と言ったところではないか？」

「……」

水着姿でボディアビルのポージングするめだか君の横で呆れ返った顔を  
をする善吉君。  
うん君の気持ちはわかるよ、かくゆう俺も「あゝあまたやってるよ」  
って気持ちだもん。

「まったく、なんで女神がボディビルのポージングをするんだよ」

「さあ？ 持ち上げられて気分が良いとか？」

めだか君はどうやら、持ち上げられると馬鹿みたいにはしゃぐ習性があるみたいだ。

「いや人吉君、阿久根さんの言う通りだよ」

「何が？」

「今回の僕のテーマは『女神の浜辺』！ つまり女神でなければ描く意味が無い！」

「あっそ、そりゃあ何よりだな……」

なにやら力説している夕原君とやら。  
てか女神で……。

「……ぷっ」

「？ 何笑ってんだ零」

「い、いや別に……」

女神で、いや確かにめだか君は人間としての造りは良いかも知れないけど、女神はちょっと違うと思うのは俺だけか？

まあ、そんな事は鼻から下のパーツが無くなっても言えないけど。

「駄目だア！ 描けない……僕には黒神さんが描けない！！」

俺がここに居る意味無くね？ と思い始めた頃に、いきなり絵を床に叩き付けながら芸術家特有の苦悩とやらに苛まれてるご様子の夕原君。

絵の様子を見てないので少し気になる俺は、床に放置された絵を善吉君と一緒に見る。

「ああ？ 何言ってるんだ、いい絵じゃん」

絵を見ると、ポーズをしているめだか君がすっかりと描かれていた。

「うんうん、これでいいじゃん。いやこれがいい、てな訳で君の依頼は完了……」

「いや、人吉君に霧生君。僕には夕原君の言ってる事がよくわかる」

「…………チツ」

クソ、上手く言いくるめてさっさと帰れると思ったのに…………余計な事を。

「この絵はめだかさんの『美』を表現しきれて無い！モチーフ以上のものを描かなければ絵画とは言えんだ！！」

知るかよ、君の目にはめだか君が何に見えてんだってんだよ。

「…………その通りです。モチーフ通り描きたいのなら写真でも取ればいいんだ。僕達、アーティスト芸術家は常に現実以上を行かなければならない」

こりゃあ、言いくるめる必要も無かったな。

だって言った所で無駄だな面倒なタイプの人種だからねと考える中、夕原君は続ける。

「つまり、完成した『美』であるところの黒神さんには……………芸術性がない！！！！」

めだか君を指差しながらバツサリと言いつ切る夕原君。  
思い切り腹を抓り、爆笑しそうになったのを押さえ込んだ自分に表  
彰を送りたいもんだ。

「……フツ」

壁に手をつき『猿の反省』の如くポーズでブルーになつてゐるめだか  
君。

「お〜いおい。君が余計な一言を言つてくれたお陰で我等が生徒会  
長様が面倒な事になりましたよ?」

「フツ、アーティスト芸術家とは勝手なものなんだよ霧生君。否！ 勝手にでなけ  
ればならないのだ!!」

「あつそ」

ああ、やっべ。多分何時もの俺だったら、この目の前に居る餓鬼を  
半殺しにした後に素っ裸にして屋上に逆さ吊りにしてるな。  
だが、これは単なる餓鬼の我が儘だと思つてるから怒りは湧いて来  
ないのでこの餓鬼……いや夕原君は運が良いな。

「どーします阿久根先輩？」

「どーするもなにも、めだかさんがあんな感じじゃ……オレ達が代わりのモデルを探してくるしか無いだろう」

「スイマセーン。俺もう帰っていいですかね？ 何かさっきから俺の存在意味が無い気が……」

さっきから処か、美術室に入った頃から思ってたんだが。

「いや、お前はオレ達が代わりを探す間にめだかちゃんをなんとかしてくれ」

「本来ならオレがやりたいのだが、この際だから君に譲ってあげよう」

「ちょっと待て、それは単に俺に面倒な仕事を押し付け……」  
『じゃあっ！ そーゆー事で！』聞けよっ！

何時もの二人なら考えられない程の息のあつた動きで美術室から逃げた。取り残された俺は後ろをチラリと見る。

「ブツブツブツブツ……」

「舞い降りてくれえ！ 僕が描くに相応しい女神よ！！」

「……」

正直こんな空間に1秒たりとも居たく無いのだが、仕方ないので俺はめだか君のブルーモードを取り除くのに心血を注ぐのだった。

「あー……なんだ。ほら元気だせよ、なっ？」

「モデルすら満足にこなせないなんて……私は駄目な会長だ」

うわあ、面倒臭ええええ！！！！

「いやまあ、今回は夕原君のイメージと君が合致しなかったただけだし、気にすんなよ」

「……」

こりゃ相当重傷だな……うーむ、どつしたものが。あっ、そうだ。



「夕原君。余ってる画材道具ってある？」

「え？ 準備室に行けばあるけど……」

「よし、ちょっと貸してくれ」

「？ いいけど」

数分が経ち夕原君が画材道具一式を持って来てくれた。  
さて、上手く行くか……。

「……」

「……！？ 霧生君、君は……っ！」

「あ〜？ 昔知り合いに絵描きの基礎を教えて貰ってね……と言っても君等プロに比べたら月と鼈並だがね」

（霧生君の手の動きが見えない！ それでいて描かれてる絵はしっかり絵になってる……これで素人だと？）

しょうがないから、そこでブルーになってるめだか君を描いてるんだが、はたして上手く描けるかどうか……。つか、後ろで俺が描いてる絵を凝視してる夕原君がちょっぴり怖いんだけど。

約2分後

「まあ、素人が描きゃあこんなもんかな？　夕原君どう思う？」

「……僕から見ても凄いと思うよ。僅か2分足らずでこれだけ描けるなんて」

「まあ、全部鉛筆描きだが……ホラめだかちゃん？」

「……………何だ？」

「「うっ！」」

めだか君の背後から膺気楼みてえな何かの幻覚が見えたので二人揃って思わず半步程下がってしまった。

「い、いやほら。これ見てみん？」

「これは……私か？」

虚ろな目を通り越した目で俺の描いた絵を見る。

「俺が今、そこで落ち込んでためだかちゃんを描いてみたんだけどさ、どう思うっ？」

「……絵は上手いが、モデルが酷いな」

「あ、ありがとう。でも今の君はこの絵みたいなものさ。落ち込むだなんて人間誰しもある事だからとやかく言うつもりは無い、だけどめだかちゃん？ 俺はどちらかと言えば凛々しい顔ソラをしながら『生徒会を執行する！』って言うめだかちゃんが好きだぜ？」

「はあっ！？」

「！？」

おっ、どうやらめだか君のブルーモードが徐々に解除されつつあるな？ 後一押しして所か。

てか夕原君は何をそんなに驚いとるんだ。

「フー訳だから、さ。俺は今“元気な姿のめだかちゃんを描きたい病”に罹ってるみてえだからさ、書かせてくんねーかなあ」

これでどうだ？

「……………フツ、仕方ないな。そんなに描きたいのなら……………存分に描くがいい！！！！」

閉じた扇子で俺を差しながら、何時ものポーズを取るめだか君に『ミッション・コンプリート任務完了』と思いつつも、慣れない事はするもんじゃねーかと苦笑いしつつ、めだか君を自分の技量限界を掛けて描き上げるのだった。

「まさか、お前がめだかちゃんをここまで元気付けるとは……………何をしたんだ？」

「ああ、色々な」

「てかさつきからめだかちゃんがずっと見ているあの絵は誰が描いたんだ？ 夕原のやつでは無いし」

「ありゃあ、俺が描いたんだよ」

「ふうん零が……って、お前が描いたのか！？ この壁に手をついてるめだかちゃんの絵も！？」

「そうだけど……なにか？」

「いやだって、この絵……普通に上手いぞ！？」

「あゝ そうなんだ。付け焼き刃程度の技術で描いてみたんだが」

（零の意外な特技を発見してしまった……！！）

なんか、変な事を考えてる善吉君の事はこの際スルーするとして、だ。

「何で諫早先輩がいんの？」

後ろで壁に掛けてある誰かの作品を見ている諫早さんの事が気になり、善吉君に聞く。

「あ、ああ。モデルだよ、絵のモデルをあの人に頼んだんだよ」

「ナイス善吉君」

善吉君が連れて来るってんだからどんな奴を連れて来るんだろうと思っただら……。

「ふむ、どうやら人吉君。考える事は一緒のようだな」

善吉君の偉業を内心褒めていると、いつの間にか阿久根君が鍋島さんを連れてやって来た。

「阿久根先輩……」

取り敢えずお礼を言おうとするが。

「同じイ！？ ハア！？ オレの諫早先輩ナメないでくださいよ！  
この人脱いだらスゴいんですよ！？」

「何をほざくか虫が！ オレの猫美さんは脱がなくなともスゴいぞ！」

あつ？ この二人今何つつた？ 脱いだらスゴい？ って事は。

「オイコラア！！」

「はっ？」

いきなりデカイ声で俺も参戦したもんだから、ビックリした様子の善吉君と阿久根君。  
だが今はそんな事はどうでも良い。

「見たのか？」

「は？」

「霧生君、君は一体何を言ってるんだ」

「だあかあらあ！！ この二人の裸を見たのかってんだよあ！！！！」

後ろで呆然としてた鍋島さんと諫早さんを指差しながら聞く。  
答えようによつては死刑執行だ。

「は？」

「へ？」

「『は？』とか『へ？』じゃねえよこの野郎！！　なんて羨ましいんだ馬鹿野郎おお！！」

自分の欲望が前面に押し出されてる気がするが、気にしない。  
それくらい重要なものだからな。

「いやいや、見せてないから!？」

「ウチもやで!？」

諫早さんと鍋島さんの二人の言葉を聞くまで、延々と阿久根君と善吉君の二人に尋問紛いの行動を取り続けたのだった。

（10分後）



「最後に聞くが、ほんっと~~~~に！ 見てないんだよな？  
阿久根先輩に善吉君」

「はい、お二人の裸体を見るなんて恐れ多い行為等、一切いたしておりません」

目の前で正座させた二人は、心の底からやってませんと土下座までしている。

……まあ、そんな事は初めから分かった事だから良いんだがね。

「フム、ならよい……釈放!!」

二人を正座から解除させ、そして……。

「いや〜どうもお見苦しい所を見せて申し訳ございません……諫早先輩に猫美先輩」

「う、うん。それは別に良いんだけど」

「アツハハハ！ 相変わらず面白いね、零君は」

「いやいや、俺は結構本気でしたぜ？　もしお二方の裸を見たとか吐かしてたら、そのまま処刑してましたからね。」

「ゾクッ！」

俺の言った事に反応して顔を真っ青にしてる阿久根君と善吉君、まあしょうがないよな。君等がんな事を口走るのが悪いんだから。

「なんや知らんけど、地味に嬉しいわあ。零君にそんな風に思われるなんて」

「そうすか？　ハハハ、あざーす」

ザキ○マ風に挨拶を交わす、ちなみにお互いが下の名前呼びな理由は、俺がその旨の提案したら猫美さんが乗ってくれたのだ。とまあ軽い過去話はこれまでににして、いよいよ諫早さんと猫美さんがモデルとなる夕原君の絵描きが始まる。

「ってな訳で、アスリートとファイターの夢の共演やー！」

先輩方二人の思い思いの衣装でモデルとなる。

その姿に俺の心は『我が生涯一片の悔い無し！！』ばりの満足感で

満ち足りてたのだが。

「次の方……お願いします」

バツサリと夕原君は切り捨てた。

そして多少なりとも回復したためだか君の横で『猿の反省』のポーズが二人増える。

「っ……」

「次々と犠牲者が……」

「芸術は人を脅す為の道具では無いというのが僕の持論です。正直、あの二人は怖いです」

「……そこまでの信念でやってるから何も言わんが、普段の俺なら間違いなく君をミンチにしてたろうな」

うん、てかこの瞬間にも消し炭にしてあげたい位さ。

「ハア、仕方ないな。善吉君と阿久根先輩の二人はまた代わりを探して来てくださいな。俺は先輩二人の心のライフポイントをなんと

か回復させますから」

「す、すまねえな」

「あ、ああ。頼む」

今度は二人か……何とかなるかしら？

（更に数分後）

「ふう〜 取り敢えず二人の峠は越させたんだが……モデルがいないだつて？」

「ああ、断られた」

「オレもだ」

「チツ……参ったな」

どうやら誰だかは知らないが、モデルを頼みに言ったら普通に断られたんだとさ。

「……仕方ねえ。こうなりゃあ最終兵器を呼び出すかな」

「「最終兵器？」」

「ああ、俺としては対価がデカ過ぎて呼びたくは無かったが……」

とブツクサ言いながらも携帯を取り出し、先日（10日前）に無理矢理メモリーに登録させられた相手を電話で呼び出す。

出るかな………あっ出た。

「もし？ ああ、俺俺。今から美術室来れる？ ハイハイわかってるよ。今日の放課後に君が好きなのを好きなだけ食わしてやっから……うん、うんサンキューてな訳でヨロ」

用件を言い携帯を切る。電話の相手はもの凄い張り切った口調で『1分以内に来る』と言ったが。

「おい零。今の電話の相手って」

「あ？ そろ、し」察しの通りよ」

「？ 誰だ？」

「まあ、奴いわく1分以内に来る。」「やっほー 霧生君。呼ばれて飛び出てパンパカパンだよー!!」……………な？」

「成る程ね、不知火か…………でもなあ？」

「うん、難しいと思うが…………」

「これで無理ならもう知らんな…………ってな訳で夕原君、どうよ？夕原君？」

何だ？ さつきから夕原君が「こっ こっ こっ」とか言ってるが、鶏の真似か？

「これだあああ!!」

火山噴火の如く夕原君が叫びまくる。

「イツツ・シヨータ〜イム!!」

あれよあれよと、不知火さんを着替えさせ、物凄い気迫で絵を描き始める。

不知火さんったらキョトンとしとるぞ。

「そのあどけない横顔！ 寸胴のようなボディ！ 未成熟な四肢！  
！ これまでのモデルとは比べ物にならない！ これが芸術だああ  
あああ！！！！」

「はうっ！！！！」

多分無自覚であろう夕原君の言葉に再びダメージを喰らう不合格の烙印を押されたモデル三人。

ああ、せっかく元気付けてあげたのに……。

そんな訳で無事描き上げた夕原君……俺の財布の中身を犠牲にして。

続く

おまけ

程無くしてコンクール課題の依頼を完了した俺達は。

不知火

「うん、良く分からないけど、霧生君が夕飯をご馳走してくれる

んだよね?」

零

「うん、実際君のお陰で依頼が終わったからね。好きだけ良いぞ?」

不知火

「やったー!!! じゃあ早速行こー!」

零

「ちよい待て。その前にやる事がある……善吉君、阿久根先輩に諫早先輩とめだかちゃんと猫美さん!」

零がその場に滞在している人間全てに声を掛けると皆、零の方へと向く。

零

「フー訳で……俺はこれから不知火さんと夕飯を食いに行くんですが……良かったら皆も来ます?」

零以外

《へっ?》

零



「いやほら、皆さんには……得にモデルを頼んだ人達には色々と迷惑掛けちゃったし、お疲れ様でした〜を込めた意味でどっかのファミレスで食わねえかなあ……と」

一応、今回の依頼を通して何か思う所がある様子の零。  
誘われた全員の反応は……。

善吉の場合

善吉

「いいのか？ 不知火だけでもかなりキツイぞ？」

零

「ああ、今財布には十万位はあるからな、なんとかかなんたる」

善吉

「そうか……なら俺もご同行しようかな」

零

「そうか……サンクス！」

阿久根の場合

阿久根

「オレなんか誘って、大丈夫なのか？ 俺は君を……」

零

「フツ、その謝罪を込めての意味での……と言ったら？」

阿久根

「……いいだろう、オレも是非行かせて貰うよ」

零

「ありがとうございます！」

諫早の場合

諫早

「てか私って、君と余り接点無いよね？」

零

「ハハッ！ そんな事気にしてたんですか？ 俺としてはこれから仲良くなれば良いかなあ……って思っているが」

諫早

「そう……なら私もお願いしちゃおうかな？」

零

「ありがとうございます……！」

めだか & 不知火の場合

めだか

「フム、私は……」

零

「ああ、別に無理しなくてもいいぞ？ 強制参加じゃねーし」

めだか

「そうでは無い……只、な」

不知火

「……」

零

「あゝそう言えば君等って……ふむ、なら今日だけはそんなしがらみを忘れてってのは無理？」

めだか

「……………」

不知火

「アタシは別にかまわないよー 霧生君がいるしい？」

零

「……………？ まあ、良くは分からないが、めだかちゃんはどうすんの？ やっぱ無理？」

めだか

「いいだろう、不知火とは一度話してみたかったからな……………」

零

「そ、そうか、ありがとう。不知火さんもいいかな？」

不知火

「あひゃひゃひゃ！！ アタシは霧生君に奢って貰えれば構わないって言ったでしょ？」

零

「うん、二人共ありがとな」

不知火

「うっ！ そんな畏まらなくてもいいじゃん。気持ち悪いよ」

めだか

「ああ、それは不知火に同意出来るな」

零

「ハハッ！ 手厳しいぜ」

鍋島の場合

零

「てな訳で最後に猫美さんになりましたが、どうします？てか俺としてはこれが本命だったり？」

鍋島

「零君は、相変わらずドキリとする事を平気で言うなあ？ まあ、ええよ。部活は引退したし、これから何があるって訳ちゃうし」

零

「っしゃあ！ ありがとうございませす！ イヤッホーイ！！」

鍋島

「アハハ、子供みたいにはしゃいじゃって」

そんなこんなで、全員誘う事に成功した零。

自身の財布の8割のお札が消える事になっても、不思議と心は満ちてた。

不知火

「ほら霧生君。早くー！」

零

「痛たたた！！ そんなに腕を引っ張らないでくれよー!!」

鍋島

「あの二人、仲がいいなあ？」

善吉

「とうとうより……」

阿久根

「うん……」

零・不知火以外

《兄妹？》

終

13：「『芸術は爆発だ！』って言うが、実際に国宝級の芸術品が爆発した

前書きにもありましたが、主人公はほんの少しだけこの物語の世界に心を許してしまってます……ある意味では危険な状態かも？



14:「実写版の利根川さんが『fuck you! ぶち殺すぞ!!!めむー!』

ちよいとカイジネタがあったり無かったり。

14:「実写版の利根川さんが『fuck you! ぶち殺すぞ!!!めろろ!!!」

「結構いるなあ……」

「ああ、中々にシユールだな」

俺は初めての体験をしていた。

そう、日曜日の朝っぱらから学校に登校したのだ。その理由ってのは余り深くは無いのだがご説明させて頂こう。

今から約6日位前のこと俺は何時に無く真面目に仕事、まあ世間一般に例えるならデスクワークだ。しかし。

「……」

「……」

「まゝた部費についてかよ。面倒だなチクシヨイ! てか君等寝てる暇無いぞ……」

机に突つ伏している阿久根君と善吉君に激を飛ばすのだが、イマイチ効果が無い。この場に鞭か何かがあれば、バシバシとブツ叩きたいのだがそれは流石に酷なのかも知れない。ても、机に置いてある書類の山、山、山！　が5つはあるのだ。

最初に見た時は思わず『えっ？　何処の漫画？』と呟いてしまったのだが今更ながらここは漫画の世界だったと、最近この世界に馴染んでしまつてる自分がいたりする。

まあその事は置いて今は書類のお片付けをしなければ。

「……人吉くん。オレ　生徒会やめちゃ駄目かなあ？」

「あつはつは！　逃がしはしませんよー　阿久根先輩」

阿久根君と善吉君が死にそうな顔をしながら、何やら言い合っているが仕事片付け無いとまた居残りになつちまう。

えーっと次の山は……また部費陳情かよ、金にがめついなこの学校の奴らは。

「しかし……流石にめだかさんはさすがだなあ」

「俺達の十倍は働いてる筈なんですけどね」

「と言っより気になるのは……」

「ええ」

「何故零（霧生君）がめだかちゃん（さん）と同じ動きが出来るんだ？」

「んだよ、俺がめだか君バリに働いてるのがそんなに信じられないのかい。」

「別に……柔道視察の件の時に、めだかちゃんにあの後本当に手伝わされましたね……その時にめだかちゃんの動きを大体真似てみただけでっせ」

「本当……あの時は二人だったから大変だったぜ。日付が変わる前に終わらせられたのが奇跡に近いよ。」

「……てかよ、無駄口叩いてないで、アンタ等もキリキリ働けよっ！」

「は、ハイ！！」

充血した目で睨むと、即座に仕事に戻る。

〜20分後〜

「めだかちゃん、取り敢えず4山終わらせたぜ〜」

「ご苦労、流石だな……が、まだ私の席の後ろにもあるからそれも片付けてくれ」

と後ろ指を差すめだか君の背後を見ると、確かにまだ書類の山々が……。

「うつそ〜ん？ 死角になってて分からなかったけど……まだこんなにあるのかよ〜」

流石に限界だぞ。“秘技・ペン6本持ち”のお陰で地味に指が痛てーしよ。

「しかし、流石に私と零だけではこれだけの書類を片付けるのに時間がかかるな」

「ああ、それには全面的に同意だ。所詮俺は君の動きを猿真似しただけだし……ってオイ、二人共寝てねえで働けやつ！〜」

「あだっ！」

「うぐっ！」

机に突っ伏して睡眠モードに入っていた二人を叩き起こす。全く、油断も隙もあつたもんじゃない。

「書類内容の殆どが各部活動の部費に関する陳情なんだよな」

「ウム、勧誘期間が終わり、部活動が本格化したのが大きいな」

「カツ！ 副会長はともかく、会計の不在はやっぱり痛いな」

「ああ、痛い所じゃ無いよ。そもそも今の時点で役員が揃ってないのがキツ過ぎだぜ」

まあ、その分の仕事をめだか君が全て兼任してるつても凄い話だ。てか善吉君、なにナチュラルに会話に混ざってるんだよ、お前の分の仕事はまだあんぞ？ まあ、言わないケド。

「元柔道部員の間人として言わせて貰えば、部費は一円でも多い方がいいですからね。連中の気持ちもわかりますよ」

「ふむ、何をすることも先立つものには必要か」

「うんうん、まあ何をすることも先ずは金……だからな」

この三年弱で一番身に染みてるからな……金の重要性って奴を。

「とはいえ……増額できる部費の予算枠は限られておる。全員で分け合えば雀の涙程度しかならん。それだと公平性を欠くことになりそうだな」

めだか君の言う通りだ。この学校は、馬鹿みたいに部活の種類がありすぎる。

なので、予算委員共から出た予算程度では足りないのだ。

「……だったらこうしませんか？ いっその事、増額枠を一つの部の総取りにしてしまうというのは？ 例えば……オレが担当している業務の中に部活動対抗リレー大会というのがありましたでしょう？ あれで優勝した部が予算増額とか！」

「成る程……でもそれって陸上部辺りが有利になりませんかね？ 走るんだし」

「まあ、確かにそうだが……」

俺の呟きに阿久根君も考えるのだがその提案は良いと思う。  
なんとかして上手い方向へ持ってきたいものだが。

「あ、だったら丁度いいのが……え〜っと、あ あったあった」

何かに気が付いた様子の善吉君が机の上にある書類をガサゴソと探り一枚の紙を俺達に見せる。

「「「ん?」「」」

「後で話そうと思ってたんだけどさ、目安箱にこんな投書があったんだ」

んで冒頭に戻る。

様は目安箱に投書してあった内容“新設された50メートルプールの活用”ってのを使い、部活動対抗水中運動会を開催したって訳だ。



「結構集まったなあ」

「陳情していた部活が全て参加か」

「急なイベントだったのによくあつまったものだよ」

阿久根君の言う通りだ。余程予算が欲しいのか。

「知ってる顔もいるじゃん、剣道部に陸上部」

「美術部に柔道部……って猫美さんじゃん。引退したんじゃない無かったっけ？」

「あ、ホントだ」

ナチュラルに混ざってる猫美さんに脱帽ってか？ と同時に目の保養だなあ、と親父臭い事を思っていると、後ろからマイクを持ったためだか君がご登場。

『さあ、貴様達。戦争の時間だ』

マイク片手に開口一番の言葉がそれだった。

『働かざる者食うべからずと言うが、これは真理に反している。私達は寧ろこつ言うべきなのだ』

お得の演説を開始し、一旦一息入れ。

『働いた者は食ってよい！ 貴様達、欲しい部費<sup>モ</sup>は勝って得よ！！』

めだか君の言葉がプールサイド全体へと響き渡る。この瞬間、水中運動会が始まったのだ。

『えーそれでは競技の説明に移りたいと思います』

善吉君が競技の説明をする、大まかなルールは以下の通り。

1つの競技につき、各部から3名の代表者を選出し競い合う。

それに加えて男子生徒はハンドとしてヘルパー（浮輪）を装着。

んでこれが一番重要、もし生徒会より総合点が高かった場合は、無条件で予算が三倍となる……めだか君の私財とやらで。とまあ、ル

ールを説明したのだが、俺には関係が無い為死ぬ程やる気が無い。

阿久根君と善吉君がプールサイドのタイルに両手を付いて『あゝ！』とか言ってるのが愉快だが。

『それではここに第一回水中運動会の開催を宣言

する前に』

つてオイ。いい所で止めんなよ、みんながズッコケてんぞ。

『我々生徒会に所属する“役員補佐”から話があるそうだ』

「はあ!!?」

いきなり俺に話を振ってきたので思わずデカイ声が出てしまった。そりゃそうだ、だってそんな話俺は聞いて無い。

『では霧生役員補佐、頼む』

「お、オイ。そんな話、聞いて無い……」

「頼む」

マイクを俺に押し付ける様にして渡すめだか君。他の生徒達は俺をジーンと見てるし……ええい!! こうなりゃあ破れかぶれだ。

『ええ〜つと 只今黒神生徒会長からご紹介に預かりました〜霧生

零です。万年彼女募集中だったり……ああ、ごめんなさい。冗談です』

取り敢えず無難な挨拶から始める。ちよつと私情を挟み掛けると、隣に居ためだか君に睨まれた。あゝあ、こついつのは苦手なんだが……。

『さて、お前等に聞く……部費カネが欲しいか!？』

《おおー!!!》

全員……とまではいかねえが、かなりの人数が雄叫びをあげる、よし触りはいいな。

『そんなに欲しいのか!？』

《おおー!!!》

『それなら、そんなに欲しけりゃあ勝て! めだかちゃんか『楽しみ』と言つてたのもあるが、それ以上に部費カネが欲しいなら、勝つて! 勝つて! 勝つて!! 勝ちまくれ!!! 金と女は勝ち取るもんだ、勝つ事が全て……勝たなきゃゴミだ!!!』

《……》

かなりの私情が入った発言がまずかったのか、耳鳴りがする程辺りに静寂が走る。

うーん？ 間違ったか？

《うおおお！！！》

と思ったら軍隊の士気が最高潮になったような雄叫びが再びあがる。フツ……どうやら成功か。

『では第一回戦、水中玉入れだ……総員準備に取り掛かれや！！』

かくして、血で血を染める様な……とまではいかない水中運動会が開催された。

マイクパフォーマンス終了した後をめだか君に引っ叩かれたのが納得行かなかったが。

続く

14: 『実写版の利根川さんが』fuck you! ぶち殺すぞ!!!めむー!...

水中運動会編は次回で終わらない……かも？

15：「『幸福は金で買う』by両○津勘吉」（前書き）

見てみたら総合評価が500にアクセス数が10万を越えてました。

いや、ホントにありがとうございます。

評価して下さった方々には感謝してもしきれませ。

そういう事で中編ってところですよ。

特に言う事も無いので、駄文に我慢出来る鋼の精神力を持つ方はどうぞ。

15：「『幸福は金で買う』by両○津勘吉」

どっかの受け売り臭い俺の演説もめだか君の拳骨で終了し、いよいよ第一戦“水中玉入れ”がスタートする。

ルールは得に説明する必要も無い、陸上玉入れが水中に変更しただけだし。

『部活動対抗、水中運動会！ 第一種目水中玉入れ！ でわでわっ！ これより開始したいと思います！！』

実況らしく女の子の声がプールサイドに響き渡る。

姿を見たのだが、アレ（・・・）で三年生だったのを聞いた時は、世の中ってオカシイと再認識したもんだ。

『おーっと申し遅れました！ 本大会実況はわたし、放送部部长代行、阿蘇短冊が解説は』

『この世に知らぬことなし！ 一文字流、不知火ちゃんできーっす！』

EP15：start

一回戦の水中玉入れでのウチ（生徒会）のチーム分けは阿久根君、善吉君そしてめだか君だ。



なので俺は……。

「フリーフリー」

応援に回る。

てか出来たら全ての競技を応援する役で行きたいのが本音だったりする。

『位置についてよおおおいつ………どん!!』

水中玉入れがスタートした。

おー開始早々面白い事になってるな。

「くそっ！ やっぱヘルパー邪魔でもぐれねえ!!」

「バカ！ 足で掴めばいいんだよ!!」

「やつ………これ別にヘルパーしなくても！」

「てかプール深すぎ！ 足がつかない！」

とまあ、色々な声がし、予想以上にシユールな絵だ。

あつ、不知火さんつたら実況席でプールにいる奴らを指差しながら大笑いしてやんの。  
とと、変なもんに気を取られて無いで俺達チームを応援せな。

「おや？ 善吉君と阿久根君がプールからあがり、めだか君の姿が見えない……へえ？」

既にプールから上がった二人は見に入ったか、だとすると。

『おつ、おおおつ！？ 黒神めだかつ！ お手玉を一気に！ まとめて投げ入れたああ！！ 生徒会執行部20P！！』

潜水していためだか君がお手玉の塊を一気にシュート、それが決まり我等が生徒会は20P獲得した。  
程なくしてタイムアップ今の所は何個かの部活と同点トップになった。

「おつつかれえ！」

中休憩の間に電光掲示板を眺めてる阿久根君と善吉君の元へと出向き、労いの言葉を掛ける。

といつてもこの二人は何もして無いんだが。

「おお、零か」

「あん？ どうした？」

「いや、ほぼ横並びの順位になってしまったってね」

「あー 確かに」

俺も一緒になって眺める、確かに“何個”かどころか殆どの部活が食らい付いてきてんな。

「まあ、主催者がトップじゃあ不公平感是否めませんし、そういう意味では不知火に感謝ですか」

「いや善吉、不知火に感謝する必要など無い」

善吉君が顎に手を置いて語る背後にて、何時ものごとく登場をするめだか君。

「あゝ、おつかれめだかちゃん」

「……………どういふ事だよめだかちゃん」

「うむ、どの道私達はトップではなかった、あやつらを見よ」

めだか君の目線を追うと、皆とは少し離れた場所にたむろしてる三人組が。

「ありやあ……競泳部か？」

「うむ、その通りだ」

「あれが不知火の言ってたトビウオ三人衆って奴か？」

ああ、水中運動会の準備の時に何か後ろで言ってたな。

金大好き三人衆って聞いたが。

おや？ いつの間にかめだか君があの子三人に何か話してんな、どれ…  
…。

「どうしたんだ零？」

「ん？ あの三人の人とナリを知りたいってね」

さて……俺と馬が合えばそれなりに警戒、じゃなければその時点で興味の対象外だな。

そう思い、めだか君が去ったタイミングであの三人の元へと向かう。

「どうも　競泳部の皆さん。楽しんでますか？」

「あ？　何だオメー」

「確か……開始直前に中々に素晴らしい演説をかましてくれた、霧生って名前だったか？」

「あー！　思い出した思い出したわ！」

「……」

無駄にテンションの高いガングロ君こと種子島君に対して冷静な態度のオールバック君こと屋久島君。

そして全く喋らない女の子、喜界島さん。

「フフ、覚えてくれて何よりですよ……ふん？」

「何だよ？」

「いえ別に、あなた達三人共、いや得にその女子さんが一番かな……三人共『人生悟ってます』って目エしてて、自分が中々に好きになれそうなタイプかなあ、って」

「……」

「何？」

屋久島君の目が若干細まる。

大方、俺の言った事に引つ掛かりでも覚えてんだらうよ。

「まあ、あれですわ。“それなりの対価を支払わなければ金は手に入らない”って意味での応援みたいなもんで声掛けただけですのでお気になさらず、それでは」

そのまま軽く手を振り、その場を後にする。

三人の視線が突き刺さってる気がしますがね。

つー訳で第二回戦、水中二人三脚が始まる。

出場するのは阿久根君と善吉君なので、相変わらず俺は応援をする、手持ち無沙汰なので、パフォーマンズに使用したマイクを弄りながらだ。

「競泳部の代表は、屋久島先輩と種子島先輩か」

「……」

「あん？ どうしたよめだかちゃん」

何時もなら一言一言返してくれるのに言葉が返ってこない。何やら考えてるみたいだが。

「いや別に」

「なーんや黒神ちゃん、二回戦は見学かいな」

「お？」

めだか君が口を開いた瞬間、話に割り込んできた人が、この聞き覚えのある声。

「鍋島三年生か、私ばかりが出張っては団体戦の意味があるまい。貴様も同じ考えではないのか？」

「ククク！ まあ後輩にも出番やらんとねー」

「チーッス！ 猫美さん」

「やつ、零君も元気そうやね」

何だかんだで今日初めての会話だったりするんだよな。

「はっはっは！ 元気だけが取り柄……って訳でも無いですが、俺はまだ今日競技に参加してないんでね」

「そっぴやそっぴやね、出場せえへんの？」

「うーん正直俺より、めだかちゃんや阿久根先輩や善吉君の方が動けるような気がしませんかね？」

出る気が無いってのもあるのだが、俺が出るよりあの三人の方が遙かに動けるからな。“勝利”するって考えれば、俺は補欠扱いみた



いなもんさ。

「そうか？ 私には“面倒だから出たく無い”って本心が見え隠れしてる様に見えるのだが？」

「まあ、それもあるが」

めだか君よ、何時も思っただが、何で俺の考えてる事の大半を言い当てるんだ？ ちょっと怖いよ。

「なんや、ヤツパリそうなんや。あゝあ、ウチは零君が出場しとる所が見てみたいな」

「めだかちゃん、気が変わった。次の種目は俺が出るから！！」

猫美さんの言葉に、ソッコで心変わりをしてしまった。しかし安いな俺の決意って。

「貴様は何故鍋島三年生の言う事は聞くんのだ？」

「え？ 猫美さんだからだけど？」

「貴様は……もういい」

寧ろそれ以外に何かあるんだ？ それと正直に答えたつもりなのに、めだか君にはジト目で俺を睨まれたあげく『プイッ』ってされた。

「何を怒ってんだらうかあの子は」

「アハハ……相変わらずやね。平気な顔してドキリとする様な事を言うところとか」

「そうですね？ うーん、思った事を言っただつもりなんですがねえ」

「もしかしたら零君は天然ジゴロさんなのかもね？」

うんうんと一人で納得している様子の猫美さんだが、それは違う。

「そりゃあ違いますよ。俺は『好きな人には常に正直であるべし』って信条をもってますから、貴女に対しては、殆ど正直に話してるんですよ」

この信条は元の世界に居る爺ちゃんの教えだ。

「……………それ、一歩間違えれば告白やで？」

「え？ そのつもりでしたか？」

「ほえ！？」

そう言った瞬間、めだか君と猫美さんがビックリした様子で俺を見て来た。

「……………鍋島三年生。コイツの言う事は余り本気にしない方がいいぞ？」

「は？ 俺は本気だ」

「そ、そうするわ……………」

「ちょっと待ってよ、最後まで言わせ」

「話は変わるが、は屋久島三年生について何か知ってるか？」

「あ、ああ。それなら同じクラスやからわかるで？」

「オーイ、二人共……特に猫美さん聞いてますか？」

何か知らないけど、俺の話を最初から無かった事にされた気がする。言うタイミング間違っただろうか……。とにかく二人から『これ以上言うな！』ってオーラが出ている為、話はそこで終了した。

「もとより特待生は変人奇人ばっかやけど、中でも屋久島クンは輪アかかつとるよ。阿久根君や黒神ちゃんとは違う種類の、あっさり天才ゆう男やな」

先程のやりとりが、ホントに消去されたかのように話が進む。なんだろ、急に悲しくなってきました。

「その実力自体は素直に尊敬するけど、何を考えてるかわからへんし、何がしたいのかわからへんねー」

「ふーん？」

これ以上腐っててもしょうがないので会話に参加する。どーでも良いのだが、俺が思うに、あの屋久島ってのは三人の中じやあ一番常識的な気もするがな。

「……別にわかってもらおうなんて思っ  
てないよ。あたし達は」

「「!」」

「お？」

三人で屋久島君を眺めると、  
またもや背後から声を掛けられた。  
確か喜界島さんだっけか。

「でも何がしたいかは教えてあげ  
るよ、あたし達はね札束のプール  
を作っ  
て、そこで泳ぐのがあたし達三人の夢なのさー！」

バブル時代に実際あつた様な夢を淡々と、  
そして無表情で語る喜界  
島さん。

あらやだ、この子ったらホントに夢も希望もなさ  
気な目をしてんな。

「ふん？」

「なに？」

その濁った目で俺を軽く睨む様にして見て来る喜界島さん。

成る程ね“顔の整った女が睨む程もの怖いものは無い”って誰が吹いたかのかは知らないが、実際に目の当たりにするとあながち嘘ではなのかも知れないな。

それにしても、札束プールで泳ぐって考えは頂けないな、泳ぐだけなら誰だって出来るんだからな。よし、此処は精神年齢年上のお兄さんがご教示してあげよう。

「いやあ？ 俺としては札束プールで泳ぐより札束風呂でドンペリかゴールドシャンパン飲みながら女はべらして高笑いしつつ『全て愛ですよ』と全く持って説得力の無い言葉を嫌味全開な顔して言うて札束をばらまきながら……」

「貧乏人よ拾え拾え！！」まで言おうとしたが、途中で言葉が止まる。  
だって……。

「……」

「……」

「……」

「ゴメン、軽く妄想入ってました」

だって、冗談のつもりで言ったのに、目の前の三人から来る「ああ、可哀相な人なんだ」な視線に耐え切れずに平謝りをしてしまった。ホント、女の軽蔑の視線程心に突き刺さるようなものは無い。

「軽いジョークだったのに本気にしやがって……」

隅っこの方で膝を抱えて座ってても、今なら誰にも攻められないだろう。

「まあまあ、ウチは冗談やと思っとったよ」

「うん……」

喜界島さんは壁に激突した鳩を見る様な、めだか君は着地に失敗して腹から落ちた猫を見るような目でそれぞれ俺を見て来たのに対し、猫美さんだけが何故か異様に優しかった。その優しさが逆にキツイすよ猫美さん……。

第二回戦での生徒会のは3位という戦績で終わった……終わったのだが。

「捻挫、だな」

「ぐっ！」

「あんな馬鹿な走り方をすれば、ああもなるわ」

「す、すまねえ」

「返す言葉も無い」

只今、阿久根君と足を触診しつつ氷嚢を乗つける。  
理由は、第二回戦の時にこの二人が馬鹿をやらかしたからだ、二人三脚だつてのに何を思ったのかお互いを潰し合う様にしながら爆走した結果が……これだ。

「ホントにすまねえ、頭に血が上りすぎた」

「今更遅いよ、もう……」

「ぐっ、」  
「ねくらい……平気だ!」



阿久根よ、絶対平気な訳無いだろ。普通に生活しててなる皮膚の色じゃ無いし、確実に数日間は痛むぞこれ。

「しょうがない……次からは俺も入るよ」

「むっ、やっと貴様も出る気になったか」

「まあ、こんな怪我状態で無理矢理出させて『俺知りませーん』は流石にねえ？ つー訳で早速次の競技から準備運動がてら入んで」

うん。そこまで俺も鬼のつもりは無いし。

「頼むぞ」

「ウッス、まあ笹船にでも乗ったつもりで待っててくれ」

「それ、沈まないか？」

「ナイスツツコミありがと善吉君」

善吉君のナイスツツコミで自身にカツを入れつつ三回戦である“鰻

掴み取り戦”に参加したのだが。

「ヒヤーツハツハツハツアアア！！ 鰻だああ！！！」

「……………」

ちよつぴり張り切り過ぎたのもあってか5匹しか取れ無かった。しかもプールサイドに居る奴、果てには実況席にいる奴らすら俺を不審者を見る様な目で見てきたのがこの上無く腹が立つ、人がこんなにも真剣に鰻を掴もうとしてんのに。

そんな何かを失った気がした三回戦を終えた俺達の戦績は38Pになり、只今の順位は4位。

1位である競泳部は10P差だ。

つーかあの喜界島さんってのは、俺が“世紀末・モヒカンモード”になって周囲に恥を曝してる間に顔色を変えずに淡々と鰻を狩っていたのかと思うと、いかに自分がハシャイでいたんだろうと思えば思い返す程に、段々と恥ずかしくなっていた。

「んで、最終競技が」

『ヒヤツハー！！ 水中騎馬戦だああ！！！！』

世紀末モヒカンモードになってた俺に若干影響されたのか、阿蘇さんの口調に変化が訪れてたのは置いといて、遂に最終競技“水中騎馬戦”に入る。

続  
く

15: 『幸福は金で買う』by 両○津勸吉 (後書き)

主人公は、黙ってれば格好良いのに性格と馬鹿な言動のお陰で三枚目キャラが確定しつつあったり。

外：「不死身って言っても一応は空腹感に襲われるんだよね……襲われるだけで番外編って奴です。」

主に主人公がこの世界へと飛ばされて、徐々にチャラ男予備軍に性格が変わる軌跡です。

因みに時系列中学生時代で、安心院さんが封印されて暫く経った位です。勝手な設定も盛り込んでしかもクオリティーも最低値なので、鋼の精神力を持つ方はどうぞ。

外：「不死身って言っても一応は空腹感に襲われるんだよね……襲われるだけでこれは……俺がこの世界へ来てから一年の時間が過ぎた年末の出来事。

世間はX・mas一色で、メディアの方もそれは「もう聞き飽きた」て程に取り上げていたのだが、当然の事ながら知り合いなんて者が存在しない俺にとっては、ただただ辛くそして寂しい思いを強いられるイベントだったりする。

そんな時は家に閉じこもってDVD鑑賞会に洒落込みたかったのだが、そういう時に限って冷蔵庫の中が空っぽだったりするもんで、只今買い出しにの為に駅前のスーパーに向かっているのだが。

(ドイツもコイツも幸せそうな顔しやがって……)

寒い、そしてカップルが多いの二拍子が揃ってるお陰で、早速帰りたくなった。

だが、晩飯の材料を揃えなければますます寂しいX・masを送る嵌めになるのだけは避けたいので、腹の中にあるどす黒い感情を一杯表に出し、スエット上下着用、オマケにポケットに手を突っ込みながらのヤンキー歩きで街中を歩く。

一応死ぬパターンに餓死を取り入れてみたのだが、約半年程何も食

わずに水だけの生活にしてみたが、見事に死ねなかったのは記憶に新しい。

ちなみに脱水症状や熱中症でも死ね無かった。

「うっ！」

「こ、怖い……！」

そんな感じで歩くもんだから道にいる人間共（カップルが殆ど）は俺を見た瞬間に顔を逸らしたり、逃げたりする。

まあ、こんな事をした所で誰も得をする訳じゃあ無いし、寧ろ迷惑千万だつてのは自覚はしている……自覚しているのだが考えてみる、道を歩く先々でカップル共が手を繋いで歩いているのを想像してみなさい……どうだ、殺したくないか？ 寧ろ「X・m a sに躍らされてんじゃねえし」とか「告白して玉砕しろ……そして絶望しやがれ！」等とか思わないだろうか？ 少なく共俺はそう思ってしまう。

身勝手だつても解るのだが所詮人間はそういつた生き物なのさ。

（……ケッ！）

これが世間で言う所の「リア充爆発しろ！」の現場をリアルタイム生放送で見せられてる俺は、どす黒い感情全開で買物を済ませ、帰宅しようとしたのだが、一件の服屋を見て足を止める。

(そう言えば……最近服買って無かったな)

必要最低限以外の物は、余り買わない主義で通っていた俺は、その服屋を見た瞬間、買いたいという感情に襲われた。

(たまにはいい、かな?)

どうせなら適当に服も買い込んで置いても損は無いと思い、その服屋に入るのだった。

↳2時間後↳

「ありがとうございました」

(ついつい目移りして買ってしまっただが、まあ、いいか……)

どうも、ああいった店に入ると馬鹿みたいに衝動買いしてしまう俺がいるなと思いつつながら、店で着替えた服を着ながら街中を歩いて家に帰る。

だが、数分歩いている内に妙な違和感を感じる。

(なんだ、あちこちから視線を感じる?)



そう、さっきまでは視線を逸らされたのだが、今度は逆に視線を周  
りから感じる様になったのだ。なんていうか……こう、嫌な視線じ  
や無い事は確かなんだが。

(服が変……なのか?)

自身の姿を確認しながら思う。今着ている服は黒く若干生地が厚い  
パーカに黒いジーンズという真つ黒スタイルで、別にぶっ飛んだデ  
ザインじゃ無く、ごくごく普通にありそうな服……な筈だ。

(何か……居づらい)

ともかく、このチラ見感覚の視線に耐え切れずにその場から退散す  
るしかこの嫌な視線から解放される手だてが無かった為、真つ直ぐ  
帰る事にした。

(ふう、食料だけだったのに……やはり慣れない事はするもんじゃ  
無いな)

X・masだっただけで慣れない事はするもんじゃ無い……そう思

いながら何も入っていない郵便受けを覗き、家の鍵を開けて中に入る。よし、これからの予定は飯を食ってから買って来たつまみとビールないし酒を片手にDVDもしくはTV鑑賞会だな、うむそれがいい。さて、今日の飯は何にすっかなあ……。

「おや、お帰り。遅かったね？」

「うん……」

うん……中華を昨日食ったし、だからと言って洋食は余り好みじゃない。事を考えれば……。

「ご飯にあさりの味噌汁そして生姜焼きだな」

うんうん。X・masだからってわざわざ七面鳥なんて馬鹿らしいからな。

普通の家庭の食卓レベルで充分だなうん。

「随分と寂しいね、X・masだよ？」

「別にX・masだからって他と合わせる必要性が無いって言うか……他所は他所、家は家って言うか……」

「ふん？ まあ、どっちでも良いけどさ。あっ、僕は少し多めね」

「はいよ……………あ？」

ちょっと待て…………俺今誰と話してたんだ？ 此処は俺家でも俺一人の筈だよな？ てかどっかで聞いた声なんだけど。幽霊……………にはフレンドリー過ぎるし。

「……………」

「何ボケッとしてんのさ？ さっさと作ってよ」

とりあえず声が出た方向…………台所を出て直ぐにある俺が寝ているベッドを見ると、異常に髪の毛の長い女が、さも当然ですよと言わんばかりの顔をしながらベッドに腰掛けていた。それが全く知らない顔だったらどれほど良かった事か…………その時ばかりは心の底から思った。

「……………何故に？」

「何故に？ じゃ無くて早く作ってくれよ。じゃ無いと僕のお腹と背中がくっついてしまっよ」

いやいやいやいやいや、だから何でアンタが居るんだよ。  
しかも普通に晩飯を催促してるし……いや待て、此処は迅速にかつ  
的確な言葉と大人の対応で、この俺の城マイ・キャッスルから出て行って貰おう。  
うん、それが良い。

「えーっと……どなたかは存じ上げませんが、とりあえず出てって  
貰えませんか？ うん、てか出てけ」

貼付けた様な笑顔で言い切った。

「決まった……」と心の中で呟きながら。

「君はこんな美少女を寒空に放り出して心が痛まないのかい？ あ

ゝあ、お姉さんは悲しいなあ……」

「そんな事は知りませんな。住居不法侵入した犯罪者に情けを掛ける程、私は器が大きくありませんので」

「風営法を思い切り破ってる君に言われても説得力のカケラも無いよね」

「……」

「……………」

沈黙する…………。

俺としてもそこを突かれると痛いのだ。

仕方ない…………ほんつつつとーに！ 仕方ないな。

「はあああゝ 何しに来たんですか？ 安心院先輩」

これ以上言った所で、俺がこの人に口で勝てる気がしないので、俺が折れる事にした。

「何って、そりゃあX・masだから遊びに来ただよ。それと僕の事は安心院あじむじゃなくて安心院あんしんいんさんと呼びたまえ…………ってこれで通算100回は言ったよね？」

「うん、そんな建前は要らないし呼ぶつもりも毛頭ござりませんので、さっさと要件及び目的を迅速に話す事を要求します。さもなければ、貴女の身ぐるみを全て剥がして真っ裸で外を歩かせる嵌めになりますので……………」

完全に脅し口調にシフトチェンジさせ、何が目的か吐かせる。

この人とは一年前の“球磨川君に封印されちゃいました事件（仮）”以降、ある理由があつてちよくちよく我が家に出没したりする。

「霧生君ったら……そんな激しい告白を……キャッ！」

「……」

キレるな……キレたらこの人の思い通りだからな。COOLになれ  
零、冷凍庫の様にCOOL DOWNだ俺。

「うん、山椒魚みたいにクネクネしても誰も得なんかしないし、決  
して可愛く無いんでさっさと用件を喋りやがれでございますコノヤ  
ロー」

日本語が若干おかしな気がしたが……まあ、何が言いたいかは伝わ  
っただろう。

「だから、遊びに来ただけなんだけど？」

急に真顔で答えだす安心院さん、コロコロと表情が変わんなこの人。

「本当に？」

「本当さ。僕が何か企んでるとでも？ あっ、まさか自分が物語の

主人公だとか思っちゃってる？ 自意識過剰だなあ」

「んな事たあ言ってますよ……俺が言いたいのは、さっさと消え  
るって事ですよ」

「ちえ……単に遊びに来ただけでこつも邪険にされるなんて、流石  
のお姉さんもビックリだよ」

「今に始まった事じゃ無いでしょうに……てな訳で玄関はあちらで  
くす」

ジェントルマン風に玄関の場所を示しながら心の中で「帰れ」コー  
ルを連発する。

「お腹が空いて空いて、力が出ないよ……ああ、僕はX・masの  
夜に死んでしまうのか……」

「いや、腹が減ってるのなんてアンタ自身の事だから俺は知らねー  
よ。それにアンタがんな事で死ぬ様なタマには見えんないし。まあ、  
仮に死ぬんだつたらこの部屋では勘弁してくださいよ？ 死体処理  
も簡単じゃ無いんですからね」

紳士的な振る舞いも虚しく失敗した揚句、逆に人のベッドの上で一  
人芝居を始めた安心院さんを放置しながらの夕食作りに取り掛かる。

多分コイツ帰る気無いな……とか思いながら。

「くすん……お姉さんの硝子で出来たハートは脆くも砕け散ったよ」

「んなもん知るか」

そんなやり取りをしつつの夕食作りも終わり、テレビのある居間に持っていく。

「さて、と。今日の出来も中々って事で、いただきます」

炊いたご飯も調度良い固さだし、うんうん、美味そうだ。  
てな事を思いながら箸をとって食べようとするが……。

「ちょっと待てよ。僕のは？ 僕の分は無いの？」

いつの間にか俺が座るテーブルの反対側に座ってた安心院さんに止められました。

そして何かを期待した目で俺を見る。

チツ……しょーがないな。

「カロリーメイトなら……」



「え〜？ 出来れば君が作ったご飯が食べたい……」

「水道水なら……」

「いやいや、レベルが下がってるよね？」

「……………じゃあ帰れよ」

「最終的には何時もそれだね。それが出来るなら、とっくに帰ってるさ。だけどそれが出来ない……………君はその理由が分かってる筈だよ？」

そう言われてはみるものの、この女がここに居る理由なんてたかが知れてる。

なんでも“球磨川君に封印されちゃいました（仮）事件”のお陰で“表”に出れなくなってしまったのだが、何故か俺の家の空間だけは能力制限付きで行動が出来る。

と、前に言ってた気がするのを右から左で聞き流してたのだ。だから俺が言う『帰れよ』ってのは『とりあえず消えてる』って意味だ。

「ハア〜 他に実体化出来る空間とか無かったんですか？ ころも

チヨロチヨロと家ウチに出現してとなると、いい加減鬱陶しいし、コッ  
チにもプライバシーってもんがありますからね〜」

「真に残念ながら未だ無いよ。人の見る夢の中ならチヨロチヨロと  
動けるけどね」

「じゃあもう夢で良いじゃん。それなら腹も減らないし」

「君が作ったご飯が美味い……そう“先生”が言ってたからね、な  
ら食べてみたいと人間の心理的に思ったのさ」

「人外とか吐かしてる奴が何ほざいてやがんだか……っーかあの野  
郎、余計な事をベラベラと」

豚生姜焼きを箸で突きつつ、俺を若干変えてくれたこの場にいない  
進路相談員の先生に恨み言を言う。

「まあ、その情報を教えてくれたお陰でますます僕は君と仲良しに  
なりたくなっただって訳なんだ。おめでとう、これで君は僕と仲良し  
さんだ」

「鳥肌が立つような事は言わないでくださいや、あゝやべえ、寒気

もしてきた」

「おやおや、風邪でも患ったの？ お姉さんが看病してあげようか？」

「煩い、ニヤけるな、そしてコツチに近付くな、ええい！！ 頬っぺたを突くな食いづらいだろうが！！」

つつんと人の頬を突きやがって……本当の意味でこの世から消してやりてえわ。

多分、普通の人間の感覚だったら嬉しいポジションにいる筈なんだが、俺にとつちゃあ意味が無いというか……ああ！ もうとにかく嫌だ。

折角婆ちゃんが隣にいらなくても何とか生きる事が可能になったのに、「クローン人間かつ！」と思ってしまう程似てるこの女のお陰で、俺の感情が嫌な意味で揺さ振られる。

「ご飯ご飯」

「るせえっ！ 食いしん坊かアンタは！！」

「食いたいんだよ、霧生君の味が知りたいんだよ！ 僕だってね、女だって事さ！！」

「そんな逆ギレされても……てかそこは「霧生君の作った飯」じゃなくね？ 飯の部分を省略するから、なんか生々しく聞こえるんですけど」

と言いながら、勝手に取られない様にテーブルに並ぶオカズをカイドしながら飯にありつく。  
むっ、この味噌汁……味噌の量が少し多過ぎたな。

「あら？ 変な事を言っただけなのに霧生君だったら何を想像したの？」

「……球磨川君が貴女の顔面を剥がした時ってどんな気持ちだったんでしょうね？」

「おっ？ 今流行りの“ヤンデレ”かい？ 大丈夫、君の為ならお姉さんはどんな愛も受け止めるぜ！」

「……」

ピシッと俺の胸辺りに指を差しながらポーズを取り、何かぶっ飛んだ事をほざいてるなあ、と思いつつアサリ貝の身をほじくりながら思う。

無理……未だかつてこんなに噛み合わない会話があったらどうかと。

そんな事があつたお陰か、1年に1度の筈のX・masなのに、普段の倍以上に飯が美味く感じられなかったのだった。

因みに、何時まで経つても帰る気配が無かったのに根負けした俺は、安心院さんの御所望通り飯を振る舞ってやったのだが、それがイケなかったのか勝手に人の家の箆笥からスエット上下を取り出した揚句着用し。

「今日は帰りたく無いから泊まるね？ いいでしょ？ 答えは聞かないけど」

とまあ、毎度勝手ながら人の了承も聞かずに泊り宣言した揚句に俺の寝るベッドを占領しやがった。

一瞬本気で顔面剥がしを実行しようと思ったのだが、何故だかやろうと思うと出来ずになし崩し的に了承してしまい、結局俺もチキン野郎だったと改めて思うのだった。

そして就寝前。

当然予備の布団なんて準備してる訳も無く、俺は固い床で寝る嵌めになった。

「そついえば先生って元気なの？」

電気を消し、携帯のアラームをセットしている最中、安心院さんに

聞かれる。

“先生”ってのはさつきも説明した、俺を再び中学生生活をさせてくれた進路相談員の事だ。

「ああ、元氣過ぎて腹が立ちますよ。こないだも『行こうぜナンパ！』ってサムズしながら言っただけでしたね」

「相変わらずだね……」

「しかしまあ、アンタと先生が知り合いだって知った時は地味に驚きましたね」

「うん、僕が初めて会った時は『君のお陰で仕事が無くて楽だよ、君には感謝だよワッハハハハ！』って言われたよ」

「ああ、超言いそう。あの人って自分の仕事を全力で他人に押し付ける気があるし」

殆ど、いや俺以外にあの進路相談室を使用する生徒はいないだろうな。

なんせ皆の記憶があった時は、悩み事等があった生徒は安心院さんに相談してたし。

「まあ、僕が消えたんなら先生の仕事も増えたんじゃない？」

「ん〜 余り変わってなさ気でしたぜ？ 貴女の後釜的なのが出て来たし」

「後釜？ …………… ああ、めだかちゃんか。確か霧生君と同じクラスだったね？ 彼女は元気？」

「さあ？ 俺はあの子とはあんまり関わって無いから知りませんな。多分元気なんじゃ無いツスカ？」

黒神めだか、この世界での主人公。

あの子とは時が来るまで関わらない、そう決めてる為敢えて授業にも出ない……筈だったのが災いして逆に俺の顔を見るたんびに絡まれる事になった。

だが、いくら絡まれると言っても俺があの子の事を知らないのもまた事実だ。

「ふうん？ まっ、どうでもいいんだけどさ」

黒神さんと関わって無い事を話すと、完全に興味が失せた様子の安心院さん。

あっ、聞きたい事思い出した、調度だから今聞いてみよ。

「安心院さんって『自分以外の人間に興味が無い』みたいな事言っ  
といて俺には絡んで来ますよね、何ですか？」

「さあてね、何でだと思っ？」

常日頃から疑問だったので聞いてみたら、逆に聞き返された。

「うん？ 体の良い宿泊施設の持ち主だから？」

「……うん、どうやら君には一生分かりそうに無いね」

「じゃあアレだ、暇潰しの相手にたまたま俺が選ばれた」

「おやすみ」

「おい、答え位教えてくれたって……」

「……ZZZ」

「寝付きが良いな……てかこの人寝るんだね……」



結局答えは知れなかったが、何時か聞き出すと心に誓いながら俺も意識を手放すのだった。

終

外：「不死身って言っても一応は空腹感に襲われるんだよね……襲われるだけ  
先に言っときますが、主人公はいくら自身の性格が変わろうと、最  
終的な目的である“死んで家に帰る”は忘れてません。」

16：「大丈夫勝つよ？ だって笑い飛ばしたくなる位にスペックの高いあのマ

え〜とと……申し訳ございません。

アレな感じになってしまいました。

16：「大丈夫勝つよ？ だって笑い飛ばしたくなる位にスペックの高いあの  
ムカついた、だからあの女を……売り飛ばす！」

「「お、おう……」」

最終競技、水中騎馬戦の始まる前に言ったためだか君の一言のお陰で、  
喜界島さんのやる気……いや殺<sup>キ</sup>る気は大気圏突破しています。  
下の二人が冷や汗ダラダラなのを見て若干同情してしまい、思わず  
俺と善吉君で作った土台の上で仁王立ちしているめだか君に一言物  
申す。

「おいおい、何でわざわざ本気にさせる様な真似してんだよ」

「何を言っている。お互い全力でやってこそ意味が在るのだ」

「あそ……」

相変わらず“意味の無い事”がお好きな子だな。

『それではラストバトル、よお〜い……』

阿蘇さんの号令が掛かり、皆の表情が本気マジになって行く。

『どんっ！』

スタートと同時に両者が組み合う。

一人は楽しげな表情で、一人は憤怒の表情で。

「さて……競泳部の事は善吉君とめだか君の二人に任すとして、だ」

競泳部についてはめだか君に任せて何の問題も無いだろうと判断した俺は、周りで俺達が潰し合ってるのを伺ってる何組かの部活を見渡し……。

「お疲れ」

誰にも気付かれ無い様に腕を振って“北〇の拳”にでてくる拳法“南〇紅鶴拳”のように水を還した衝撃波を送り込む。

と、言ってもこれを喰らって皮膚が切れたりする事は無い、精々騎馬のバランスを崩して脱落させるのが関の山だが今はそれで充分だ。

「うわぁー!?!」

「急にバランスが!？」

『おーっと!？ 理由が解らないが次々と騎馬から墜ちていくチー  
ムが!？』

おし、こんなもんかな。後はめだか君達だが……まっ、大丈夫だろ  
うな、主人公だし。

「あたしが死んでも誰も悲しまないよ!!」

「おわっ!？」

「くっ!」

『あーっと! 生徒会、黒神めだか! ここで突き飛ばされたーっ  
!?!』

阿蘇さんの言う通り、喜界島さんがめだか君を突き飛ばしたのだ。  
バランスの影響とはいえ、めだか君と力比で勝つとは……いやは  
や、この子も中々どーしてだな、それに“金は命よりも重い”ね…  
…ククッ、つくづく話しが合いそうな子だよな。

確かに金に困って無い連中からしてみたら『金より命が優先』とか  
言うが借金まみれの人間からしてみたら『綺麗言だ』と言われるだ  
ろっな。

まあ、それも人によって考えが違っけど、俺はどちらかと言えば喜界島さん寄りの考えだな。  
だけど悪いね、俺も割と本気ガチなんでね、例え君等の考えが変わってしまっても今回はめだか君に力を貸させて貰うよ。

「善吉君！」

「わかつてるよ!!！」

俺の声に返事をした善吉君は、腕に括りつけられたヘルパーを投げる。

よし、あの子のスペックならやれる筈だ。

対する喜界島さんは、力を出し尽くしたのか息切れをおこしてる、やはりめだか君との力比べは骨が折れた様だな。

下の二人も勝った様な顔ソラをしている様だが。

「甘えた事を吐かすな……！ 例え貴様等が地獄の様に不幸でも、命を粗末にしている理由になるか!!！」

「!!！」

勝ったと思つてた競泳部の三人が驚くのも無理は無い、なんせめだか君は今、ヘルパーを介して水の上に立っているのだから。

「金が大切だと言う割に随分と高い買い物をした様だな喜界島同級生……貴様は私の怒りを買った!!」

『く、黒神めだか生徒会長！ 水の、上に、立っているだとおおー！！』

うん、まあ普通の人間の神経なら驚くわな、俺だって何も知らないでこんな光景を見たら、取り敢えず『人型未確認生物（UMA）か？』と思ってしまうだろうよ。

「別に俺は勝敗とかどーでもいいと思っただけだな、今は流石に力チンときたぜ。だから珍しくけしかけてやる、やっちまえめだかちゃん」

どうやら善吉君も喜界島さんの考えが許せないらしくしかめっ面をしながら言い、めだか君が競泳部の騎馬に……具体的には喜界島さんに飛び付いた。

「貴様等が死んだら、私が悲しむ!!」

とかなんとか言いながら、多分本人には自覚の無い百合っぽい絵面をVIP席並の場所で見せられた。

正直「あくあ」って気持ちになったと同時に、俺程命を粗末に扱ってる人間も居ないだろうなあと思っっていたりする。



だってそうだ、元より俺は“死”がこの世界での最終目標なんであるからな。

ナイフで自身の頸動脈を掻き切ったりとか、自作の爆弾で爆死（誰も居ない場所で）したりとかな。

コイツ等が知ったら、フフツ……どんな顔をするんだか……。

『おおっと!! 同時着水だああ!!!!』

「ん、終わりか？」

考え事をしてる間に決着が着いたようだな。

どうやら喜界島さんに飛び付いた時に、ちゃっかりハチマキを掠め取ってみたいで総合点で引き分けになったみたいだ。めだか君も喜界島さんを抱えて競泳部の元へ行き、何やら語ってるのが見える。どうやら……若干修正させられた様だね。

「やれやれ……慣れねー事はするもんじゃ無いな」

「そうか？ それにしちゃあお前も結構本気な顔してたぜ？」

「あ？」

おおっと、どうやら善吉君に聞かれてみたいだね。

「まあ、エンジンが掛からなかった……って言ったら嘘になるが」

「だろ？ まっ 『終わり良ければ全て良し』 ってな！！」

「余り締まってないぞ？」

「うっせ！」

善吉に小突かれながらも少し笑ってしまったのが自分でもわかる。  
そして試合終了のホイッスルが鳴り阿蘇さんが優勝した部活の発表  
する。優勝したのは……。

『優勝は鍋島猫美率いる柔道部チーム！ おめでとっございます！  
』

「やーどーもどーも！」

「……………は？」

折角いい雰囲気になっていた空気をぶち壊すかの如き事実、俺以外の生徒会のメンバー及び競泳部の空気が固まった。

なんでも俺達がごちゃごちゃとやってる合間に、猫美さんがあれよあれよと八チマキをかき集めて見事優勝したのだ。全くもう……。

「流石ツス！ 猫美さん！！」

「どーもどーも！」

後ろで『え〜？ そんなのアリですか？』みないな空気が出てるが、んなもんは知らん。

勝ちゃあ良いんだからね、しかも別にルール違反じゃ無いし。

「ククク！ 『綺麗な相手に汚く勝つ』卑怯と反則、確かに貰かせてもうたわ」

ピシッとめだか君を指差しながら言う猫美さん。

「やっべ、パネエっす！！」

そんな姿が眩しく映る俺はとにかくボキヤ貧なのを自覚しつつ色々と褒めちぎる。

「けどまあ！ 次こそは直にやろつで黒神ちゃん！ 顔洗って出直

してこいや！ 首を洗ってまっとなるわ！！」

そして、ピツと手を軽く挙げながらその場を去る。俺以外の連中は『うわあ、卑怯なのにカツコイイ……』って顔をしてる。

「やべえよ猫美さん……何か知らないけどヤバイっすわ！！」

「ホホホホ！ そんなに褒めんといてーな零君」

「よくは分からないけど愛してます！！」

「ウチもやで〜！」

お互いテンションが高いお陰で恥ずかしい事を人前で言っても恥ずかしい感情が全く沸いてこない、周りから見たら愛の告白に見えた。と後に聞かされた、そんな水中運動会も無事終了した。

ちなみに部費については「いらん」と他の部活へ適当に分配したらしい。

流石に猫美さんだぜ。

くそして次の日の放課後く

「そんな訳で先日のイベントは成功に終わった。が、私が学校行事に置いて私財を投じたことについて批判が多かったのもまた事実である」

「あ？ 何だよ怒られたんかい……俺が意味無く頑張った意味ねえな」

「らしいけど、そんな事言つなよ」

「だってよ、結局思い返してみたら、只単に疲れに行ったようなもんじゃね？」

「君はどうしてこう、アレなんだよ」

「いやだって……」

と男三人で先日のイベントを思い返す中、めだか君が続ける。

「よって今後このような事が無いよう、生徒会にお金の専門家を雇い入れることにした」

あ？ そうなんだ。てことは俺の仕事も減るってか？

「紹介しよう、これから会計職を任せる喜界島同級生だ。競泳部のレンタルなので大切に扱うように！」

紹介と共に扉を開けて中に入って来る喜界島さん、おゝ眼鏡属……いや、どうでもいいか

「荒稼ぎに来ました。無駄遣いしたら売り飛ばすのでそのつもりで！」

キリツと眼鏡を持ち上げながら何処に売り飛ばすつもりなんだろう、と疑問に思ってる俺に何とも言え無い表情をしている善吉君と阿久根君。

「ちなみにレンタル料は一日320円！」

「驚きのお値段っ！」

「値上げ前のタバコの値段と一緒に……」

「そこに繋げるなよ……！」

ナイス突っ込みサンキュー二人共。

続く

オマケ？

零

「で？喜界島さんの紹介はアレって事にして今日の仕事は？」

めだか

「ほう、貴様にしては熱心な所だが……今日は特に無いな」

零

「very nice! じゃあ帰る!」

仕事が無いと分かった瞬間にいそいそと帰る準備を始める、喜々した表情とオマケ付きで。

善吉

「何時もながら、お前って仕事が無いと分かった瞬間にさっさと帰るよな」

零

「だって俺が残ったてしょうがなくなね？」

善吉

「そうだけども……」

零

「だろ？ じゃあ皆、後はヨロピコ〜喜界島さんもバイビー！」

喜界島

「え！？ あ、う、うん、じゃなかった、ハイ……」

零

「あ？ ノリを間違えたか？」

喜界島

「そついう訳じゃ……ない、です……」

零



「なんで敬語？ 同い年だよね？（肉体的に）」

阿久根

「世の中、君みたいに初対面でも馴れ馴れしい性格の人間の方が少ないからね」

零

「そうですね？ まあ、どうでもいいですが……じゃっ、帰りまゝ」

喜界島のキャラがイマイチ分からない零は何も考えずに帰るのだった。

終了

16:「大丈夫勝つよ? だって笑い飛ばしたくなる位にスペックの高いあのマ

主人公自身のスペックは高いんだか低いんだか良く分からない。

外：「刺さない蜂に勝利（カチ）は無い」（前書き）

また番外編でしかも駄文ですいません。

外：「刺さない蜂に勝利（カチ）は無い」

ふと思うのだが、何で『ほっといてくれて』と思ってる時に限って、人に絡まれるんだろうか。そりゃあ絡む人間が嫌いじゃ無い人間だったらまだ我慢出来るが、逆だったら取り敢えず殴りたくなって来る衝動に駆られてしまう。……絡んだ人間からしたら堪ったもんじゃ無いがね。

EP Extra Start

一年目のクリスマス&冬休みが終わり3学期が始まって数日の事、例によって俺は授業には出ずにサボりに勤しんでいた。

「毎日毎日、同じ事の繰り返し……」

「あ、なぐにを言ってたんだ？」

「いや、別に」

冷たい空気に晒されるながらのお昼寝が出来無いので、進路相談室にて一向に傷付かない自分の身体にうんざりしつつもポケーションとしていた。

同じ様にポケーションとしている“先生”も暇そうだ。

「先生って、仕事しないンスか？」

「やらない）……（じゃ無くて、仕事が無い）……（んだよ）」

仮にも聖職者の一端を担ってるってのに、呑気に緑茶をすすりながらヤンキー漫画を読んでいる先生。

こつこつのを“給料泥棒”って言っただろうか。

「何でまた……」

「ほら、アレだアレ。お前と同じクラスに居る子で良くオメーに絡む子、え〜っと何だったっけ？ あの喋り方が面白い子」

「ん、あゝ黒神さん？」

喋り方が変で絡んで来る子ってのはあの子位だからな。

「そうそうそう、あの金持ちっ娘。あの子が俺の代わりにやってくれてるお陰で、今まで以上に仕事が無くなってさあゝあ？」

「なるへソ」

安心院さんが消え去った後から、元々その気があったからね黒神さんだったら。

しかし、安心院さんが消えたあの日に偶然生徒会室を通り掛かった時に、球磨川君が黒神さんに半殺しにされてる現場を見た時はまあ凄かったね。何が凄いかつてお前……その現場の室内だけ、廃屋みたいにもろもろになって、とつと意識が飛んでた球磨川君にマウンツ取ってぶつぶつと何か言いながら殴り続けてる絵を見た時はもう、ね？そのすぐ横で安心院さんは顔が消えた状態で横たわってたし。

まあ、アレ多分偽物だけど。

話しは戻るが、あんなリアル殺人現場を見たらそらアンタ、いくらあの球磨川君と黒神さんに絡みたくは無いとは言え、止めないと思っと思わず止めたけどさ、その後がまた傑作だよな。

何が傑作かって？ その後いつの間にか意識を取り戻した球磨川君が泣きながら言ったのがさ。

「『僕が悪かった』 『許してめだかちゃん』 『二度と人の心は傷付けない』 『二度と君達の前に姿を現さない』 『だから僕に罪を償う機会をくれ』」

とまあ、なんの法則か知らないけど白っぽい髪になってる黒神さんに言う球磨川君、いや嘘っしょ？ と思いつながら俺はただ黙って見ている。

それから二言三言程あつて、遂に許してしまつた黒神さん、そしてボロボロになつた身体で学校から去っていく球磨川君。魂の抜けた様にその場にへたり込む黒神さん。

んで八割空気となつていた俺に、いつの間にか消えていた安心院さ

ん。

「……」

「……」

空気がスツゴク重い。

このままほったらかしにして逃げても良いのだが、それはそれで罪悪感的な何かがある。

「あゝ」

「……」

取り敢えず声を出してはみたが無反応。

「布団が吹っ飛んだ」

「……」

お次は小寒いギャグを言ったがやはり反応が無い。

「あ〜」

「……？」

おお？ 今度はコツチ見たけど、ヤツパリ魂が抜けた感のある表情だな。

「なんだ？」

「いや」

マズツた、反応して貰ったは良いが、何話して良いのかが分からん。第一この子とは仲が良く無いし……ええい！ ままよ！！

「ええつと、部外者だから余り気の利いた言葉は出ないけど、元氣出せよ、なっ？ キミにゃあ友達が居るんだしさ」

「……」

「じゃあ、まあ頑張ってくれ」



結局気の利いた言葉もクソも無くその場を逃げる様にして立ち去った。  
こんなだったら止めなけりゃあ良かったよ、と遅すぎる後悔をしなから。

まあ、そんな事があって約半年以上が経過したが、今では何事も無く過ごしている黒神さん。  
だけど、俺からしたらその後が最悪だった。

「フゝ 玉露最高」

「フゝかオメーよ？ 授業出なくて良いのか？ 逢えてツッコまなかつたけどよゝ」

玉露に舌鼓をうつてる俺に言う先生。  
漫画に視線を集中させながらだが。

「いいよあんなの。出た所でアウェー感が半端無いし」

「ふゝん？」

気の無い返事をする先生。いやいや 안타さ、仮にも教師なんだからそこは授業に出る様に説得した方がいいんじゃないの？ いや、して貰っても困るがね。

「まあ、此処に来て貰うのは、俺の暇潰しとしては良いんだけどもさ、オメーが此処でサボっていると、その金持ちっ娘が来るから困るんだよね」

「なんで？」

「何か苦手なんだよね、あの子」

「ふ〜ん？」

先生に苦手なタイプとか居るんかい、結構意外だなと思いながら玉露を啜っていると半ば忘れ去られてる進路相談室の扉が開かれる。

この扉を開ける人物は限られている、先生と俺そして……。

俺と先生は若干引き攣った顔をしながらその開けられた扉を見るとそこには黒神さんが凜として突っ立ってた。

噂をすれば何とやら……まさにそれだな。

「やはり此処に居たか霧生同級生。さあ、私と一緒に来て貰うぞ！ あっ、先生はそのまま結構です」

「ほら零、お前の彼女が来たぞ」

肘で俺を突きつつ小声で言う先生。

「止めてください鳥肌が立つ」

「じゃあ何だ？ 通い妻か？」

「寒気がするから止めるつつてんだろつがゴラァ！」

これ以上本気で言わせ無い為に半ば本気ガチでネックブリーカーをする

「ぐえっ！？ や、止める……！ 死ぬ死ぬ！！」

「ハアハア……！」

ワリとマジで絞めたせいかわ先生の顔色が土気色に変化したので、俺は息切れ混じりで解放する。

「ゴホッ！ わ、悪いケド黒神さんや。後でコイツを引っ張って行くから教室へ戻ってくれないか？」

「……。わかりました。おい霧生同級生、絶対に来るのだぞ？」

「……………」

未だに顔色が悪い先生に頷き俺に念を押し相談室から退室する黒神さん。

くっ！ 駄目だな、自分でも解る位に顔が引き攣ってる。

「オメーよーそんなにあの金持ちっ娘が嫌いな訳？」

黒神さんがいなくなった後にお茶のおかわりを用意しながら先生からの一言。

「いや、別に嫌いじゃ無いんだけども」

「じゃあなんだよ？」

なんだよ……と言われてもな。主人公だから、とか言え無いしなあ。そもそも主人公だからとか関係無いし。

「…………」。言いたくなくちゃあ、言わなくても良いけど、あの子って

将来絶対美人になるぜ？」

「だからなんだよ」

「今の内に仲良くなつといても損はしねえって事だよ」

コイツ、事あるごとにそこに結び付けるケド、アンタも嫌いみたいな事言つてたよな？ まあ黒神さんの造りが良いつてのは認めるけど、俺は絶対に「そんな目」では見れない、そもそも趣味じゃ無いし。

「好みじゃ無いんでね。万が一、いや億が一にでも有り得ない」

「じゃあどういったのが好きなワケよ？」

「年上……しかもお姉さんみたいなの？」

「って、何で答えちゃってんだよ俺。」

「好きだねえお前も」

「『小学生が大好き！』何て言うよりかは百倍ましだと思わんかね？」

「違いねえや」

出されたお茶を飲みながら一服する、うむ、美味しいな。

「それ飲んだら授業出るよ？ また来られてもアレだし」

「……………わかってらあ」

結局その後教室行き授業に出る事になったのだがクラスの連中の意外そうな視線を一齐に浴びながらの授業になった。

黒神さんは満足そうに、うむうむと頷いてたけど、そこを無視して寝始めたので再び絡まれる事になったのは当然の流れだった。

やはり俺はこの子とは合いそうになさそうだね、そりゃあ俺も一応大人だから表面上普通に会話なりなんなり出来るが、心の底から笑いながの会話は無理だ。

餓鬼だな俺も…………。

終

外：「刺さない蜂に勝利（カチ）は無い」（後書き）

“先生”の名前ってどうしようかしら……。

## 先生の設定（前書き）

先生の設定、修正しました。



## 先生の設定

向島 真

年齢：25歳（原作時点で）

身長：180？

体重：81？（若干筋肉質な為）

血液型：AB型

“備考”

主人公が通わされていた中学校にて進路相談員の先生として働いていて、主人公を中学校に通わせた張本人。

生徒に平気仕事押し付けて自分はサボってばかりで、主人公の中では「給料泥棒」レベルが貼られてる。

軽い性格で、美人を発見したらすぐに声を掛けてナンパをし、その中率は80%の確率で成功する。（残りの20%は彼氏持ちとかの理由）

その性格のせいで三年間もの間に主人公をチャラ男予備軍へと導いたある意味での師匠なのだが、逆に言えば、どんな連中とも仲良くなれる。

ナンパな性格の癖に興味は意外にも釣り。

容姿は一応それなりにカッコイイ（ワイルド系）。

ちなみに、主人公がこの世界に飛ばされてから一番絡んでいる人物

で、中学校時代はよく“腐”の付く女子から良からぬ噂をされてた  
りする程周りから仲の良さを認知されていて、主人公が高校生にな  
った今でも、主人公の家に転がり込んだり遊び歩いたりする。

## 能力

### サクリファイス 自己犠牲

他人の痛み、傷、病気、心的外傷に至るまで、ありとあらゆる人  
にとってマイナスとなるもの全てを自分か代わりに請け負う能力<sup>スキル</sup>

この能力と、真自身の“どんな人間でも分け隔て無くと接する”と  
いう性格もあってか、異常者<sup>アブノーマル</sup>、過負荷<sup>マイナス</sup>、悪平等<sup>ノットイコール</sup>と呼ばれる連中から  
好意的な目を向けられる。

先生の設定（後書き）

古畑任三郎を見てたらんな名前が聞こえた気がしたので付けました。

17：「1に気をつけ2に構え、3・4が無くて5にパイプ椅子！」（前書き

史上最つ悪！ に来来の悪い回です。

鋼……いや超合金の心を持つ勇者様はよろしければどうぞ。

17：「1に気をつけ2に構え、3・4が無くて5にパイプ椅子！」

突然だが俺は自分の部屋にいる。

しかもあのアパートの部屋では無く、元の世界に住んでいた自分ちの部屋だ。

「うーん？ 俺って死んだんだっけ？」

意識がある前の記憶が目茶苦茶になりつつも視界に映る景色を観察する。机にテレビ、ベッドや本棚……窓から見えるのは約三年ぶりの景色 やはり間違いない、否定しようも無い、此処は俺の部屋でそれが意味することは。

「帰って、来た？」

何のトリックで帰って来たのかは分からない、だけどここの景色は懐かしい感覚がする。

帰ってこれた その事実を知った時、俺の中で何かが弾け飛んだ。

「我が家よ！ 私は還って来たあああ！ ガハハハハハハハ！」

何かのパクリ臭のする台詞と腹の底から込み上げてくる感情を、押し込む事無く吐き出す。

「ハア、ハア、ハア」

余りに笑い過ぎて体力が大幅に削られたがこうしちゃおれん、マイハニーよすぐに逢いに行くぜ！

「待ってるよ婆ちゃん。すぐに会ってあ〜んな事やこ〜んな事を…  
…ククク、悪いな爺さん今日の俺は野獣と化すぜ！」

そうこれは戦争なのだ！ と意気込んでいるのは良いのだが現実残酷である。

「おい、起きろ」

「グへへへ」

「寝ながら気持ち悪い声出してんじゃねえ！」

「あでっ!？」

「起きたか？」

「え？ あれ？ 此処は何処？ 婆ちゃんは!? マイハニーは!？」

「寝ぼけんのか？ 教室に決まってるだろーが、早く行くぞ」

確か、居間に後ろ向きで突っ立ってた婆ちゃんにサイレント飛び付きをした瞬間に、B2爆撃機並の音と衝撃がしたと思ったら目の前に善吉君が居る、て事はだ。

「夢……?」

「何の夢だか知らねえが、お前は今の今まで寝てたぞ？ 気持ち悪い笑い方しながらな」

淡々と事実のご開張をする善吉君。

「そんな馬鹿な……マイハニーに【ピーッ】する事無く現実世界に戻されてしまった」

「何を言っただわかんねーけど、最低だなお前」

ドン引き顔をしている善吉君にちよこつと傷付きながらも、夢オチか……どうせなら最後まで見せてくれよと、欲望全開な俺だった。

「全く何時まで寝てるんだ。もう放課後だぞ？」

「んあああ……」

どうやら放課後までノンストップで爆睡してたらしいな、軽く呆れた表情をする善吉君を尻目に、俺は呑気に欠伸と共に身体を伸ばす。机に長時間突っ伏してたせいか、ゴキゴキと背中の関節が鳴る。

「フウ……どーせなら最後まで夢を見てから起きたかったよ」

「知るかなもん」

なんだろう善吉君が冷たい、やはりあの夢の内容が寝ながらにして顔に出てたのが問題だったか。



「ほら行くぞ」

「あ？ 何処に？」

「ボケてんのか？ 生徒会室だよ」

「あ〜」

「放課後になれば生徒会室に行く」というのがもはや日課となっている。今日は、仕事がなけりゃあさっさと帰って夢の続きと洒落込みみたいな。

「ふわぁ……」

善吉君の後ろを欠伸混じりで歩く中、高校生になってから二・三番目に絡んでるので善吉君だよなあとか思う。仕事の為とは言え、律儀に俺を起こしてくれるし一緒に仕事をする回数も多い。

「て、聞いているのか？」

「は？」

「だから、今日めだかちゃんが遅れて来るって話だよ」

「え？ ああそつなんだ……」

どうやら一人で考え込んでいた間、ずっと俺に話し掛けてたらしいな。  
傍から見たら“話しているのにシカトこいてる”って絵だつたらうね。

「お前本当に大丈夫か？ 具合でも悪いんじゃない」

「いや大丈夫。ちょっと考え事してただけだよ」

「考え事って、さっきの夢と関係あんのか？」

「え？ あー……まあな」

まさか「君の事考えてました」なんて言っただけで気持ち悪い解釈されたら堪ったもんじゃ無いしな、ここはテキトーに言っとくのが無難さ。

「何の夢見てたんだ？ あん時すっげえ危ない奴みたいなの顔してた

ぜ？ クラスの奴ら及び教師までが引きまくってたぞ？」

マジか……。そんなに変態な顔<sup>ツラ</sup>だったのか、恥ずかしいな。

「まあある意味、酒池肉林を越えた夢だったかな」

あのタイミングで善吉君が起こさなければ、と思うとかなり悔やまれる。

「相当スゲエ夢だったんだな」

そう言っつて再び前を歩く善吉君。

「それにしてもよお、なんで俺達が最初に入ったつてのに後から入つていく奴らの方が階級が高いんだろっな？」

「さあ？」

それから、生徒会室に行く間ずっと善吉君の愚痴っぽいのを聞いている。どうやら後から入ってくる奴らの階級が上なのが気に入らないらしい。

平和だな……。

「でもお前の場合は微妙に違うんだっけか？」

「いや、俺の場合は緊急事態にならないと意味を成さない役職よ？  
それにめだかちゃんが生徒会長やってて緊急事態に陥る事なんて  
あると思う？」

「今の所想像出来ねえな」

「だろ？」

多分その内緊急事態になるとは思っけけど、だからって俺が何かする絵が浮かばないな。

それにしても、何でめだか君は俺なんかを取り込んだんだろうなあ  
とか思っていたら生徒会室に到着、先にいた善吉君が扉を開けると。

「……あ」

何か固まってる善吉君。一体どうした、デケエ蛾でもいたか？  
と思いつながらヒョイと中を覗くと。

「……」

制服を脱いでいる喜界島さんと目が合い、気の利かない台詞が言え無い俺は。

「露出狂その3つてか？」

全てを台無しにする言葉が思わず口から出てしまった。  
後に「キミは、もう少しデリカシーのある言葉を選んだ方がいいよ」と言われるのは別の話した。

EP17:Start

「お金！ お金払って！」

善吉君がボロボロにされてからの喜界島さんの第一声がそれだった。ついでに俺は善吉君以上にボコられたりする、机の角で殴られたりパイプ椅子で百叩きにされたりとか、普通だったら死んでるぜ？

「ば？ 何言っでんだお、前？」

「痛つつつつ……鼻血が止まらない」

全身ズタボロの善吉君は呂律まで目茶苦茶になっている、相当殴られたらしいなちよこつと善吉君に同情してしまう。ちなみに鼻血が止まらないってのは決して興奮してる訳じゃあ無い、鼻を思い切り殴られた為だ。

「アタシの裸見たでしょ？ だからお金払って！」

「……これだけ人をボロボロにしないと更に金払えってか？ いい性格してんな、え？」

「裸ってなあ……ブフツ！」

「何ですか？」

思わず吹き出してしまった俺に反応した喜界島さんが何故か敬語で俺を睨み付ける。

「だつてなあ？」

そんな痛くも痒くも無い睨みを軽く無視しながら視線を善吉君に向けながら話しを振る。

「俺は言わんぞ？」

んだよ俺が代わりに言えつてか？　しょーがない。

「え〜つとさあ、取り敢えず何で君の半裸を見たからって金払うワケ？　ここは風俗ですか？　あ、キャバレーでもやっつてんスか？　だったらポールダンスでもやっつてくださいよ。え、出来ない？　じやあ金なんか払えまへんなあお嬢ちゃんよ？　大体ねえ餓鬼の肢体見たからって興奮する程俺は餓えてませんし、もしかしてそう思われてるとか思っちゃってる？　うわあ〜お、勘違いちゃん&自意識かじよ〜！！」

ちよっぴりハツチャケながら言っちゃったけど、何とか思いの丈をぶつけてやったぜ。

「お、おい零！　ちよっと言い過ぎじゃ」

「あん？　良いんだよ、ハッキリと言わないとこういったガキはドンドン付け上がるからね。じゃないと近い将来、身体に触れられただけで『この人痴漢ですっ！』とか言うぞ？　全くこれだからガキは……」

「お、おい！！」

何か知らないケド冷や汗混じりで俺を止めようとする善吉君、何だよ自分だって言いたげな顔だった癖によ。

「んだよ……！俺が言わなかったら善吉君だって似た様な事言っ  
てた癖によ」

「そ、そうじゃ無くて！」

「何だよ？」

「ほ、ホラ」

と言いながら顎で差した場所を見ると、喜界島さんが爆発まで5秒  
前な状態だった。

「うっ……」

「言い過ぎだ。泣きそうだぞ？」

確かに目を潤ませているが……。

「へ〜 なんスか、今度は泣いちゃいますか？ 泣けば勝てるとか  
思っちゃってますか？ ごめんなさいねえ、俺って土下座されても  
何も感じ無いタイプなんですよ、ハイ残念！」



更に追撃を試してみた、と言うより泣かせたくなった。

「ば、馬鹿！」

「うわ〜ん!!」

おっしゃあ！ 遂に泣き出した！！ と内心喜んだのもつかの間、なんと喜界島さんは泣きながら近くにあったパイプ椅子で殴り掛かって来る。

「あぶなっ!?!」

「ほら見る！ お前のせいだぞ!?!」

横ステップでパイプ椅子攻撃を避けつつ善吉君に怒られてしまう。

「何だこの子メンタル弱すぎっしょ!?!」

「あんだけボロクソに言われたら誰でもああなるわ！」

確かに自分で言っというてたが「無いわ〜」とは思ってたが、理性が吹っ飛んでるお陰か、関係無い善吉君まで攻撃されてる。仕方ないな。

「アチヨ〜！」

ちよこつとヒートな状態で、喜界島さんが振り下ろそうとしたパイプ椅子を蹴り飛ばす。

「きやつ!?!」

「今だ、無効化ダイブ！」

そのまま喜界島さんに飛び付いて無力化し汗を拭う、汗なんかかきちゃいないケド。

「痛いだけは勘弁だよ」

「あ、危なかつた〜」

「……………クスン」

アレだな、余計な事なんか言わなけりゃよかった……あの程度じゃ痛いだけで死ぬ無いだろうし、何より掃除が大変そうだけ。

散らかった生徒会室を片付け終わった後、俺達はそれぞれ財布を取り出していた。

「ほら……750円」

「わーい、ありがとうー!!」

善吉君に渡された750円に目を輝かせる喜界島さん、アレとは言葉安いな。

「ホントに払うのかよ」

「だって、見たのは事実だし……」

「律儀なこつて。あん？ 何だその手は？」

「霧生くんも、お金……！」

ああ、善吉君だけで満足して忘れて欲しかったが覚えてたか……。

「分かったよ。冷静に考えりゃあ95%俺が悪いし、ゴメンね……  
って許しちゃあくれんか」

「い、いえ。あたしもすいません」

ぺこりと頭を下げる喜界島さん、また口調がおかしくなってるな。

「口調」

「え？」

「こんな状況で言うのもアレだけど、そのよそよそしい口調は止めてくれないか？ 背中が痒くなる」

さつきから処か水中運動会が終わった辺りから俺に対する口調がおかしい、それが何と無く嫌だ。

「でも……」

「でももへちまも無い。止めてくれないなら金は払わんぞ？」

「えっ！？ わかりまし わかった、これで良い？」

「……現金な奴」

金を払わないと言った瞬間に口調を普通にしゃがったな。

「よしそれでいい。え〜っと財布の中身は〜 チツ、小銭が無い  
……しょうがねえな、ホレ！」

「えっ！？？」

財布から諭吉さんを1人取り出して喜界島さんに渡す、対する喜界島さんはビックリ顔だ。

「お前……金額デカク無いか？」

「札しか無かったし、それに俺も火が点いて余計な事言っちゃったし？　これから喜界島さんも一緒に働くのにギスギスした感じは嫌だしね……ってそうしたのは俺だけど、さ」

「で、でも……」

「あ？　今になって何でビビってるんだよ？」

「い、いやそういつ訳じゃあ……」

「だったらその金は募金でもしてくれ。とにかく、ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げながら謝罪の言葉を述べる、でもこれって全部自業自得なんだよな。

「うん、じゃあ貰うよ……アリガト」

そう言いながら綺麗に札を折って蝦蟇口財布に入れる。

「うん、じゃあ……どっしょよっ。」

「急にオレに振るなよ」

「つーか阿久根先輩どうしたよ？」

「オレが知る訳無いだろうよ」

「そりゃそうだ……会計さんの仕事もなあ？ こないだ全部片付け  
ちまったしなあ」

「そうなの？」

「うん、そうなの」

手持無沙汰だったので、キョトンとする喜界島さんの頭をポンポン  
と叩く、おっ！ 髪がサラサラだ。

「かと言って勝手に帰ると後々面倒な事になるからなあ。とにかく  
めだかちゃんが来るまで待機かな」

「だな。じゃあ漫画でも読んでよつと」

そう言って最初から用意してた漫画を机に拡げて読み始める善吉君。

さて、俺は何をしようか。

「……」

「あ？ どーしたよ喜界島さん」

急に黙りだして、何だ？ でも最初からこんなだったか？

「あの……頭」

「頭？ 俺の頭に何かくっついてる？」

「ゴミでも引っ付いてるのだろうかと思い、自分の髪を隈なく触る。

「そーじゃ無くて、アタシの頭」

「は？」

「霧生クンの手がアタシの頭に……」



そう言われてフト気付く、先程からずっと喜界島さんの頭をポンポンと叩いていたんだっとな。

うん、俺の図体が無駄にデカイから、喜界島さんの頭が調度良いポジションなんだよなあ。

「あゝ フリッ！ ん……何か調度良い感じだったからさあ？」

「いや、べつに良いんだケドさ」

と、冷静に言ってるつもりなんだろうけど、目線を逸らしてオマケに若干顔が赤い……ああ、でもこれも元からか？ よし、試してみつか？

「もしかして……照れてる？」

「うっ！ ち、違う」

お？ あからさまに動揺してるな？ やっべ、面白くなってきたっ！

「へえ？」

「な、なに？」

ジーンと喜界島さんを見つめる。  
うむ、よくよく見ると……。

「喜界島さんってさあ？ 結構カワイイよね」

「はい！？」

「ぶっ！？」

素っ頓狂な返事をする喜界島さんに吹き出す様なリアクションをする善吉君。

てか聞いてたんかい。

「な、ななな何言ってるんだよお前！？」

壊れたCDみたいな口調で俺に迫る善吉君、ちょっと面白い。

「いや善吉君だってそう思っつしょ、実際この子かなりレベル高いと思っただけど」

「お、お前、高校に上がってから随分変わったよな」

「今更だな、まあ中坊の頃は色々あったんだよ」

実際俺が変わったのは中二くらいだったかな。

「て、今はそんな話しじゃ無いんだよ。喜界島さんだよ喜界島さん……って喜界島さん、茹蛸になって固まってるあ」

善吉君に気を反らされたお陰で喜界島さんがフリーズしちゃったよ。

「おーい、戻ってこーい」

ペチペチと頬を軽く叩いてこちらの世界へ意識を還さないと、何時まで経っても話しが進まんぜ。からかい過ぎたのもアレだけでも。

「うつ……！ あたしは一体？」

「おお、戻って来たけど、からかうのは止めとくかな。やっぱりこの子、見た通りに免疫がなさすぎるわ」

「そうした方が良い。お前、何時か刺されるぞ」

「はっ、刺殺じゃ俺は殺れないな」

「ワリとマジな気がするから恐ろしい……」

ワリとじゃ無くて本当なただけだね。

刺し傷が短時間で塞がる様は結構ショッキング映像なんだぞ。

「その話しは置いて、マジで何しよ？」

「くくく……」

椅子にも座らずに三人で唸ってる絵面つてのは中々にシユールだな。そんな横道に逸れた事を考えていると、勢い良く入口の扉が開いて誰かが中に入ってくる。

「ハロー霧生君！ 暇だつて念話が届いたから飛んで来たよくん！」

何やらすっ惚けた事を言いながら入って来たのは不知火さんだった。

「何言ってるの？ 気持ち悪いよ」

「うわーお、いきなりの毒舌せんきゅー！」

えっ？ ちょっとおかしくね？

「何この子、酒でもかっくらったのか？ ちょっと怖いんだけど」

「うん、若干変だな」

「てゆうーか何で普通に生徒会室に出入りしてんの？」

確かに喜界島さんの言う通りだが、そこは別に突っ込むところちゃうぞ？

「ちよいちよい不知火さんよ、何しに来たんだよ？」

「ん？ べつつに？ 暇だから遊びに来た……おやおや、これは喜界島選手じゃありませんか！」

「っ！」

急に話しを振られたせいか若干顔が引き攣ってるぞ喜界島さん。

「あたし不知火、よろしくね〜！」

「よ、よろしく……」

引き攣った顔のまんま挨拶する喜界島さんに対して不知火さんは「見せたいもんがあるんだ」とか言って例の百合写真のパネルを掲げる。

それを見た喜界島さんが最上級にテンパる様を楽しんでる不知火さんに善吉君のメスが入り、程なくして鎮静化した。

その後漸くめだか君が来たのはいいが、ヤツパリ今日は仕事が無いらしくその日は解散、暇になってしまった。

出来たらあの夢の続きを………見れる訳無いか。

続く

17：「1に気をつけ2に構え、3・4が無くて5にパイプ椅子！」（後書き

フラグじゃ無いからね!?

……多分。

17・5：「お前のカーチャンでくべくそ〜！」ってけなしてるつもりなんだよ  
ト並に最低ですのぞ。

我慢強い方はどうぞ。



17・5：「お前のカーチャンでくっくそく！」ってけなしてるつもりなんだよ  
結局早めに帰る事になった俺こと霧生零は、特に面白い事も無く家の前に到着し、ポストの中をチェックするが何も無い。

「今日の夕飯何にしようかしら」

階段を登りながらもはや日課と化している夕飯のメニューを考える。  
あれ程さつさと帰るってキメていたのに……順応って怖いわ。

「く　あら？」

鼻歌交じりで家のドアノブを回すと、鍵が開いていた。  
行く前に鍵はちゃんと閉めたよな？

「……まさか」

その瞬間頭に「空き巣」という単語が浮かんだ俺は、咄嗟に折りたたみ傘を伸ばして武器へと変化させ部屋に突入する。

「御用だ！！」

土足のまま自分の部屋に突入したが。

「おゝ零！ 先にやってるぜ」

そこに居たのはビール缶片手に挨拶する元・恩師だった。

## EP18 Start

靴を玄関に置いて、制服から部屋着へと着替えた俺は、目の前で人が買い込んでいたビールやつまみやらを飲み食いする元・恩師に問いたです。

「で？ 何でアンタがいんだよ？」

「あゝ？ 何時も通りガツコの仕事も無くて早めにアガったから才メーんちに泊まりに来た！ おつ、このつまみお前が作ったのか？ 中々美味いぞ、褒めてつかわす」

このチンピラ先生の言った通り、仕事が無くて暇だから俺の家に来たらしい、しかも人が作り置きして置いた食料を貪りながら。

「……ハア。来るなら来るで連絡位してくれよな」

「悪いワリイ、突然思いついた事だったし、オメーから合鍵貰ったから連絡不要かと思ってさ」

「それでも連絡しろや」

「だから謝ってんじゃねえかよ」

「ビール缶片手にエビス顔で言われても説得力のカケラもねえよ」

「アツハハハ！ 違いねえや！」

豪快に笑い飛ばす辺り、反省のはの字も無いだろうがこのチンピラ教師は。まあ、慣れた感があるから諦めてるがね。

「とにかくアレだ。お前も飲めよ、なっ！」

「ああ、飲むケドよ。後ろにあるビールの空段ボール3つ分の説明は？」

そう、先生の後ろに無造作に放置されているビールの空段ボールが

気になってしょうがない。  
俺の記憶が正しければ、アレは俺が買い置きしたビールだったと思  
うんですがね。

「ん、これ？ 昼から家に居て暇だったんでな、飲んでたらいつの  
間にかこうなってた！」

と、しつこい様だが全く反省していない顔で言われた。  
此処までくると逆に清々しくて怒る気にもならないながら一本  
目のビールを開けて飲む。  
しかも昼間から来たって、アンタそりゃ「仕事が早く終わったから  
来た」じゃ無くて「怠いんでサボりました」ってのが正解なんじゃ  
無いか？

〈約1時間後〉

作り置きしていた料理はほぼ無くなったが、材料はあったので有  
り合わせで作った料理をビールないし焼酎片手に二人で談笑してい  
た。

「ソングング……相変わらずお前の作る料理は美味しいな」

「まぐまぐ……そらどーも」

適当に味付けしたもんが褒められるとは思って無かったので、ちょっとぴり嬉しい。

「で？ 学校はどーよ、楽しんでるか？」

「ん……普通かな」

今まで女の人の話しをしたのに何故か急に学校の話題に変わった。た。

どーよと聞かれても別に普通な為に面白い回答が出来なかったがね。

「ふ〜ん？ 金持ちっ娘や金髪不良君とか、金持ち娘にくっついてた男の子とかは元気なの？」

「元気なんじゃねえの？」

“ソルティードック”を飲みつつ先生の質問に淡々と答える、本人達の体調なんぞ俺が知る訳無い。

「『じゃねえの？』ってお前……皆同じ生徒会じゃねえのかよ」

「あの子等とは“持ちつ持たれず”の関係みたいなもんだからな」

氷が入ったグラスを回しながら答える。

現段階ではあの子等に合わせてはいるが、時が来たらどうなるか分からない。「目的の為」とか言って生徒会を抜けるかもしれないし。

「成る程ねえ。相変わらずオメーも大変だねえ、スキル能力だったかに振り回されてるなんてさ」

「別に振り回されては……」

「振り回されてんだろ？ その能力とスキルやらのせいで、オメエは簡単には死ね無い……それじゃあ困るんだろ？」

「……」

先生の言う通りだ。

ツラ顔すら見た事も無く、恐らく何処かで俺を見てほくそ笑んでる神とやらが埋め込んでくれた力のお陰で、元の世界に帰る事が出来ない。それどころか、失敗したら永遠に生かされる羽目になるとか『何処の罰ゲーム？』と泣きたくなる事をいつの間にか強要されて早三年

だ。

しかもタイムオーバーになった瞬間、完全にこの世界の住人ハケモノになっ  
てしまう、そのタイムリミットが約二年半なのだが、不思議と焦り  
とかの感情が湧いて来ない。“この世界に俺が順応し始めてしまっ  
たのか”それとも“帰れ無くてもいい”と心の何処かで思っ  
てしまっているのか……俺自身にも分からない。

「おい、何シブイ顔して長考タイムに入ってたんだ？」

「ん？」

一人で考えていたそぶりをしていた俺に不信に思った先生が俺の顔  
を覗き込む様にして俺に話し掛けていた。

「あー……くだらねえ事考えてたわ、悪いな」

先生の顔を見ると、能力だとか何だとかを一々真面目に考えるのが  
馬鹿らしく思える。

「オレから振った話しだから別に良いけどよ、まあアレだこの話し  
止めよう、酒がまずくなるわ」

「それは俺も激しく同意するわ」

それから俺の能力の話から、何故か女の子の話しにシフトチェンジした。

しかも、俺が今通ってる学校の子についてアレコレと、だ。

「で？ オレが紹介した箱庭学園はどうだった？ 言った通り“猛者”が多いだろ？」

「あの時言ってた猛者って、ソッチの事も含まれてたのね……」

「たりめーよ！ 野郎の話しは二割程度だよ、で？ どうだった？」

そんな興奮した顔して机から身を乗り出すみたいにして聞くなよな、いい年した大人が。

「まあ、確かにレベルが高いよ。高いんだけど、皆ガードが固いっぼいな」

「へえ〜？ 何人か声掛けしたんだ？」

「うん、殆どから当たり障り無い断られ方されたケドね」



一応生徒会の目や風紀委員の目やらを盗んで「おっ！ 好みだ」って思った女の子に声掛けしてはみたが、どれもこれも「何コイツ？」みたいな顔された揚句逃げられるのだ。脈アリもあつたけどね。

「流石にエリート共が通う学校だな」

ちよっぴり割高の酒“山崎25年”をグラスに注ぎながら何処か羨ましそうな声色で話す先生、と思いきやハツとした様に顔を上げて俺の顔を見る。

「殆ど……て事は何人か脈アリがいたのか？」

「え？ まあ……」

しまった……余計な事言っじゃ無かった。

「マジ!？」

興奮した面持ちで言うて来る先生に「お前は中学生か！」と軽く引きつつも答えようとしたが、よくよく考えてみると、確かに脈アリとは言ったが、あの人の場合は普段から飄々としてるからよく分からないな。

まあ、言っけど。

「ん〜と、脈アリかと言えば首を傾げざるえ無いんだけど」

「うんうん！ 早く早く！」

何だこの“親におもちゃを買って貰えるか貰え無いかの駆け引きでギリギリ勝ちそう”みたいな顔は。

「一人いた」

そう言った瞬間の先生の顔は死ぬ程憎たらしかったりもした。

「マジかよ……へえ？お前の好みに合う子がいたんだね？」

「なんだよその言い方」

「だってよー年上好きだったけ？ お前の好みって」

「まあ」

こればかりは譲れませんね。

「更に言えば性格キャラやら何やらが一つでも合致しなければ意味が無いとか豪語してたお前が、ねえ？」

なんだろ、ニヤつく先生見るとムカツとするんですけど。

「しょーがないじゃ無い！ 最初に見た瞬間、俺の中へ直球200？ ストレートで入って来たんだもの！」

机をバンバンと叩きながら半ばヤケクソ気味で言う、あの人は俺が今まで会った中でも二番目ぐらいに俺のハートに電流走ったからね。……異世界人だけでも。

「へえ？ そこまで言わせる子なら一度会ってみたいなあ。ね、一回会わせてよ？」

「やだ！」

「な、なんで!?!」

「アンタ絶対に余計な事吐かすから」

100%……いや120%の確率であの人に余計な事を言いそうだが、主に俺の恥ずかしい過去とか平気でバラしそうだ。それだけは駄目だ。

「チツ！ まあいい、絶対何時か見てやるから」

「仕事しろよ！」

「そんな事より、お前があわてふためく顔見た方がよっぽど面白いね、クケケケ！！」

「ホントに最低だなアンタ！？」

悪役顔全開で笑う目の前の元・恩師。

ホントになんでコイツは進路相談員なんてやってんだろつか、永遠に謎だな、と思いつつ酒を口に含んだ瞬間。

『面白そうな話だね、僕も混ぜてよ』

突如俺の背後から声がして。

「うげ！ 重っ！？」

急に背中にGが掛かる。

「安心院さん？　なんだキミも来たんだ？」

そんな俺を余所に、先生は慣れた感じで恐らく俺の背中乗っかかっている安心院さんに話し掛ける。ヤバイ、体勢が体勢だから地味にキツイ。

「久しぶりだね、先生。な〜んか二人して面白そうな話ししてたから来ちゃった」

そうとは知らずにヘラヘラした表情で先生と話す安心院さん。ヤバイって、早くどいてくれないとヤバイって！

「オレの家じゃねーからそれは良いんだが、取り敢えず下敷きにしているこの部屋の主の許可を取った方がいいぞ？」

「ぐえ〜！」

その通りだこの馬鹿野郎！！……野郎じゃ無いか、でも性別が不明な点がある可能性もあるんだよなこの人。

そこは置いといてとにかく早く退けと叫びたかったのだが、潰れた蛙のような言葉しか発せられない。

「え？ あっゴメンゴメン、大丈夫零君？」

対して、某偽りの救世主の肩書を持つキャラの如く「ん？ 間違ってたかな？」みたいな感じで悪びれる様子も無く言う安心院さん。  
「瞬本気で殺つてやるうかと思つてしまったのは仕方がないのかもしれない。」

「あ、謝る暇があつたら早く退け 退いてください、苦しい」

真面目に退いて欲しかったので、俺の中では割りとへりだくつた感じで言うと、背中に掛かつてた負荷が無くなり肺に酸素が供給される。

だが、それまで呼吸すらままらない状態で急に酸素が供給されたのでむせる。

「げほっ！ げほっ！ アフリカ象並にクツツツソ重たかつたあ  
！！ 絶対太つたるアンタ！？」

開口一番にその言葉がマズかったのか、後頭部に鈍い衝撃と痛みが走る。そう、ひっぱたかれたのだ、安心院さんに。  
そついった事は気にしないタイプだと思つてた俺の誤算だ。

「零よ……そりゃねえよ」

先生も呆れ顔だったのが無性に腹が立ったので言い返す。

「無くないから！ 何なのこの人！？ 暫く姿を消してくれたお陰でパラダイス気分だったのをいきなり現れたと思ったら人の背中に乗っかってきやがってよお！ しかも重いし、何気に俺を名前で呼んでるし」

安心院さんに指差しながら怒鳴り散らす。

先生も若干ビクリ顔だが更に怒鳴る。

主に住居不法侵入の件についてあらかた言ってやった。

「ハアハアハア……」

「気は済んだか？」

「若干」

息を調えながら答える。怒鳴りまくったお陰か、若干スッキリした。

「というのが零の言い分なんだけど、安心院さんからは何か無い？」

そう先生が聞くと、安心院さんは半笑いの表情を変える事無く言う。

「半泣きの表情で怒鳴る零君が可愛かったよ」

あ、あれだけ言われて感想がそれかよ！？  
しかも謝る気無しですか！？

「ククツ……！　だ、そうだが？」

「Kill You For Me!（頼むから俺の為に死んでくれや!）」

そう言いながら近くにあったビール瓶で安心院さんに襲い掛かろうとしたが、直ぐさま先生に止められた。

先生いわく「勿体ないから殺すな」だと。  
一体何が勿体ないだよ。

それからは紆余曲折的な何かがあって三人……特に俺と先生でギヤ  
ース力騒ぐのだった。

結局安心院さんは、何をしに来たのかが分からずじまいだった。

終



17・5：「お前のカーチャンでくっせー！」ってけなしてゐるつもりなんだ

先生の名前はもはや考え無くてもよくな？　と思ひ始めてまいりました。

18：「ルールと襖と障子は破る為にあるのだー！」（前書き）

あくまでも寒いギャグ97%仕様でございます。

てか、話が進むにつれてクオリティーが低下する……。

18：「ルールと襖と障子は破る為にあるのだ!!」

箱庭学園風紀委員会、ルールを破った生徒を容赦無く取り締まる、通称“学園警察”又は“掟破りの処刑部隊”（主人公が勝手に命名）。

これはその風紀委員会と生徒会と主人公のしょーもない戦いの記録である。

「校―則違反です!!」

登校の時間帯に響く声。彼女の名は鬼瀬針音、風紀委員会の一人である。今日から学園風紀徹底週間とやらで、正門前にて制服を改造したり崩れた着方をしている連中を取り締まっていたりするのだが。

「だって……」

「なあ？」

「うん、そんな事言われてもなあ？」

言われてる本人達は、余り反省する様子が無かったりする。

「なんですかその態度は！ □答えは許しませんよ！！」

反省の色が無い態度の生徒達に怒鳴る鬼瀬だが、一人の生徒が反論する。

「アンタの言う通りかもしれないけど、だったらあいつらはどつなんだ？」

「あいつらあ？」

生徒が指差した所を見ると。

「あゝ 頭力ち割れるの如くイテェよ」

「顔色が悪いが大丈夫か？」

「フム、本当に具合が悪そうだな？」

「一体何をしたんだよキミは」



「大丈夫？ お水飲む？」

ソファでくたばってる俺に水を片手に声を掛けてくれたのは喜界島さん。何でか知らないが、昨日のアレから若干仲良しになれた。

「おー大丈夫」

手渡された水をグビグビと飲む。

「プハア……。アリガト喜界島さん」

お礼を言いつつ、空になったペットボトルをごみ箱にス〇ムダンクする。

「どーいたしました」

若干微笑んでる喜界島さんを見ながら、よく此処まで仲良くなれたよなあ……と思う。

だってそうだろ？ まともに会話したのが昨日で、しかも内容が余り良いものでは無かったし。

まあ今はそんな事より、この頭痛を何とかしなければね。

「フウ、こうしてねっころがっていると大分楽だな……首が痛いけど」

ソファの手摺りが固いので首を痛める気があるが、贅沢は言え無い。

「零よ、そんなに辛ければ早退を許可するが？」

何時に無く優しいめだか君。

『ただ』単なる二日酔いなんですよ』なんて言ったら怒られるな  
れ。

もしかしたら気付いてる上で言ってくれてるのかも知れないがね。

「大丈夫心配してくれてサンキュー……。だけど余り動きたく無  
いってのが本音なんだよね、帰るのさえ億劫なもんでさ」

「そうか……なら今日だけ特別に寝ているのを許可してやるっ」

「ああ、助かるぜ」

めだか君から許可も頂いた事だし、お言葉に甘えて睡眠モードに移  
行……する前に。

「猫美さん暇かなあ？」

「急になんだ？」

猫美さんの名前に反応する阿久根君。

「うん、暇なら生徒会室に来て貰ってひざ枕して貰おうかって」

弱気な状態だと人肌恋しいってのは結構マジだという事が、今分かったので猫美さんに会いたくてしよーがない。

だが、そんな俺の寂しい気持ちを呆れ顔で見ってくる善吉君と阿久根君。

「あのなあ、んな事で一々先輩を呼び出すなよなあ？」

「失礼な、俺はこの上なく真剣なんだがね」

んな事って、本当に失礼だぞ善吉君。

「それに猫美さんなら今日いないぞ？」



「え、何ですか!？」

思わず飛び起きてしまったのはしょうがないと思う。

てか何でキミが知ってたんだ？ 事と次第によつては撲殺刑に……。

「さっき正門から帰って行くのが見えた」

おーまいが、納得しました。

それならしょうがないなこの固い枕で我慢……いや待て、猫美さんが無理なら他の人に頼めば良くね？ って事で生徒会のメンバーを眺めてから、枕代わりを探してみたのだが5秒弱で「ありえません」という結論に達したので首を痛めるのを覚悟で睡眠モードに入ったのは良いが、わずか30分で現実世界に引き戻されるのだった。

「一体！ 何を考えているのですか、あなたがたは!！」

キーキーと猿みたいな声のお陰で、折角寝付いたと思った矢先に起こされてしまい何事かとソファ身を起こす。

「ウルセエなあ」

「あ、霧生くん起きたんだ？」

何故かソファの隣でそろばんを弾いていた喜界島さんが俺の顔を覗く。  
辺りを見渡すと見られない女子生徒が一人、涼しい顔して紅茶を飲んで  
いるめだか君に机をバンバン叩きながらなにやら怒鳴ってる。

「あー喜界島さん？ 一体全体何事？」

今起きてる状況が全く掴め無いので喜界島さんにヘルプをかける。

「実は……」

喜界島さんの説明に耳を傾ける。

説明によると、風紀委員に所属している鬼瀬とかいうちびっこが俺達……いやめだか君と阿久根君と善吉君の制服の着用が校則違反とかで物申しに来たとか。

「まずは人吉善吉君！ どうして制服の下にジャージを着ているのですか！ まさかオシャレのつもりじゃありませんよね！？ 次に阿久根高貴さん！ 貴方が例えエルヴィス？ プレスリーのファンだとしてもその大胆さはありえませんか！」

「いやその……そろそろ時代が俺に追いついて来たかなと」

「真正面から言われた……」

制服の下にジャージを着込むのがどうやら駄目らしい、しかもオシヤレじゃ無いとまで言われてるが少なく共俺は良いと思ってるから安心しろ善吉君。

てか、阿久根君に至っては疑問では無くもはや否定だ。

「それと……！」

そう言いながらソファに足を組んで座ってる俺とその隣に座って三人のやり取りを眺めていた喜界島さんに予先が向く。

「あ？」

「何？」

怒りで興奮した様子で睨みつけてくるちびっ子……もとい鬼瀬さん。対して喜界島さんは真逆と言って良いほどの無表情で聞き返し俺はといえば、自分で勝手に煎れた緑茶を啜りながら何時もの癖で睨み返す。

「なぐにを『自分は関係無い』って顔してるんですか！ 喜界島もがなさん、そして史上最悪超問題児である霧生零君！！」

ツカツカとこちらに歩み寄りながら怒涛のラッシュを繰り出す鬼瀬さん。

「あたし関係ないよね？ 制服改造なんてしてないし、スカートの丈だって普通だし」

「右に同じ、俺も普通に着ているつもりなんだが？」

着崩した制服の着方は中学生で卒業したし。

「ほほう、ならこれでも同じ事が言えますか！？」

そう言って手錠を手に嵌めてメリケン代わりとした拳をを振るうと喜界島さんの制服が……。

「水着？」

誰が言ったか分からないが、どうやら喜界島さんは制服の下に水着を着込んでたらしい。

この子も若干変わり者だったのか。

「ほおらごらんさい！ 貴女が制服の下に水着を着込んでいる事位この私に実装されている“風紀眼”でお見通しなんですよ！！」

顔が干上がるんじゃないかと思う位真つ赤な喜界島さんを余所に、もの凄いしてやったり顔の鬼瀬さん。  
なんだよ風紀眼ってよ、写○眼のパクリか？

「そして霧生君は！」

おう次は俺か？ と言ってもここ最近が目立った事はしちやいねえがね。

「取り敢えず今までの極悪非道っぷりを上から下まで言っても良いのですがそれは保留にして、まずなんで貴方はジャージ姿なんですか？」

確かに今の俺の姿はジャージだけど、それについてはちゃんと説明してやるにしても、何だよ極悪非道って。  
俺そこまで人様に迷惑掛けてないんだけれども。

「いやさ、ジャージの格好については制服がねえんですよ」

「そんな馬鹿な話がありますか！」

「嘘だ！」と言わんばかりの表情をしながら俺の足を踏む勢いで接近して来る鬼瀬さん。

なんだろ……全然嬉しいとかって感情が湧いて来ないね。

「いやさ……盗キられたんだよ制服」

「ぎら？　なんですって？」

しまった、殆ど先生との間にしか伝わらない単語で喋っちまった。

「だから盗まれたんだよ」

今度はちゃんと盗まれたと説明したら、一瞬惚けた表情になる鬼瀬さん。まあそんな顔になるのも分かるケド事実なんだよ。

「そうだったのか。知らなかったぞ、何故言わんのだ？」

「いや、別に言う程のもんでも無いかなってさ」

めだか君の質問を返しつつ緑茶を啜ると「確かに」と阿久根君と善吉君の呟きが聞こえる。  
盗<sup>キ</sup>った犯人も知ってるしそんなしょうもない事をわざわざ他人に言う程お喋りじゃない。

「の割には随分と冷静ですね？ 本当に盗まれたんですか？」

胡散臭さそうな目で俺を見て来る鬼瀬さん。

チツ……。こんなならすぐにも制服を取り返しとくんだったな。  
あんにやろう、次会った時はひざカックンしてやる。

「まあ、犯人は分かってるし、その本人いわく「借りただけ」だと言うつもりだろうから別にね。あ、ちなみにジャージ姿については担任にちゃんと許可貰ってるから、風紀委員<sup>ファンタラ</sup>に取り締まられる言われは無いよ？」

「ぐっ！　そうですか……」

何故だか凄い残念そうな顔をする鬼瀬さん、もしかしてこいつ、適当な理由付けて俺を引っ張るつもりだったのか？　残念だったね君の思い通りにはならんよ。

「まあ、そういう訳だから無事解決しましたって事でハイさよな……」

……

「なりません！！　まだ貴方には別の罪がつ……！！」

チツ！　流れで帰って貰おうとしたのによ、もう君には飽きたから帰ってもらって構わないんだけど。

そんな俺の考えを尻目にぎゃあぎゃああと俺が入学してから“やらかした”犯罪歴をマシニングの如くぶつけて来る。

いいや、シカトだシカト。

そんな過去の犯罪歴（風紀的な）なんか言われても正直今更感が否めない俺としては痛くも痒くも無いし、そんな事より別の事が気になるのでその気になる本人に聞いてみましょう。

「鬼瀬さんはそこで適当に言わせれば良いとして、喜界島さんって“もがな”って名前だったんだ？」

「良く無い！　話を聞いてください！！」

阿久根君と善吉君がそんなやり取りを冷や汗混じりで見てるのも俺には関係無いし。

何やら横で眼鏡チビが突っ込んでる気がするがそこはスルーだ。俺としては喜界島さんのほうが気になるし。

「う、うん……そうだけと言わなかったっけ？」



「聞いてるんですr y」

「うん。めだかちゃんも“喜界島会計”って呼んでたからね。な  
めだかちゃん、そうだったよなー？」

「私の話をr y」

「そういえばそうだったな」

「確かにそうだったな。めだかさんは〇〇同級生とか苗字の後ろに  
名前ないし役職を付けて呼ぶからな」

「でしょ？」

「俺は不知火から聞いたから知ってたぞ？」

「ちよつr y」

「ふん？」

善吉君と不知火さんってホントに仲が良いよな。てか不知火さんが

ら聞いたって言ってるケドさ、何気にあの子って時たまスゲエ情報  
持って来るけど何ルートなんだろう。………って、違う違う話が  
逸れてるよ。

「で、話を戻すけど。俺が喜界島さんの名前を今知ったって事でこ  
れから下の名前で呼ばせて貰うよ。ね？ ね？ 喜界島さん許可ち  
よーだい？」

別に許可なんか取らずとも勝手に呼んじゃえば良いとは思うのだが、  
一応取つとかなないと呼ばれた本人から嫌な顔されたらへこんじまう。

「え！？ べ、別に良いけど………」

若干テンパリ気味の喜界島さんではあったが、無事に許可を貰った。

「マジ？ サンキュー！ じゃあ改めてよろしく！ もがなちゃん  
！！」

早速下の名前で呼びつつ右手を差し出し、握手を求める。  
仲良くなる位なら別に罪じゃないしってね。

「う、うん。ヨロシク、霧生くん………」

妙なテンションになってる俺に着いて行けないのか、怖ず怖ずとした感じで握手に応じてくれたのは良いが。

「オイオイ、俺んことは零って呼んでくれたら嬉しいんだけど？」

そこは空氣的に俺の下の名前で呼ぶべきでしょ？

「へ！？ えっと、その……ぜ、ゼロ？」

恥ずかしいのか知らないけど、顔を真っ赤にして俺の名前を呼ぶ“もがなちゃん”

「なんで疑問形&片言よ？ まあそこら辺は追々慣れてくれりゃあ良いか」

本当に一々反応が面白い子だね。

「イチャつくなああ！ー！」

「おわっ！？」

折角良い雰囲気になってたのを、六割忘れていた鬼瀬さんのメリケンパンチのせいでぶち壊された。

「フーか何処をどう見たらイチャついてる様に見えんだよ!? しかもつい条件反射的に避けたのは良いが、そのせいで俺の第二のベツドが真つ二つに割れてしまった。」

「人の話しの腰を折って尚且つそのヘラヘラした態度……!」

ヘラヘラて……俺はこの上なく真面目だったんだがな。

「それにそうやって女子に軽々しく声を掛けるその軽さ……!」

「軽々しくじゃねえよ、誠意持って声を掛けるんですけど、なあ皆!?」

これじゃあ、まるで俺が「女なら誰でも良い」みたいになってしまっじゃないか! そう思った俺は、誤解を溶こうと取り敢えず生徒会のメンバーに同意を求めてみたが。

「めだかさん。霧生君はどうやらアレで誠意って思ってるみたいですよ?」

「フム、そういう事に関しての零は悪いが全く信用ならんからな」

「チャラ男だもんなアイツ。そもそも誠意って意味知ってるんのか？」

「ちょっと言い過ぎじゃ……」

オイ……。ひそひそと四人で内緒話をしているつもりだろうが全部聞こえてんだけど。  
いや、もがなちゃんだけは俺を庇護する感じだったのは嬉しかったよ。

取り敢えず鬼瀬さんのジトーとした視線を何とかしなけりゃと思つた俺の取つた行動は。

「……………な？」

ちよつくら間を置いてから鬼瀬さんの肩に軽く手を添えてのサムズだ。

そんな俺の行動に「シメた！」といえ顔をした鬼瀬さんは。

「貴方が軽い性格だつてのは周知の事実みたいですね？ 諦めてください」

こんな事を小憎たらしいニヤケ顔でハッキリと言われた。

「チクシヨ〜!!」

そんな事を言われて取った行動は、半ベソかきながらの逃走だった。逃走の途中で「畜生、何時か泣かせてやる!」と鬼瀬さんに対してしようもない復讐心を抱いた瞬間でもあったりする。

ちなみに逃走のついでにそのまま帰りました。

18：「ルールと襖と障子は破る為にあるのだー！」（後書き）

主人公はもうチャラ男でした（笑）

19：「フハハハ！　いくら雑魚のパワーを吸収したところで、このオレを超え  
久しぶり？　なのかは分かりませんが投稿します。

その間に作者名って奴ですか？　を変えてみたのですが、決して執筆を“サレンダー”するつもりは無いので悪しからず。

そして今回は、過去最長クラスの文字数ですが、内容は「ああ……。リアクションの起こし様が無い」そんな感じです。

なので、錬金術で強化した精神力を持つ自信のある方はどうぞ。



19：「フハハハ！　いくら雑魚のパワーを吸収したところで、このオレを超えるぜ！  
うつつす、俺は箱庭学園生徒会役員補佐を勤める霧生零だ。  
16歳の蠍座だけど精神年齢をマジカウントすれば二十歳を越えてるぜ！

「オハヨーさん」

好きな物は酒とタバコと婆ちゃんと……。

「婆ちゃん……」

血液型は2000人に一人とか言われてるRH・AB型で、致死量出血をしたらさあ大変！

「血が足りねえ！　レバーを食せ！！」

だったけど、ある日を境に俺の人生は180度変わってしまった……。

「此処はどこじゃあああ！？」

知らない世界にいきなり飛ばされ。

「暇潰しに俺を選ぶな！」

会った事すら無い神（自称）の手紙を読んでキレたり。

「グハツ！ …………… って死ぬ無いいっ！?!?!？」

元の世界に帰る為に死のうとしても、勝手に実装された第二能力セカンドスキルのお陰で半不死身君にされちゃったり。

「使用する、又は一年周期で能力がパワーアップって……何処のサ  
○ヤ人だよ」

その能力に振り回されたりと様々な出来事に遭遇して早三年近く、  
現在はそれなりにこの世界に馴染みつつある。  
だが、完全不死身君になるタイムリミットも近付いてたりする。  
それだけでも避けたい、だから今日も主人公の周りをうる  
ついて事件にわざと巻き込まれるように頑張っていたりする。

目指すは、G O T O H e l l だ！

あつ、地獄じゃ無くて元の世界だった。

EP19 start

珍しく長々しい授業に出た俺は、放課後になって善吉君と不知火さんと一緒にフラついて……じゃなくてパトロールをしていた。事件が起きたのはそのすぐ後になる。

「ねーねー帰りに何食べてく？」

「それだけ食ってまだ食うんかい」

「フムフム」男から積極的なのはモテねーゲスのする真似』か、やべえ、俺ってゲスの部類だったのか……」

よくある放課後の風景ではあるが、ちゃんとしたパトロールなので、決してサボってる訳では無い。

ほほう、『余裕を持って女と接する』こいつは参考になりそうだからメモっとこ。

「霧生くんは何食べたい〜?」

「オイ、聞いてんのか零?」

「何!?!」 『女は物欲しそうにしている男を見下す傾向がある』…  
…だと? うっ、俺ってもしかしくなくても猫美さんに見下されてた  
?」

ヤバイな、先生の影響をモロに受けたって自覚がある分、今までやって来た事は無駄だったのか?

「おい霧生くん?」

「ハッ!?! な、何かな?」

知らぬ間に不知火さんに袖をグイグイ引っ張られ、意識が現実に戻る。

「いや、霧生くんは何が食べたいのかな? って……」

「え? ん〜何でもいいぞ。今日は俺が奢るから二人で好きなもんセレクトしてきてくれ」

「ホントに!?!? やった〜!!!」

ぴよんぴよんと跳ねながら喜ぶ不知火さんに対して、何やら渋い顔を  
をしている善吉君。

何だろうと思っていると、言いくそうにその口を開く。

「毎度の事ながら良いのか? なんか何時もお前に奢って貰ってる  
気がするんだが……」

ああ、どうやら遠慮してんのね。

確かに世間一般的な学生だと思われてる……のかは知らないけど、頻  
繁に他人に奢るってのは余り無い話ではあるわな。

まあ、心配しなくとも金なら暫く遊んで暮らせる位まで稼いでるか  
ら良いんだよね。

稼いでる手段は、決して胸を張って言える方法じゃ無いケド。

「良いんだよ。どーせサブク銭みたいなもんだし、何より結婚する  
直前以外に金なんて貯める必要が無いからね」

「でもよお……」

それでも食い下がる善吉君。

もう、苗字の通りお人よしだねこの子ったら。

「じゃあ今日は割り勘にすつか？ 多分……いやどーせ不知火さんは財布を持ち歩かないと思うから除外するけど」

ホントならバイトすらしてないこの子達に金を出させるのはアレなんだが、いくらそれを言った所で善吉君が引くとは思え無い、だから俺の中での最低ラインの妥協だ。

善吉君も暫く考えた結果「それなら……」と納得してくれたし、これで万事解決だ。

やれやれ……。一応君達より年上なんだから少しは頼って欲しいもんだね、言って無いけどさ。

と、少し頬が緩くなつたと感じつつ再び読書に戻ろうとしたその時である。

「校内に置けるみだりな飲食、買い食い及び歩き読みは校則違反です！！」

何処かで聞いたような甲高い声が聞こえそれに反応する不知火さんと善吉君。

どうやら風紀委員の鬼瀬さんが飛び出して来た様だ。

そして三人で何やらギヤースカ喚いているが、俺は本の方が気になるのでスルーを決め込み、読書に励む。

「霧生君！！ 聞いているんですか！？」

直ぐ右横で名前を呼ばれた気がしないでも無いが、勉強だ勉強。

「フムフム……」男は焦らずCOOLに構え、一気に落とす。そうすれば自ずと女は向こうからよって来る……これがモテ男、関東鋭牙会・三代目ボス榊真〇男が編み出した“榊の左手の法則”……か。うーむ」

最後の頁を読み終え、本を閉じての深呼吸。

フム、今日はなんと充実した時間だったんだろう。

一時間目の授業から今の今まで読んでいたが、これ程俺に知識を与えてくださった本は無かった。ありがとう、俺の中に存在するマイボス・マイヒーローよ。

さて……。

「なんか呼んだ？」

お次は現在進行で俺に降り注ぐ八つの目に対応しなければね。

何かこう……若干善吉君と不知火さんからの視線が生暖かい様な気がしたが、気にしたら負けだ。

「お前って……ホントに人の話を聞かない奴だよな」

「なにが？」

ジトーとした目で俺に言う善吉君。

ああ、ヤツパリ生暖かい視線だったのね。

てか、話って何の？ そう心で疑問を投げ掛けると、代わりに答えてくれたのが不知火さんだった。

「いやね？ 霧生くんが何の本読んでるのは知らないけど、ずっと鬼瀬さんが霧生くんを怒鳴り散らしてたんだよ？」

ニマニマしながら答えを導き出してくれた不知火さんに心の中で感謝をしつつ、その問題とされている鬼瀬さんの方を見ると、その名の通り“鬼の様な形相”だったりする。

うゝむ顔芸が上手い子だねえ、とまあ他人事のように全く関係の無い事を考えていると、鬼の形相そのまま俺に食って掛かる鬼瀬さん。

「先日の事といい、貴方には反省つてものが無いんですか！？」

そしてまたもやグイグイと俺の足を踏む勢いで接近して来る。

なんだろ、やっぱり嬉しく無い。

「だって本の内容の方が気になる……」



「校内に置ける立ち読みはき・ん・し!!!!」

「は、ハイ。すみません……」

聞く耳持たないとはまさにこの事、いくら言い訳をしようともそれ以上の勢いと迫力で封殺してくる鬼瀬さんについて謝ってしまう。まあ悪いのは俺なんだから仕方無いのだけど。等と思っていた矢先、善吉君がブックカバーで覆われた俺の本を不思議そうに眺めながら聞いてくる。

「一体なんの本なんだ？ 人の話が聞こえなる程面白い本なのか？ しかも時たま独り言まで漏らして……」

「あ！ アタシも気になる〜!!」

「ちょっと三人共!? まだ私の話は終わって r y」

二人の視線が俺の持っている本に集中する。

でも善吉君はアレだとしても不知火さんには余り関係無い本なんだけどね、教えるけど。

え、鬼瀬さん？ フツ……少し位待ってて貰っちゃ。

「この間たまたま本屋にて発見した『The・モテ男』って本なんだけど……君達知らないっしょ？」

ブックカバーを丁寧に外して二人に見せる。

案の定二人は苦い顔をして知らないと言い、善吉君に至っては「んな馬鹿らしい本を朝っぱらからズット読んでたのかよ!？」と、有り難いツツコミを頂戴いたしましたとき。  
チャンチャン

「で？ お前のせいで鬼瀬があんな事になってる事についてはどうすんの？」

「は？」

本の件から話は戻り、本人をスルーしての三人の会話がまずかったのか、今にも爆発しそうな表情で、俺を睨み付けてくる鬼瀬さん。顔芸大会があつたら文句なしで世界一なんだろうなあ……と不謹慎な事を思ってたのは秘密だ。

「やっぱり俺が原因なの？」

「「うん、100%！」」

Oh……二人同時に言われちまった。

でも話を逸らしたのは君達なんだから君等にも原因があるんじゃない？ とは思ったものの黒幕は俺だから敢えて言わない。

フム、かくなる上は“必殺技”を使うかね。

あのチビ子ちゃん（心の中で勝手に付けた鬼瀬さんのあだ名）が初実践するのはちよいと気に入らないがこれもまた試練だと思えば。

「だったらしよーがない。それならあの怒りんぼうは俺が沈静させてくるよ〜っ」と

「え？」

「どっやって？」

二人してあの切れたナイフをどうやって鎮静化させるの？ と言わんばかりの顔をしてこちらを見て来る。そんな顔しなくても直ぐに分かるし、たいした事はしないつもりなんだが。

「じゃあ行つてくらあ」

ごちゃごちゃと考えるも仕方が無いので後ろに居る善吉君と不知火さんが見守る中、俺は鬼瀬さんに近付き。

「お待たせしました鬼瀬さん」

「フー！ フーツー！」

「Ah……」

なるべくラフっぽく話掛けてみたら、ブチ切れ状態の猫みたいな反応と今にも飛び掛かりそうな目で睨んでくる鬼瀬さん。

ちよっぴり怖かったけど、此処で引く訳にはいかない、後ろで見守りながら固唾を飲んでる二人の為に、何より面倒な事態を避ける為に。

て事で、無理矢理感が否め無いが俺流にアレンジしたやり方で行くぜ。

「まあ……そんなに怒らないで、楽しくやりましょうや」

なるべく当たり障りのなさ気な口調のつもりだったのだが、それが逆に鬼瀬さんの神経を逆なでしてしまった。

「クヒヒ……貴方には情状酌量の予知はもはやありません。だから、此処で死ねやああ……！」

やはり馴れ馴れしかったのが原因なのか、明らかに鬼瀬さんのキヤラじゃ無いと思われる口調で手錠メリケン形態へと移行しそのまま俺の顔面向かって拳を走らせる……が。

「危ないよ、っと」

「え!？」

自分の顔面に飛んで来た拳を掌で受ける。

その際、鬼瀬さんと後ろに居た善吉君が「えっ!？」って顔をしてたが、意味が分からん。

だってあんな単調な攻撃位なら避けられるし、失礼だとは思うがその程度の攻撃如きではまず間違い無く死ねない。

まあ、それは置いといて今度は俺の番だ。

……………この子にこの手が通用するか分からんが。

「鬼瀬さん…………」

「ッ!？」

まずは鬼瀬さんの両肩を掴んで俺の方へ向ける。途中、鬼瀬さんがビクッと反応したが無視だ無視。

「フッ……」

軽く微笑みながら、鬼瀬さんの顎を優しく持ち上げて俺に視線を合わせる。

「そんなに怒ると……可愛い顔が台なしだよ？」

うわぁ……。いくらアレでも言っちゃまずかったかな？ 寒い台詞に加えてこんなお子様に言ってしまうなんて。あゝ蕁麻疹が出そう……。

「「「へ！？」」」

自分のやってる行動に内心ゾツとしている中、予想通り面白い反応を示しだす鬼瀬さん。

後ろの二人までが一緒の反応なのが意味分らんがね。

「フフフ……ソッチの顔の方が俺は好きだよ？」

イーッ！ 痒い！ 背中がこそばゆい！！ だけどそれを顔に出したら一発でバレてまう。

だから、なるべく怪しそうな笑みを崩さずにそのまま自身の顔を鬼瀬さんの顔へ近づける。

「ククク……」

「あ……え……？」

「「ゴクリ！」」

よしよし、鬼瀬さんの思考が段々フリーズしてきてるな。

後ろの二人は怖い物見たさ見たいな感じで俺達……いや俺の次なる行動を見守る中、俺は更に鬼瀬さんに顔を近付ける

が。

「嫌あああ！……！」

「バンビッ……！」

おデコがくつつくかくつつか無いかの刹那、右頬に暫く無かった重い衝撃が走る。

ええ、皆さんの予想通りシバかれましたよ？ それも手錠メリケン形態の状態で思い切り右頬を殴られましたよ……と。

「ぐ、グホッ……！ イッツツ！」

「ハアハア、ハア！」

「……」

廊下の壁に頭から激突して悶絶する俺に、その近くで顔を真っ赤にしながら息を切らす鬼瀬さん。その流れに着いて行けて無い善吉君と不知火さん。  
一分位沈黙した空気が流れたが、いち早く回復したのは善吉君と鬼瀬さんだった。

「あ、あな、あなななっ！！ 貴方は！?!?!」

「おま、おままつ！ お前!?!」

口が回らないのか、壊れたCD再びである。

「二人共落ち着けよ、何言っつかわかんねーぞ？」

このままバグった状態もそれはそれで面白いのだが、何時まで経っても話が進みそうにないので取り敢えず二人を落ち着かせる。  
だが二人は落ち着く処か、更にヒートアップしていく。



「貴方、今私に何をしようと思いました!？」

「何って……事態の鎮静化？」

本を参考にしてでの行動だけど、寧ろそれ以外に一体何があるんだ？

「余計に悪化したじゃねーか!？」

「落ち着けよ善吉君、君は中学生か？」

というより、君に関しては不知火さんと一緒に事態の流れを見ていたよな？

「あひゃひゃひゃ! さっすが霧生クン!! 誰も予想しない事を平然とやってのけるその根性に憧れるう〜!!」

「おう! サンキュー!!」

不知火さんだけは褒めてくれたぜ。  
途中で「写メ撮れば良かった……」って聞こえたのはきつと気のせいじゃ。

「やっぱり貴方を野放しにしとくのは危険です！ だから此処で殺  
……肅正します！ ついでに不知火さんも！！」

健闘虚しく、鎮静化しなかった鬼瀬さんが“殺”と言いかげながら、  
やはりワンパターンな攻撃で俺に突っ込んで来る。

やはりあの程度で動揺するたあ、これだから餓鬼は扱いづらいんだ。  
だがまあ……。

「そうは行くか！！ 不知火さん！」

「オツケー！」

目で不知火さんに合図を送りそれに反応した不知火さん。

やはりこの子とは、何か通じるもんがあると思いつつ、二人して  
事態を飲み込めていない生贄の背中を引つつかみ。

「善吉君（人吉）バリアー！」

イケニエ  
善吉君の背中を二人で押して、鬼瀬さんに特効させる。

「うわっ！？」

「キヤツ!？」

押された善吉は鬼瀬さんに向かって覆いかぶさる様にして倒れ混む。どうやら上手く行ったみたいだ。

「成功!」

「フハハハ! 引いて駄目なら押してみるってか!？」

多分今の俺は殴りなくなる様な顔をしながらの高笑いからの。

「ヘーイ!!」

不知火さんとのハイタッチ。  
いやあ、悪戯が成功して嬉しい気持ちってのが久しぶりに感じられましたよ。

「フフン、さっきの件については餓鬼に通用するとは端から思っ  
は無かったからね! だから遭えて正攻法で行かせて貰ったぜ!」

「これが正攻法なのかよ!？」

「しかも餓鬼って、私の事ですか!？」

さあねー君以外に誰がいるんだろうね？ 自分で考えて欲しいもんさ。

「それは自分で考える事だね。それに余りはしゃいだと何時か痛い目に逢うって事を覚えときな鬼瀬!」

おう、俺が思ってた事を不知火さんが代弁してくれたぜ、しかも意味ありげな事を言ってるし。

「はい？ それはどどういう意味 r y」

「「さらばっ!」「」

鬼瀬さんの質問に答える事無く二人並んでその場から逃走。

その場に取り残した二人から「待て!」だの「何時か殺す!」とかかって声が聞こえたが、殺<sup>ヤ</sup>れるもんなら殺ってみるよと言ってやりた<sup>い</sup>。

あの二人を放置してでの逃走から暫く経つ。

不知火さんとは直ぐ後に別れ、一人生徒会室にてお仕事を黙々と熟したのが好を奏したのか、自身のやる仕事が思いの外早めに終わったので帰りの支度中。

あ？ 善吉君達はつて？ …………… さあ？ 何とかなんじゃね？

俺としてはそんな事よりさっさとオサラバしたいしい。

「さて、と。掃除も完了したし鍵の場所もメモつといた……後は帰るだけってね」

帰る前の最終確認を済ませいざサラバ！ つて時にポケットに入れてた携帯が鳴る。

着信相手は不知火さんで、何だ？ と思いながらも出る。

「もし〜？」

『やほ〜霧生くん！』

先程ぶりだが、何時ものテンションで話すのが何故か印象的だ。

「お〜 さっきぶりだね〜 どしたの？」

『やだなあ、忘れたの？ 今日はいこれからお食事に行く約束だったじゃ〜ん？』

「ああ……」

あり？ 行くのか？ 逃走ついでに今日のは中止かと思ってたんだけど。

「たった今やる事終わったから、行くのは構わないんだけど善吉君いないのにいいのか？」

そもそも不知火さんは善吉君とツルむのが好きな訳で、俺とだけで何かをする事がまず無い。

更に言ってしまうば、不知火さんとまともな話題で会話をした事すら皆無なのだ。

そんな感じで受話器の音量を調節をしつつ不知火さんの言葉を待っていると、意外な返事が返ってくる。

『ん〜？ アタシは別に人吉が居なくても大丈夫だよ〜？ 霧生君も人吉と同じ位トモダチやってるつもりだし〜！』

あらあらまあまあ、嬉しい事言ってくれるじゃないの？ それなら友達<sup>ダチ</sup>としては喜んで付き合わせて頂きますか。

「よっしゃ！ なら喜んで行かせて頂きますぜ、お嬢さん？ で、今何処にいんの？ 迎えに行くよ」

友達と真正面から言われたのに、少し嬉しく思いながら不知火さんの現在地を聞くが。

『いいよ、今近くだからアタシがソッチに行くよ〜それじゃあ！』

そう言っただけで電話を切る。別にコッチから行っても良いんだがね〜と思っていると、1分と掛からずに生徒会室に入って来た不知火さん。ホントに近くだったんだ。

「お待たせっ！ じゃあ行こっ！」

何時も通りのテンションで俺の手をグイグイと引っ張って急かす。

「お、おう。そんなに急がなくても行くから待てっの」

さっきもあんだだけ食っというてまだ腹が減ってるのかよ、と内心ツッコミを入れながらも鞆を取り出してめだか君が座る机の引き出しに鍵をしまう。

そして、やり残した事が無いかと最後の確認を終え「いざ夕飯！！」って時だった。

「あれ？ きりゆ　じゃなかった……零。もう帰るの？」

俺の苗字から名前に言い直しながら入って来たのは喜界島さん基、もがなちゃんだった。

俺の名前を言うのは片言では無くなったのだが、相変わらず苗字で呼ばうとする時があったりする。

「おーす、もがなちゃん。そうだよ、3日分の仕事は片付けたしこれから不知火さんとメシ喰って帰るんだ」

「そう……」

「……」

あら？　余り高いとは言えない、もがなちゃんのテンションが更に下がってる気がするんだが、何でだ？　……ああ、横でニヤニヤしてる不知火さんが居るからか。

確かこの子達の初絡みも余り良いとは言え無かったんだっけ？　フム、それなら……。

「もがなちゃん今日はもう帰るのか？」



「え？ う、うん。そうだけど……」

何時もの通りワンテンポを間を置いてから返事を返すもがなちゃん。あれ？ 不知火さんの表情から段々と笑みが消えて来たぞ？ まあいいか。

「ふうん？ じゃあこれから暇だったりする？」

「？ 特に何も無いけど」

「……」

おしおし、今何も無いって言ったな？ フフン、ならやる事は一つだ。

「よし、ならこれからデートしよーぜ？」

暇だつて言ってから誘われると、大半の人間はノつてくれる心理を突いてみました。

は？ デートって言葉がおかしいだど？ 別に誘い文句なんてなんだつていいだろ。

「「……はい？」」

ん？ 何故二人してそんな反応なんだ？ デートの意味位知ってん  
だろうに。

「いやだからデートよデート。これから三人で飯食いにいくって？  
って意味合いでの」

「え、ええええ！?!?!」

「うっさ！?!」

突然叫び出すもがなちゃん。

余りの声のデカさに自身の耳を塞ぐ、隣に居た不知火さんも耳を塞  
いでる。

あゝしまった、この子ったら純情ちゃんだっただっけか。  
でもまさかこの程度で取り乱すとはね。

「で、で、で、デートって……」

オイオイ、爆発すんじゃないかねーかって位に顔が真っ赤だけど大丈夫か  
？

「霧生君ってたまに予想外な行動なり言動を発するよね？」

「ハツハツハー！ そんなに褒めてくれるなよ？ いくら不知火さんでも照れちゃうぜー！」

不知火さんに褒められてちょっと照れる俺。

声のトーンが低いのがちよいと気にはなるが。

まあ、こういう反応をする子には更に追撃を掛けてみたくなるんだよね。て事なので……。

「ほほう？ 顔を真っ赤にしちゃって、照れてんのかな？ 可愛いなもっつ！」

てな事を口走りながらその場のテンションで抱き着いてみた。

「はえ！？」

「あっ！？」

おお？ 色々と試しては来たケド、もがなちゃんって意外と抱き心地は上位クラスだな……。

てか不知火さんの「あっ！？」って何だよ、リアクションが違くないか？ そこは普通に「おおくだいたくん！」な感じじゃ無いんかい。

「き……」

ん？ き？ …… って気功波か？ いや違うな、氣○團か？ それとも……。

「キヤアアア！……！」

「ブヘツ！？」

心の中でもがなちゃん何が言いたかったのかを考察してみたのだが、勿論気功波な訳無く、普通に悲鳴をあげられてからの左頬への手首のスナップが効いたビンタだった。

しかも結構力強いビンタだったのか自身の身体が軽く吹っ飛び、その先に都合良くあつた机の、しかも角っこに額を強打した。

「ハアハアツ……！」

「あ、あががが……！ 今の不意打ちはかなりキたぜ……」

ギャグ漫画みたいに額から血がピューピューと吹き出し、とお約束みたいな出で立ちになりながらも立ち上がる。

ただ、もがなちゃんがまさかの攻撃とは…… 失敗したぜ。

「き、霧生君って。噂に恥じないキャラ男っぷりだね……」

そんな事態を、黙って眺めていた不知火さんからの更なる駄目出し。まあ周りから“キャラ男”とか“ヤリオン野郎”とかって言われまくってるから自覚はあるんだよな自覚は。

でも決して俺は“ヤリオン野郎”じゃ無し、そんなアハハんな事をする相手がまずいない。

あつと……。話がまた逸れた。

「いやほらさ、あそこまですれば気絶するかなあ？ って思ってたからのお茶目な悪戯のつもりだったんだが」

「悪戯って……アレが？」

「うん、仮にだけど不知火さんがもがなちゃん立場だったら涼しい顔して『何してんのさ？』って言うでしょ？」

寧ろその後『アンタとの付き合い方を改める必要があるかもね』ってニヤニヤしながら言いそうだ。

「……まあ、そうかも。でも全部の女がそんな反応す

ると思わない方が良いんじゃない？」

うん、それは鬼瀬さんの時に思い知ったよ。

アレだな、今度からは慎重にからかう事にしますか。

「まあ、その事は置いて、早く喜界島を何とかしないと……ピ  
ンタのモーションのままズット固まってるよ？」

「だな……。ホレッ！ もがなちゃん、起きろ！ ったく、そん  
な格好でフリーズするなんて器用な子だよ」

呆れた顔をしている不知火さんを横に置きつつ、ペチペチと頬を軽  
く叩き、向こうの世界に旅立ったもがなちゃんをこちらの世界へ強  
制送還させる。

本当につくづく反応が面白い子だ、何をしても予想以上の反応が返  
って来る辺りまずハズレが無い。

あ、ちなみに傷なら普通に完治させました、誰も突っ込まない様に  
徐々に……さりげなく、ね。

続く

オマケ……か？

向こうの世界に居た喜界島を呼び戻した主人公は、紆余曲折した結果三人で何処かに行く事になり、学校を出て三人でテクテクと歩いていた。

その途中、手錠で繋がれた三人組が金属バットと木製バットを持った二人組の不良に襲われてる……てな構図を見てしまったのだが、敢えて何も見なかった事にしたのは別の話だったりする。

零

「てな訳で何食いたいんだっけ？」

不知火

「アタシ的にはお好み焼きをリスペクトかな〜！」

零

「フムフム、まあ俺は何だって良いから別に構わんが……もがなちやんは？」

喜界島

「アタシは別に……何でもいい」

零

「そ、そう？　じゃあ今日はお好み焼きね、うん行きますか」

不知火

「やた〜！」

何時も以上にテンションが低く、更に氷点下な視線で主人公を見据えている喜界島に引き攣った表情で対応する主人公。

こうなった原因が主に自分だと自覚があるので気を使ってるのだ。まあ、だからと言ってからかうのを止めるか……と言われれば「止め無い！」と爽やかに言うちよっぴりSな主人公だったりするのだが。

不知火

「しかし、喜界島もあんな程度で一々反応するなんてねえ？」

喜界島

「う、なによ……」

不知火がする何時もの企み顔。

それに対してムツとした表情で言い返す喜界島。元凶なだけに、下手な事が出来ないで見守る主人公。

不知火

「霧生君のアレは只の挨拶みたいなもんだから、余り本気にしない方が良くと思う訳よ、アタシ的には〜」



喜界島

「なっ!?! 別に本気にしてない!?!」

零

「(別に挨拶がわりのつもり無いのだけどね……)」

ヤッパリ周りからもチャラ男なキャラ付けをされているのか……と  
今までの行動を少し反省する。

不知火

「どーだかね、さっきやられてた時は満更でもなさそうな気がする  
するんだけどね〜!」

喜界島

「ち、違っ!?!」

不知火

「ねー? 霧生君はどう思う?」

零

「いや別に? もがなちゃんが何を思ってくれたのかは知らないケ  
ド、俺としては一々初な反応を見せてくれるもがなちゃんが面白く  
てしょーがないし、何より好きだね、可愛いじゃん?」

ハツハツハ！ と豪快に笑い飛ばしながら何やらまた勘違いしそうな事を口走る主人公。

喜界島・不知火

「……」

が、この二人も馬鹿では無い、今まで主人公の“チャラ男”な行動を見てきた訳なので半ばこれも半無自覚な言動なのだろうと考え、呆れた様な目で主人公を見詰める。

零

「あん？ 二人して何だよその目は？ 俺なんか変な事言ったか？」

喜界島

「いや……」

不知火

「べつについ？」

喜界島・不知火

（（やっぱりチャラ男なのかもしれない））

零

「??？」

二人が内心そんな事を考えているのを露知らず、主人公は阿保な顔して考える。

が、根底は馬鹿な主人公なので直ぐさま考えるのを止め急に微笑んだと思いきや二人の肩を掴んで軽く抱き寄せる感じにして歩き出す。不知火の場合は軽く抱っこに近いが……。

零

「まつ！ 何かよくわかんねーけど、これから仲良くやろうぜ？ なっ？」

喜界島

「ちよっ！ 止めてよ！？ まだ学校のグラウンドが目の前にあるし皆見てるから！！」

不知火

「これはいくらアタシでも流石に恥ずかしいかなっつと……」

二人が言う通り、此処はまだ学校を出たばかりの通りで、目の前にはグラウンドがあり、更に言えば下校中の生徒がチラホラ……では無くてかなり居た。

そんな人通りが多い所で異性に抱き寄せられてる、とまあそんな恥ずかしい事をされてる二人からしたらたまったもんじゃ無い。

例え目の前の男が別に好きでも何でも無い男だとしても、羞恥心が込み上げて来るもんだ。だが、二年半という歳月で大分毒されていた主人公がそんな気持ち解る訳も無く、寧ろ「しめた！」と言った表情をしながらの一言が。

零

「ん〜？ なら俺達の仲の良さをこのチラ見している人達に見せ付けながら行こうじゃ無いか！ ハッハッハ〜！」

これが「好きになった子をイジめる小学生の気持ちか」と新たな知識を得た主人公だった。

まあ、主人公の場合は“Love”と言うよりは“like”と言った所だろうが……本当の所はこの主人公にしか分からない。

只一つハッキリしている事は、これをキツカケに元から「霧生零はチャラ男っぽい」と噂になっていたのが「霧生零は紛れも無いチャラ男」とランクアップしたらしい。

ちなみにこの出来事から次の日、生徒会庶務と生徒会長に割と全力で殴られたのは言うまでも無いだろう。

しかも生徒会長に至っては、その現場を見た生徒会のメンバーいわく「会長の髪の色が若干白っぽかった」との事だった。

終われ

19：「フハハハ！　いくら雑魚のパワーを吸収したところで、このオレを超越するフラグについては、主人公のキャラ的に立ってる様に見せ掛けて実は立ってない……………　かもしれせん。」

皆様から要望があったらもしかしたら路線が変わるかもしれせんが。

こんな作者ですいません。

20:「見える いややっぱり見えないや」(前書き)

とりあえずスイマセン。暫く仕事が忙しくて更新が出来ませんでした。

一応前々からこの回は出来てたのですが、「これで大丈夫なのか?」的な不安感があったので投稿を渋ってましたが、一々渋ったところで何が変わる訳じゃねえ! という八割開き直りな感じで更新させて頂きました。

最低値を常に更新しているクオリティーですので、ダイヤモンドを彷彿とさせる精神力を持つ方々は読んで頂けたらと思います。

20：「見える いややっぱり見えないや」

目の前には大量の壺。

その壺を持っていた日本刀で叩き割ると、紫色の浮遊体……俗に言えは火の玉が出てくる。

その火の玉は死んだ者の魂、壺を割る事で魂が解放されて成仏する。その為に壺を割る、割る、割る！一周回ってまた割りまくる！！それを繰り返していると、その邪魔をしてやるとばかりに一体の生物が立ちはだかった。

その生物、何処から見ても人間では無い。

裕に2メートルを越える巨体に猛獣のような牙に女性のウエスト並にある巨腕、そしてその太い両腕で持つ身の丈程の巨大な斧。

体力の少ない今の状態に加えて並の攻撃では絶対に倒せ無い、無理をして倒そうとせずに壺を割ろうと思えば右をした瞬間……。

『ブルオオ！！』

両腕に持っていた斧を何の躊躇いも無く力一杯振り下ろした……そして。

《終》

「ジーザス！ また死んだ！？」

画面に“終”の文字と共にゲームオーバー音が鳴り響く。不甲斐無い俺のコントローラ捌きのお陰でこれで通算28回主人公を殺してしまった。

「クッソ〜！ ゲーム本編は全然簡単だったのに、クリア特典のミニゲームのがクソ難しいっておかしいだろ……」

あんまりにも悔しいのでタバコを吹かしながら独り愚痴る。

取り敢えず今の状況を説明するとするなら、一昨日三人で普通に飯を食いに行つて、普通に家に帰り、普通に風呂に入つて普通に少し早い睡眠に入った……のはいいのだが、夜の9時から寝たのがいけなかつたのか、深夜2時頃に目が覚めてしまった。しかも、そんな中途半端な時間に目が覚めてしまったのにも関わらず二度寝が発動出来ない。

要は目が完全に覚めてしまったのだ。

なので、コリヤいかんと思つた俺は眠気を誘う為にゲームを開始したのだが、思惑とは裏腹に中々にヒートしてしまい結局明け方までピコピコとゲームをプレイして今に至る訳だ。

「5時半……二度寝したら確実に昼まで寝ちまうな」

テレビの横に置いてある電波時計を見ながらゲームをテレビの荷台の中に収納する。別にイザとなりやあ学校をサボるのは吝かじゃ無いのだが、その後がメンドイのだ。

主に生徒会長さんのビンタとか生徒会長さんのコブラツイストとか生徒会長さんのムーンサルト・ドロップとか。



やっべ、昨日の事を思い出したのか寒気がしてきやがった。

寒気の原因は言わずもながら、あの生徒会長様だ。

てのも、一昨日三人で飯を食に行った次の日にはか弁を食した気分登校したのだが、教室に入るや否や善吉君が挨拶代わりと言わんばかりに、俺の顔面へと拳を走らせた。

挨拶代わりのパンチはどうかとは思ったが、そこまで怒らせた俺に原因があるのだから善吉君には文句は無かったのだが問題はその後だ。その後、気ダルい授業にちよいと真面目に受け、放課後になって生徒会室に向かって扉を開けた瞬間、仁王立ち状態のめだか君から脳が揺れる位強めの身に覚えの無いビンタをノーモーション喰らったと思えば、そのままマウントを取られボッコボコにタコ殴りにされた。

しかもだ、その時のめだか君の出で立ちが球磨川君を半殺しにした姿だったのにはマジで俺が何をしたんだ！？と変形した顔面の状態で割と真面目に聞いて程だ。

だが、当の本人は何も答えずに「次やったら生爪を……」とブツブツと連呼していた。

そんな感じで一人別の世界に旅立っているめだか君に聞くのは不可能だったので、傍にいた善吉君に半泣きで原因を聞いたところ「テーマで考える」と名刀でバツサリと竹を切ったように突き放されたので、結局原因はわからず仕舞いだった。

「あゝあ、仮にも女にタコ殴りって……なっさけね」

昨日の全盛期のマイク・タ○ソン真つ青な一方的なリアルファイトのことを思い出すたんびにため息が出る。

一応半不死身ボディとか唄ってはいるが、実を言うと痛みとか軽い病気とかには普通に罹るのだ、死ねないが。

それだけ聞けば「ズルくね？」とか思う奴も居るだろうが、痛いだけで死ねないのは結構キツイもんがある。

例を一つ挙げるなら、240？ものスピードを出した新幹線に正面から突っ込んだとしよう、普通なら衝突ないし下敷きになった瞬間に身体中がグツチャグチャになる筈なんだが、俺の場合はそうはいかない。

俺の場合はそのまま身体が吹っ飛んでも下敷きにされても『ハイ残念でした死ねません』なのだ。

これだけ聞けば「やっぱズルくね？」と思われる方々がいるのだろうが、その次がミソなのだ。

確かに吹っ飛ばされたその直ぐ後は特に痛みも何も無いんだが、半日程時間が経つと寝たきり状態を余儀なくされる程の痛みに襲われるのだ……全身に。

2・3年前までは、そんな事は関係ねえとばかりに無茶をしまくっていたのだが、最近になって“能力を自動使用しても能力自身がパワーアップする”という、俺にとって何の得にもなりやしねえ制約がある事に気が付いた為に下手なことが出来無くなった。

下手にでしゃばって能力がパワーアップすれば、それだけで元の世界に帰る確率がぐつと下がる。

それだけは勘弁願いたいので今は死亡フラグ？ てのが自分のトコにくるのを虎視眈々と狙っている……………未だに無いが。

「フウ」 マイルド……………」

解りにくい説明で申し訳無いが一言で言えば“僕は死にはしましえくん！”みたいな？

「で？ 二度寝をした為に遅刻しちゃったと？」

「……………うん」

「知らねえぞ？ めだかちゃんにバレても……………多分もうバレてるだろうが」

「もう半ば諦めてるさ……………。どーせ今日も延髓蹴りからのアルゼンチンバックブリーカーの刑になるよ……………ハハ」

昼休みの食堂の中にての善吉君と不知火さんとのやり取り。

不知火さんの言った通り、結局アレから睡魔に襲われて二度寝を決め込んでしまったのは良いが、起きたのが調度昼前位だったのだ。最初はこのままサボリに入っちまうか？ と悪魔の囁きに屈しそうになったのだが後の事を考えると嫌なので遅すぎる登校を開始、んで学校に着いた時には時計の短い針と長い針がキツカリ十二を指していた。

そして今に至るとい……………。

「でもさあ？ 昨日アレだけポッコボコにされても次の日ちゃんと登校して来た俺って寧ろ逆に褒められても良いんじゃないの？ ……

…遅刻だったけどさあ？」

きつねうどんを啜りながらこの場に居ないめだか君の昨日の奇行について愚痴る。

「まあ……」

「アレはね……」

あの殺人現場に近い絵を真近で見せられた二人は、昨日の事を思い出したのか引き攣った笑みを浮かべていた。

何度も言うが昨日のアレは一般人が見たら発狂するんじゃないかと思う程凄まじい絵だった。

あの“面白い事は何かに残す”と言うのが信条の不知火さんが何もなかった位だぜ？ 普通の人間だったらまず死んでるよ。

「ハア〜ア、何かこう、デカイ事件でも起こらないかなあ？」

というより、めだか君に誰か何か仕掛けて欲しいと思う昼休みだった。

昼休みが終わり、遅刻した事を担任に軽く説教された俺はまたもや普通に授業を受け、放課後になった。

そして生徒会の仕事をイザやりますか……と重い足取りで生徒会室に向かい、案の定めだか君に怒られた俺は、投書に投稿されていた仕事の割り振り通りの仕事をやる……筈だったのだが。

「……………」

「……………」

最悪だ……………。

てのも、目安箱の中に投書されていた依頼が4件でそれぞれ人選を割り振った結果俺が余ったのだが、何をどうという経緯でこうなったかは知らないが俺とめだか君が一緒に仕事をやる嵌めになってしまったのだ。

しかも、散々ネチネチと説教を受けた後でだ。

まともな神経をしてる奴なら、さっきまで怒られていた相手と一緒に空間に居ること自体嫌だったのに、これじゃあ何かの罰ゲームだ。一応、人選振り分けについて物申したのだが見事に却下されたのは記憶に新しい。

あゝあ、出来ることならもがなちゃん、最悪善吉君と一緒にやりたかったなあ……………。

めだか君つたら、そんな感じの事を提案したら物凄い嫌な顔しながら断られたし。

「……………」

「……………ハア〜」

てな訳で、何かのコスプレをしているめだか君の後ろをため息混じりで着いて行くのだが、正直言ってこの子とだけで行動した事が一切無い。

何時もなら横に善吉君なり誰かなりが居るのだが、今回は皆出払っ  
といて俺とこの子の二人だけだ。

更に言えばめだか君との共通の話題なんて、せいぜい生徒会の仕事  
についてだとかしら無い。

まあ、俺から好き好んで話掛ける人物では無い事は確かだが。

しかし、こういう時に限って廊下に人っ子一人居ないってのは、も  
はや悪意を感じさせられるな。

「……………」

「……………」

くっ、依頼のある場所まではまだあるし……………。

あゝ〜！！ 誰でも良いからこの澱みきった空気を変えてくれええ  
えー！！ ホントに誰でも良いから、それこそ悪魔でもっ……………！！

とそんな事を念じていたのが幸をそうしたのか、その時だった。

「霧生ク〜ン！！ 念じられたから来たよ〜！」

株式の投資に失敗して最後の博打に挑むオツサンみたいに祈っていたら、不知火さんがペロキャンをくわえながら堂々とご登場した。

「し、不知火さん……」

「ん？ どうしたの霧生くん？ 泣きそうな顔して……。あつ、お嬢様ご無沙汰してまーす！」

「……。不知火か、何の用だ？」

ローテンションのまま不知火さんに話し掛けるめだか君。

そっぴやこの二人折り合いが悪いんだっただっけか？ 会話から何と無くだがソレを感じさせる。

まあ、今はどうでもいい。

「不知火さん！」

「え？ どうしたの霧生く……ん！？」

「！？」

不知火さんに素早く近付いた俺は直ぐさま抱き着いた。

若干上擦った声を出した不知火さんを無視しながら割とマジで抱き

着いた。

まさか、ホントに願いが叶うなんて……、念じて良かった〜！

「ううう……、来てくれてありがとう不知火さん」

「霧生君、一体全体何が？ ……あゝ成る程ね〜」

「……」

俺に抱き上げられた状態で、めだか君に視線を移す不知火さん。

そうだ、君の思ってた通りさ、この重々しい空気を変えてくれた君には感謝しきれない思いだぜ。

「いやあ！ 不知火さんが来てくれたお陰で、この重過ぎる空気が緩和されたぜ！ ありがたやありがたや！！」

それから何やらめだか君と二人して話した結果、不知火さんも一緒に着いて来てくれる事になった。

ホントに感謝だ。

「そう？ それならお礼は弾んでくれるんだよね？」



「フツ……当然。何でも好きなもんを食わせてやるぜ!!」

「さっすが霧生くん！ わかってるう！」

「ナツハツハツハ〜！ 任せれ任せれ！」

めだか君がローテンションのまま前を歩いているその後ろで、先程の重苦しい空気が嘘みたいになテンションで不知火さんとの会話を繰り広げる俺。

しつこいようだけどマジで助かったわぁ。

………めだか君の視線が怖いのが印象的だったケド。

「という訳で、俺的には○○って場所にあるラーメン屋が中々にツボを押えてると思う訳よ」

「○○にラーメン屋なんかあったのか？ 聞いた事も見た事も無いぞ」

「ええ、知らないのかよ？ あ、あ、自活してるってこないだ聞いて少しは見直したのに所詮は喋り方のおかしな金持ちっ娘か……当然不知火さんは分かるよな？」

「分かる分かる！ あそこのラーメン屋は美味しいよね！」

「さっすが不知火さん！ よし、それじゃあ今日辺り食いに行くか？ 話してたら久々に食いたくなっただしな！」

「ホント！？ やった〜！！」

「喋り方がおかしいだと？ ……………私の喋り方はおかしいのか？」

ちゅー訳で、途中でバツタリ再開した鬼瀬さんをパーティーに加え、4人で音楽室に向かっている。

会った瞬間に顔面パンチは痛かったが、先日の出来事を考えた結果、甘んじて受ける事にしたのだが最近殴られる事が多いな……決してマズじゃ無いのに。

「駄目です！ 買い食いは禁止です！！」

帰りに飯を食いに行く話しをしていると、お堅い鬼瀬さんが早速食いついて来るので、かつたるいのを表に出さない様にして鬼瀬さんの方へ向く。

「なぐんだ、羨ましいの？　なら鬼瀬さんも来るか？」

「行く訳無いでしょうが！？　とにかく買い食いは駄目です!!」

そして毎度の事ながら、俺の足を踏み付けるんじゃないかと思う勢いで接近してくる鬼瀬さんに対して、いい加減このやり取りも飽きたんですが……と思いつつ返す。

「あゝハイハイ、分かったから一々近付くなよ、暑苦しいな……」  
「不知火さん分かってるよな？」

（オツケー！　後で電話するね？）

「私の喋り方はおかしいのか……？」

威嚇している犬を彷彿とさせる鬼瀬さんの隙を突いて、横にいる不知火さんに目で合図を送った結果無事に伝わった。

うゝむ、目だけで会話が成立するとは……最初の方と比べると偉い違いだな。

でまあ、先程から会話に参加せず一人ブツブツと独り言を言ってるめだか君を先頭にしながら3人でペチャクチャと会話を繰り返す間に無事第二音楽室に到着した。

到着したのだが……。

「お、おお……ええつとドッキリ……じゃ無いよな？」

出来る限りのシャレだったが、誰も突っ込んでくれなかった。

それも仕方無い事だ、だって音楽室の中は目茶苦茶になっていた。

しかも殆どが吹奏楽部員の半屍の山で、その真ん中にうちの学校の制服を着た見た目小学生の少年がイッチまってる目をしながら突っ立ってた。

永遠にこの時間が続くかと思ってたら、少年が鬼瀬さんの存在に気付いて動く。

「おつ、鬼瀬ちゃんじゃん！ タオル持ってきてくれたんだ、サンキュー」

「あ、は、はいっ！」

何の為に鬼瀬さんがタオル一枚だけを持っていたのか、そしてこの少年正体が分かった。

この餓鬼……風紀委員長だ、確か名前は……雲仙君だったか。

「まったく、オレは本当に駄目だなー、返り血まみれなんて何時ものことなのに何時もタオル忘れちゃうんだよな」

タオルで顔を拭きながら、この地獄絵図に似合わない口調で喋る雲仙君（仮）。

てかこの吹奏楽部員さん達は大丈夫なのか？ これって全員集中治療室行きだよな？ うめき声とか普通に聞こえんぜ？

「で、なに、黒神めだか？ 何でテメーが居るわけ？」

そんな俺の心配を余所にめだか君との会話モードに入る雲仙君。めだか君の言った事により、無事に雲仙君の後ろについていた“仮”の文字が外れた。

あつ、ちなみに俺と不知火さんは半分空気と化しています、ハイ。だから今の内にこの地獄絵図の正体を探りたいと思いますハイ。

「この光景の事情はおおよそ察しがつくが、しかしどう見てもやり過ぎだ」

「ケケケ！ オレもテメーのそのふざけた格好見りゃー察しがつくぜえ？ どーせ平和的解決とやらを目論んでたんだろ？ 話せば事情があるとかそんなトコだろうが……」

何やら二人の考えについて話している横で調査を続ける。

フム、楽器は穴ぼこだらけ……ショットガンを使用……じゃあ無いな。

この日本にてショットガンなんて簡単にゃあ手に入るとは思えないし、仮にショットガンを使用したら穴ぼこだらけになるだけじゃあ済まない、確実にバラバラになる。

ん？ なんだこりゃ、スーパーボール？ ……いや違うな。

「甘えんだよ！！ 話してわかるか！ 事情なんか知るか！ ルールを破った奴が罰を受けるのは当たり前だろーが！！」

おう、雲仙君が何やら自身のポリシーを語り始めたぞ？ やべえな、今は空気と化してるケド、もし気が付いた時は真っ先に殺されるんじゃないだろうか？ 多分死なないケド。

「やり過ぎなけりゃあ正義じゃねえ！ それがオレのポリシーだ！！」

やり過ぎじゃ無い……。

へ〜？ 日本って案外スラムな所あんだな。

あ、地獄絵図の正体を探ってはみましたが、全然解りませんでした。スイマセン。

「不正を正す事が俺達の唯一の目的だ！ 暴力も武装もただの手段

に過ぎねえ！！ 勿論黒神！ テメーと敵対するつもりもテメー率  
いる生徒会執行部と敵対するつもりも」

ずんずんと近付きながら、自身の想いを語り散らす雲仙君。  
そして一息間を置いたと思いや……。

「あるっ  
」

語尾に楽しそうなもんと共に何かをめだか君に向かって繰り出した。

「!?!」

めだか君は避ける事も無く頭上からきた攻撃？ をモロに受ける。  
横で鬼瀬さんが、何が起きた？ って顔している。  
俺にも何かが飛んできた……って程度にしか分からない。  
つまりは何もワカンネーってことだ。

「……？ おかしいな、今のはただの挨拶代わりだぜ？ 見えねー  
までもよける位の手加減はしたつもりだけど？」

半笑いで何やら不思議がる雲仙君。

曰く、単なる挨拶なんだから避けるだる普通……らしい。  
レベル高いね……お兄さんには着いて行けませんぜよ。

そして攻撃された当の本人は。

「貴様から攻撃される理由がない、故に避ける理由も無い」

左手で自身の首を鳴らしながらさも普通の出来事のように答えるめだか君。

フッフウ〜！ カッチョ良い！！ 拍手を送りたいと思いたくなるねえ？ 右目付近に攻撃された跡が痛々しいケド。

と、場違いな事を思っていると雲仙君が再び動いた。

「へえ？ 面白れーこと言うじゃん？ もっぺん同じコト言えたらベタ褒めしてやんよ！！」

そう言いながら、右手を軽く振った瞬間アッパーカットをモ口に喰らったモーシヨンを取るめだか君。

う〜ん、じえんじえん見えませっ〜ん！ 無理、諦めます。

てか、一応この子も女の子なんだから顔とかの攻撃と違って、もうちよい自重した方が良くと思うんだよね。

あーでも、そこんところ辺はまだ子供だから分からな……いなんて幼稚な思考回路じゃ無いか。

「ケケッ  
」

そして買って貰ったおもちゃに満足した様な感じで、歩き出そうと



した雲仙君だったが。

「貴様から攻撃される理由が無い、故に避ける理由がない……言つてやったぞ、褒めるがよい」

先程とまんま同じ事を言い切つたためだか君。

「……素晴らしい」

これには流石の雲仙君も若干驚き気味だ。

うん、めだか君頑張つたよ！ 俺も心の中で称賛しよう。

「やつ、止めて下さい委員長！ 黒神さんの言う通りです！ 今生徒会と敵対する理由なんかないじゃないですか！！」

此処でこのやり取りにおいてきぼりを喰らっていた鬼瀬さんが動いた。度胸あるねえ、と関係無い事を思っていたことは秘密だ。

「理由ならあるじゃねーか鬼瀬ちゃん、いつの時代だって正義は聖者を弾圧するもんだろ？」

「ふざけないで下さい！ これ以上の暴力行為は一人の風紀委員と

して見逃せません!!」

アララ、鬼瀬さんも何かカツコイイぞ？ パンとか奢りたいとかつて一瞬思っただくらいに。

「ケケ！ この俺相手に随分と言ってくれるじゃん？ 好きだぜーオレ！ 鬼瀬ちゃんのそういうトコ！」

うんうん、少々煩いトコもあるが、そこんところは多分俺も同意するよ。

まあ、本人に言った所で殴り飛ばされると思うがね。

「だけどやっぱり理由はあんだよ、ここで会ったのは只の偶然だがここで会ったが百年目。正義と聖者は相容れない、そう思うワケよ？ でさあ黒神イ、テメーのスタイルって上から目線性善説とかっって言われてるらしいじゃん？」

静かに語り始める雲仙君に黙って聞く中、俺は一人考える。

上から目線性善説って……めだか君ってそんな事言われてたんだ……。  
まー確かに上から目線で何かを語る時はあるケド、あんまりその現場を見てねーから良く分からないわい。

「だったらオレのスタイルは見下し性悪説だ！ テメーが花を育て

る側ならオレは芽を摘む側なんだよ!!」

口を吊り上げながらおおおよそ餓鬼のする目じゃ無いような目で、自身のスタイルを語る雲仙君。

この学校の奴等ってやつは一癖……んにゃ五癖位ある人物ばかりだな。上手く無いけど。

「確かに私と貴様では主義が違うようだが、しかしそれは話し合いで解決出来るレベルであろう、敵対する理由は変わらないぞ」

それでも何とか平和的解決を提案するめだか君。ふん？ いいじゃん、健気じゃん？ カッコイイじゃん？ 本人には言わないけど。

「ケケケ、とことん上か目線だな黒神！ けどももうそんなレベルじゃねーと思っぜ？」

ため息をしながらやや諦めつつ表情で何やら伏線めいた事を言う雲仙君。まあ、その伏線は直ぐさま回収される訳だが。

「なんせオレは生徒会潰しの為の刺客を三名、既に放っちゃまってるんだからなあ!!」

「!?!」

「は？」

一瞬驚愕つばい表情をしたためだか君の後ろで、空気に溶け込んでいた俺もこればかりは声が出でしまった。だつて、そんな話し聞いてないんだもんだよ。

「テメーみたいな奴にはこういうのが効くんだろ？ オラ、もつぺん同じ事言ってみな！？ それができたら褒め殺しにしてやんよ！」

あつ、でも普通言つもんじゃねーか。

という訳で、雲仙君が戦争じゃい！！ みたいな事を宣言した訳です。

……流石に俺も動いた方が良いよな？ 一応あの子等とは親しくさせて貰ってる訳だし……俺も何だかんだであの子等に怪我して貰いたくない。となる……。

「む？」

「あ？」

めだか君の前に立つ。

不知火さんと鬼瀬さんが不思議そうに、雲仙君が超ガン飛ばして来ますが無視無視。

(助けに行くんだろ？ ほら早く行けっの)

聞かれるとマズイので、ヒソヒソ話しの様にめだか君の耳元で喋る。あら、この子結構睫毛長いのね。

(零……貴様)

関係無いことに意識を持ってかれていたら、何か知らんが意外そうな表情でこちら見てくるめだか君。なんだい、俺だってやる時はやるぜ？ 殆ど空振りになるがな。

(フフン、やっとキミを“補助”出来るって又とない機会だからな、早く行きなよ『助けられませんでした』なぐんてオチになる前に)

目で『俺は大丈夫だからさっさと助けに行ってくださいお頼み申します』という合図を全力で送り込む。



だが君の前へと移動し、そのまま盾になって見えない攻撃を受け切るスタンバイをする。何と無く心の中でカミングアウトするが、別に俺自身はめだか君みたいなエセ分身とかが出来る程ハイスペック体じゃ無い。

仮に俺がめだか君バリに動ける様になるとするならば、能力を使つた状態でめだか君の動きを観察して、自分の能力としてから始めてエセ分身とかが出来る様になれる訳だ。

「飛べない豚は只の豚」、「ポケットの無い猫型ロボットは只の古狸」等々「能力の無い俺は只の最低チャラ男野郎」という訳だ。

……だからと言って能力があるから最高の人間か？ と俺を知つてる奴等に聞いた所で、十人が十人「最低の馬鹿」と言つと思つけどな、ハハハハハハ！！ ……はあ。

「おぐつ!?!?」

「零!?!?」

心の中で誰に対して説明してる訳では無いのに、長々と考えながら見えない攻撃を無事に受けきつた。

受けきつた感想を言わせて貰うなら、めだか君だったらこんな攻撃<sup>もん</sup>を真正面から受けてた訳!?!? という位に痛い攻撃だった。

うん、まあだからと言って死ぬますか？ と聞かれたら「無理ッス、同じスピード、同じ威力で後八千発は欲しいくらいッス!?!?」とハッキリと宣言出来る。

宣言出来るから立ち止まってるんでさっさと行ってくれよめだか君、何を立ち止まってるんだキミは。

「めだかちゃんよ、俺の心配をしてくれるのは有り難い……ひつじよ〜に！！有り難いから早く三人の救出に行ってくれよ、この程度の攻撃ごときじゃ寝てて直る程度なんだからさあ！」

「へえ〜？」

俺の一言にピクリと反応する雲仙君だが、今はそれどころじゃ無い。

「だが！」

何を戸惑ってるのか、音楽室から出ようとしないうめだか君、俺ってそんなに信用無かったのか？しょうがねえ、余り言いたくはねえが……。

「だがもパプリカもねえよタコ助！早く行けてんだよ！！テメエ……これで助けられないなんてなったら明日からオメーの事を“淡水魚ちゃん”と呼ぶぞコラア！！」

自分は助けられない癖に身勝手な事をめだか君に向かって叫び散らす。

いきなり口調が悪くなったのが原因なのか、その場にいたメンバーが中々に驚いた表情で俺を見るが切羽詰まってる俺には関係ない。その後、ヤンキー口調で怒鳴ったのがアレだったのは知らないが、



直ぐさま黙って頷いき救出に向かったためだか君。  
フウ……手間の掛かる奴等だぜ。

「いつつ……」

呆気にとられてる残りの奴らを余所に攻撃された後に叫んで痛みだしたボディを摩りながら扉の前を陣取る。

でも、めだか君はただ俺を心配したから足を止めただけなんだよね、なんか悪い事したなあ……後で謝ってから何か奢ってやる。

めだか君が無事に救出作業に入って10分後の音楽室……。

先に結果を言うならば、めだか君は無事に三人を救出出来た……と  
いうのを雲仙君に掛かって来た電話の会話から聞いた。その際雲仙  
君は怒りのあまり高そうな携帯……たしか 아이폰 だったかを握  
力だけで握り潰し、扉を陣取ってた俺達の横にあつた壁を蹴りで吹  
っ飛ばし行ってしまった。そして俺はというと、清々しい位にぶっ  
飛ばされました。

余計な事を口走ったのが原因かは定かでは無いが、明らかに攻撃の  
量とスピードが、めだか君の時と全然違うのだ。

しかも、結局見えない攻撃は見えないまま全身に喰らい続け、僅か  
一分ちヨイでダウンしたというヘタレっぷりを不知火さんと鬼瀬さ  
んに曝した。

そんな感じで、お次は不知火さんが攻撃されるのか？　と思いきや「何もしてない奴には手を出さない」という雲仙君のポリシーを逆手に取った策を出したお陰で、俺と一緒に扉の前で邪魔をしたというのに何もされなかった。

そのやり取りを倒れながら傷の自動修復モードに入りつつ聞いた俺は「あんだだけカッコつけといて数秒でダウンした俺は一体……これじゃあ只のピエロじゃん」とツッコミ、今に至る訳だが……。

「霧生クン、大丈夫？」

全身と制服がボロボロの笑える姿の状態なのにも関わらず普通に俺に声を掛けてくれた不知火さん。

普通に話し掛けられてもかえって恥ずかしい……腹の底から爆笑して貰った方がまだマシなんだがなあ……。

「イツツツ……。まあ何とかね、昔から身体は頑丈だし」

痛いと言には出しているが、雲仙君から受けたダメージは外傷はそのままに内面的にはとっくに治っていたりする。

ちなみに、外傷の方も何時もならもの30秒もしない内に完治させる事が出来るのだが、一応不知火さんが見ている訳なので時間差で自動修復モードを発動している。

これが二年間もの間に手に入れてしまった能力パワーアップの具体的な力の一つ“能力のコントロール”というもので、自動修復になる時間がある程度操れるという、まあ俺にとっては唯一の救いになる力だ。

「それだけボコにされて『イテテテ』で済む霧生クンって何気に凄  
いよね」

「あ？ あー……アレだ、“ギャグ漫画”みたいな風に考えりゃあ  
いいんじゃない？」

「じゃね？ って……自分のことでしょうに……」

畜生……。呆れ顔な不知火さんに向かって「俺だってこんな訳の分  
からん回復力を最初から持って訳じゃないんだよ」と心から言っ  
てやりたい。

まあいいか、写メ撮られないだけマシだと考えよう。

そう思いながら、自分で自分を慰めるといって、なんとも滑稽なこ  
とをしていると、いつの間にか取り出した菓子パンかじっていた不知  
火さんが口を開く。

「それにしても、あのお嬢様に向かって結構なことを言ったのはビ  
ツクリしたよ」

菓子パンを頬張りながらニヤついた表情カオをする不知火さん  
何故だか「人間って面白ー！」とか言う死神を思い出す。

「あ、そう？ ほら、流石に切羽詰まった感があつたからね……  
めだかちゃんには悪い事したよ」

「へ〜？ 霧生クンってケッコー変わったよね？」

「へ？ 何処が？」

「だって入学したての霧生クンなら「早く行けよこのブスが！」……って言いそうじゃん？」

「は？」

「いやいや、入学したてだろうが入学前だろうが流石にそこまで言わないよ？ 俺って不知火さんにそんなイメージ持たれてたんだ……何かシヨックだ。」

「それに前にも言ったと思うけど、入学直後にアタシの頭引っ付かんで4階の窓から放り投げようとしたじゃん？」

「うっ！ あ、あれね……」

「そうだったな……確かあの時は妙にイライラしてからの行動だったんだよね。」

「いや、あの時はマジ「めん……」

「別にいいよ！ アタシはもう気にしてないし、それに今はこうやって仲良くやってる訳だからねっ！」

と嫌味も無くにこやかに言ってきた不知火さんを見る限り嘘では無いだろう。

「し、不知火さん」

「えっと……なに？」

友達だと言ってくれたり、この子はことごとく俺の涙腺を簡単に破壊することを恥ずかしげも無く言ってくれる……。

「キミって子は……グスッ」

（何で突然泣き出すの？）

あ、アカン素敵やん？ と、何処かに雲隠れした元・TV界の帝王の口癖的な感情が底から湧いて来る。

これでこの子が俺の好みのタイプとかだったら真っ先に、それこそ

全力で落としに掛かるんだがなあ……残念だぜ。  
あ、別に不知火さんはブスじゃないってのは言えるからそこは悪し  
からず。

続く

おまけええ!?

第二音楽室の地獄絵図を、後から来た保健委員会と共に事後処理を  
済ませた主人公は、不知火と共に廊下を歩いていた。

零

「不知火さん、俺決めたよ……」

不知火

「へ？」

零

「今日行くとか言ってたラーメン屋では好きなだけ食っていいぞ？  
俺は今モーレツに感動したからな」

不知火

「ほんとに？ 全メニューでも!？」

零

「おう！ なんなら店にある材料の在庫を全て食い尽くす勢いで行  
けてんだ！！」

不知火

「わ〜い！ 霧生クン大好き！！」

そう言つて主人公に飛び付く不知火。

主人公もそれを受けて飛び付いて来た不知火を持ち上げてくるく  
と回す。

零

「ハッハッハ〜！ 今だけ俺もそう思うぜ！！」

周囲の目等を気にせず二人してはっちゃける。  
そんな状況を見た周りの生徒達は……。

『父娘か？』

揃ってそう口にしたという。

終



20:「見える いややっぱり見えないや」(後書き)

次回辺り、主人公がかなり本気マシになるかもしれません。

まあ主人公の性格上、空振りになる可能性の方がありますけどね。

21：殆どの人間が小学生の頃に一度は経験した事があるだろう『好きな子を遊

最初に言っときますが、あくまでギャグとして見て頂けたらなあ…

…と思いつながら更新します。

主人公はこういった性格という設定なので、反感を買う覚悟は最初からあるので…ハイ。

てな訳で、竹を割った様なサツパリとした精神力を持つ方はどうぞ。

21：殆どの人間が小学生の頃に一度は経験した事があるだろう『好きな子を遊

不知火さんとラーメン屋に行く約束をした俺達は一旦別れた後、生徒会室へと向かう。

途中、トイレの水道にある鏡の前で自身の姿を確認する。

取り敢えず、あの子達に自分が無事だという事を伝えなければならぬし第一、先に勝手に帰ったら何言われるか分からないからな。

「頭に包帯よし、腕にギプスよし！ 腹部周りに包帯よし！！」

で、何を鏡の前で独り何を呟いてるのかというと、生徒会室に行く前に自身の怪我の状況の再確認をしている。

いや、正確には怪我の方はとくに完治してしまったので包帯をする理由なんざ皆無なのだが、無傷の状態であの子達に会えば、八割以上の確率で不信感を持たせる事になる。

別にあの子等に不信がられるには吝かでは無い……………無い筈なんだが、その思考とは別に、俺の能内で『不信がられるのは得策じゃ無い』みたいな指令が出ているので、それに黙って従うことにした。それに“怪我をしていりゃあ早めに帰れる”という小学生が使いそうな手が発動出来るし、だったら包帯ぐるぐる巻き状態で行った方が俺にとって都合が良いってのも一つの理由だったりするが……………。

「よし、行くか……………」

そんなこんなでトイレから出て、再び生徒会室へと足を運ぶ。

あの子達……怪我がなければ良いんだが。

さてさて、別にネタになる程面白い出来事が無く無事に生徒会室に到着した訳なのだが、ウム……どんな出で立ちで入れれば良いんだ？  
死にそうな顔しながら入ったら馬鹿みたいに心配されてしまうし、ウムム……これでいいや。

「チヨリクス！ 皆無事か？」

何時までも考えたって仕方ないので、逆に何時もの様に扉を開けて入ってみると、なにやら四人で話し合ってたのが見え、皆の視線が一斉に俺へと注がれる。

お？ 流石に俺が無事に生還したのが信じられなかったのだろう、包帯だらけの俺のナリを見てビックリした表情………あれ？

「零！」

「おお、零！ 無事だったか！」

「おうおう！ めだかちゃんから聞いたぞ？ 雲仙のヤローに淡呵きったんだって？ お前にしちゃあやるじゃねえか！！」

「全く、ゲータラのキミにしては今日は頑張った方じゃ無いか」

「え？ あ、あれ……？」

……あら？ なんか変だぞ？ なんでこの子達はこんなにもリアクションが普通なんだ？ いや、もがなちゃんだけはリアクションが違っけどさ。

「ん？ 何だ、その間抜けな表情は？」

つい数十分前まで、二人してシリアスな感じになってたのに、そんな空気は消えましたとばかりに話し掛けて来るめだか君。

「あ、あれえ？ おかしいなあ……？ 俺が思ってた皆のリアクションと何か違うんだけど」

「は？ 何がだ？」

心の底から、「何を言ってんだ？」って表情の善吉君。

うん？ 君達って人が怪我してもそんなうつすいリアクションなのか？ いや、もがなちゃんだけはマジで心配そうな表情してくれてるけどな。

「いやほら、俺さっきまで危ない場所にいたんだよ？」

「ん？ だから？」

「え？」

「え？」

んんん？？ さっきから話しが噛み合わないぞ？

「いやだからね？ 俺、危険地帯にいた、これ分かる？」

「「「ああ（ウム）」」」

取り敢えず確認だけしてみようと、小学生に足し算を教えるかの様にして聞く。

最初の質問には善吉君と阿久根君とめだか君の三人がちゃんと頷いてくれた。

何度も言っが、もがなちゃんは心配そうな表情で見えてくれる。

「んで、こんなナリにはなったとはいえ無事に生還出来た、これも分かるよね？」

「「「ああ（ウム）」」」

先程と同じトーンで返してくる。

……んー？ やっぱり変だよ。

「で、そんな俺に対して、君達のリアクションはえ〜っど……………それだけのなの？ あ、もがなちゃんは別だからね？ 心配してくれてサンキューな？」

「へ？ う、うん……………さっきから普通に話してるけど、ホントに大丈夫なの？」

「おう、俺は昔から頑丈だからね！」

目の前で阿保面をしている三人とは違い、横心配してくれてるもがなちゃんに向かって胸を張りながら言う。

ホント、最近の高校生にしてはいい子だよ……………異世界人だけ

ど。

あつと、話しが逸れた。

「うんそれで、だ。まともな神経をしている奴なら、もがなちゃんみたいな反応の筈なんだが……君達のその冷静過ぎる態度はどう説明してくれるの？つーか、めだかちゃんに至ってはさっきまでスゲエ俺の事心配してくれなかったかな？」

段々腹の中で沸々ととろ火で熱されたお湯の様に怒りが沸いて来るのを抑え込みながら聞く。

すると、三人はお互いの顔を見合わせてから「何だ、そんな事か……」と、半笑いな表情を浮かべたと思つたら、思いもしない事を言つて来た。

「いやだつて、お前の場合は、ちょっとやそつとじゃあ致命傷なんか負わないだろ？ 今日だつて昨日の事があつたつてのに余裕な顔で登校して来たしな！」

「オレは、キミの化物じみた回復力を中学校時代に嫌と言う程見せられたからな」

「私も、最初は善吉等が危ないと聞かされて、少し冷静では居られ無かったからあのような行動を起こしたが……救出中に冷静に考えたら、貴様は私の本気の攻撃を受けても次の日になつたら平然としてるといふ事を思い出したからな」



「……………」

三人の言い分を聞かされた時に思った事が一つ……………」ああ、そういやこの三人には能力の一端を見せまくってたなあ……………」アハハハハハ」とまあ、物凄くやる瀬ない気分になった。  
しかも更に俺のハートをグツサリと刺す様な気持ちにさせたのが、もがなちゃんこの一言だった。

「そういえば、昨日も黒神さんにボコボコにされたつてのに、普通に歩いてるような。うん、大丈夫……………」なのかな？」

これを聞いた瞬間、いい年した餓鬼……………」しかも精神年齢を合わせりゃあ二十歳過の大人な俺が、結構マジで落ち込んだ瞬間だった。

「……………」

ある意味信頼されている事を知った俺は、四人が何やら話しているのに混ざらずに一人ソファでねっころがりながら携帯を弄っている。決して、心配されなかった事に腹を立てている訳では無いので悪しからず。

「スーパーボール？」

「否、ただのスーパーボールではない、スーパーなボール、つまりはスーパーボールだ」

「……うん、スーパーボールじゃねえかよ。べつにスーパーとボールの間に“な”をいれる必要あんのか？」

「まあ、そんな顔をするでない、私はこれでも真面目な話をしているのだ」

「どづいうことだ？」

何やらスーパーボールがうんたらかんたらと言っているめだか君。

「雲仙二年生の使う奇妙な術については貴様達……特に零は知っているな？」

「ああ、えーっとなんか変な軌道の正体不明の飛び道具だっけか？」

あ、先生の呟きだ。

「明日は合コンで飲みまくりなう。」「か……良いなあ、超づらやましいんだけど！ 電話してやる！」

「うむ、このスーパーボールがその正体だ！」

「はあ！？ 風紀委員会の武器がスーパーボールだったのか！？」

「そうだ、十中八九間違いなかろう……そうだろ、零………零？」

「あくん？ 聖職者が合コンですかあ？ 超づらやましいんですけどあ！ 何で声掛けてくれなかったんですかあ？ ……は？ 忙しくねえし！ 暇だったし！！ キレてねえし！！」

「……………」

畜生、こちとらそんな楽しそうなイベントも無いのに、この野郎が。しかも相手は二十代のお姉様方だと？ ざけんなバツキャローガ……！！

「おい……………」

「あーあーうらやましいですよ？　それがなにか？　なんだよ全員が二十代で先生やつてるなんてねえ、俺の好みのタイプ知ってたよな　え、マジ？　俺も参加OKな雰囲気なの？　そりゃあ勿論行く　ちよっと待て……………何？」

周囲の事など忘れて、先生との会話に勤しんでいると、いつの間にもやらめだか君が俺の寝ていたソファの直ぐ横に現れていた。

「何だよ？　今俺は忙しいから後にしてく　あっ！？　なにしゃがる、返せ馬鹿！！！」

鬱陶しい表情カオをしながら用件を聞くと、能面の如く無表情で俺の携帯を取り上げそして、そのまま携帯に耳を当てて電話の向こう側にいる先生と話し始める。

「もしもし、黒神です。お久しぶりです先生、ええ……………ええハイ、そうです。いえいえ、では近い内にまた……………それでは」

《ピッ！》

何やら先生と話し終えたためだか君は、そのまま俺の携帯の通話終了のボタンを押した。



「ふ、フザケルな！ そんな話しは聞いてねえし、第一んな大工じみた仕事って明らかに業者の仕事だろうがタコ中の助！！」

正論で返してる筈なのだが、めだか君は余裕の表情だ。  
奴め、まだ何かしらの手札があるというのか。

「それについては心配いらん、そういった（・・・）知識を私は持っているし、五人でやれば直ぐに修復可能なダメージだ、しかもそういった説明をしたら予算委員会の者達も喜んで許可してくれるぞ。だから、明日は長丁場になるから……諦める」

こんな感じで、俺の言い分も普通に屁理屈で返された、薄ら笑いを浮かべながのオマケ付きで。

「グググ……！」

くそっ、このままでは、俺はお姉様方達とよろしく出来ない……いや待てよ？ そうだよ、サボっちまえば良いんだよ。

ここ最近真面目にやって来たんだ、一日くれえサボったって文句は……。

「ああ、そうだったな、一応お前に限って無いとは思つが、もし明日学校をサボるなんて考えていたら……」

等と思つてたのもつかの間、俺の浅知恵を見抜いてますと言わんばかりに“サボったら”の単語を強調させながら窓の方へ向くめだか君。

「解るな？」

間を置いてからこちらを向き、俺の目を見ながら言い聞かせるようにして言う。

「わ、わかりました……スンマセン」

逆らえ無かった……。

威圧する事無く、逆に静水の如きオーラを醸し出しながら言つめだか君に逆らえ無かった。

逆らつた時の反応が恐すぎた為に……ああ、まだ見ぬお姉様方……、俺は明日参戦出来ませんが、どうか先生にだけは靡かないで下さい。嫉妬に狂つて先生を張つ倒したくなりますから……。

「ふん？ 俺がボコにされた原因がスーパーボールって……全然分からなかった」

めだか君に手渡されたスーパーボールを眺めながら煎れたてのお茶を飲む。

ふうん？ 結構跳ねるじゃないの、このスーパーボール。

うむむ何故だろう、俺の中に未だ残る子供心がスツゲエ擦られるんだが……よし一つ位貰っとこつと。

「なんだ、気が付か無かったのか？ お前の事だから気付いてるのかと思つたぞ」

「いやいや、キミじゃ無いんだから無茶言つなよ。腕振つたと思つたら攻撃喰らつてましたの世界に俺が着いて行ける訳ないじゃん…

…」

全く、どいつもこいつも何故俺が強いのイメージを持つてんだよ。俺は何でもアリの喧嘩なら大体勝てるけど、戦闘に関しての能力はス○ウターで計測したら絶対に、「ふん、戦闘力たつたの1か……ゴミだな」とサ○コガンらしき物を装備した青白い宇宙人に鼻で笑いながら言われるに決まつてるってんだ。

「そうか？ オレの勝手な想像だけど、お前つてな〜んか隠してる気がすんだが？」

「無い無い、馬鹿みたいな回復力を持つてるのはこの際認めるにしても、戦闘に関してはミミクソだぞ？」



うたぐり深い目で俺を眺めてる善吉君に向かって、さりげなく回復力についてのカミングアウトしつつ、戦闘力についての解説をする。

「……………」

「な、なんだよ二人してその目は？ マジだつてば、俺は単なる回復力がバカに高い、お姉様好きのか弱い一般市民 　　って阿久根先輩…………貴方もですか？」

「いや、オレもキミが何か隠してるんじゃないかと前々から思ってたはいたが…………。でも、キミが人に暴力を振るってる所は見た事は無いな」

「でしょっ？ 　　でしょっ!？」

そうだ、俺はこの世界にてガチで喧嘩をした事は余り無い…………といふより喧嘩をしたトコを人に見せた事は無い筈だから…………多分。ふう、それにしても俺って案外皆に見られてたんだな。まあ、これで俺の話は終わり…………。

「そついえばアタシ、生徒会に入る前の話しなんだけど、零が明らかに普通じゃ無い速度で校庭を走り回ってたのを見た気が」

ぐっ、別領域からの刃だと!? が、まだまだ!

「もがなちゃん、君が見たのはきつと幻だよ。タバコをスパスパと吸ってる俺にそんな体力があるとでも?」

フッフ、こんな事もあるうかと俺が普段から超ヘビースモーカーだつてのを皆に教えまくってたから俺に体力がねえ事はもがなちゃん意外には知れ渡ってるって事だ。

まあ、実際にはタバコを吸っても肺やら呼吸機系やらに影響は無いんだよね、リセットされるから。

「え……? 零タバコ吸ってたんだ……」

「なんだと? 貴様……随分前に『タバコは止めた』と言って無かったか?」

「い、いや、今はちゃんと禁煙してんぜ? もがなちゃんが言ったのは“生徒会に入る前”の話だろ? その当時なら現役バリバリで吸ってたからな」

危ない危ない、めだか君が居る事を普通に忘れてたぜ。

ああ、当然ながら禁煙なんてしてないよ? してみようとは思ってたけど三日と持たなかったし。

「そうか……なら良いが、フムなら後日検査をさせて貰うが？」

「うん、いいぞ？ 俺の禁煙達成を祝ってくれってんだ」

ふん、リトマス検か。

無駄だよ、その時になってから俺の身体全体を健康体に近い程に再臨<sup>ソツ</sup>させちまえば関係ないし。  
それより……。

「もがなちゃんったらそんな前から俺を見ててくれたの？ あらやだ幻の俺とはいえ嬉しいじゃ無いの？」

さて、シヨ一の始まりってね。

手始めにフツと軽く笑いながら、ながらもがなちゃんに近付いて肩を組む。

「へ？」

初めてはキョトンとしていたもがなちゃんだったが、段々理解出来たのだから、みるみると顔が紅くなっていく。  
はい、きたよ来ましたよ〜と。

「うんうん、知り合う前から幻の俺とはいえ、見てくれたなんてねえ？俺もまだまだ捨てたもんじゃ無いってか？」

「ち、違っ！」

「うん？何が違うんだ？俺は『幻の俺とはいえ見てくれたんだ』としか言ってるねえぜ？一体キミは何を考えてんのかなあ？」

「うんうん……」

ニタニタと傍から見れば、スゲエ悪党顔で迫ってるという光景になってるのをめだか君達が、凄く冷たい目で見てくる。

が、エンジンが完全に入った俺は止める気が無いんですけどね。

まあ、実際にはある諸事情があつて校庭を全力で走り回っていたのは事実だから、もがなちゃんが見たのはまごう事なく俺だし、もがなちゃん自身が俺に対して何かしらの感情を抱いてる事等、天地がひっくり返っても有り得ない。

この子の場合、単に男友達が余り……いや一人もいなかったからこんな風にされるのに慣れてないのだろう。

種子島君と屋久島君に関してはベクトルが違うみたいだし。

「あつうん……」

あ、やっべ！ ついつい力を入れて抱き寄せる感じにして肩組んだせいで、火山が噴火する5秒前みたいになってやがる。うむ、そろそろ止めとくか？ またビンタなんかされたら嫌だしな。

「……とまあ、おふざけもこれくらいにして、そろそろ本題に戻りますか？ ん〜っと何の話だっけ……そうそう雲仙センパイの話だったね、ハイ始めましょ〜と」

「え……？」

「「「……」」」

もがなちゃんを離し、三人の方へと顔を向けて先へ行く様に促す。  
ん？ もがなちゃんが……なんっ！か「え？ 終わり？」みたいな表情を一瞬だけ浮かべた様な……いやまさか、無い無い。

「あ？ 何だよ三人揃ってその『また議員が嘘言ってるよ』みたいな目は？」

ちよつと……いやかなり気にはなるが、取り敢えずは俺に注がれる軽蔑にも取れる三人の視線を対象しなきゃいけない。

「お前なあ……！」

「キミは男として恥ずかしく無いのか？」

「なにがです？」

「その後先考え無い軽すぎる行動だよ」

何故か知らないが阿久根君に説教された。

うん、軽すぎる行動と言われれば自覚はしてんだが、しょうがないじゃん？ キミには弄りがいがある子が目の前に居るのに、それを我慢しろってのか？ 生憎俺には二年弱で人を弄り回す楽しさという、なんともはた迷惑なもんに目覚めてしまったから無理だな。

「逆に聞きたいんだが、貴方達は目の前にあるテーブル一杯に広がってる御馳走前にして我慢しろと言っのか？」

悪いが、俺にはそんな強靱な精神力を持つ程出来た人間じゃあ無いんだよ。

「……不知火と気が合う理由が今更ながら再確認出来た気がするぜ」

「喜界島会計、わかったら？ 零はそういう奴なんだ……奴のやる事に一々構う必要は無いんだ」

「……」

「やはり二年前の君と今のキミとは悪い意味で変わり過ぎたな……」

アキララ、全員から駄目だし貰っちゃった。だけども確か君、キミは少々誤解をしているな？

「めだかちゃん、誤解を解くアレにはならないとは思うが、一つだけ言わせて貰おうか。……俺は興味の無い人間にはこうやって会話をしたり、ましてや弄るなんて事しないからな？」

そう、俺は昔からある人物の影響をモロに受けたのが原因なのか、一定以下の認識しか持たない人間には対しては、最悪そこら辺に生えてる雑草程度の認識しかない。この世界へ来たばかりの俺が誰に対してもヤサグれていた態度をとっていた理由がソレにあたる訳だ。

そついった意味で考えると、この世界の人間達はある意味で興味を啜る者達が多すぎる。

……。だからといって永住する気は更々ないが。

「ふむ、成る程な」

俺の一言に、何か思う点があるらしく、一人考えるそぶりを見せる

めだか君。

まあ確かに、キミには中学時代のヤサグレた俺のイメージの方が強いから仕方ないのだろうけど。

俺が生徒会に入って少した時に、俺が女の子に声を掛けていたのを目撃された時は「貴様は誰だっ！」と両頬をオモツクソ引っ張られた位だし。

「それと一応、他人を意識しているのにも段階分けみたいにしてるし」

「段階分け？」

「そうだな、例えばっと………そう、こっちの窓から見えるが、一人でストレッチをしてる生徒がいるだろ？」

頭にハテナを浮かべていた善吉君に更に詳しく教える為、窓から見えた適当な人物を指差しながら説明する。

すると全員が窓の方へ寄って来て、俺が差した名も知らぬ生徒を見る。

「お？ あれだな。それで？」

「彼が、所謂赤の他人レベルで、俺の認識は『意識する以前の問題』とするならキミ達は友達レベルで、認識的には『好きですよ』み



「たいな感じだな」

見知らぬ赤の他人を捕まえての説明に、全員がナルホドと頷いていた。そこから更に細かい仕分けがあったりするのだが、別に一言う必要は無いと思い、言わない事にした。

「だから、俺がもがなちゃんを弄ったり、不知火さんとフザケ合ったりしたりするのは、友達だと俺が勝手に思ってるが故の行動……なのさつと！」

「へっ？」

と言いながら、たまたま（……）近くに居たもがなちゃんをこちらに抱き寄せる。

善吉君と阿久根君は「またやってる」と半ば……いや八割呆れた目で俺を見ていて、めだか君からは何故かちよっぴり威圧感的な何かを感じる。

そして抱き寄せされたもがなちゃんはいえ、一瞬キョトンとしてから、また火燧の様に紅くなっていく。

ククク……やべえ。やっぱしオモシレーや！

「まあ、俺のくっだらねえ説明は以上ですつと……質問は？」



21：殆どの人間が小学生の頃に一度は経験した事があるだろう『好きな子を遊  
主人公がでしゃばるのは次回です。

多分グダグダにやあなると思われますが……。

外：「さっきから言ってるだろ？ ハンバーガーの中にあるピクルスは真ん中に

本編に入る前に、番外編を突然思い付いたって感じですよ。

申し訳ございません。

時系列的には結構設定が矛盾しまくってますが、……まあ番外編だからって事でお許しください。

それでは打って伸ばしてで鍛えた鉄の様に強き心を持つお方はどうぞ。

外：「さつきから言ってるだろ？ ハンバーガーの中にあるピクルスは真ん中に

これは、あの世界へ飛ばされた後の中学最後の大晦日にあった小さな小さなお話である。

（駅前）

「つくつく寒いぜ！ つーかカップルだらけだな畜生！！」

「だな、場所を間違えたかな……？」

「いや、んなこたあねえ筈だ。こん中に一人や二人は男無しで年を越すって女の子がいる筈だからな！」

大晦日 それは新年の前の晩の日。

ハッキリ言おう、この日だけは独りで過ごしたく無い。ていうか、クリスマスしかりお正月しかり。何かしらのイベントを一人で過ごした事の無かった俺としては、去年を振り返るたんびに虚しい気持ちにさせてくれる。

てな感じの話を生先生にしてみたら……。

「簡単だ。年越す前に女を引つ掛けりゃあ良いんだよ」

という一言から始まり、只今中々に活気のある街の駅前にて、女の子を探している訳なんだが……やはり大晦日になってからじゃあ遅かったのだろう。

カップルばっかで中々声を掛ける女の子に出くわさないのだ。

「寒い……。なあ、先生、諦めて帰らない？ 何だか惨めな気分になつて来たんだけど」

いくら服を着込んでいようと、寒いものは寒い訳であり、かれこれ3時間はこの場所に居る訳のだが、たったの一人も引つ掛かつてくれない事にいい加減諦めの気持ちが出て来た為、先生に帰りたいたいと言ってみるが。

「馬鹿野郎！ こんなトコで諦められるか畜生！」

何を意地になつてるのかは知らないが、諦める様子が全く無い先生。先生からしたらこんな筈では無かつたのだろう。いい年した大人クセして半泣きになつてる。

こうなつたら梃子でも動かないとわかつてる為、思わず大きなため息を付きながら、近くにあったベンチに座って、キョロキョロと忙し無く首を動かす先生を眺める。

「言わなきゃ良かったのかもな……」

近くで見てたから気が付か無かったが、こうして少し離れた場所から先生を見てみると、何と云うか酷く可哀相な姿に見える。まあ、事の発端は俺の一言な訳だから言わないけど。

「ねえねえ、君達二人だけ？」

あつ、男と待ち合わせね……

…うん、聞かなかつた事にしてくれ」

これで先生が断られた回数が50回を突破した。ちなみに俺はとっくに諦めてる為に何もしていない。

(缶コーヒーでも買ってやる……)

ついでに諦めるように説得しないと、と思いつながらこつから200メートル位離れた場所に置いてある自動販売機へと向かう。最初来た時よりも人の波が若干激しくなってるのを感じつつ、自販機に小銭を入れてホットの缶コーヒーと紅茶のボタンを押して、下から商品を取り出そうと視線を下に向けた時だった。

「ん？ こりゃあ、うちの中学の生徒手帳？」

何でこんな所に？ と思いながら落ちていた生徒手帳を広いあげる。

「一体誰の 「すみません、此処らに手帳を拾いませんでしたか？」 だ？」

謀った様なタイミングで背後から声が掛かる。

どうやら直ぐに持ち主が気が付いて、探しに戻ったのだろう。俺は直ぐに背後を振り返る。

「もしかしてこれです げっ！？」

「む？」

手帳の持ち主だと思われる人物の顔を見た瞬間、思わずいらん声を出してしまった。

この藍色っぽい髪の色に俺と若干にたような目の色……。

「霧生同級生、なのか？」

「あ、ああ……」

今現在、俺が最も苦手としている人物である黒神さんだった。



「え、ええっと？この生徒手帳はキミのかな？」

「ああ、拾ってくれたのがお前で良かったよ。礼を言う」

「え？ あーまあ、気にしないでくれ、偶然拾ったに過ぎないし、ほら」

「うむ」

手に持っていた生徒手帳を黒神さんに渡す。  
何で生徒手帳を持っていたのかは気になったが、聞いたところで誰も得をしないので聞かない事にした。

「……………」

そして何故かこの場を去らずに俺の顔をジーツと見てくる黒神さん。何だっただよ、手帳も帰ってきたんだから早くどっか行けよと思う。

暮れの日こんな気分になるなんて……………。

「あのさあ……………」

「なんだ？」

この妙な空気、そして何を勘違いしてやがるのか周りから来る微笑ましそうに俺達見る目に堪えられなくなったので、仕方無しに俺から声を掛ける。

「なにしてたの？」

まさか一人でこんな街中をうろつく性格キャラじゃない事はわかってる。だとすれば、連れがいる筈なんだが……。

「ああ、善吉と除夜の鐘を鳴らしに行こうとしたのだが、どうやら逸れてしまった様なのだ」

「ふ〜ん？」

やはりそうか、善吉ってのが誰だかは知らんが、連れが居るらしい。しかも名前からして男。フフツ、焚き付けた俺が悪いとは言え、先生があれだけ必死こいてるってのに、このガキ女タレは男と一緒に……なんて筋違いな事を思ったのは内緒だ。

「それで？ 早くその善吉って子の「ア」に行けば良いじゃない。おつきからどーしたん？」

「それがだな……」

「ん？」

何だか言いにくそうな表情をする黒神さん。  
何だ、逸れちまったか？

「善吉と逸れてしまったんだ」

やっぱりな。

「へー？」

「それで、これから探しに行いじや思いつのだ」

「で？」

「うむ、取り敢えず貴様は何をしているんだ？」

「は、俺か？ えーっとねえ、あそこでキョロキョロしてる男がいんだろ？」

先生に向かって指を差しながら説明する。

さっきから諦めずに頑張ってる様子が見えるのだが、収穫はなさそうだ。

「あれは……先生か？」

目を細めながら呟く黒神さん。

「そ、友達がいない寂しい俺は先生と遊んでるってわけ」

「成る程な」

まあ、先生の場合はナンパだな。

「それで話は戻るけど、早くその善吉君とやらを探しに行ったらどうだ？ 向こうもきつとキミを探してると思っが？」

話しのタネも無くなってきたので、さっさとこの場からオサラバしちまおうと、無理矢理話を切ろうとしたのだが、黒神さんから思いも寄らない事を言われる。

「ああ、そうしたいのは山々なんだが……」

「なに？」

さっきからどうも、煮え切らないというかハッキリとしない態度に苛々し始めた俺は、ちよいと強めの口調で早く言えと促す。

「道に……迷ってしまったのだ」

「は？」

自分でも間抜けな声だと自覚できる位間抜けな声が出た。

「道に迷った、だ？」

「ああ」

「キミがか？」

「そうだ」

「……………」

再び沈黙した空気がお互い流れる。  
コイツは驚いた、まさか黒神さんともあるうもんが道に人と逸れる事はあるだろうが、道に迷うなんて事があるなんて。  
ん？ ということはもしか……。。

「あー？ まさか俺もその善吉君とやらと一緒に探して欲しいとか？」

「できればそうしてくれると助かる。此処等は初めて来るから良くわからないのだ」

うっそくん。何処までツイてねーのよ俺は。

「善吉君とやらに電話した？」

「善吉は携帯を持ってない」

「じゃあキミの家に電話して迎えに」

「そんな時間の掛かる事はしたくない」

「……はあ」

チツ、なら最初から来るなよと言ってやりたいのだが、それは流石に可哀相だから言わない。

「あゝあ。しょうがねえなあ……わかったよ」

「え？」

「一緒に善吉君とやらを探してやんよ……どーせ暇だしな」

「そ、そうか！　ありがとう恩に着る！」

ぺこりと頭をさげる黒神さん。

言って置くが、本当に困った様子だから手伝ってやるだけだからな、とは言わなかった、否言え無かった。

本当に嬉しそつだったから。

「さて、そうと決まれば先生も手伝わせるかな」

「む、先生を手伝わせて大丈夫なのか？ 何やら探し物をしている様子だが？」

「あー確かに探し者といやあ探し者だが……行きながら説明するわ。ほら、これ飲みな」

そう言つて先程購入したホットの紅茶を手渡す。その際、ちよこつと黒神さんの手に触れたらすんごく冷たかった。恐らく逸れてのと手帳を落として探してから結構な時間が経つたのだらう。

よく見りゃあ寒そつな顔してるし。

「これは？」

「たった今その自販機で買った紅茶。キミにとつちやあ安くてマズイ飲み物かもしれんが、まあ我慢してくれ。気休めだが暖まるとは思つぜ？」

リプ〇ンのレモンティーの説明を軽くしつつ諦めずに女の子に声を



掛けてる先生に歩いて接近する。  
そういやこの子って超がつく位に金持ちだったな……こんな安物の  
飲み物渡して失礼だったかな？

「そうか、フッフ……ありがとうな」

訂正、随分と嬉しそうにしながら両手に持ってる。

あれか？ キミからしたらこんな安物を貰ったことが無いから逆に  
珍しいって心理か？ だとしたら羨ましいことこの上ないな。

「どーいたしました……っとオーイ先生！」

未だにキョロキョロとせわしなく首を動かす先生に大声で呼ぶとこ  
ちらを振り向き、そして驚いた表情をする。

なんだ？ とは思いつつも先生の目の前まで近づく。

「あの、どーした の、！？」

意味のわからないリアクションについて聞こうとしたが、いきなり  
両肩をおもっいきり捕まれた。

そして半泣きの表情を浮かべたと思ったら素っ頓狂な事を吐かした。

「オレがこんなにもてこずってるのに、自分<sup>テーマ</sup>はちゃっかり女の  
子GETか！？ 羨ましいぞこの野郎！！」

「は？」

一瞬コイツが何を言ってるのかが解らなかったが、5秒位経って理解した。

どうやらこの目の前に居る馬鹿は、黒神さんを引っ掛けたと思っ込んでる様だ。

直ちにその訳の分からない誤解を解く為に時間を要したのは言うまでもない。

「ふうん偶然そこで会ったら迷子だった、ねえ？」

「そう、成り行き上俺も一緒にその善吉君とやらを捜す事になったんだよ……てな訳で手伝え」

「そういう訳なんで宜しくお願いします、先生」

「あーうん……」

ぺこりと頭を下げる黒神さんに対して、微妙な表情をしながら返事

をする先生。

まあしょうがねえわな？ プライベートとはいえあんたも一応は教師なんだしな。

「で、その善吉君とやらの特徴は？」

探し人の特徴を聞いとかないと話しにならない、てなわけで三人で並んで歩きながら善吉君とやらの特徴を聞いたのだが、黒神さんからジトツとした目で睨まれた。

「あんだよ？」

「貴様と善吉と私は同じクラスだぞ？ 覚えてないのか？」

「知ってたら聞かないよ。だから聞いてるんじゃない」

「うわっ！ ヒデエ奴」

「あゝあゝ？ 仕事を生徒に押し付けてるアンタに言われたくねえんだけど！？」

わざとらしいリアクションをする聖職者（笑）に食ってかかる。

ハッキリ言ってコイツにだけは言われたく無いからだ。

「はあ、まあいい。善吉の特徴は」

諦めた様子で、淡々と善吉君とやらの特徴を話す黒神さん。  
なんで冬休みの、しかも年末最後の日になってから黒神さんに怒られないと聞かないのだ。

〈1時間後〉

只今、探し人を尋ねて半径2?を搜索中。

「クシユン！」

クソみたいに寒い場所をずっと歩いてきたのが原因なのだろう、黒神さんがくしゃみをした、結構レアなのかもしれない。

「あ？ 大丈夫か？」

「少し冷えるな……」

紅茶はとっくに飲んでる。なので暖を取る手段が無い。

先生の服を剥ぎ取って黒神さんに着せるのも手だが、それをしてら下が薄着の先生が凍死しちまう……となれば。

「ほら、これ着な」

「え？」

「お？」

着ていたジャンパーを黒神さんに渡す。

風邪でもひかれちゃあ、目覚めが悪いから特に意味の無い行動だ。だから後ろでニヤニヤするんじゃないやねえよクソ教師。

「あんだよ？　んな寒そうな顔ツラされりゃあ誰だってこんな行動取るだろうが、ほら、さっさと着る」

そう言ってジャンパーを投げ渡す。

「だが貴様は」

「いいから着ろ！　俺様の珍しいご好意なんだ、無下に扱ってくれるなよ？」

なんか言っけきそうだったが、無理矢理押さえ込む。

「あ、ああ。済まないな」

そう言っけ俺のジャンパーを着る黒神さん。

安物だから余り見栄えは良く無いが、我慢してくれと心の中で思う。それとさつきから、腹を抑えながら必死に笑いを堪えてるクソ教師、後でテメエとはお話しがあるから覚えてやがれよ。

「はあ、しかしないね、善吉君とやらは」

「だ、だな、ぷっ！　ククク……」

「テメエ、後で覚えてやがれよ……」

「おー怖い怖い！　ククク」

決まりだ。お話しじゃねえ、半殺しにしてやる事にするわ。

「フフ……余り遠くには行ってないとは思っけが、見つからないな」

そして黒神さんは何をそんなにニヤついてんだよ？ 意味が分からないわ。

そんなこんなで更に数十分程が経過した時だった。

「ん？ あそこでキョロキョロしてる子って善吉君とやらじゃねえのか？」

「むっ？ 間違いない……善吉だ」

「良かったな、ほれ早く行ってやりな」

駅の周りを暫く歩いていたら、見事に金髪でくせつ毛が入った髪型をした男の子が一人、キョロキョロと何かを探している仕種をしているのが見えた、多分アレがその善吉君とやらなのだろう。顔までは良く見えんが。

「ん？ どーしたんだ、彼氏も見つかったんだから早く行きなよ」

「黒神さん？」

折角探し人を発見したつてのに、善吉君とやらの元へ行くつとせぜに黙り込む黒神さん。

「二人は？」

「「は？」」

と思つたら唐突に喋り出した。

「いえ、二人はこれからどうするつもりなのかと……」

俺と先生の顔を交互に見ながら言う黒神さん。

俺も先生も背丈が黒神さんより高い為、見上げる形になってるが。

「俺達は……」

「特に……なあ？」

先程の行動を思い出したのか、お互い微妙な表情で見合わせながら口を開く。



「それなら」

「ん？」

そんな表情を察したのかは知らないが、俺達にとっては思いも寄らない事を言ってきた。

「私達と一緒に除夜の鐘を鳴らしに行きませんか？ 善吉も二人と……特に霧生同級生と話しがしたいと言ってましたし」

「はい？」

二人揃って、某刑事ドラマに登場する窓際部署の刑事のような返事をしてしまう。  
それほど唐突な話だったんだから。

「いや、いいよ」

「ああ、オレも遠慮するぜ」

「何故？」

妙に食い下がる黒神さん。

「何故って……」

「なあ………?」

そして再びお互い微妙な表情で顔を見合わせる。どうやら先生も俺と同じ考えらしい。

「ほら、折角彼氏と二人なんだし邪魔しちゃあ悪いし」

「それに、こんなむさ苦しい男二人を連れて彼の元に行ったら何を言われるかわかんねーしな」

適当に言いくるめて、上手いことごまかす。

まあそれだけが理由じゃ無いがね。

「別に善吉とは幼馴染みなだけで、そういった関係では」

「ハイハイ、幼馴染みの奴らは皆そんなリアクションなんだよなあ？」

「ククク……オレとしては零と善吉君でキミを取り合う絵が見たい  
とは思う　　がっ!？」

言い終わる直前に、腰の入ったパンチを脇腹に向かって打つ。  
当然モロに入ったので、その場でのたうちまわる。  
ふゝ少しスッキリ。

「まあ、この教師バカの言う事は気にせずさっさと行ってやりなよ。向  
こうだって必死に探してた筈だしな」

「だが　　「はいはい!」……むっ!？」

引き下がらない黒神さんのデコに向かって軽いデコピンをしてやる。  
意外だったのだろう、少し驚いた様子だ。

「俺はしつこい女は嫌いなんだよ、覚えて置いてね?　おいチャラ  
男バカ、早く起きろよ」

「ゴホッ!　　テメエがマジで殴ったから動けねえよタコ!」

チッ、さっき殴ったのは失敗だったかな。

仕方ない背負うか。

「何から何まで済まないな」

「うむ、わかってくれて結構！　じゃあ俺達は帰るけど……あゝそのジャンパーはくれてやるよ。どーせ年末セールで買った安物だしな。捨てるなりなんなりしてくれたまえ、無理なら来学期になつた時にでも返せばいいし……まあ好きにしてくれ」

「そうか、それじゃあ有り難く頂く事にするよ」

まあ、本当言つとこの馬鹿を背負う時に邪魔になるから押し付けただけなんだがな。

「よつこら、せつと！　じゃあ黒神さん、良いお年を」

「ああ、それじゃあ来年学校でな。サボるなよ？」

「努力はするよ」

別れの挨拶を済ませ、漸く俺様は別れた。

ふと振り返ると、黒神さんが善吉君とやらと無事合流出来た様子が見える。

さて俺はこれからどうするか……取り敢えずタクシー拾って家に帰るが一番なんだが。

「イテテ……何時に無くあの金持ちっ娘にやさしかったじゃねーか、  
どういつ心境の変化だ？」

帰る方法を一人模索していると、おんぶしていた先生から声を掛けられた。

「あ、別に？ 単なる自己満足みてーなもんだよ」

金持ちっ娘……いや黒神さんの話しを唐突にしだす先生。  
別に良心的にとか、何かを求めてやったつもりは全然、いやこれっ  
ぽっちも無いんだよね。

「へえ？」

「何だよその声は？ てか平気ならさっさと降りろ。重いし、何よ  
り周りの視線がきつい」

「嫌だよ。オメエの腹パンが結構効いたからまだまともに歩けない  
から無理。ったく、仮にも教師にむかってヒデエ奴だぜ」

「チツ……!!」

自業自得だから無理矢理降ろす事が出来ない。  
はあ、もうちよい加減すりゃあ良かったわ。

「で？ もうナンパは不可能だからタクシー拾って俺は帰るけど、  
アンタはどうするんだ？」

「あ？ 何言ってるんだお前は。今日から正月に掛けては零ンちでパ  
ーティーに決まってるんだろ？」

さも当然とばかりに吐かしやがる教師。  
全く……。

「ハイハイ、解りましたよ」

「嫌そうな事言いながら嬉しそうな声出しちゃって」

「るせっ!!」

なんでこの男は俺に構う……いや構ってくれるのかねえ？  
嬉しくて泣きたくなるぜ。

本人には口が裂けても言わないけどな。

続く

外：「さっきから言ってるだろ？ ハンバーガーの中にあるピクルスは真ん中に

次回で番外編は終了して再び本編にもどります。



外：「だ〜か〜るあ〜!! さっきから言ってるだろう!? サラダセットを頼  
次回から本編に戻ります。

今回は、キャラは当然の如くぶっ壊れていて、クオリティーは目茶  
苦茶。申し訳ございません。

それでも良い方はどうぞ。

ちなみに先生の名前が判明したりします。

はあ〜それなりでも良いから文章力が欲しいぜ。

外：「だ〜か〜るあ〜！！ さつきから言ってるだろう！？ サラダセットを頼  
「ほ〜れ、この階段を上ればお前の部屋は直ぐそこだ、頑張っ  
！」

「煩い！ 重いんだよボケツ！！」

クソが。駅前だったのに何故かタクシー拾えずに家まで歩いたのは  
良いが、この野郎、ず〜っと俺の背中に乗っかったままなのだ、運  
が悪いにも程があんぜ。  
だから家に着いた時には既に時刻は19時を回ってやがった。

「ハア、ハアハア！ つ、着いたぞ……降りろ」

「ハ〜イお疲れちゃんつと」

扉を開けてに入り、玄関の電気を点けると漸く降りてくれたクソ教  
師。  
ガチで疲れたぜ……ってあり？ 何で部屋の鍵が掛かって無いんだ  
？ ついでに何で居間の明かりが点いてるんだ？

「お、おい。今気が付いたんだけど、何で部屋の鍵が開いてんだ？」

「は？ そりゃあオメー」その疑問、僕がお答えしよう」……無理矢理入ってくんなよ」

「げ……」

居間兼寝室に繋がるガラス製の薄い扉が開かれ、そこから出て来たのは色々な意味で反則な人、安心院さんだった。

「ヤッホー零君。どーせ独り寂しく半泣きで大晦日を過ごすんじゃないだろうかと思つて、封印されて身動きが取れない僕が無理して遊びに来てやったよ。どう？ 嬉しくて飛び上がるだろ？」

何やら「自分、良いことしたでしょ？」みたいな感じに、のたまわつてる安心院さんだった。

「……。悪いが先生がいるから独りじゃ無いです。てか、そんなに恩着せがましく言つなら無理せず帰つて貰つて結構ですよ？」

「オレは初めからいない空気だね……」

確かに女の子はいないが、別にだからといって寂しくは無い。一応こんなでも先生がいるし。

「新年を迎える前だったのに野郎二人で過ごす訳？　うわあ、可哀相な子だね」

「違うぜ安心院さん。本来ならオレと零は　」

「ナンパやったは良いけど、失敗してノコノコ帰ってきた……でしょ？」

全部知ってるよ、と言わんばかりに俺達の行動の駄目だしをする。

「うわあ〜ん、ゼロ〜!!」

そして心をへし折られた先生は俺の腰へ抱き着きながらさめざめと泣き出した。

うん、先生の気持ちは痛い程分かるよ。

「遊びに来て貰うのは構わない……いえ、この際嬉しいですが、先生を泣かすのは止めてくださいよ。この馬鹿、女から駄目だし喰らうとアホみたいに泣くんで」

腰に抱き着いてくる先生を無理矢理引っぺがして、その場に座り込

む。

先生は部屋の隅で体育座り、安心院さんは俺のベッドに腰掛ける。この人つていつも家に来ると、俺のベッドを占領しやがるもんだから床で寝る嵌めになるんだよなあ……。この分だと今年最後の日も床だろう。

「案外メンタルが弱いんだね先生って」

「そうなんですよ、後で元氣付けてやってください。単純馬鹿だからすぐ引つ掛かると思います」

「うん、そうするよ。男の落ち込む姿程うっとうしい物は無いからね……。あ、零君は別だから。もし落ち込む事があったら喜んで胸を貸すよ、いやなんなら今すぐにでも貸して」

「その気の利く行動を先生にしてやったらどうです？ あの人なら喜んで飛び付いて、ついでに押し倒してくれると思いますよ？ したら2・3時間は部屋を貸してあげま ず！？」

「お ！？！？」

最後まで言うか言わないかの刹那に、ニコニコしながらいきなり顔面に何かを投げ付けて来て、それに怯んだ隙に腕十字を掛けてきやがった。

表情と行動が一致してないのが怖い。

「い、だだだだあ、あ、あ、！?!? ギブツ！ ギブツ！！」

洒落じゃ無い位に腕と肩に激痛が走るのだが、タップをしても止めてくれる様子が全く無い。

頼みの先生はまだ体育座りだ。

「キミは人の話しを聞かないねえ。僕はキミにだつたらつて言ったんだ。お分かり？ 僕はそんなに安い存在じゃ無いんだよ？」

そして何か語ってる安心院さん。  
くそが……こつなりやあ意地だ。

「ハッ！ 能力を貸すとか言つて誰彼構わず、性別すら越えてディープキスかますアンタは立派なビッチ あ、あ、あ、！? ごめんなさい、すいません、申し訳ございません！ 神様、仏様、安心院様！！ 焼き土下座しますから離して下さいいい！！！！」

意地になって余計な事を言ったのが原因で、締める強さが更に強くなる。コイツ、ホントに女か？ と言いたくなる位の強さだ。

「やだよ。今のキミの一言は僕のか弱気な乙女心を傷付けるには充分だ」

成る程、冗談じゃ無く多少なりとも怒ってるって訳か。  
乙女心だと？ 笑わせんなよ、と言い掛けるの止めたのはどうやら  
正解の様だ。

「わ、解りました。ぐっ！ 何をしたら許してくれるんですか！？  
このままじゃあガチで肩が碎けるんで！」

意地を張るのを止めて、安心院さんに許しを請う事に、じゃないと  
右肩が粉碎する。

「ふむ。なら僕の事を今この場で『愛してます、一生貴女の傍に居  
させてください』と、言ったら離してあげてもいいよ？」

「愛してます 一生貴女の傍に居させてください！！ ……ほら言っ  
た、言ったから離してくれえ！！！」

「……………」

「ギヤアア！？！？ 言ったじゃ無いっすか！ なんで強く締める  
んですか！？？」

こっちは言われた通りに言ってやったのに、それを安心院さんは更

に強く締め付けて来た。

「つか、何で先生はいつの間にか人の貯蔵していた酒を飲みながらコツチを見て『あらら、微笑ましいこと』みてーな空気醸し出してるんだよ。見てないで助けるよ。」

「どう聞いても僕が無理矢理言わせてたって感じがするからやり直し。はいテイク2スタート。あ、アドリブは受け付けるから」

「無理矢理も何もアンタが言った事をそのまま言っただけr y  
OK!!! 死ぬ程愛してます、一生……いや生まれ変わっても一緒に居て下さい、安心院なじみいい!!!!」

とにかく痛みから解放されたいので、脳から捻り出した単語をそのまま言った。

「…………。OK 合格」

その言葉通り、右腕に掛かってた負荷が無くなる。

「あ、危うく右肩が全壊しちゃうかと思った…………」

「最初からそう言えば良かったんだよ」



「貴女がそう言えって言っというて違うんじゃないですよ」

「H A H A H A ! 平和だね」

「その腹の立つツラを止めろくそ教師！」

とまあ、帰って来ていきなりこんな目にあつたが、この三人で新年を迎える事になりそうだ。

てな訳で、新年を迎えるにあたって夕飯の準備を始めたのはいいが、冷蔵庫の中が見事にスツカラカンだったので、少し遅い買い物しようとして車を持つて先生を足に使って、駅前の大型スーパーへとむかった。

「これとこれ、後おせちの材料はこんなもんかな……」

「へえ？ おせちまで作るのか？」

「ああ、お雑煮までやるつもりだよ？ まあおせちなんで重箱に初めから出来てる食い物をぶち込めば直ぐに終わるし」

「年越し蕎麦は？」

「ああ、ちよいと高めなのを買ってあるから」

「お前って案外主夫に向いてるかもな？」

「将来結婚したら近所の人妻の集まり会に俺が混ざるのか？ はは、絵になんねーな！」

先生に言われた通りに近所の人妻と世間話をしている自分を想像しようとしたが、無理だった。

「さて、買い出しはこれくらいにして……あつと安心院さんに頼まれてたもんを買わないと」

「ん？ 何買うんだ？」

「茶葉だよ。しかも静岡原産のくそ高い奴。……ええっと確か此処等へんで見たんだが」

「あれじゃね？　なんかのコスプレしてる姉ちゃんがいると」

先生が指を差した所を辿る様に見ると、年末セール的なノリでお茶の販売をしてる姉ちゃんかいた。

「サンキュー」

見付けてくれた事に軽くお礼を言ってから、お茶売りコーナーへと向かって、物色をする。

「いらっしやいませー！　お茶をお探しですかー？（あら、二人ともイケメン……）」

「ええ、この中に静岡原産の一番高くて美味しい奴ってあります？」

「そうそう、値段は気にしないから美味しい奴を」

お茶については良く分からないので、売り子の姉ちゃんに丸投げする。

「でしたらこちらなんかオススメですよー！（顔だけじゃ無くても素敵……）」

売りの姉ちゃんにサンプルを渡され、それを凝視する。  
うむむ、わからん。隣にいる先生もわかってない様子だし。

「あ、それと、これがそちらの茶葉で煎れた緑茶になります、よかつたらどうぞー！」

二人してアホ面で見っていたのを察したのか、試飲用のお茶をくれた。  
飲んでみる……フム、美味いぜ。  
隣にいる先生も美味そうに飲んでるし、決まりだな。

「OK これ3つください」

フツと笑いながら持っていたサンプルを返すと、パアッと明るい表情を浮かべる姉ちゃん。

「ありがとうございますー！！（ああ、帰っちゃうのね……）」

てな感じでとんとん拍子で事が進み、レジへ持って行って会計を済ませ、買った商品を袋に入れてイザ帰ろうと、駐車場を二人並んで歩いている時だった。

「真!!!」

「あ?」

急にキョロキョロしだす先生。

「? どうしたん?」

「いや、誰かがオレの名前を呼んでた気がしたから……」

「名前って……真?」

「そう。珍しいな、オレを真って呼ぶ奴は限られるんだが……」

今更カミングアウトするが、先生の名前は向島むかしま 真まことらしい。

だが、俺は先生と呼んでいるし、周りの連中も先生と呼んでいるので、俺は苗字は疎か名前ですら呼んだ事が無い。

で、話しは戻るが、その向島先生の事を名前で呼ぶ奴が近くにいるらしいのだが。

「いないじゃん？」

「ん〜？ 気のせいかな？ まあ真って名前なんて珍しくとも何とも無いからな、気のせいかな？」

「じゃね？」

勝手に二人で完結して、再び歩き出そうとした時だった。

「待てってんだろーが！！！」

そんな声と共に俺達の足元に釘バットが飛んで来た。

「は？」

俺の口から出た間抜けな声。

「いつ！？ まさか……！！」

その釘バットに身に覚えがあり気な先生……もとい真。

「ま、まさか……」

急に顔を真っ青、いや土気色に変色させる真。  
何なんだよ、一人で勝手に先行つてないで俺にも教えるよ。

「何、どーしたんだよ？」

「やばい零。今すぐ逃げ　「やっつと、追い付いた!!」……遅かった」

背後から妙に元気な声がするので振り向くと、女の子が一人肩で息をしなが立っていた。

多分将来は百パーセント美人になるであろう容姿だが、着ている服がなんとというか大胆過ぎて、逆に引く。

「よお、真。テメエを見付けて此処まで追いかけたんだよ」

「あー？　ああ、何だよ？　どーしたん？」

何時に無く吃る真。  
そして俺は空気。

「どうしただと？ ヒヒヒ、アンタを見付けて最高に気分が良くなつたからなあ……っー訳で半殺しにさしてくれよ？」

成る程、会話からしてこの二人には何かしらの因縁があるっぽいな。

「ええ？ 今日は勘弁してくんね？ 予定ある」

「知らないなそんな事は。知ってるだろ？ アタシが気分が良いってんだからアンタは黙ってサンドバックになってりやあ良いんだよ。弱いアタシが唯一見つけたアタシだけのサンドバックのアンタにな」

「……はあ」

「……。オイオイ、何なのこの子は？ ヤバイ空気がビンビン出てないか？ アンター一体この子に何した訳？」

流石に言ってる事がヤバ気なので、隣にいる先生に聞いてみる事にすると苦い顔をした先生が口を開く。

「昔ちよつと、ね」



それ以上語る事は無かったが、多分色々あったんだろう。  
そんな風に思考を巡らせていると、対面していた女の子から声を掛  
けられる。

「で？ アンタはコイツの何？」

そんな事を唐突に言われた。

何だか、彼氏が二股掛けて修羅場になってるって風景を思い出され  
るんだが。

「ああ……。一応コイツのダチをやってるんだが」

「ふうん。まあ、アンタについてはどうでもいいや。何故か知らな  
いが見てると気分が悪くなるから見逃してやんよ……。ああと！  
真はこの場に残れよ？」

「……了解」

「……」

さっきから思っただが、この子の言ってる事は目茶苦茶なんだが…  
…。

気分が良い相手を半殺しにするとか言って、逆に見ていて気分の悪

くなる相手を見逃すつて、随分変な考えをお持ちの様だな。  
まあ良いや、見逃してくれるつてんなら喜んでこの場を去ろうじや  
無いか。

どーせ先生は半殺し程度じゃびくともしないし、イザとなりゃあ再  
臨<sup>ソット</sup>で元に戻せば良いしな……と思いつながら先生から車の鍵を受け取  
り、一人車の中でラジオを聞きながら待つてる事にした。

……早くしないと安心院さんに怒られるなこりゃ。

結局なんだかんだで一時間は待たされた。

そして案の定ズタボロにされて帰ってきた先生に再臨の力を使って  
元に戻し、家に向かって車を発進させた。

「で？ あの後、意味のわかんねー鎌鼬みてえな攻撃でズタズタに  
されたと思つたらいきなり抱き着かれた、と？」

「ああ、ズタズタにされるのは初めからわかつてたけど、抱き着い  
て来たのにはオレも意味が分からなかつたぜ」

まあ、だろうな。

半殺しにされたとおもつたらいきなり抱き着いて「お前はアタシの  
もんだ」的な事を言われりゃあ誰だつて訳が分からなくなるわな。

「その子、歳は？」

聞いて無かったのでこの際だから聞いてみる事にした。

「ああ、お前と同じ年だよ」

へ〜？ 今の俺と同じ年か。

「どういう関係なのよ？ あの様子じゃあ、相当アンタに執着してんぜ？」

あのイレ込み様は半端無いと思う、あの子の秀囲気がそう語ってた。あれか？ “ヤンデレ” って奴か？

「ああ、社会人になる前に住んでた家でお隣り同士でね。で、あの子んちの親は、どういう訳かあの子を嫌っててしょっちゅう虐待紛い……いや虐待をしてたんだよ」

「フムフム」

何だか急にダークな話しになってきたな。

「で、たまたまそれを見ちまったオレが、余計な気を効かせてあの子と一緒に遊んだり何かをしたりして傍にいたんだが……まあオレも社会人になつて独り暮らしをし始めた時にはあの子も成長したから大丈夫だと思つて別れたんだよ。その時はあの子の両親も蒸発しちまつてたし……」

「はあ……」

結構処かかなりダークだな。

「それから会つて無くて、この前5年振り位に会つたんだが……あんまり変わつて無かつたな」

「変わつてないって……昔からあんな激しい性格してたのか!？」

こりゃ驚いたぜ、て事は先生は昔からあの子のサンドバックだったつて事になるぞ？

「あの子は……。まあ、少し変わつててな。自分でわざと傷とか作つてはその傷をわざわざ広げる様な真似をするんだよ」

「マジ?」

自分で傷を作るって、さっきの子は随分とへビーな性格だな。

「ああ、だからオレが“自分で傷を付ける位なら変わりにオレを半殺しにでもなんでもして作った傷を広げる”って言ったんだよ」

「うわぁ……」

口説き文句にしちゃあ……またキツイもんがあるな。

「そしたら、オレが傍にいる間はそんな真似をしなくなっただが……今はどうなんだろうな。未だにオレをサンドバックだと思ってるあたり、やっつては無いと思うが」

「さぁ?」

それは本人に聞かないと分からないな。

「しかしまあ、あんたも随分難儀な性格してるよなあ?」

窓に肘を付いて頬杖を付きながら呟くと、先生は自嘲気味に笑いながら答える。

「それがオレのアイデンティティだし、それがオレの能力スキル、自己犠牲サクリファイスだからな」

「自己犠牲サクリファイス“他人の痛み、傷、心的外傷、その他マイナスとなる物全てを自分が代わりに請け負う能力”だけ？」

「ついこないだカミングアウトされた時はちょっと驚いたが、まあよく考えりゃあ俺の能力について感づいたりとか何かしら思い当たる節はあるからそこまで驚かなかったんだよな。」

「まつ！ あれだな。オレの嘘みたいな過去話は終了だ。飛沫も無事生きてる事もわかったし、今日はそういう事は忘れて飲みまくろうぜ？」

「……………。だな！」

顔を見れば、先生が無理して言ってるのが分かるが、そこを突いた所で俺にどうする事も出来ない、だから思考を切り替えて今は楽しむ事にした。家に着く間、二人してくだらない事を笑い合ながら話しながら。

車から荷物を降ろし、家へと入る。

「ただいま〜っと」

「お帰り、遅かったね〜」

居間兼寝室から安心院さんの声が聞こえる。

遅くなった理由は言いつつもりは無い、何となく。

「何だか、疲れたぜ……」

入るや否やぼつりと咳く先生。

無理も無い、戻した（リセット）とはいえ、ズタズタにされちまっ  
たんだからな。

「オイオイ、年を開ける前に寝ちまうのか？」

「まさか、んな馬鹿な真似は5歳の時からやってね〜よ」

だよなあ、じゃなけりゃあ美味い酒が飲めないってもんだ。

「さて、と。俺は飯と酒の準備をすっから、アンタは風呂に入って

きなよ。準備は出来てるし、服は……ジャージでいいか？」

「マジ？ オレはなんでも構わないよ、サンキューな」

「おっ」

他愛の無い会話を交わして、夕飯の準備に取り掛かる。さて、と。軽いもんでいいかな。

〈30分後〉

「出来たぜ？ つと先生はまだだな……」

出来上がった夕飯を居間兼寝室へと持っていく。視界に映るのは、人のベッドの上でゴロゴロしながらチャンネル片手にざっぴんぐをしている安心院さん。

「待ちくたびれたよ。つと……今日もまたリアクションの難しい食卓だね」

「……嫌い、嫌なら食わなくて結構！」



毎回毎回、人の作る飯にケチつけやがって。

「別に嫌だなんて言ってないじゃないか。有り難く食べさせて貰うよ」

へらへらと喋りながらテーブルの前へ座る。

「先生は……後少しで出るみたいだし、ちょっと待ってて貰えますか？」

「勿論。僕は食いしん坊じゃ無いから待てるよ」

「つーか、毎回の疑問だったんですが貴女って食事の必要ってあるんですか？」

そもそも、目の前に存在してるのが嘘みたいな人物だし。

「キミは僕を何だと思ってるんだよ。確かに飲食の必要は無いけど、食べたくなる時位あるさ」

「へ〜？ ついでにもう一つ」

テーブルにオカズと酒をセッティングしつつ聞く。

「なに？」

「何で今日は此処来たンスか？」

ちよっぴり気になる疑問だ。

「ああ、僕が存在出来る場所が今の所零君の家だけなんだよ」

「んで来たと？」

「まあ、零君と一緒に他愛の無い事を話したいってのもあるけどね」

……。うっん、嘘か本当かが見抜け無い。  
本音なら地味に嬉しいが。

「へっ？ お仲間のところには行かないンスか？ ええっと確か七億人位のお仲間が居るとか居ないとかって前に言ってますでした？」

「彼等は悪平等<sup>ボク</sup>自身だよ？ 自分に会いに言ったってしょうがないじゃ無いと思わない？」

「あー納得」

自分に会いに行った所でつまんないらしいね、この人曰く。

「まっ、俺は別に貴女が来ようが来まいが構いやしませんかね、特に今日みたいな日は」

「おろ？ 零君が少しデレたぞ？ 新年は大雪かな？」

一言余計だな。

風呂から出た先生にジャージを貸し出し、それを着た先生と共に、三人だけの忘年会が始まった。

「あゝあ、本来なら女の子がいっぱいのハーレム状態だったんだよな……」

麻婆茄子を突きながらボソリと呟く先生。

「アンタまだんな事言ってるのかよ？ いい加減諦めたと思ったんだが」

それに返す俺。

「ん？ また二人でナンパかい？ 全く、零君には僕が居るんだからそういう事は余りやって欲しく無いんだけど」

突然訳のわかんねー事を吐かし始める安心院さん。

「まあ、失敗したけどね」

「ああ、どいつもこいつもカップルだらけだったぜ……」

「へ〜？ そりゃあ何よりだね」

それで済ますなよ。

先生にとっちゃあ何よりで済まされる問題じゃ無いから。

「でさあ、オレが必死こいて女の子を探してたのに、コイツは

黒神さんといちゃついてやがったんだぜ？ 腹の立つ話しだよな。」

「は？」

「おい」

突然何を言っつてやがるこの馬鹿は。

「だってそうじゃん？ 何時に無く黒神さんに優しく接してたい  
！」

「なにそれ、そんな話しは聞いて無いよ？」

「別に貴女に言う必要なんて無い おおっと近付くなよ！ 捌折  
りの刑は勘弁だぜ」

わざとらしく声を張り上げて言う先生。

ニヤついた顔が、俺の暴力衝動を助長する。  
そして安心院さんが俺に近付いて捌折りをしようとしてくるが、止  
めるには理由を言わないといけない雰囲気だ。

「だから言っつたる？ あんな寒そうなツラしてりゃあ、余程の鬼じ

やねー限り服位貸すだろ？ いやあげちったけどさ、先生もそう思うだろ？ 少なく共俺はそう思う」

いくら苦手だつていってもだよ？ 人とはぐれた揚句に迷子だぜ？ 軽く同情しちまうよ。

「ふうん？ オレが見るに黒神さんは満更でもなさそうだったけど？」

「だから何だよ？」

「案外、お前の事好きだつりしてな？」

「うわあ、話しが飛躍しやがった。」

「だが、それは二百パーセントありえない。」

「無い無い、前に偶然阿久根つて先輩が告った時に『私は誰かの物になるつもりは無い』的な事を聞いたし」

「うわあ、人が告つたのを盗み聞きとかサイテー」

「偶然聞いたつて言うてんだろ？ ふざけてるとアルゼンチンバツ

クブリーカーをくらわせんぞ?」

ニヤついきながら話しゃがって、いい加減ぶっ飛ばしたくなるぜ。

「へ〜? 零君って案外モテモテじゃないか。お姉さんを辱めとい  
てさあ?」

「モテモテ……かあ? あれがモテるとは思いたく無いし、つーか  
俺はアンタに何もしてない」

あること無い事……主に無い事はっかり言いやがって。  
何時かシメてやりたくなるぜ……絶対返り討ちに逢うが。

そして日付が変わる1分前。

「さてさて、今年も後1分を切った訳だが……」

「ひゃひゃひゃっ! 新年になっても暫くお前んちに居座るぜえ!  
」!

すっかり出来上がってる先生。

「先生がそうするなら僕もそうしよっかな？」

ちやっかり人んちに厄介になると言ってる安心院さん。

「勝手にしてくれ……。あっ、あと三十秒か」

今年も結局帰れ無かったか……。  
来年に帰れば良いんだが、そう思いながらチラリと二人を一瞥する。

「どーしたの？ 僕に惚れた？」

「アツハハハ！ 来年こそは結婚するぞー！！」

……。 たった二人だけど、ダチが出来ちゃったなあ。  
これじゃあ

「5秒前！ 4、3！」

テンションMAX状態の先生が立ち上がりながらカウントする。



「2」

ノーマルテンションの安心院さん。

「1」

そして俺……。

「「A HAPPY NEW YEAR!」」

俺と先生が腹のそこから叫んだ。

こんなに優しくされちゃあ、帰るのが少しだけ……ほんの少しだけ躊躇っちゃうぜ。

「つーか安心院さんも一緒に言ってくださいよ」

「やだよ、恥ずかしい」

「安心院さんに恥ずかしいとかって感情があるんだな」

「キミ達一人とは一度キツチリ話しがしたいね」

終了

外：「だ〜か〜るあ〜！！ さつきから言ってるだろう〜？ サラダセットを頼

この三人はトリオ漫才的なノリで動かしたい様な気がします。

22：「事件は生徒会室で起こってるんじゃないねえ、現場で起こってるんだ！！」

新年一発、仕事場から投稿。

次回で委員会偏的なのが終了する筈です。

てな事ですが、余り期待せず読んで貰えると楽かもしれませぬ。  
文章は最低値を常に更新中ですが、サツパリ素麺い○の糸並のサツ  
パリ感で読んで頂ければ……と思ってる次第です。

22：「事件は生徒会室で起こってるんじゃないねえ、現場で起こってるんだ！！」

突然だが、俺は山崎○正を心から尊敬している。

他には森○中とか出川○郎や江○2：50分、ダ○ヨウ倶楽部の上島○平等も同等に尊敬しているのだが、何が言いたいかと言つと彼等は“身体を張った芸で爆笑を生み出す”という事だ。

EP22：start

いつの間にか、俺の人に対する認識についてを彼等に説明した後、漸く雲仙君についての話し合いに戻った。

「あゝあ、全身がマジイテエ」

「は？ お前怪我していないだろ？」

「いやいや、俺のこの痛々しい姿を見れば、いかに熾烈を極めた攻防……いや、一方的にボコにされただけだったの位わかんだろ？ キミの角膜と水晶帯はあれか？ビー玉で出来てんのか？」

頭に包帯、胴回りにはサラシの様にして巻いている包帯を見せびら

かしながら『私は怪我人ですよ』とアピールするが、めだか君を筆頭に他のメンバーも『テレホンショッピングで紹介されている万能洗剤の驚き効果を見せられてる』かのような目で俺の姿を見る。ある意味で信用されているのは解るが、素直に喜べない。

「チツ、取り敢えず帰って良いかな？ 今日には十二分に体張ったしいいでしょ？」

こうなれば、仮病が無理だと判断したので、包帯を外し、そして今度はストリートに早引きの許可を頂く事にした。まあ恐らく、いや確実に無理だろうが。

「ふむ、良いだろう。一応はお前には助けられたことだしな」

ほら見る、やっぱり駄目だ あれ？

「え？ い、良いの？」

まさかの早退許可に、もう一度確認を取る。

「そう言ってるだろう？ 帰りたいかったらさっさと帰ればよからうに」

広げた扇子を口元に持っていき、妙に棘のある言い方をするめだか君。

そんな言い方されると、何だか帰る気がしなくなるんだが……帰るけど。

「よし、そんなら帰るが……ホントに良いんだな？ 後になってやっぱ駄目だはやだよ？」

もう一度確認をする。

色々と裏がありそうな気がしなくても無いが、珍しく許可をしてくれるってんなら喜んで帰宅させて貰うぜ、不知火さんとの約束もあるし。

「なんだ、そんなに私の言葉が信用出来ないのか？」

「お互いに信用する程俺達って仲良しじゃ無い気が　　うん、  
今のは失言だったね。だから隅っこで体育座りは止めてくださらない？」

また俺の余計な一言で、部屋の隅っこで膝を両手で抱えて落ち込みだすめだか君。

メンタルが強いんだか弱いんだかわからんなこの子は。

でまあ、紆余曲折あったのは言うまでもないが、結局帰る事にした

ので、自身の鞆を持ってポケットにある携帯を取り出し電話帳の項目を操作する。

不知火……不知火………あつたあつた。

しかし、この世界に来てから頻繁に人と連絡先の交換をしまくったせいか、さ行の苗字だけで50人はいるな。

「じゃあ、後は頼むな？」

そのまま発信ボタンを押し、携帯を耳に押し当てつつ、生徒会室に残るメンバーに軽く手を挙げながら挨拶をする。

「おっ」

「また明日」

善吉君ともがなちゃんが軽く微笑みながら言ってくれたのに、ちょっと嬉びを感じながら生徒会室の扉を開けてから廊下へと足を入れて、身体を右へと向ける……る？

「……」

「おい、どーした？」



「零？」

善吉君ともがなちゃんが、廊下に半歩踏み込んで首を右正面に向けた状態で固まつてる俺に声を掛ける。

俺はそれに対して返事をしない否、出来ない……俺の視界に映ってる人物が俺の思考をシャットアウトさせているからだ。

その人物の正体は、無駄に長い廊下の向こうからやってく。

小学生並の背丈、白い髪……ヤバイ、もしかしなくても先程俺をボコにしてくれた雲仙君だ。

さっきまでボロボロにされた姿が、何事も無かったかの様に元に戻ってる今の俺の姿を見れば、確実に不信な目で見られる事請け合いだ。

「……………疾！」

こうなった時の俺の迅速な行動は、警視總監もんだと自慢出来る程早かった。

即座に携帯の電源を切ってから右向け右をし、キョトンとしている善吉君達を無視しながら再び生徒会室に入り、0.5秒で頭に包帯、腕にギプスをはめ込んでからソファァーにダイブ。

そして……。

「あゝヤベエ、急に全身に激痛がきたあ……………こりゃ動けないよ」

全力で仮病モードに入る。

周囲の子達の視線が、おかしな人を見るような目で見てくるが、今は気にしてる暇が無い。

「霧生君？」

「急に顔を真っ青にしてどうしたんだよ？」

阿久根君と善吉君が俺の珍行動について質問する、ちゃんと説明してやりたいのだが、雲仙君は直ぐそこなので説明できない。だから一言に纏める。

「いいか皆、俺は怪我してて寝たきりだ」

「」「」「は？」「」「」

「いや、は？ ってるのは解るけど理解してくれ、俺は怪我人OK？」

「何言ってるんだ？ 怪我人も何もお前ピンピンして」「シャラッブー！」「る？」

くそっ！ 説明してないから上手く伝わって無い……。

でも初めから説明してたら直ぐそこまで来てる雲仙君が

「よお、黒神。どーやら全員救助できたみてーだな？」

「「「!?!?!」」」

「雲仙二年生……?」

Oh Shit! ひよつとしたら素通りしてくれ無いかという俺の僅かな希望も虚しく、生徒会室に入ってくる雲仙君。こつなつたら俺は観葉植物の如く景色に溶け込んでやんぜチキシヨウ。

そういう訳で、只今私は観葉植物に付いてる埃の如く寝たふりをして存在を消しています、穩便に事を終えるのを祈りながら……くそ、ソファが安物なのかどうかは知らないが首が痛くなるぜ。

「で、どうやらオレの攻撃手段を見抜いたらしいじゃん？」

「ああ、貴様が使ってたのはこのスーパーボールだろう？」

「ご名答。一年以上そのやり方でやって来たけど、タネまで見抜いたのはテメーが初めてだせ？」

パチパチとわざとらしい拍手をめだか君に送る雲仙君。

ソファで丸まつてる俺に気付いてる様子はまだ無い。

ん？ いま、手を後ろに持ってたって鍵閉めて……………無いな、見間違いだな多分。

「まあでもバレちまったんなら終わりな、言うなれば手品みてーなものさ」

そう言つて、服の袖から大量のスーパーボールを床に落とす。

おお、そこら中がスーパーボールだらけで俺の子供心的なもんが撥られるぜちくしょう。

……………。皆見てないみたいだから一個位ちよるまかしたってバレないよな？ だってあんなに跳ねるスーパーボールを見せられりゃあ一つや二つは欲しくなる。

「でも実際、この手が通用してたつてのに、黒神は解るがまさかそこで居眠りこいてる奴にも効いてねーってのは流石にシヨックだっ

ぜ？」

「!？」

雲仙君の視線が、床に落ちてるスーパーボールを拾おうとした俺に向けられた。

それにつられて善吉君達も俺の方を見る。

「な？ そうだろ霧生？ その意味のねえ包帯とかしちゃってるけど、実際効いちゃいねえんだろ？」

「……………」

下手に喋ると、バレちまうから雲仙君に言われた事に黙っているが、もう此処まで言われりゃあバレてるのと同じだ。

せっかく包帯も巻き直して、ソファで痛々しい患者の如く震えながら丸まってたのに、ソッコーバレたって……空回りにも程があるぜ。

「オイオイ、先輩が聞いてるのにシカトか？」

「あ、ハイすんません。実際はもう普通に動けますけど、痛いのは変わり無いです」

バレたのならしかたないって事で、開き直る事にした。

「やっぱりか、まったく普通の奴にまで効いちゃいねえとなれば、オレの評判もがた落ちだぜ」

「へえ、すんませ〜ん」

何故かは知らないが謝っとく事にしといた。

それが、穩便に済ませる最善の策って奴だからだ。

その誠意の無い俺の謝罪に対して、肩透かしでも喰らったのだろう。

微妙な表示をした雲仙君は、再びめだか君に話し掛ける。

さて、俺はどうするか……。

（なに、あのヒネてそーな子供。全然可愛くないんだけど）

包帯を外し、何をしようかと考えつつ、雲仙君が床に落としたスパーボールをちよるまかしている矢先、もがなちゃんが俺と善吉君と阿久根にだけ聞こえるように一言呟く。  
初期に出会った頃の無表情状態で。

（喜界島さん聞こえてる、聞こえてるって！！）

うん、善吉君と阿久根の言う通り、自分なりに小さい声で言ってるつもりだろうけど、多分全部聞こえちゃってるんじゃないかな？  
注意してる二人も人のこと言えないケドさ。

（もがなちゃんよ。雲仙先輩はあんなナリしてるけど、一応あの人は俺達の先輩に属するから余り大きな声で言っちゃ駄目よ？）

（でも実際そう見えるし……）

（うん、言いたい事は解るんだけど……もうちょい良い感じの感想を言っただけよ？）

今分かったけど、この子って結構毒舌というか、物をハッキリ言ってしまう時があるな……。

俺がもし言われたら部屋の隅で体育座りコース直行の自身がある位に刺さるもんを感じる。

（良い感じって……例えば？）

教えてくれて目で見ると俺を見るので考える。  
うむむ、俺が感じた雲仙君の第一印象は……。

（ええっと……とてもクソ生意気な……じゃなくて考え方が大人な

糞餓鬼　でも無くてお子様、とか？

(……お前もあんまり変わんねーぞ)

(アタシより酷いし……)

(同じ穴のムジナって奴だな)

うぐ……つい本音が出てしまっただけなのに、三人から駄目出しを頂戴してしまつたぜ。

つーか阿久根君よ……あんま上手く無いぜ？

そんな事より雲仙君とめだか君の話し長いなあ……。キミ達って初めて会話を交わしたって横で聞いてたけど、よくそんなに話す事があるなあ……。俺がもしめだか君と向かい合つて会話をしても10分、いや1分も持たないと思うのに、さっきから子供の癖して小難しい事を言つてる雲仙君を軽く尊敬する　あ？　今雲仙君、窓の鍵を掛けたよな？　何でだ？

「どつちやら二つの誤解をしているようだな雲仙二年生。第一に上から目線性善説などは善吉が勝手に言ってるだけで私は聖者等では無いし、第二に」

第二に、の所で急に何かに気付いた様な顔をしためだか君、何だ何だ？　何時に無く焦つたツラしてるが……。



「貴様達今すぐ離れる！ さっきこやつがばら撒いたのはスーパーボールではない、火薬玉だ！！」

と、言ったためだか君。

成る程成る程、スーパーボールじゃ無くて火薬玉……え？

「おつとバレたかい？ ダメだなー俺つて、手品下手過ぎ！ たがもう遅い、仕掛けはギリギリ終わってる！！」

急に態度ががらりと変化し、両手一杯にマッチを取り出す雲仙君。  
え、マジなの？ このボールマジ火薬玉！？

「テメーが甲賀正谷ならオレは伊賀鰐隠れの里の忍つてワケよ。炸裂弾灰シンデレラかぶり！ 1個ありゃあ老朽化した壁くらいなら余裕でぶち抜けるシロモノだ」

雲仙君が何やら言ってる気がしてるが俺は最上級にテンパってる。だって、スーパーボールだと思ってたから5・6個はズボンのポケットに入れちまったんだぞ！？  
そんなもんが爆発でもして見る……違う意味でBAD ENDだよちくしょう！！

「…………」。密閉状態の部屋でそんなもの爆発させたらキミもただじゃ

済まないよ?」

「そつだ! 子供っぽい脅しはやめろ! 悪ふざけにしても度を越してる!」

「そ、そうですねよ雲仙先輩! もし今そんなもん爆発させられたら俺の下半身が黒焦げになってしまいます!」

「テメー等ニュースとか見てねえのか? ダツセエな、最近のガキは何考えてるかワカンネーんだぜ?」

だ、駄目だ。あの目は本気でやろうとしてる目だよ。

確かに最近の子供の犯罪率は高いかもしれないけど、何もキミまで便乗する必要は無いじゃんよ。

「ってオイ。何でテメーは火薬玉をポケットに入れてんだよ」

「い、いやだつて、スーパーボールだと思つてたから少し位貰つても良いかなあ〜って……くそっ!! 何でこんな時に限つて手が入んねーんだよ!」

「お、お前、いつの間にかそんな事してたのかよ!」

善吉君からツッコミ……いや怒られた。

「だ、だってえ……くっ！ スーパーボールって男のロマンが詰まってる」

「だからと言って何で拾う真似なんかしたんだ！」

「お、落ちてたから要らないのかなあ、と思ったんで」

「……だからって」

「う、うん。今この瞬間にも後悔しまくってるからそんな可哀相な目で俺を見ないでくれええ！」

（ふむ、一回零には、虚勢とやらでも経験したら良いと思ってしまった私は間違ってるのだろうか……？）

善吉君に続き、阿久根君ともがなちゃんからも駄目出しを頂いた。そして、そこでボソリと何やら物騒な事を呟いたためだか君よ……聞こえてるし、男が一回ソレをやった瞬間終わりだから。

「まっ、聞いた限りじゃ、テーマは節操無しって聞いたし、此処等で新しい人生にチャレンジするのも悪くねーんじゃないか？」

「い、嫌ですよそんなの!? 先輩も一緒にやってくれるなら考えますけど!」

「なぐんでオレがそんな事に付き合う必要があんだよ? 嫌だね、まだ一回も使ってねーし」

「それを言うなら俺だってまだ一回しか 何だよその目は?」

全員から非難めいた視線を向けられた。

いや、俺の言いたい事も解るよな? 特に善吉君と阿久根君は。くっ! 時間稼ぎしながら火薬玉を取り出そうとしてんに、テンパってるせいか上手く取り出せない……! ヤバイってガチで俺の下半身がジ・エンドしちまううう!!

「まあ、この馬鹿はほつといて、どーするよ黒神。こっからオレを見事改心させてみせんだろ?」

今にも着火させる勢いの雲仙君。

「ま、まっってください。まだポケットから取って」

「それともやめてくださいってお願いしてみるか？」

無視かこの野郎！！

「…………。やめてくだ」

「おせえよ、ボケ」

オーマイガ！！　めだか君が言い終わる前にマッチに火を点しやがった雲仙君。

その瞬間、耳をつんざくような爆音がして、目の前の景色が真っ白になり下半身に嫌な衝撃が伝わったと共に「こんなしょうもない事に能力が勝手に使用されてしまう…………」と二度と物を捨つのは止めようと固く誓った後に意識が飛んだ。

「…………うあ？」

頭に鈍い衝撃と共に意識が回帰する。

「あ、う……?」

上半身を起こす……くっ、目が見えないせいか目の前が灰色のもんしか見えやしねえ。

「ここは……あでっ!?!」

記憶が飛んでいて、先程までであった事を思い出そうとした矢先に頭頂部に鈍い痛みが再び遅い掛かる。

何だと思っ、手探りで辺りを探ると痛みと痛みの正体が、石……というよりコンクリートが頭に落ちて来たのだという事実と、先程までの記憶が復活した。

「本当に爆発させやがって……ハッ!!」

記憶が戻ったのを機に、直ぐさま自分の下半身を触ったりとかして観察する。

触れたという感覚はある……という事は俺の下半身は無事生還したって事だ。

嬉しいんだが素直に喜べない、何故なら。

「オートサーチ自動修復……しちまった」

あんな爆発で俺の下半身が無事な訳が無いのはわかってる。能力が勝手に俺の傷を、健康体の時まで戻したって事だ。それは即ち、俺の能力が勝手にパワーアップしたって事に繋がる。これでまた俺が元の世界に帰る確率が下がった。いや、もしかしたら帰れないのかもしれない、それくらい俺はこの世界に馴染んでる気がするわ……。

「はぁ……そうだったら進路とかどうするかね」

何と無くだがめだか君達の顔が浮かんでくる。

「……ん？ そーいや善吉君達は何処だ？」

浮かんで来たついでに思い出した俺は、辺りをキョロキョロと探してみるが誰もいない。

まさか死んだ……訳じゃ無いよな？ そう思いながら重い腰を上げて、俺を覆うよにしているコンクリートの固まりを退かして、外に出てみて探す。

光に目が慣れてないのか妙に眩しい……あつ、居た居た。案外近くに居たな。

「おう、その様子じゃ皆無事みてえだな……」

「ぜ、零か？」

三人に話し掛けたつもりなのに、反応したのは善吉君のみで、他の二人は、爆発で見るも無残な事になってる生徒会室を眺めていた。

「その様子じゃ無事みたいだな？ 不自然な位傷がねえけど……」

「ああ、ギリギリで火薬玉を取り出せて、ついでに雲仙先輩に向かって投げ付けたからな」

と、適当な事を言っでごまかす。

まさか能力か何かで回復しました……なんてお伽話信じる訳もねーし話せない。

まあ、そんな事はどーでもいい。俺としてはさっきからこちらも見ずに生徒会室の残骸を眺めている二人が気になる

「さっきから二人は何を見てんのさ？ 視線の先を見ても無いみたいだ……いや、見えて来たかも」

煙りが若干晴れてから見えたのは、めだか君が雲仙君を割とガチで殴り飛ばしてる姿が見えた……。

何故だか割と最近見た様な姿なのは果たして気のせいなのだろうか……。



「めだかちゃんか乱神モードになっちまったんだが……マジでヤバイかもな」

「雲仙先輩がか？」

「そつだ」

「だろつなあ」

乱神モードなんて変テコなネームは初めて聞いたが、マジで雲仙君がヤバイのだけは、善吉君の切迫感ある顔から伺える。

だけどあれはどーしょうも無いでしょう？ だって只のパンチ一発で餓鬼の体重とは言え、人がこれでもかかってくらい吹っ飛んでるもんなあ。

あの子の性別を時々疑う時すらあるぜ、等という俺の感想は置いていて。

「餓鬼とはいえ、年上の女にタコ殴りにされてる光景はあまり見れなもんじゃねえし……しょうがねえな」

何でか知らんが、止める気配の無い三人を横切り、今現在吹っ飛ばされて意識が飛びかかっている雲仙君の救助と、怒りによって目覚めた伝説の戦士状態のめだか君を止める為に、悲惨な状態となっている生徒会室へと向かう。

「お、おい!？」

「何をする気だ!？」

行きたくねえ〜とか思いながらダラダラと歩いている最中、後ろにいる善吉君達から声が掛かる。それに俺はいかにも怠そうにしながら振り返る。

「何って……止めるんだよ、あの子を」

後ろ指でめだか君達の居る生徒会室の残骸の場所を差しながら答えると、三人から無茶だの何だのと否定的な意見が飛んでくるが、お前等あの子達の友達だったら見てないで止めてあげろよと言ってやりたい。

暴力沙汰起こしてるからもう遅いかもしれないが、もし何かの拍子でめだか君から受けた傷が一生障害となって残ってしまうなんて事になってしまったら退学程度じゃ済まないんだぞ？ 二度と言うが手遅れかもしれないけどさ。

とまあ、散々心の中で人を非難している俺が人の事を言える訳じゃ無いんだがな。だけど、殴られたから殴り返す……なんてやり方は周りにバレねえ様にやるのが一般的な訳だし、ここは止めなけりやならんのよ。

「無茶でも何でも止めなければ、文字通りあの子が遠い世界に行ってしまうぜ？ 例えばカンカン ええっと、鑑別所とか行ったら、

いくらこの学園が変に校則が緩い場所とはいえ退学になっちまうだろうが。そんなの嫌だろ？ 少なく共俺は嫌だね」

認めたくはねえが、あの二人以外に俺の正体的なもんをある程度察してるあの子をみすみす手放す気は毛頭ないからね。

「退学って……でもあの雲仙って子が悪いんじゃないの!？」

「もがなちゃんの言う通りだが、喧嘩両成敗って言葉がこの世にあるくらいだし、いくら生徒会室を爆破した雲仙先輩が悪いとはいえ、あんだだけ殴る蹴るしちまえば、今度はめだかちゃんの方が悪くなっちまうよ。第一これだけの騒ぎを起こしちまえば警察だって来るだろうし、まさか『理科の実験ミスで爆発しました』は通用しないと思うぜ？ 理科室は向こうだし」

例え雲仙君が悪いなんて話になっても、めだか君が変な意味で更に目立ってしまうだろうしな。もう遅いが、彼女を“暴力沙汰を起こした優等生”のレッテルだけは貼らせる訳にはいかないし。

「まっ、っー訳だから俺は止めに行くから君達はそこで明日の昼飯の事でも考えてな……」

そう言いながら三人に再び背を向けてから歩き出す。

……嫌に喋ったな今日は。ナンパ以外で喋ったのも久しぶりだぜ。

「おい、待てコラ」

「なんだ　　うっ!？」

またまた背後から俺を呼ぶ声がしたので振り返ったら、いきなしボディに鈍い衝撃が走った。

その正体は、言わずもながら善吉君のボディブローだったりする。

「何を一人でカッコつけてやがんだよ、似合わねえぞ？」

「な、なにを……?」

腹パンされてうずくまる俺の目の前に立って毒舌を吐く善吉君。

「人吉クンの言う通りだ。キミに一々言われ無くても最初からめだかさんを止めなきゃイケないことぐらいわかってたさ」

「そらすんませんでした」

フツと笑いながら「自分覚悟注入しました!」なツラで俺から見て善吉君の隣左隣に立つ阿久根君。

だったら初めの方で止めて頂戴よと言いたくなかったのは秘密だ。

「アタシも行く。黒神さんには助けしてくれた恩があるし」

阿久根君と同じ様な目をして右隣に立つもがなちゃん。

何だ何だ？ 全員何で知らんがやる気になってるじゃないの？

まあ俺じゃ多分 いや100パーセント一人じゃ手に負えない相手を止める事になるから人手……特に、善吉君と阿久根君の参戦は大助かりなんだが、もがなちゃんは大丈夫なんか？

「阿久根先輩と善吉君はアレにしても、もがなちゃんは大丈夫なのか？ 一応あの子も女の子って分類されてるけど、単純な力はマウンテンゴリラ並の馬力を持つてる訳なんだが……」

「そういう問題じゃ無いよ零。それに、女の子に向かって言う言葉じゃ無いよね？」

妙に静かな口調でもがなちゃんに注意されちゃった。

確かにマウンテンゴリラのチヨイスはまずかつたとは一瞬思ったけどどげ。

「スマンスマン、訂正するわ。彼女を止めるのは骨が折れる作業だけど大丈夫か？」

「うん！」

一応の訂正をしてもう一度聞くと、今度は元気なお返事を返してくれた。うんうん、元気な子は好きだよという俺のどうでもいい感情を挟んだが、これで戦力は補強された。

「じゃっ、いつちよやるか？」

「「「おう（うん）！」「」」

そういう訳で、結局四人全員で乱神モードとやになってるめだか君を止める為に走り出す。どうやって止めるかの話しはして無いが、その場の状況で考えれば良いかな多分。

まあ最悪、最終手段として無賢蔵ゼロ・インフイニティを使ってめだか君の乱神モードとやらを奪いとつちまえば直ぐに終わるだろう。

だけど、無賢蔵はあくまで最終手段として使いたい。でなければ、俺が乱神モードとやらを習得してしまうので、出来れば避けて通りたい道だ。

そんな事よか、俺はめだか君が無賢蔵を習得して欲しいと思ってる。もしそうなった場合、俺以外に突然変異者オレが増える事にはなるが、もしめだか君が突然変異者ミュータントになれば、俺の中にある再臨リセットを消してくれる可能性があるのだ。

そうになったら……フフフ。

まっ、なればの話しだけだね。

続  
く

22：「事件は生徒会室で起こってるんじゃないねえ、現場で起こってるんだ！！」

北斗の拳に登場する天才キャラ“アミバ様”がケンシロウの残壊積歩拳で死んだ後に“めだかボックス”の世界にトリップして無双しまくる……てな話しを一瞬だけ考えたのですが、カオスなネタしか考えつかない。



23：「今からホワイトツリーハウス行こうぜ！」

え？ 何それって……白

ギャグなんで！！

もはや言い訳ですが、ギャグなんで！！ と割り切って欲しかったり……。

そんな感じでござ。

23：「今からホワイトツリーハウス行こうぜ！」

え？ 何それって……白

なんやかんやとあつたが、4人で暴走状態のめだか君を止める事になつた。

「で、どうやってめだかちゃんを止める気だよ？」

雲仙君がめだか君に散々タコ殴りにされたのだから、コンクリートの固まりにもたれ掛かって気絶寸前です、つてな現場の直ぐ近くにあるコンクリートの陰から4人で覗いていたら、善吉君から声を掛けられる。

「わからん」

「え？ 何か作戦とかを考えて無かったのかい？」

「あんなにエラーソーにしといて無計画かよ？」

「う、煩いな。一応案はあるんだよ」

「それを言えば良いじゃん」

何だよ三人揃って、俺に押し付けやがって。  
俺は作戦考えたりとかするのが一番苦手なんだよ。

「えーっと、取り敢えず俺が彼女の前に行つて、適当な事をして時間を稼いでる間に、隙を見たキミ達が後ろからめだかちゃんを羽交い締めにする……とか」

今言われて適当に思い付いた案を皆に説明する。簡単な話し、俺が雲仙君の代わりに半殺しにされてる間に善吉君と阿久根君ともがなちゃんの三人でめだか君を後ろから押さえ付けながら説得する……てな感じだ。

「成る程な……だけどお前は大丈夫なのか？ 今のめだかちゃんが、会話に応じてくれる程理性的じゃ無いんだが」

この中で一番めだか君の事を知ってる善吉君からの意見。

「だから俺が行くんだよ。殴られ慣れてる俺が行った方がね」

ひっぱたかれた回数ならこの中の誰よりも一番だから俺は、と何の自慢にもならない事を思つ。

「ふむ、仮に後ろから押さえ付ける所までは成功しても、どうやってめだかさんの乱神モードを解除……というか普通の状態まで戻すんだ？ ハッキリ言って、あそこまでイッてしまったためだかさんを止めるのは容易じゃ無いぞ？」

「その時はその時で、俺が動きます」

阿久根君が難しそうな表情で言うのに対して適当に答えるが、その時は最終手段を使用するまでだ。

「動くって何を？」

「まあ……見てからのお楽しみだ」

もがなちゃんの不思議がる顔に笑ってごまかしながら答える。  
もし三人の説得で無理な様なら、無賢蔵・再臨のどっちかを使用してまであの子を止める算段だ。

「お喋りは此処までにしてそろそろやるぞ。雲仙先輩が限界来てるみたいだし」

意識が飛びそうになってる雲仙君を眺めながら全員に言う。

「ああ、頼むぜ？」

「そりゃあコツチの台詞だ、しくじんなよ？」

「分かってるよ」

善吉君と軽口を叩き合ってからいよいよ戦地へ向かう。  
さてさて、痛いのは勘弁願いたいもんだがね……。

主人公達が立ち上がったその頃、本来の主人公である黒神めだかは、壁にもたれ掛かって半虫の息状態の雲仙冥利に止めを刺そうとしていた。

此処まで彼女を暴君に仕立て上げたのは他でもない彼だったりするので文句は言え無い。

「オレは人間が大嫌いだ！！」

目の前で拳を振り上げて固まってるめだかに言い放つ。  
自分と似てる様で似てい無い彼女を潰す為に、彼女と彼女の仲間ごと生徒会室を爆発させて彼女の怒りを買ひ、散々殴られても変えな  
い彼の信念。  
もしこれを目の前で主人公が聞けば、「ヒュ〜！ イカスじゃん？」  
と、緊張感の無い事を言うに違い無いが、生憎その主人公は聞いて  
なかったりする。

「そうか、私は人間が大好きだ」

その似ている様で似ていないそんな彼女からの、「人間が大好き」  
の一言につくづく皮肉な奴だと心の中で毒づく雲仙。

「だから貴様は改心しなくていいよ……明日にはいないのだからな」

「……」

普段なら決して口にしない彼女からの強烈にて痛烈な一言。

一昔前にも同様の事が起きた時にも、彼女は同じ事をしてその人物  
を学校から追い出した。

そして、今まさに彼女は同じ事を雲仙にやってしまう。

だが、彼は許しを請う事も無く……。

「だったらもういいや、さっさとトドメを刺しな。大好きな人間を」

守る為に、オレを排除してみせな……」

逆に開き直った様な口調でトドメを刺すよう促す、目の前にいる人物の矛盾した考えを思いながら。

「……。そうする」

それに対してまともな思考を巡らせる事が難しい状態のめだかは、何の躊躇も無く、全力で無慈悲な拳を振り下ろした……その時だった。

「その結婚……じゃなかった、その攻撃ちよ〜と待ったああ!!」

「は?」

「!?!」

訳の分からない事を叫んでる声があった。

突然の事だったので、思わず振り下ろした拳を止めてから首だけで辺りを伺つめだかと雲仙。

その声の正体は言わずもながら……。

「ヘイ！ 何かスゲエ事になってるじゃないの？」

バカ  
零だった。

「ヘイ！ ヘイ！ ヘイ！ 俺様を差し置いてなぐにしてくれちやつてるのかなあ？」

「零……」

「霧生……？」

「おう、好きな言葉は“世界平和”の霧生零だぜ！！」

あ、危なかったああ！ ちょっとだけ間に入るのを躊躇して見てたら、めだか君がトドメ刺そうとしちゃってんだもん、思わず小寒いギャグを言いながら飛び出しちまったは良いケド、こりゃ近くで見ると迫力満点だな。

雲仙君は血だらけの状態で壁にもたれ掛かりながら座り込みまっ



てるし、めだか君なんて「ク○リンのことかー!!」みたいな状態だし……。  
子供が見たら気絶しちゃうよコレ。

「……。何しに来た？」

「……」

おっと、めだか君や雲仙君の状況を考えてる暇は無いつてか？  
てか、出て来た時のボケ位はツツコミが欲しいと思っただが……流石に不謹慎だな。

「いやさあ？ 俺が気絶しちまつてる間に、何かヤツベー事になってるって善吉君達から聞いてさあ？ あっ、俺は見た通りだけど、善吉君達は無事だから安心して頂戴？」

「……。ああ、そうみたいだな」

チ、何故間を置いて話すんだよ、やりずれえな。  
そして雲仙君はハツとした様なりアクション取ったと思ったら、急に探る様な目で俺を見始めたぞ、何故に？

「どーしました雲仙さん？」

「テメエに言われてから気が付いたんだが、何で無傷なんだよ」

ああ、その事か……。

まあ、正直に言ってしまうのは吝かじゃねえが信じちゃくれねーだろうし、適当に答えるかな。

「その事ツスか？ 答えは簡単。あの瞬間、運よくポケットから取り出せたので、直ぐに捨てたんですよ。んで、何故か知りませんがその火薬玉と周囲何個かだけは不発だった……てな感じですかね？」

その場で考えた嘘をペラペラと噛む事無く説明する。

「ふざけんなよ！？ 不発だったのはそこに居る黒神が花瓶の水をぶち撒けたから爆発しなかったんだ、テメエがあゝの火薬玉を不発にさせる事は出来なかった筈だボケツ！」

アララ……一発で嘘ってバレたよ、というより、俺はめだか君があゝの瞬間に花瓶の水を撒いて不発を誘導したって事実のほうが嘘っぽいと思うんだが。

「めだかちゃんったらそんな事したんだ……スゲーな、ほらご褒美だよ」

「……………」

飼い主の言う事を守った犬を褒めるかの如く、中途半端に拳を振り下ろしてる状態のめだか君の頭を撫でる。

何も言っ来ないのが死ぬ程怖かったりするが、それ以前にこの何とも言えない空気のお陰で、俺のテンションが変な方向にいつてしまってる為か、まあいいかと思ってしまう。

上手く解決した後、多分めだか君からぶっ飛ばされる気がするぜ。

「テメエ……………聞いてんのかコラ!!」

しつこいなあ。仮に、「能力で元に戻しましたあゝ」なんて言ったら更に怒鳴るでしょう」。

よし、こうなりゃごり押しで納得して貰おう。

「ふざけんな、と言われましても事実俺はこの通り下半身が黒焦げになっ無だから事実としか言え無いし、だったら俺が無傷だった理由を言っってみて下さいよ? ………………ほら無いじゃないですか」

無傷の正体を言ってみがれと言っても何も言わない雲仙君。

代わりにものっそいガン飛ばされてるが、瀕死状態の今の雲仙君に睨まれても痛くも痒くも無いんだなこれが。

「まあ、俺の話は横に置いて。めだかちゃんは何で中途半端に拳を振り下ろす動作な訳？」

何時までも俺の話して時間を潰すのアレなので、本題に戻る。といっても、理由は知ってるのでわざと惚けながら聞く。

「っーか何なのその過激な格好！？ おじさんはめだかちゃんを露出の多い格好をするようなのはしたくない子に育てた覚えはありませんよ!?!」

「……………」

む、無視された…………。

俺の渾身のボケを無視された。

ええい、それなら！

「なに、シカト？ オーイオイ、確かにキミの事を故意じゃ無いとは言えシカトしちまった事はあったけど、俺のボケまで消化しちまう事無いじゃん？ へい笑顔プリーズ！」

「……………」

だ、駄目だこりゃ。

これじゃあ俺が空気読めて無いみたいな感じになってしまった。

「オメー頭大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですよ……」

揚句の果てに雲仙君にまで頭の調子を聞かれてしまった。  
なら、仕方ない余り言いたく無かったが……。

「ふむ、見ただけだから何とも言え無いけど、どうせ雲仙先輩のやり方に大激怒しちゃったためだかちゃんが、ほぼ一方的に半殺しにしちやっただんでしょ？」

「……」

二人共黙ってるから肯定と取る。

まあ、大方の事情を知ってるから今の質問は関係無かったりするんだが。

「で？ キミは雲仙先輩をこっから追い出しちゃうとかって思ってるんだろ？」

「……」

これも肯定つと。

「はあ……めだかちゃんさあ、確かに二年ちよい前にも似た様な事したよね？ 確かく、く、く……ああそうそう、球磨川先輩だった？」

「……！」

球磨川という名前に反応しためだか君が俺のほうを見る。

向こうにその気が無いとは思うが、どう見ても睨んでるようにしか見えないよ。

その横で雲仙君は、「誰だソイツ？」的な表情だが、今は関係無い。

「その名を……」

「あ？」

ボソリと言つめだか君を見ると、表情がより険しくなっている。  
やっべ……ミスった？

「今その名を口にするな……！」

背後にゴゴゴ！ みたいな効果音が出そうな位の形相で俺を睨む。  
あっちゃあ……失敗か？

「いや、苗字言っただけでそこまで嫌な顔する事無いじゃん。……  
まあ彼が何をやったのかは俺は知らないからエラーな事は言えま  
へんが」

真面目な話、要所要所で聞いたので、具体的な内容は知らない。  
ちよつと前に“あ”の付く人が「顔を剥がされちゃったよ」っ  
て可愛いげの無いポーズで言ってきたが、それ事態が本当かどうか  
怪しいし。  
ああつと話がまた逸れた、マズツタね……めだか君が臨戦体制に入  
ってしまった。

「奴がやった事と、雲仙二年生がやった事は限り無く似ている……  
一歩間違えればそうだった。だから私は、コイツを消す!!」

雲仙君の目の前で、中途半端に下ろした拳をもう一度振り上げて、  
そのまま振り下ろす。  
空を切る音が、めだか君の力強さを物語る。

「！ 馬鹿っ!?!」

それに反応出来たは良いが、即座に飛び出してきた猫みたいになつてしまった。

お陰で、めだか君が放ったパンチが位置的に俺の肋にモロに入った。メリメリという嫌な音がした気がする。

「ぐっ……ふっ！」

「「!？」」

吹っ飛ばす訳にもいかないので、半ば火事場のクソ力的な感じでその場に踏み止まる。

そのせいだろう、ボキッ！ という音がした気がする。

「……。何故こやつを庇う？」

「……」

攻撃して来た本人と雲仙君が解せないと表情だ。たった一発のパンチで足に来た俺は、その場に座り込む。

「ゴホッ！ 庇った理由だと？ これ以上事態をややくしくしたく無いからだよ」



一番の理由がこれだ。  
騒ぎを大きくしたく無い、俺はある意味平和主義者だからな。

「お互い存分に殺り合ったんだ、もう此処等で終わりにしようぜ？  
これ以上騒ぎを大きくしたって仕方ないでしょうに……………うわ  
あ、一発で肋三本バツイチやっちゃまってやがる」

二人の視線を受けつつ、ワイシャツをたくし上げて脇腹付近を観察  
してみると、黒みがかかった紫色に変色してやがる。  
完全に折れてるぞ畜生。

「イツツツ……………それに、めだかちゃんって何気に俺の事をほんのち  
よっとだけと感付いてるっしょ？」

「……………？」

「……………」

何を言ってるんだコイツ？ パート2状態の雲仙君を外に置いといて、  
めだか君に聞いてみる。

最初に生徒会室に連行された時に俺だけに聞こえる様に言った彼女の  
一言がマジだったのか……………聞く機会が無く、聞く気にもならな  
かったがこの際聞いてみる事に。

だが、何も言ってくれない……………今聞く空気じゃ無かったか。

「ダンマリ……ですか、まあ、今のこの状況で聞くのもおかしい話か」

「そういう事だ。お前の事については、雲仙二年生を消してから……  
…ゆっくりと話し合ってやるう」

再び握り拳を作り、ダンプカーが衝突する力の三分の1のパワーのあるパンチを雲仙君に振り下ろす。

チツ、聞く耳持ちやしねえ……やはり俺ではめだか君を止めるのは無理、か。

「……まあ、止めるのは俺だけじゃあ無いんだよねえ」

誰に言う訳でも無い独り言……そして。

「やめるめだかちゃん、これ以上はやり過ぎだ……」

来たか……善吉君、阿久根君、もがなちゃん。

ちよつと時間が掛かった気がしたが、見事にめだか君を押さえ付けてくれた。

「遅いよ善吉君。お陰で肋を二本ヤツちまったよ」

「三本で済んだのなら御の字だ」

「ハッ！ 言ってくれるねえ……その通りだけどさ」

来るのが若干遅かった事に文句を言ってやったら、サラッと返された。

「……。何のつもりだ貴様等、離せ巻き込まれたいのか？」

おいおい、此処までやっても止める気無しかい。

「うん、そうだよ。あたし達は黒神さんに巻き込まれたいんだ！」

これがもがなちゃん。

「めだかさんになんと言われ様と、俺達は生徒会を辞めるつもりはありません」

これが阿久根君。

……あ？ 何だ、生徒会首にされ掛けたのかよ。

「……。めだかちゃん」

そしてこれが。

「俺達はもう二度と、お前をひとりにはしないよ」

言った！ 善吉君良い事言ったよ！！ めだか君ったらちょっと揺れてるよ！！ ……とと、ハシヤギ過ぎたな。

「ほら見る。いくい友達持ったじゃないの？ うし、そんなめだかちゃんに俺からプレゼントだ」

「…………？」

少しだけ理性が戻ってるめだか君。

そしてこれが俺の本当の狙い……始めるか。

「取り敢えず今日はもう疲れたろ？ 止めにしよーや」

よし、4年振りの無腎蔵だ……うわぁ、頭に色々なもんが流れ込んでくる感覚がするぜ。

その感覚を無視しながら、めだか君に近付き頭に手を乗せる。

（キミがオレになれるかどうかは知らないけど……もし俺になれたのなら……そんな時は宜しく頼むよ？）

無賢蔵の情報の一旦をめだか君に明け渡す。

これで仕込みは完了した、後はキツカケがあれば突然変異者オレへとなる訳だが……気長に待たせて頂くよ。

「零？」

「ああと、スマンスマン。邪魔だったね」

善吉君に声を掛けられたのを機に、直ぐさまめだか君の頭に置いた手を離してから彼等の後ろへと下がる。

既に、めだか君はスーパーサ○ヤ人状態から戻ってるから大丈夫だ。そして押さえ付けていた三人をゆっくりと振りほどき、雲仙君に向かって言う。

「雲仙二年生。貴様、生徒会に入らないか？」

「あ？」

普通から戻った第一声がまた面白かったぜ。  
アレなのか？ 昨日敵は今日の友好的なアレか？ だとしたらスゲー面白いんだが。  
そして、善吉君達は予想通りのリアクションだしね。

「……………ハア」

なんだか一気に疲れがきたぜ。  
肋骨も痛いし、再臨の使用はこれ以上は嫌だし……………使わなくても勝手に使ってしまう訳なんだが。雲仙君が生徒会に入るのを当然の如く怒鳴りながら断ってるのを見ながら、ポケットから携帯を取り出して電源を入れる。  
不知火さんに電話しなくちゃならんしな。

「お……………い……………零……………?」

さてと、死んで家に帰るやり方がそろそろ通用しなくなって来た訳だが……………まあ、この世界に飛ばされて一年目から薄々気が付いたが、とにかくこれ以上ダラダラやってたらガチで家に帰れ無くなってしまう。

それだけは……………いや、何だろうな？ あの子達を眺めると、元の世界に帰るって目標を忘れてる時があるんだよなあ。  
まあ、一応最終手段の仕込みはさっき済んだから忘れる事は決して無いがね……………。

「聞いているのか零？」

でも、もしめだか君が突然変異者へとならなかった場合、どうすっかなあ？ この最終手段も殆ど成功しないし……いや、成功した事が無いんだよねえ。

そろそろ考える時が来たのかな。

あれだけ婆ちゃんに依存してた俺がここ二・三年で平気になってしまったし、独り立ちの時なのかも……。

「聞け!!！」

「イ、デッ!!！」

な、何だ！？ 頭頂部に物凄い衝撃と痛みが、何だと目線を上げると、めだか君達だ俺を見ていた。

当然衝撃の正体は、めだか君のゲンコツだ。

「さつきから呼んでいるのに、阿呆な顔して何をしてるのだ？」

こ、こんのがキ女クメ！ 人を捕まえて阿呆なツラだあ？

「イツツ……！ 何でもねえよタコ！ 人の頭をバカすか叩きやがって、頭頂部がハゲたらどーしてくれんだよ!? ナンパの成功率

「がどつと下がんだろーがこのポケナス!!」

「そら聞いて無かった俺が悪いのかも知れないけど、ゲンコツは無いんじゃないの？ ゲンコツは。」

「「「「  
……………」」」」

「な、何だよその目は？ 何か間違った事言いましたかあ？」

「全員して俺をそんな目で見やがって、文句があるなら言えっただよ。」

「いや……………」

「別に……………」

「うん……………」

「善吉君と阿久根君ともがなちゃんが、軽く笑いながら言う。何なんだよ言いたい事があるならハッキリ言えよコラ、そう思っていたら、目の前に立っていたためだか君が口を開く。」



「相変わらず緊張感の無い奴だな……お前は」

妙に優しい顔しながらそう言って来た、何だか心が痛い気がする。

「……悪かったな。昔から緊張感が無いつて言われてるから、自覚はしてるよ」

座った状態で視線下に向けながら呟く。

緊張感が無いつて言われてんのは慣れてるのは本当だ。

「だけどな？ 一応緊張する事もあるんだぜ？ 例えば……全校生徒の前で発表会とか。」

「……？ あれ、そういえば雲仙先輩は？」

雲仙先輩の姿が見えない、何処行ったんだ？

「先輩なら鬼瀬達に抱えられて行っちゃったぞ、気付か無かったのか？」

めだか君の横にいた善吉君が教えてくれた。

「そうか……はあ、無事解決、かな？」

これだけの事をやったんだから、暫くはチョツカイ掛けて来ないだろう。ふう〜 何だか腹減ったなあ。

「そういう事だ。ほら此処は危険だから、病院に行くぞ立てるか？」

「ん？ ああ、めだかちゃんボロボロだもんな？」

「そうだ、久々に身体がガタガタだよ。お前も肋骨が折れたんだろ？ 一緒に行くぞ」

座り込んで俺に手を差し延べるめだか君。

ハハ、キミの方がボロボロだつてのに……元気な娘だねえ。

そう思いながら差し出された手を取りながら立ち上がる。

肋骨がギシギシいつてる気がする。

「ッ！」

「大丈夫か？」

痛みで顔を歪める俺を心配するめだか君。

折れた肋骨は痛いけど、別に時間がきたら適当に治ってるから大丈夫なんだよね？ それに今日はラーメン屋行く予定だし。

「ああ、大丈夫さ。だが悪いけど病院には行かないよ」

「何故だ？」

一応の怪我人が病院に行かないと言った事に、全員が俺を見る。

「いやさあ、今日は不知《スネエエエク！》……っと噂をすれば何とやら、ちよっと待ってね」

コチヲを見ているめだか君達を置いて、電話に出る。

「もっし〜不知火さん？ そうそう、まったく大変だったぜ？ うん、皆無事だぜ。      おう、ラーメン屋には行くから安心したまえ……ん、怪我は殆ど無いに等しい      え？ 無理してないから心配すんなよ。つーか寧ろ来てくんね？ 何だか愚痴りたい気分だし〜。うん、うん、んじゃあ後でね、ヨロ〜！」

電話を切る。

危うく中止になりかけたが、ごり押しで対応したら行ってってくれる事になった。

「フフン、久々にラーメン食える〜」

これから美味しいラーメンを食いに行く事を考えながら携帯をポケットに入れる。

「と、いう訳で聞いていたと思うけど、俺はこれから不知火さんとラーメン屋に行くから病院には行かない……」

電話のやり取りをポケットと眺めていたためだか君達に説明する。  
どーせ後少しで治るし。

「ま、つー訳なんで、皆さんお疲れ様でした〜」

手を軽く挙げながら、めだか君達が行く方の逆の方向へ向き、歩き出そうとしたが何故だろう、ここ最近は物事がスムーズに進まない気がする。

この時も例外では無く……。

「待て」

肩を掴んで俺の動きを止めるめだか君。

「なによ?」

八割方面倒な事になるだろうと予想しつつも返事をする。  
案の定、どいつもこいつも珈琲に砂糖じゃなくて塩を間違えを入れて飲んだ様な表情をしていた。

「何故病院では無くてラーメン屋に行く?」

しよっぱそくな表情全開のめだか君。

へえ? キミってそんな顔出来たんだね、何だか新鮮だよ。

「何故? そら腹が減ったからさ。他に理由があるか?」

別にやましい気持ちは無いので正直に答えたつもりなのに、何故か更にしよっぱそくな顔をする。何でよ、この期に及んで嘘なんてつかねえっつーの。

「お前って、本当に不知火と仲が良いよな?」

めだか君の隣で一緒になってしよっぱそくな顔をしてた善吉君が言う。

「は？ あ〜うん、確かにこの学校のダチの中ではあの子とが一番に遊んでるなあ。ほらあの子って地味に波長が合うんだよね」

あの馬鹿とあの人を除けば不知火さんが一番かもしれない事実に気が付く。

でも、不知火さんと遊んでる事とキミ達のそのしよっぱさそうな顔と一体全体何の関係があんだよ？

「キミは肋骨が折れたんだろ？ 呑気にラーメン屋に行く暇なんて無いと思うんだが、オレの中の常識的に」

「え？ ん〜確かにそうっすけど、ぶっちゃけるともう殆ど大丈夫だったりするんですよ、ほら」

ワイシャツをたくしあげて、折れたであろう部分を見せる。

黒紫っぽく内出血していた部分は、段々と完治の方向へと向かっていく。

「確かに……。相も変わらず気味が悪い程の回復力だな」

中学生の頃に軽いトラウマが残る位に俺の馬鹿げた能力を見せられてた阿久根君が呟く。

「そういう事だから、俺が病院に行く理由は無いんだよ。まあ、普通なら病院に付き添うのが常識なんだろうけど、キミ達だけで事足りるっしょ？」

餓鬼じゃねえんだから、そんな何人も付き添う必要なんて無い。

「そういう訳だから俺は帰るぜ？ 元々雲仙先輩が来なかったらそのまま帰る予定だったんだし」

よしよし、皆納得してくれてるな。

これでチェックメイトってか？

「じゃっ！ また明日……じゃ無かったね、月曜日にでも」

今日が金曜日で助かったぜ、と思いながらスタスタとその場を早歩きで去る。

途中、チラリと振り返って彼等を見てみると、そんな俺を最後までしよっぱさそうな表情で見送っていた。

早いとこ病院に行けば良いのにねハハハっつと。

めだか君達と別れた俺は、待ち合わせの場所である校門にて突っ立ってた。

あんだけ爆発だの殴り合いだのと、大騒ぎがあったのに一般生徒共はあっけらかんとしている所から察するに、結構ハートの強い連中だねと思う。

つか、誰も桜代門さんに連絡を取らないって……クレイジーな学校だぜ。

「霧生くん！」

この学校の危機管理能力のなのを疑っていると我が友……と俺が勝手に思ってる不知火さんが手を振りながらやってくる。

口元に食べかすがあるからに、どっかで何かを食ってたのかしら？

「いや〜 ゴメンゴメン！ チョイト野暮用があつて遅くなっちゃった！」

挨拶的な感じで軽く謝ってくる。

「おう！ 何か食ってたのか？ 口元が汚れてんぞ？」

そう言つて不知火の身長に合わせる様に屈んでから、口元に付いてる汚れを持っていた布で拭いたげる。



成る程、小さい子供に世話を焼くお母さんの気持ちが少しだけ分かった気がするぜ。

「ムゴツ！ ゴメンね。これから食べるラーメンの前の軽い腹慣らしをね」

腹慣らし……って初めて聞く単語だよ、不知火さんの為にあるような言葉だな。

「ふうん？ まあ、何でも良いケド早いところ行こうぜ？ 腹減っちゃまったよ……。うし！ 綺麗に拭けて、美人になった！」

口元を綺麗に拭いて、見事に汚れが無くなった不知火さん。そして、布を畳んで制服の中ポケットに突っ込み。

「ほら、行こう」

そのまま元の姿勢に戻って歩き出す。だが、不知火さんはポケットとしている……と思いきや、いきなし両手を頬に当ててクネクネと動き出した。

「アハハ……美人ってそんな……」

「オーイ不知火さ〜ん？」

どうやらさっきの一言に反応したらしい。

軽いギャグとして受け止めてくれると踏んでいたので、まさか照れるリアクションになるとは思わ無かったから余計に不気味だ。

「はあ、仕方ねえな。……よっこらせつと」

「エへへへ……」

向こうの世界へ旅立ってる不知火さんを、米俵を担ぐ感じで持ち上げて、再び歩き出す。

ふう、今度からは余計な事を言う時は、もうちょい考えてから言う事にしよう。

「オーイ、早いとこコツチ戻ってこ〜い。周りの生徒さんがビックリフットを見た様なツラで俺達を見てんぜ〜？」

「エへへへへ〜」

「……駄目だこりゃ」

ちなみに、このやり取りはラーメン屋に到着するまで続き、当然の如く俺の財布の中身はスツカラカンになった。別に構わないんだけどね、嫌と言う程愚痴りまくったから。あの不知火さんが変に生暖かい視線を俺に送ってたのが見れたし。

続け

23：「今からホワイトツリーハウス行こうぜ！」

え？ 何それって……白

そろそろ、主人公が本気を出すかもしれないし、出さないかもしれない。

23・5：「すみません、今回は下ネタばっかです……前編」（前書き）

タイトル通り……としか言え無い内容に……。

そういった内容やら表現が嫌いな方は今すぐにも回れ右した方がいいです、すみません。

ほんっとーに！ すみません……。

23・5：「すみません、今回は下ネタばっかです……前編」

世紀末！ 暴力が渦巻く無法の荒野で、力無き民は苦悶の声を叫びながら願ったああ！！ 乱世を切る光の出現を！！！！

本編に何ら関係ありません。

日曜の昼下がり……俺は一人で街へと出ていた。理由は簡単、ナンパだ。そろそろ本気出さないと、どこその馬鹿に『うわあ、未だに童○ですかあ〜？ 恥ずかしい！』と、リアルに北○百裂拳をぶち込んでやりたくなる様なツラで言われるに決まってるからだ。

「……………み〜っけ！」

そんな焦りとはチョイト違う感情に駆られて、気合いを入れて街に繰り出して早数時間。

漸く俺のハートにバンババンな女性を見付けた。

後ろ姿しか見え無いが、スタイルだけ見ればドストライクな後ろ姿だ。

早速声を掛けようとその女性に近付く。

ああ、ちなみにこれとは関係無いのだが俺は童○では無い。  
……。というより無理矢理童○を捨てさせられた……。と言ったほうが説明がつく。

アレだ、俗に言う逆○○○○って奴だ、うん。

内容は生々しいので言え無いが、とにかく最悪だった。

まだ若かった俺は、世間の怖さを知らなかった、それに付け込んできやがった、その手の専門家の名も知らねえ姉ちゃんに……。○学生の話だった。

「ブルッ……」

うっ……。クダンネー事を思い出しちゃったぜ。

ちなみにその後、シヨックを受け過ぎてマジ泣きした状態で婆ちゃんに言ったら、次の日には姉ちゃんがいた店と共に、そこら一帯が消し飛んでいったっけ……。

暫く婆ちゃんの顔をまともに見れ無かったよ。

「すいませ〜ん、そこのお姉さ〜ん！」

どーでも良すぎる話を挟んだが、俺は近付いて行った女性に声を掛ける。8戦2勝、それが俺の勝率だ。

これで負ければ暫く……。しば……。らく？

「あらあ、何かしらん？」

振り返ってきた女性？ を見て固まってしまった、主に顔を。

……アレだ、服装は見事なまでに女だったが、声が妙に低い。  
というか、今気が付いてしまったが、こうして見ると妙にゴツイ。  
それこそ……俺よりも。

「うーん、どうしたのかしらん？　ワタシに聞きたい事があったん  
じゃないのん？」

「あ、あ……あ……」

決まりだ。

生で見たのは初めてだ……漢と書いて、乙女と呼ぶ人種を。

それに感動したのか、はたまた別の感情だったのか……俺は頭を抱  
えて叫んだ。

「エ○ドリアーン！！　エイド○アーン！！！！！！」

EP24 : start

「はっ!？」

見慣れた天井が視界に広がる。

此処は、俺の家？



「!?!?!?」

表現しがたい声を搾り出しながら飛び起きて周りを見渡す。  
見慣れ家具に使い慣れたベッド……どうやらど真ん中に設置されて  
る回転ベッドのあったあの場所では無い事は確かだ。

「ゆ、夢……?」

そつだ、先程の出来事は全部夢だ。

「……うぶつ!」

夢オチだった事に安心したのだろう、急激な嘔吐感に襲われトイレ  
に飛び込む。  
腹に何も入ってないので、胃液しか出て来なかったが、しこたま戻  
した。

「ハア! ハア! ハア! うぐ……!」

無理矢理吐き出したせいで、胸やけに似た症状に襲われつつトイレ

を出て、コップ一杯の水道水を体内に摂取する。  
飲んでく内に段々と落ち着いてきた。

「ゆ、夢でよかった……」

ぽつんと呟く一言。

本当に、ほんと〜っくに、夢で良かったあ！

今、俺の中でそんな単語が何回も何回もリピートされる。

夢の中だとはいえ、危うく俺の大切なものが奪われてしまう所だったんだ、マジで良かったぜ。

「……………」

居間に戻ってテレビを点けて見ると6時30分と表記されている。  
日曜の朝に起きるには早過ぎる時間だし、だからといって朝メシを作って食う気力も無い、あの夢を見たせいで食欲が完全に失せたからだ。

《次のニュースは……》

《月に代わってお仕置きよ！》

《こちらのテレビの台と、ブルーレイレコーダーをセットにつけて、  
185000円なんです！！ 分割金利手数料はジ〇パネ〇トが負担いたします！》

「フウ」

空気清浄機のスイッチを入れた後にタバコに火をつけて、テレビをザッピングしてみるが、少し懐かしいアニメがやってただけで、あんまり面白そうなテレビはやって無かった。

そのままニュースのチャンネルに合わせたまま、ボケッと見ている。

ちなみに、空気清浄機を部屋に導入した経緯は、あの穀潰し二号さんが『女の子を部屋に呼ぶ時は空気も綺麗にしたいほうが良いよ』……なんて吐かしやがったもんだから、導入を決意した。決して穀潰し二号さんの為では無い。

「……フ」

それとは関係無いのだが、今日は外に出ないと決めている。

理由は、あの夢が正夢になるのを防ぐ為だ。

今日は日曜日、あの夢の日付も日曜日……。

そんなタイムリーなもんを見た後で外に出る勇氣は俺には無い。

「」

てな感じで今日一日をゴロゴロしながらダラダラ過ごす、という意気には夢の様な予定を組んだ俺は、早速シャワーでも浴びようと箆笥から下着を用意して風呂場へと向かおうと立ち上がった時だっ

た。

《ピンポーン》

「あ？」

玄関のチャイムが鳴る。時刻はまだ6時40分、こんな朝っぱらからウチに来る奴なんて、今まで存在しなかった。穀潰し一号の場合は、大体夕方から夜に掛けて来るし、二号さんの場合は玄関から入るなんてお行儀の良い事はしない、殆どが、いつの間にか住居侵入をして居間のベッドの上で寛いでやがるからな。

《ピンポーン》

「……？」

となれば、この二人が違うとなると、誰になるのかが全然分からない。

《ピンポーン ピンポーン》

「ハイハイ、今出ますよ〜」

まあ、いいか。出れば分かる事だし、そう思ってドアの鍵を開ける。  
一応チエーンのほうは繋ぎっぱなしにする。

「……………」

少しだけ開ける。

相手の姿が見え無い……………ピンポンダッシュするには位置の悪い部屋  
だから悪戯では無い事は核心出来る。  
となれb。

「遊園地に行くぞ!！」

「……………」

俺の記憶が正しければ、割かし最近……………いや、金曜日の夕方に見た  
様な姿が、ドアの隙間から見えた。

「遊園地に行くぞ!！」

俺が何のリアクションを起こさないのに、不思議に思ったのだろう、  
もう一度同じ事を言うてくる。

俺としては、何故キミが此処に居るのが分からないし、普通に対応した瞬間にロクでもない事が起きそうな気がしてならない。  
……よし。

「……。新聞なら間に合ってます」

そう言って扉を閉めようとしたが。

「くだらん小ボケは止める」

「……!?!」

閉める瞬間に、足を挟んでこれ以上閉めるのを防がれた。

「今すぐにも足を退かせ、キミの綺麗な足に傷が付く事になるぞ  
」?」

「ほう? それは困るな、それなら……」

「あっ!?!」

脅しにもならない脅しをかましてみたが、当然の様に通用せず、逆にドアの隙間に手入れてこじ開けてこようとしゃがる。その力が、また阿呆みたいに強い。

意地になった俺は、無理にでも閉めようと全力で扉を引っ張る。

「ググググ……！ 何しに来やがった？ 俺の間違いじゃなけりゃあ、このっ！ 今日は日曜日の筈だが！？」

「その通り、今日は日曜日で、しかも晴天だ。だから絶好の遊園地日和では無いと思わないか？」

「し、知るかなもん！」

全力で引っ張る俺に対して、相手は涼しい表情で扉を引っ張る。仮にも女に力負けしそうになってる、という事実には俺の安いプライドが傷付く。

「第一何で俺ンちを知ってたんだよ！？」

「住所を調べれば直ぐに分かる事……だ！」

「あゝ！？」

この意味の分からない攻防に業を煮やしたのだろう、扉の向こうに居た人物は、手刀で扉を繋いでいたチェーンをぶった切ったのだ。こうなつた瞬間に俺の負けは確定し、扉は完全に開かれたのだつた。

「朝から無駄な労力を使わせるなよ零」

「……………」

そう言つて玄関で仁王立ちをしている人物に向かつて、俺は睨む事しか出来無かつた。

「粗茶だけど……………」

煎れたて緑茶をテーブルの前に座つてる二人に配る。

結局、あの後直ぐに半強制的に部屋に入れられ、扉のチェーンをぶつ壊してくれたのとは違う、もう一人の人物が居た事にも気が付いた。んで、二人を部屋に招き入れたのは良いが、何も出さないのもアレだつたのでお茶を煎れてやる事に。

「スマンな」



「ありがとう」

「……チッ！」

わざと聞こえる様に舌打ちをしつつ、二人が座ってる場所の対面に座る。

「……ズズツ……」

そして三人同時にお茶を飲み。

「……ホツ……」

三人同時に声を出す。

うゝむ、ちょっとは落ち着いて来た。

「で、キミ達は一体何を」

落ち着いた所で、向かい側に座ってる二人に事情を聞こうとしたが。

「ふむ、此処が零の住む部屋か……意外に片付いてるな……」

「もつと殺風景な感じだと思ってたんだけど……もしくは脱ぎ散らかした服が散乱した部屋とか」

二人して部屋の中をガキみたいにチヨロチヨロしだした。

ポクポクポクポク……カチーン！！

「聞けやこのボケエ！！」

血が沸騰するんじゃないかと思う位に頭に來たので、朝っぱらにも関わらず怒鳴り散らした。

〈数十分後〉

「遊園地、ねえ？」

「そつだ、お前も行かないか？」

「……………」

数分間キレっぱなし状態で二人に怒鳴り散らしたのも虚しく、二人はあっけらかんとした表情だった。

「成る程……だからキミともがなちゃんの二人でウチに来たって訳ね」

「そういう事だ。それで、行くんだろ？ だから早く準備しろ」

「……」

そして何故だか行くのが決定事項なノリにされている。

もがなちゃんもがなちゃん、呑気にお茶を飲んでやがる。

……結構、図太い神経してんだね。

「……しかし何故俺なんだ？ 善吉君を誘えば」

「善吉はお母様との用事で行けない」

「なら阿久根先」

「阿久根書記もだ」

畜生、食い気味で被せやがって。  
そもそも本当かよ？

「……何故急に顔を近付かせる、いくら私でも照れるぞ？」

「……」

「くっ、わかりづらい顔しやがって……」

嘘か本当なのかを調べる為に、二人の顔をジーツと見てみるが、嘘なのか本当なのが見抜け無い。

「因みに、行かないって言ったら？」

「二人してこの場で泣く、大声で」

「何でぞ……」

何の恥ずかし気も無く言い放つめだか君。

この餓鬼……俺に何の恨みがあるってんだ。  
せつかく正夢を回避する為に今日は家でのんびりしようと思っただけなのに、いきなし家に訪問したと思っただらドアのチェーンを破壊した揚句に遊園地に強制的にお供しろだと？ しかも断ればその場で大泣き？ フザケルなよ、俺が二年半掛けて培ってきたご近所との当たり障りの無い信頼関係をぶち壊しにする気かよ。ここの大屋さんとだって仲が良いってのに、こんな所で大泣きされたら、近所の人妻様に。

『あそこの部屋に住んでる霧生って子、部屋に女の子二人連れ込んだ揚句に泣かせたらしいのよ？』

『あ、その話聞いた聞いた。まったく、イケメン好青年だと思っただのに、嫌ねえ』

……。最悪だ、後述については自身の事をそう思って欲しいという俺の妄想だけだ。

「……………」

チラリと二人を見る。

「喜界島会計よ、男のベッドの下にはお宝が眠っていると聞いたのだが、あるのはグラビア雑誌と呼ばれた物だけだな……ふむふむ、零

はこういった女性がタイプなのか……」

「あたしも聞いた事があるけど、お金になりそうな物は無いね……コッチにあるのは、真っ白でタイトルの無いDVDケースだけだし」

「……キミ達って、凶々しいとかって言われぬかい？」

初めて人の家、しかも仮にも異性の家だつてのに、完全に寛いでやがるぞこの二人。

知らないとは言え、男の夢の場所を勝手に探つてやがるし。

言つて置くけど、キミ達二人が持つてるソレがお宝なんだけど……とは絶対に言わない。

そんな男の事情を知らないこの二人は、あの馬鹿とは別の知り合いが勝手に置いていきやがった雑誌をしげしげと眺めてる。

ちよつと顔の紅いもがなちゃんに『それ以上ページを進めるとシヨツク死しまうぞ』と一言物申してやりたい。

「はあ、クダンネー事としてねえでさつさとその雑誌仕舞えよ……」

「む、という事は？」

「行くよ、行けば良いんだろ？ 泣かれたら堪ったもんじゃねーし」

「なんで？」

「なんでだと？ 決まってるだろう、こんな場所で大泣きされて人妻様にでも聞かれてみる……俺が社会的に死ぬからだよ」

「ふうん？」

その一言で済ませるもがなちゃん。  
コツチが泣きたくなる心境だよ。

「フー訳だから、何処の遊園地行くかはわかんねーケド、まだ時間はあるし、俺は風呂でも浴びてくるわ」

「ああ、なら私達は此処で待ってるから早くしろよ？」

「へいへい ああ、言い忘れてたけど、キミ達が今読んでいるその雑誌……早いところ閉じて元あった場所に戻した方がいいぞ？」

「何故だ（なんで）？」

「その雑誌、ページが進むにつれて段々過激になる仕様らしくてな、

最終的には真つ裸の女の写真が出てくるからね。キミ達……特にもがなちゃんにはキツイかもね」

一応の忠告をしてから、風呂場へと向かおうとすると、いきなりめだか君に後頭部をどつかれた。余りの痛さに、振り返って文句を言おうとしたら、鬼の形相のめだか君と案の定意識が飛んだと思われるもがなちゃんの姿が見え、そして振り返り様に左頬にオモツクソ痛いビンタをされた。

俺は思う、人の家のベッドの下を勝手に探ってたお前達が悪いとね。

続く



23・5：「すみません、今回は下ネタばっかです……前編」（後書き）

次回の後編では、クリーンな内容になってる筈です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9469w/>

---

The tale of a man with the title of infinity and redo

2012年1月6日11時53分発行